

札幌市文化財調査報告書 XXXV

T 151 遺 跡

南側地点

1 9 8 9

札幌市教育委員会

例　　言

1 本書は、仮称市立月寒東地区中学校建設事業にかかる工事用地内に所在するT151遺跡南側地点の発掘調査報告書である。

なお、遺跡の所在地は、札幌市豊平区月寒東3条11丁目である。

2 調査期間は、以下のとおりである。

昭和62年度

発掘調査 9月10日～11月5日

整理作業 11月6日～3月31日

昭和63年度

整理作業 4月1日～3月31日

3 発掘調査は、札幌市教育委員会文化課文化財調査員加藤邦雄、上野秀一、羽賀憲二の3名が担当した。

4 整理作業及び本書の編集は、羽賀が中心となり実施した。執筆は羽賀、上野が行なった。

5 発掘調査には、下記の人々が従事した。

関丈博、田部淳、田村リラコ、今田瑞恵、小竹昌子、山本泰子、平野井司、中川由美、石本恵理子

6 整理作業には、下記の人々が従事した。

昭和62年度

阿波みゆき（石器実測）、石本恵理子（トレース）、今田瑞恵・田部淳・田村リラコ（遺物整理、図面整理、実測等）、坂村小百合（土器拓本）、中川由美（土器実測・拓本）、平野井司（写真撮影・焼き付け作業）

昭和63年度

阿波みゆき（石器実測・トレース）、今田瑞恵・田村リラコ・小竹昌子・山本泰子（挿図作成・挿表作成）、平野井司（遺物写真撮影、焼き付け作業）

7 石器石質の鑑定については、肉眼による鑑定を北海道開拓記念館 赤松守雄氏にお願いした。

8 発掘調査、整理作業では下記の機関及び人々より有益なご指導、ご助言を賜った。

文化庁、奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター、北海道教育委員会、財北海道埋蔵文化財センター、天野哲也、石橋孝夫、内山真澄、木村尚俊、木村英明、小林達雄、佐藤一夫、園部真幸、田才雅彦、種市幸生、出利葉浩司、野村崇、平川善祥、藤本英夫、松下亘、吉崎昌一、横山英介（以上順不同、敬称略）

9 発掘調査、整理作業、報告書出版については、札幌市教育委員会総務部管理課のたえざる協力

があった。また、学校法人八紘学園月寒学院には、発掘調査期間に数々の協力を得た。記して謝意を表する次第である。

目 次

第1章 発掘調査に至る経過	13
第2章 遺跡の位置と環境	15
第3章 発掘調査の方法と層序	21
第1節 発掘調査の方法	21
第2節 層序	22
第4章 遺構及び出土遺物	25
第1節 壴穴住居跡	25
第2節 ピット	30
第3節 Tピット	75
第5章 発掘区出土遺物	81
第1節 土器	81
第2節 石器	104
第6章 結語	137

挿 図 目 次

第1図 遺跡位置図	14
第2図 遺跡付近地形図	17
第3図 発掘区配置及び遺構関連図	19
第4図 セクション図	23
第5図 セクション図	24
第6図 第1号竪穴住居跡及び出土遺物	26
第7図 第2号竪穴住居跡及び出土遺物	27
第8図 第1～3号ピット	33
第9図 第4～7, 9号ピット	34
第10図 第8, 10～12号ピット	36
第11図 第13～16号ピット	37
第12図 第17～20号ピット	42
第13図 第21～24号ピット	43
第14図 第25～31号ピット	46
第15図 第32～37号ピット	50
第16図 第38～43号ピット	53
第17図 第44～49号ピット	56
第18図 第50～56号ピット	60
第19図 第57～62号ピット	61
第20図 第63～65・67号ピット	62
第21図 第66・68・69号ピット	66
第22図 ピット出土土器実測図	67
第23図 ピット出土土器拓影	69
第24図 ピット出土土器拓影	70
第25図 ピット出土土器拓影	72
第26図 ピット出土土器実測図	74
第27図 第1～4号Tピット	78
第28図 第5～8号Tピット	79
第29図 発掘区出土土器実測図	83
第30図 発掘区出土土器実測図	84
第31図 発掘区出土土器拓影	85
第32図 発掘区出土土器拓影	86

第33図 発掘区出土土器拓影	87
第34図 発掘区出土土器拓影	91
第35図 発掘区出土土器拓影	92
第36図 発掘区出土土器拓影	93
第37図 発掘区出土土器拓影	95
第38図 発掘区出土土器拓影	96
第39図 発掘区出土土器拓影	97
第40図 発掘区出土土器拓影	101
第41図 発掘区出土土器拓影	102
第42図 発掘区出土石器実測図	105
第43図 発掘区出土石器実測図	106
第44図 発掘区出土石器実測図	108
第45図 発掘区出土石器実測図	109
第46図 発掘区出土石器実測図	111
第47図 発掘区出土石器実測図	112
第48図 発掘区出土石器実測図	114
第49図 発掘区出土石器実測図	115
第50図 発掘区出土石器実測図	117
第51図 発掘区出土石器実測図	118
第52図 発掘区出土石器実測図	119
第53図 発掘区出土石器実測図	120
第54図 発掘区出土石器実測図	121
第55図 発掘区出土石器実測図	123
第56図 発掘区出土石器実測図	124
第57図 発掘区出土石器実測図	125
第58図 発掘区出土石器実測図	126
第59図 発掘区出土石器実測図	127
第60図 発掘区出土石器実測図	128
第61図 発掘区出土石器実測図	129
第62図 発掘区出土石器実測図	130
第63図 発掘区出土石器実測図	131
第64図 発掘区出土石器実測図	132
第65図 発掘区出土石器実測図	133
第66図 発掘区出土石器実測図	134
第67図 発掘区出土石器実測図	135

挿 表 目 次

第1表 第2号竪穴住居跡柱穴一覧表.....	29
第2表 竪穴住居跡計測値一覧表.....	139
第3表 ピット計測値一覧表.....	139
第4表 Tピット計測値一覧表.....	140
第5表 遺構出土石器計測値一覧表.....	141
第6表 発掘区出土石器計測値一覧表.....	142

図版目次

図版 1 A	発掘区全景	153
B	発掘区全景	153
図版 2 A	発掘区全景	154
B	発掘区全景	154
図版 3 A	第1号堅穴住居跡	155
B	第2号堅穴住居跡	155
図版 4 A	第1号ピット	156
B	第2号ピット	156
C	第3号ピット	156
D	第4号ピット	156
E	第5号ピット	156
F	第6号ピット	156
図版 5 A	第7号ピット	157
B	第9号ピット	157
C	第10号ピット	157
D	第11号ピット	157
E	第12号ピット	157
F	第13号ピット	157
図版 6 A	第14号ピット	158
B	第15号ピット	158
C	第17号ピット上面	158
D	第17号ピット	158
図版 7 A	第16号ピット	159
B	第18号ピット	159
C	第19号ピット	159
D	第20号ピット	159
図版 8 A	第21号ピット	160
B	第22号ピット	160
図版 9 A	第23号ピット	161
B	第24号ピット	161
C	第25号ピット	161
D	第26号ピット	161

図版10A 第27号ピット	162
B 第30号ピット	162
図版11A 第28号ピット	163
B 第29号ピット	163
C 第31号ピット	163
D 第32号ピット	163
図版12A 第33号ピット	164
B 第34号ピット	164
C 第35号ピット	164
D 第36号ピット	164
図版13A 第37号ピット上面遺物出土状況	165
B 第37号ピット	165
C 第38号ピット	165
D 第39号ピット	165
図版14A 第40号ピット	166
B 第41号ピット	166
C 第42号ピット	166
D 第45号ピット	166
図版15A 第43号ピット	167
B 第44号ピット	167
図版16A 第46号ピット	168
B 第47号ピット	168
C 第48号ピット	168
D 第50号ピット	168
図版17A 第49号ピット上面	169
B 第49号ピット	169
図版18A 第51号ピット	170
B 第52号ピット	170
C 第53号ピット	170
D 第54号ピット	170
E 第55号ピット	170
F 第56号ピット	170
図版19A 第57号ピット	171
B 第58号ピット	171
C 第59号ピット	171

D	第60号ピット	171
E	第61号ピット	171
F	第62号ピット	171
図版20A	第63号ピット	172
B	第64号ピット	172
C	第65号ピット	172
D	第66号ピット	172
E	第67号ピット	172
F	第68号ピット	172
図版21A	第1号Tピット	173
B	第2号Tピット	173
C	第3号Tピット	173
D	第4号Tピット	173
図版22A	第5号Tピット	174
B	第6号Tピット	174
C	第7号Tピット	174
D	第8号Tピット	174
図版23	第1・2号竪穴住居跡出土土器（上段）	175
	竪穴住居跡及びピット出土石器（下段）	175
図版24	ピット出土土器	176
図版25	ピット出土土器	177
図版26	ピット出土土器	178
図版27	ピット出土土器	179
図版28	発掘区出土土器	180
図版29	発掘区出土土器	181
図版30	発掘区出土土器	182
図版31	発掘区出土土器	183
図版32	発掘区出土土器	184
図版33	発掘区出土土器	185
図版34	発掘区出土土器	186
図版35	発掘区出土土器	187
図版36	発掘区出土土器	188
図版37	発掘区出土土器	189
図版38	発掘区出土石器	190
図版39	発掘区出土石器	191

図版40 発掘区出土石器	192
図版41 発掘区出土石器	193
図版42 発掘区出土石器	194
図版43 発掘区出土石器	195
図版44 発掘区出土石器	196
図版45 発掘区出土石器	197
図版46 発掘区出土石器	198
図版47 発掘区出土石器	199
図版48 発掘区出土石器	200
図版49 発掘区出土石器	201
図版50 発掘区出土石器	202

第1章 発掘調査に至る経過

札幌市教育委員会では、月寒東地区に新設中学校建設を計画、埋蔵文化財包蔵地の存在及び取り扱いについて文化課に照会があったのは、昭和62年6月のことであった。

文化課では、建設予定地が学校法人八紘学園の敷地内にあり、昭和56年度に一部発掘調査を実施したT151遺跡の道々西野一白石線の南側一帯のラウネナイ川と月寒川の合流点を眼下にする台地一帯を含んでいる事から、試掘調査を実施し埋蔵文化財包蔵地の範囲、規模を明らかにする必要があるとの回答を行なった。

試掘調査は、同年6月に学校建設予定地全域約23,000m²に対しておこなわれた。

結果、道々西野一白石線の南側に沿う丘陵地上の昭和57年に行なわれた北海道博覧会の時に作られた取り付け道路跡（幅15m、長さ45m）より北東側一帯の牧草地、山林地と、台地中央を東西方に向くよう掘り込まれている排水路をはさんだ向い側の地区（荒蕪地）の合計約7,200m²の地域が発掘調査が必要とされ、取り付け道路より南西側、排水路と道々西野一白石線に挟まれた約2,200m²の地区は全体の25%程の発掘調査が必要である。またラウネナイ川の左岸、台地の下ー帯についてはラウネナイ川の氾濫原であり埋蔵文化財包蔵地には含まれないと判断された。

これらの結果をもとに教育委員会において建設予定地の変更、設計変更、工事方法等により、遺跡の現状保存が可能か種々検討された。

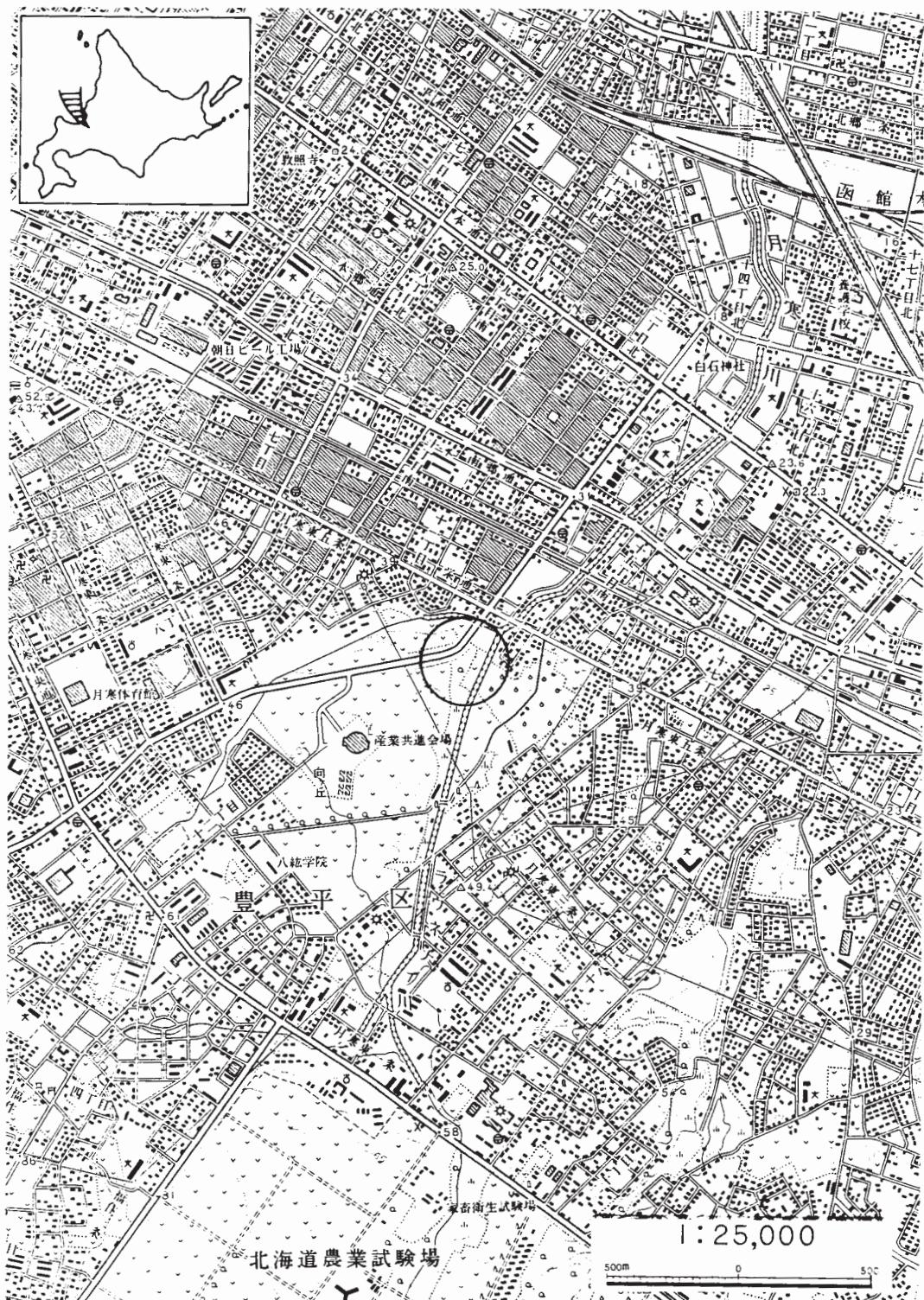
周辺部は宅地化が進み20,000m²以上の敷地を求めるのは現状では不可能に近く、今回の予定地は、台地と低地がかなりの比高差を有していることから大規模な土木工事が必要であり、発掘調査を実施し記録保存もやむをえないと結論された。

また、本地区は自然風致地区として広く地域住民に親しまれている事もあり、発掘調査が必要と判断された地区約7,200m²の内、道々西野一白石線沿い約3,500m²の山林部分を現状保存することになった。

発掘調査は未買収で、買収面積も確定していない状況のもとに暫定として約5,800m²を対象として同年9月10日より11月5日まで行なわれた。

発掘調査期間中に買収面積が確定し、校舎の設計・配置等が確定し、発掘調査面積は約1,200m²ほど増加した、結果昭和63年度の発掘調査完了面積は6,950m²、現状保存分約3,300m²となった。

発掘調査終了後に、建設予定地の南西側に排水路の切り替え工事、仮設道路の敷設が必要となり、この部分約600m²については翌年の昭和63年5月に発掘調査を実施した。



第1図 遺跡位置図
本地図は国土地理院発行の2.5万分の1地形図
(札幌東部)を使用したものである

第2章 遺跡の位置と環境

T151遺跡は、豊平区月寒東地区にある道立産業共進会場（グリーンドーム）の東にある学校法人八紘学園月寒学院の実習農場地内にある、遺跡の中央部には道々西野一白石線が東西方向に走り、遺跡を南北に分断している。

月寒川に面する道々西野一白石線の北側地区は、昭和56年度に約6,600m²を発掘調査しており、縄文時代晚期から続縄文時代初頭にかけての土壙墓23個と、陥穴10個を検出している。

今回の発掘調査は、道々西野一白石線の南側一帯で、道々西野一白石線とラウネナイ川に挟まれた台地を発掘調査対象地区としたものである。T151遺跡は、月寒川とラウネナイ川の合流点を南東方向眼下に望む台地上に立地、標高は30～40mであり、遺構・遺物はラウネナイ川、月寒川に面する斜面・緩斜面に最も多く検出している。

本遺跡をのせる台地は、いわゆる月寒台地面と称されており、東は野幌丘陵に、西は望月寒川を挟んで古い時期に作り出された豊平川扇状地である平岸面に連り、標高は30～120mである。

月寒台地面の層堆積は、基底部に「野幌層」があり、その上に「月寒火山灰層」が堆積している。本地域では「月寒火山灰層」は、粘土化し黄褐色粘質土となっている（小山・杉本・北川1956）。

本遺跡の存在は、比較的古くより知られており、最近に至るまで近隣の中学生による盗掘がさかんに行われ、月寒学院が全敷地を金網で囲うまでこの状態が繰り返されていたものである。

月寒川、ラウネナイ川の流域には、非常に良好な遺跡が数多く残っている。

発掘調査を実施し、その概要が解る遺跡も多い。

月寒川流域では、上流側からT209遺跡、T210遺跡、T77遺跡（豊平区西岡）、T151遺跡（豊平区月寒東、昭和56年度北側地点発掘）、S94遺跡（白石区白石神社遺跡）、S229遺跡（白石区北郷）がある。

ラウネナイ川の流域では、T446、465、466遺跡（豊平区羊ヶ丘）を発掘調査している。

このうち、T210、T466、T151(本遺跡)遺跡の3遺跡は、その構成が非常に良く類似している。いずれも検出した遺構の主体は、縄文時代晚期から続縄文時代初頭にかけての土壙墓群であり、検出した土器も縄文時代早期から縄文時代晩期にかけての土器と続縄文土器で、欠失しているのは縄文時代前期のみといった非常に幅広い時期にわたることが共通した特徴となっている。

遺跡の立地条件は、それぞれ微妙に異なるものの類似した性格を有する遺跡という事ができる。

本遺跡の場合、立地が月寒川とラウネナイ川の合流点にあたることもあって、遺跡の分布範囲は広く、中央を道々西野一白石線により南北に分断され、道路敷地となっている部分を含めるとその総面積は20,000m²以上に広がりを有すると推定される。

検出した土壙墓は、昭和56年度23個、今回69個あり、合計92個を数える。未調査のまま壊滅して

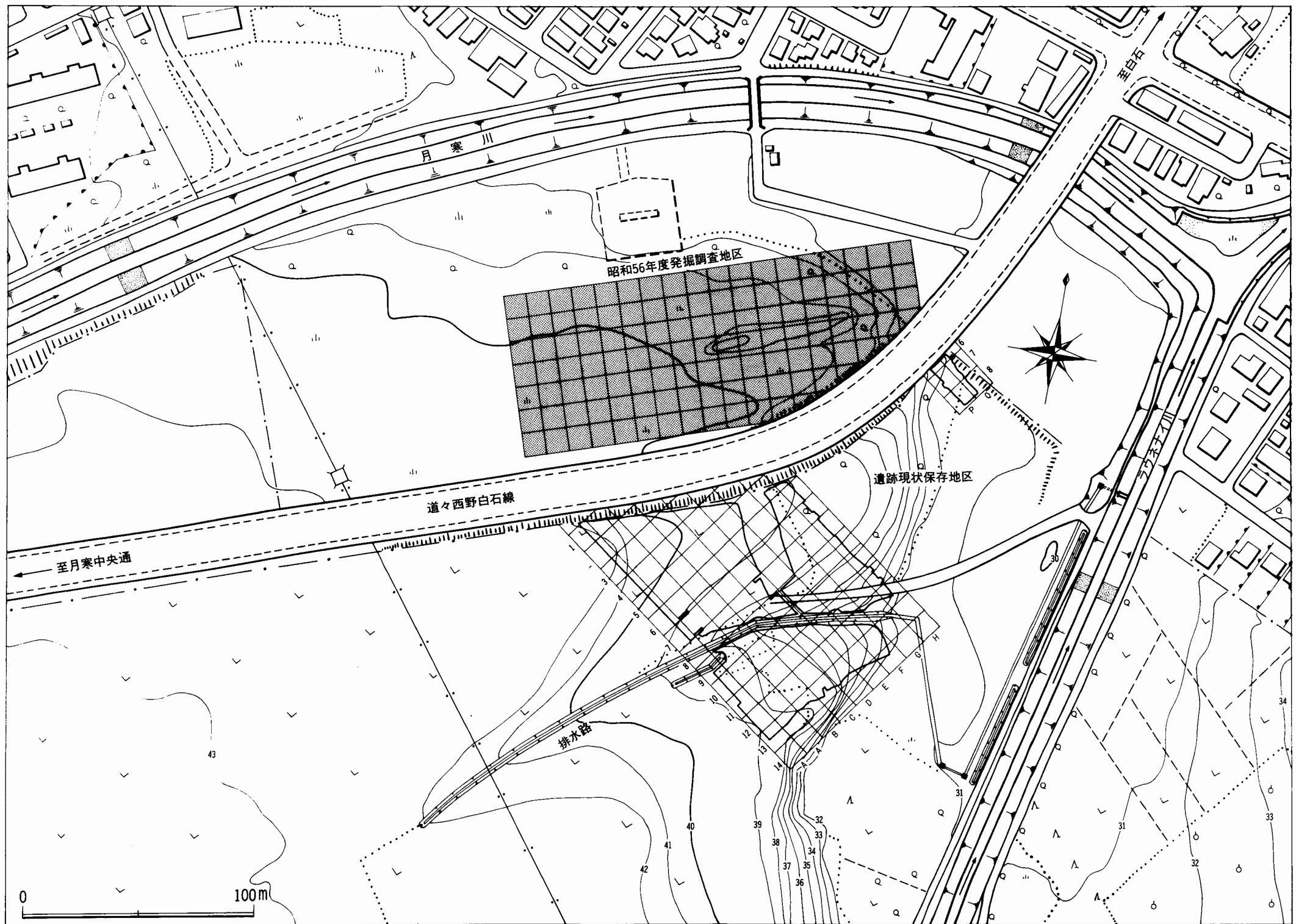
しまった道路敷地分、現状保存を前提して発掘調査実施区域から除いた地区にも当然これらの土壙墓が分布するであろうことが推定されるため、現在解っている土壙墓の2倍以上の数があると考えられる。

また今回の発掘調査では、3点程の旧石器に属する石器を検出している。石器のみの検出であり、旧石器時代の包含層は確実な形では確認していない。月寒川、ラウネナイ川の流域では、T464、466遺跡の2遺跡から同様の状況で石器のみ検出している。

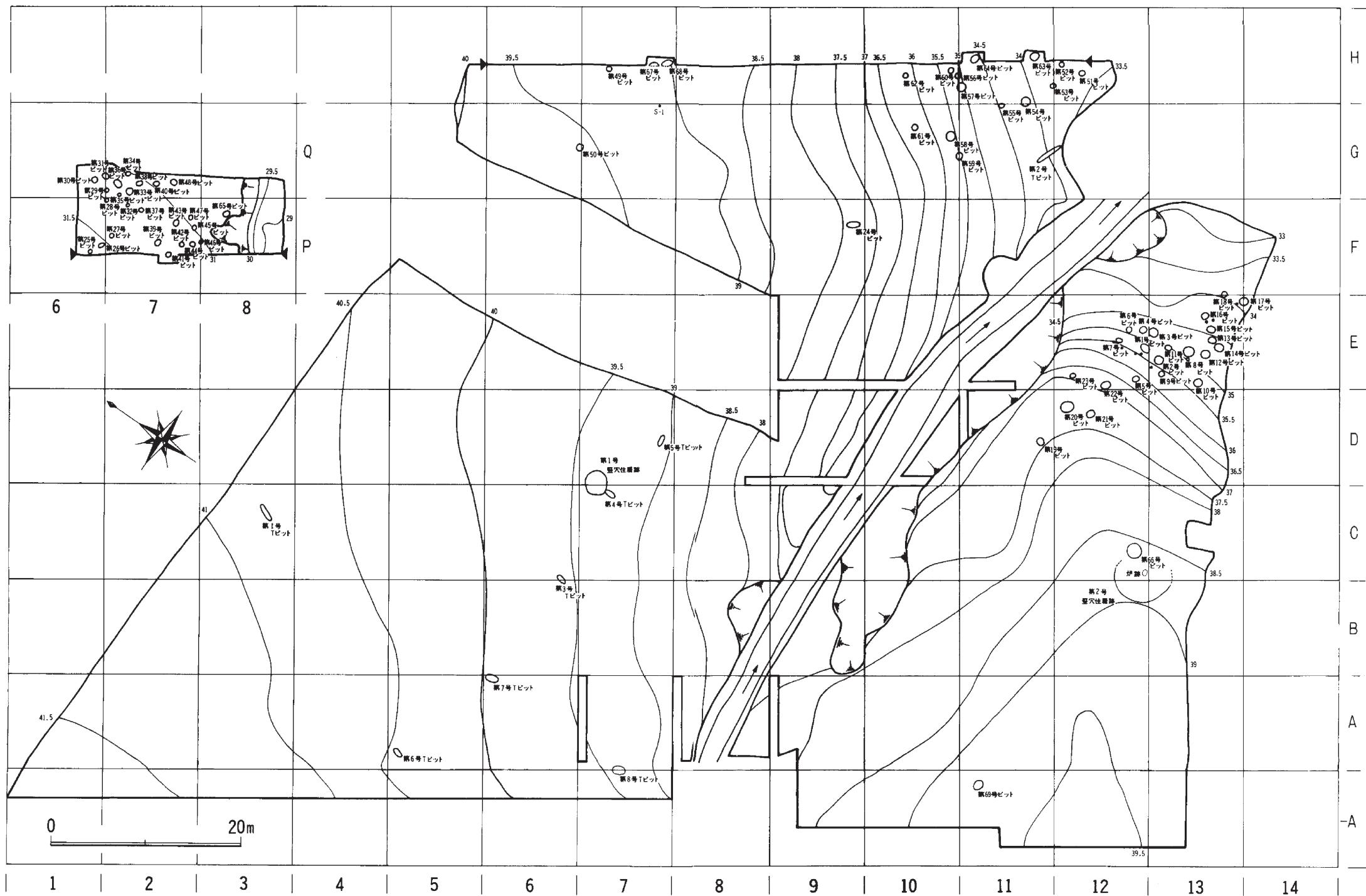
月寒川、ラウネナイ川流域には、この時期の包含層があった可能性が高いといえる。

さて、本遺跡は昭和56年度に道々西野一白石線と月寒川に挟まれる地区を調査している。今回の調査地区は、道々西野一白石線の南側でラウネナイ川に挟まれる地区である。

両地区とも同一遺跡であるが、発掘区の設定が昭和56年度と整合性をもたせなかつたため、遺跡名の下に便宜的ではあるが南側地点と付けた。



第2図 遺跡付近地形図



第3図 発掘区配置及び遺構関連図 ▶◀印はセクションポイント

第3章 発掘調査の方法と層序

第1節 発掘調査の方法

中学校建設のための敷地は、道々西野一白石線とラウネナイ川に挟まれた地域であり、道々西野一白石線沿いは小高い台地状で、ラウネナイ川に沿っては低地となる。

敷地の東—西方向の限界は、東側は低地で2～3m程に盛土がなされている部分までであり、西側は道立産業共進会場（グリーンドーム）より約300m程手前である。

発掘区の設定は、敷地西側の境界線を基線とし、これを10mごとに分割、直交する線を設定し、発掘調査対象地区全体を最少単位10×10mのメッシュでおおった。

基線の位置、方向については、昭和56年度に発掘調査した道々西野一白石線と月寒川に挟まれた地区（T151遺跡北側地点）の発掘調査区画と同一性はとれなかった。

発掘区名称については、第3図に示めしたとおりである。

発掘対象地の大半の部分は、山林、荒蕪地となっており、樹木の伐採、抜根作業については重機を導入し実施した。

また25%程度の発掘調査が必要とされた、A～E—1～8区の約2,700m²の地区については、人手において25%程を発掘調査した後に重機を入れ全面の表土層を剝いだ。

結果、昭和62年度の発掘調査完了総面積は6,950m²であり、現状保存が決定した地区は3,300m²となつた。

昭和63年度には、A区列の南西側を約600m²を発掘調査した。総計で7,550m²の面積を発掘調査した事になる。

第2節 層序(第2・3図)

発掘区は、第2・3図に示めしたように、道々西野一白石線に沿って高く、白石側に徐々に下り、またラウネナイ川に向け段丘状となっている台地である。

台地の中央部に道々西野一白石線と並行する方向(東一西方向)に台地を分断するように掘削された排水路がある。地形及び発掘調査の結果では、かつては谷状となっていた沢部分を新たに直線化して掘削したものと判断された。

概して発掘区全体は、黒色土層が厚いものの永年の耕作は深く、基盤である黄褐色ローム層上面まで攪乱状態である部分が多くあった。山林となっている部分も例外ではなく、かつては耕作されており表土層は低い方へ移動している。

層序は、発掘区と現状保存地区の境界H列の6～12区の延長63.5m、北西一南東方向の南東向斜面について記録した。また、発掘区の最北東部端の取付道路部分の発掘調査区をP—6、7、8区のやはり南東向の緩斜面についても層序を記録している。

層の状況は、以下のとおりである。

I層：黒色土(表土層で耕作されている)

II層：灰白色火山灰質砂

III層：黒色土

III'層：黒色土(火山灰粒等を含む)

III''層：黒色土(赤褐色土が混る)

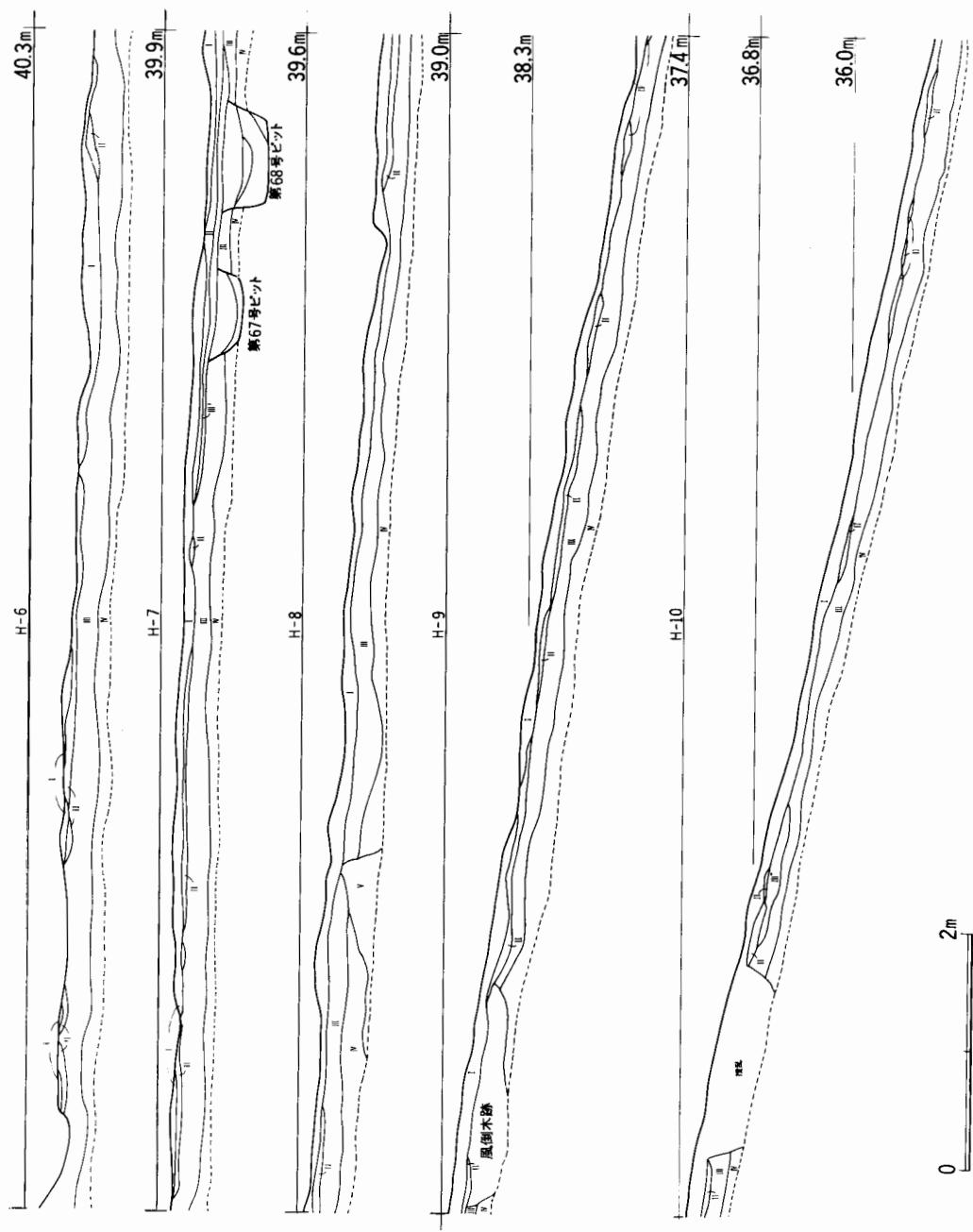
IV層：暗茶褐色土(黄褐色ローム層直上にある斬移層)

V層：黄褐色ローム

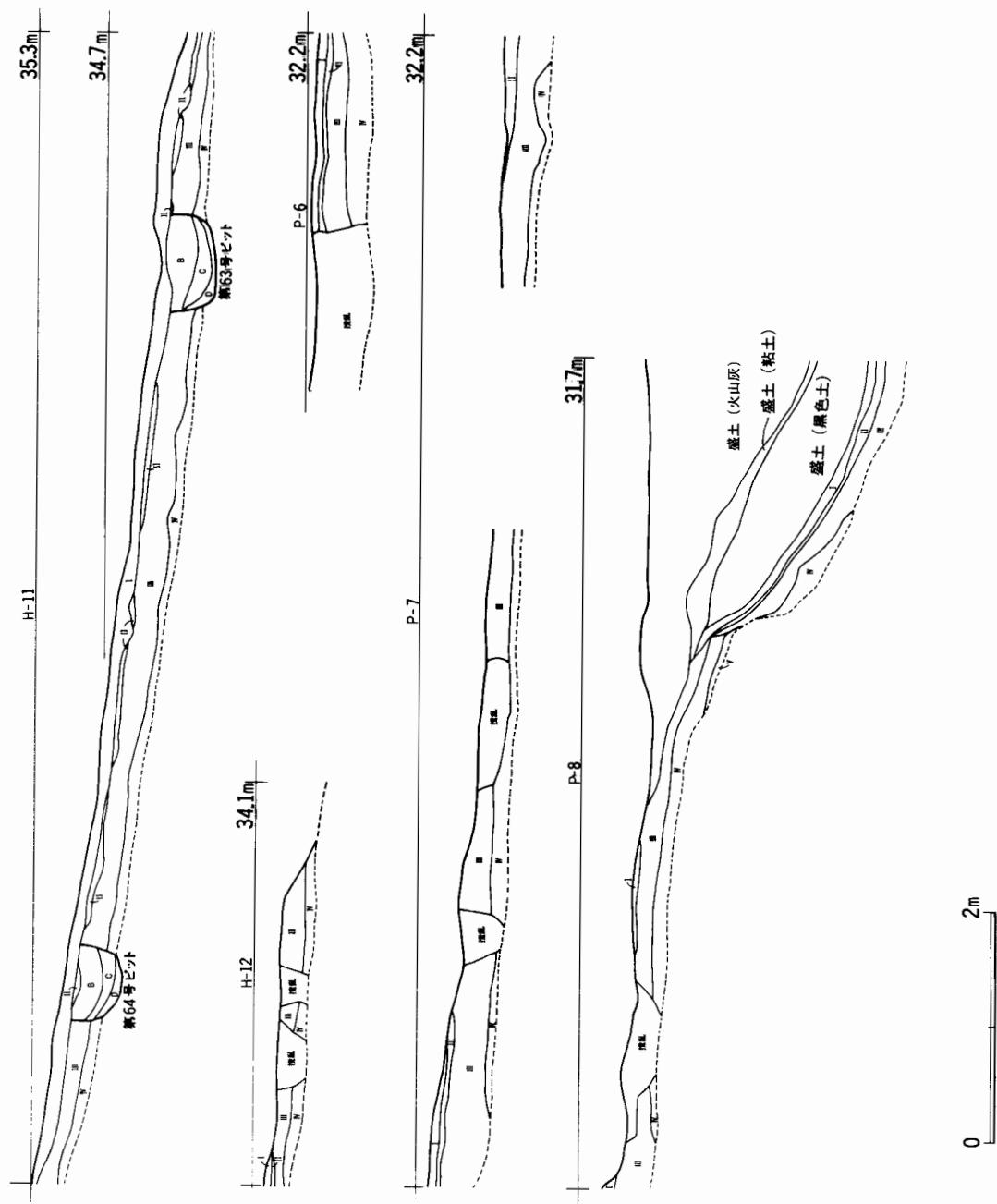
II層とした灰白色火山灰は、部分的にしか残っておらずほとんどの地区では耕作により攪乱され不明の状況となっている。

P、Q—8区では、南東向の緩斜面であるが8区に至っては急激に下る。この斜面に落ち込んだI～III層に相当する層中には、器面が洗われたように荒れた土器片が多量にあった。

またG—7区においては、基盤の黄褐色ローム中より石器(第3図S—1)を検出した、このため周辺の発掘区では黄褐色ローム層を1m程まで掘り下げ精査したが、他に一切の遺物は検出できなかった。



第4図 セクション図



第5図 セクション図

第4章 遺構及び出土遺物

今回の調査では、2軒の竪穴住居跡、69基の土壙、8基のTピットを検出した。

第1節 竪穴住居跡

第1号竪穴住居跡（第6図）

C・D-7区にて検出した。表土の黒色を呈する耕作土を除去した面に若干暗い色調のプランが認められたものである。

規模は2.8×2.2m、深さ16cmであり、プランは大略楕円形を呈する。長軸方向はN55°Eである。

壁はなだらかに傾斜しており、床面も平坦ではない、皿状に近い形状となる。永年の耕作による攪乱がはげしく上部をほとんど削平し、床面近くのみ残ったとの感が強い。

床面には南・北各壁に1個づつの柱穴状小ピットがある。中央より北西よりには45×30cmで楕円形状プランの焼土があった。

遺物は、北壁近くに図示した土器がまとまって検出されている。他には礫9点、黒耀石剝片3点、石器1点が床面より得られている。

埋土の堆積状況は、以下のとおりである。

I層：赤褐色土（焼土に類似する）

II層：黒褐色粘質土

III層：黄褐色土（汚れが多い）

土器（1～10）

全例床面より検出した。器面は風化によりはげしく荒れている。

1、2は、比較的厚手で縞縞文の付く羽状縞文がみられる。4は、RLの斜行縞文、6、10はLRの斜行縞文がみられるが6は薄手である。

大半は、第III群土器A類に属する。

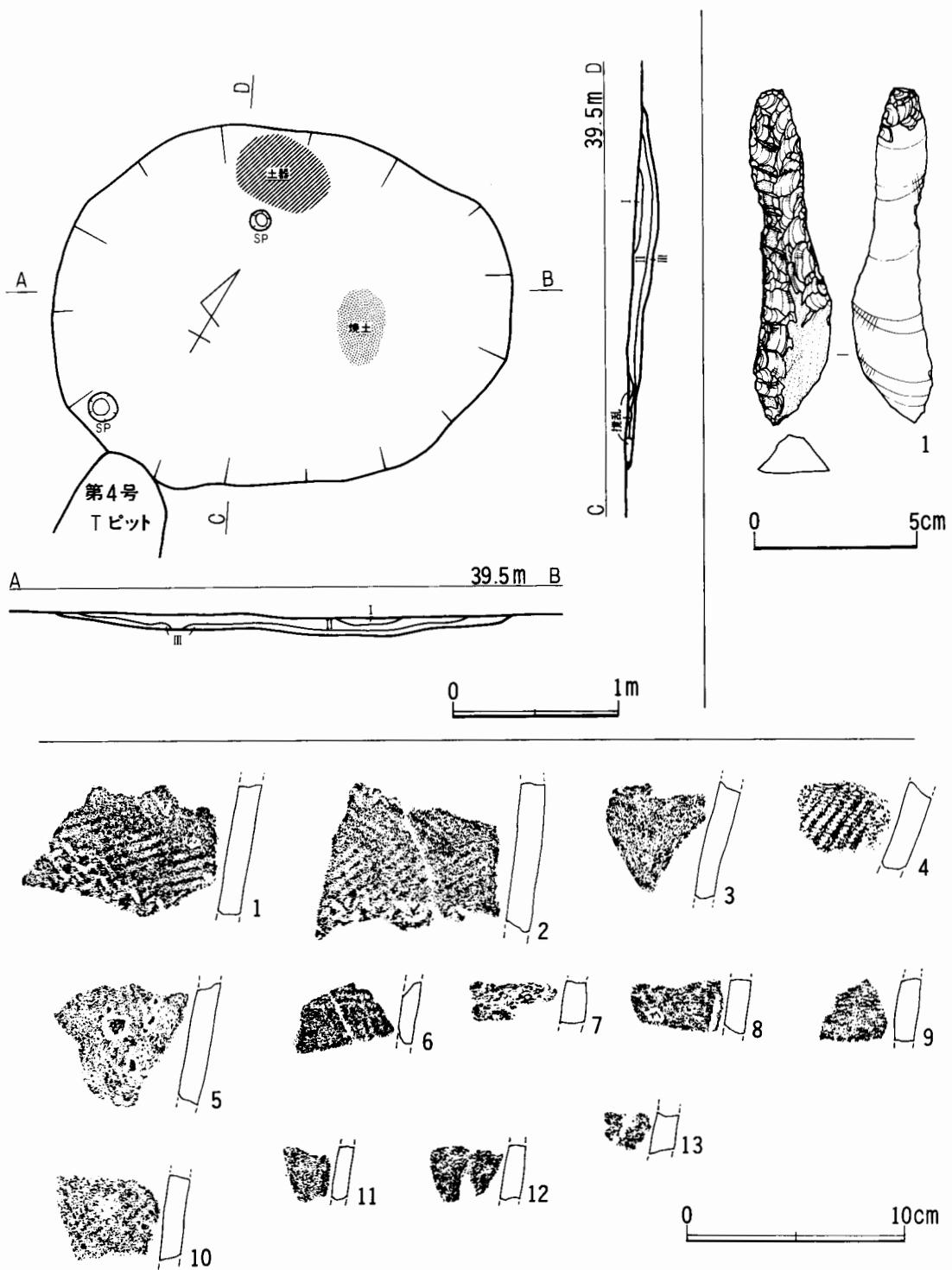
石器

断面が三角形状の長い縦長剝片を素材とし、左右両側より背の高い加工が施される。主剝離面は一切加工されない、削器である。

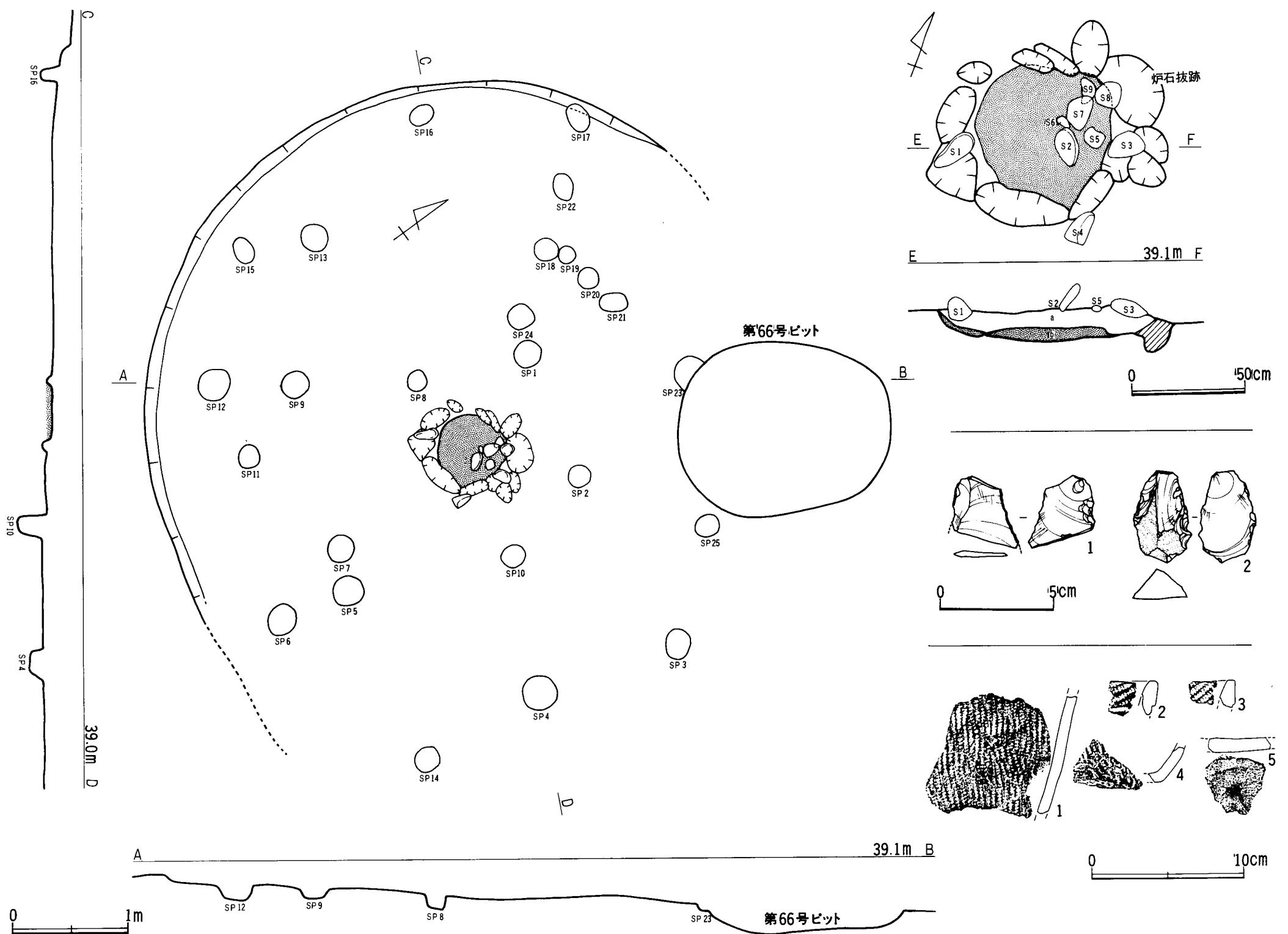
第2号竪穴住居跡（第7図）

B-12・13、C-12・13区にて検出した。攪乱層である表土層（耕作土）を剥ぎ基盤の黄褐色ローム上面に若干暗い色調を確認した。

規模は現存で5.82×4.86mを算する。南東～北東部は斜面にあり壁は確認していない。



第6図 第1号竪穴住居跡及び出土遺物



第7図 第2号竪穴住居跡及び出土遺物

プランは楕円形状をなすものと推定される。長軸方向はN76°Wである。

西壁のほとんどと南北壁の一部は確認されており5~10cm程を数える。

床面中央部には60×55cm程の焼土と焼土上に焼けた大型の礫9個が乱雑に検出された。

焼土とその周囲を精査すると焼土の周囲に5~10cmの深さのピットが焼土と接しこれをとりまくように12個検出した。一部には大型礫もあり、石囲い炉であったが深い耕作で石が移動したものと解された。

壁周囲及び石囲い炉周囲には径20~30cmの柱穴状小ピットが25個検出されている、柱穴であろう。

北東側床面から壁部分にかけては、第66号ピットが掘り込まれている。本竪穴住居跡に付属するものか、新旧関係にあるか確認はできなかった。

床面、柱穴内から土器片を14点、剝片石器2点、黒耀石剝片6点と焼けた炉石9点が得られている。全例本竪穴住居跡に伴うものと考えてさしつかえない。

攪乱が深くまでおよび、壁も総延長6m程より確認できなかったことから埋没状況を示めず層の状況は記録していない。床面上を覆っていた土は1層のみで暗茶褐色土である。

土器(1~5)

全て床面及び柱穴内より検出したものである。

2, 3は、口唇の折り返しによって口縁に肥厚帯を作り出したもので、比較的厚手の土器である。地文はL R斜行繩文が施文されている。第II群土器D類に相当する。

1, 4, 5は、第IV群土器B類に属するもので器面には地文のR L斜行繩文が施文されている。

4, 5は底部である。

石器(1, 2)

2点しかない。1, 2とも縦長形状の剝片に使用痕のあるものである。黒耀石製で、2は一部に原石面を残す。

第1表 第2号竪穴住居跡柱穴一覧表

柱穴番号	長径×短径(cm)	深さ(cm)	平面形	内容物	柱穴番号	長径×短径(cm)	深さ(cm)	平面形	内容物
S P-1	25×25	30	円形	暗褐色粘質土	S P-14	25×22	25	円形	暗褐色粘質土
2	20×18	28	〃	〃	15	25×18	23	楕円形	〃
3	25×21	19	楕円形	〃	16	24×16	18	楕円形	〃
4	31×30	15	円形	〃	17	27×18	15	楕円形	〃
5	28×25	18	〃	〃	18	22×20	20	円形	〃
6	29×24	25	楕円形	〃	19	17×16	18	〃	〃
7	24×23	20	円形	〃	20	20×19	21	〃	〃
8	20×18	14	〃	〃	21	25×17	21	楕円形	〃
9	25×23	10	〃	〃	22	26×18	19	楕円形	〃
10	22×20	25	〃	〃	23	30×(20)	8	〃	〃
11	21×20	10	〃	〃	24	25×23	25	円形	〃
12	30×28	12	〃	〃	25	24×20	18	楕円形	〃
13	24×24	19	〃	〃					

第2節 ピット

総計69個のピットを検出した。分布状況には大きなかたよりがあり、大別してD-12区、E-12・13区の北東向斜面に1グループ、G-10、11区、H-10～12区の南東向斜面に1グループ、P-6～8区、Q-6～8区の最も低い位置にある東南向斜面に1グループと3グループのまとまりが観察される。

第1号ピット（第8図、図版4A）

E-12区にて検出した。規模106×79cm、深さ28cmの楕円形プランを呈し、長軸方向はN10°Eである。中央部に大型礫が1点床面より若干浮いた状態であった。壙底は平坦で堅い。壁は直立に近く立ちしっかりしている。

壁西外30cm程の所に径20cm、深さ20cm程の円形を呈する柱穴状小ピットが確認されている。本ピットに付属するかどうかは、確認できなかった。

埋土の状況は、以下のとおりである。

A層：真黒色土（軟い）

B層：褐色土（黒色土中に黄色ローム粒が多く混る）

C層：黒褐色土層（黒色土中に黄色ローム粒がわずかに混る）

D層：暗褐色土（B層に似るが混入しているロームの色調が暗い）

第2号ピット（第8図、図版4B）

E-13区で検出した。規模は92×80cm、深さ29cmであり、円形プランを呈する。

北々東側が傾斜のため壁高は低い。比較的大型の礫が4点壙底より若干浮いた状態でほぼ南北方向に並んでいた。

壁は直立に近く立ち、壙底は丸味を帯びるが大略平坦である。

遺物は前述の礫の他に、覆土中より土器片3点検出されたのみであった。

第1号ピットと同様に本ピットの外側西北西約60cmの所に、径25cm、深さ18cm程の柱穴状小ピットがある。本ピットとの関連は、不明であった。

埋土の状況は、以下のとおりである。

A層：真黒色土

B層：黒褐色土（黒色土中に黄色ローム粒が若干混る）

C層：黄褐色土

遺物

土器（第23図2-1～3） 1は第II群土器C類に相当し、口唇上、口唇直下に竹管による連線刺突文（突引文）が各1段めぐる。口縁の肥厚部下に円形刺突文がめぐる。2は第II群土器B類に相当する。LRの斜行縄文が地文として施文されている。3は第IV群土器に相当するが、LRの斜行縄文が地文として施文される。

第3号ピット（第8図、図版4C）

E-13区で検出した。規模は93×77cm、深さ31cm程あり、橢円形プランを呈する。長軸方向はN70°Wである。

東壁は、傾斜面のため低くなっている。

壁は若干傾斜し、壙底に接する部分でゆるやかな丸味を呈する。壙底はほぼ平坦である。

遺物は、覆土中に1点の土器片があったのみであった。

埋土の状況は、以下のとおりである。

A層：黒褐色土

B層：暗褐色土（黒褐色土に黄色ロームが多量に混る）

C層：黄褐色土

遺物

土器（第23図3-1） 器面に地文のR L斜行縄文がみられる比較的厚手の土器である。第II群土器B類に相当する。

第4号ピット（第9図、図版4D）

E-12区にて検出した。規模は80×80cm、深さ27cmを算する。プランは不整円形を呈する。

東壁は、傾斜地のため低い。壁のほとんどは直立に近く立ち、壙底面は平坦となる。

壙底面中央に小礫が1点、北側壁近くの覆土中に4点の土器片を検出したのみである。

埋土の状況は、以下のとおりである。

A層：真黒色土（軟い）

B層：暗褐色土（黒色土中に黄色ロームが多量に混る）

遺物

土器（第23図4-1～3） 2は口縁に山形突起があり、口唇上にはR Lの縄文が施文されている。器面は剥落し文様は不明であるが、第IV群土器B類に相当する。

1は第II群土器の胴部片、3は同じく底部片である。1はR Lの斜行縄文が地文として施文されている。

第5号ピット（第9図、図版4E）

E-12区で検出した。規模は59×58cm、深さ14cm程で円形プランを呈する。

南東壁は傾斜地のため低くなる。壁は比較的直立に近く立ち、壙底面はほぼ平坦である。

北西壁近くの壙底には、大型の礫が1点検出されている。他には覆土中も含め一切の遺物は無い。

埋土の状況は、以下のとおりである。

A層：黒褐色土（黒色土中に黄色ロームが多量に混る）

B層：暗黄褐色粘質土（基盤の黄褐色ロームより若干暗く汚れている）

第6号ピット（第9図）

E-12区で検出した。規模は80×55cm、深さ11cm程で橢円形プランを呈する。長軸方向はN5°Eである。

東壁は傾斜地のため、ほとんど無い状態となっている。

壁は直立に近く立ち、墳底は平坦である。

墳底面で黒耀石製の削器を1点検出しているが、他に遺物は無い。

長軸方向の北側、壁より10cm程の位置に径15cm深さ4～5cm程の柱穴状小ピットが確認されている。本ピットとの関連は不明である。

埋土の状況は、以下のとおりである。

A層：黒褐色土

遺物

石器（第26図6-1） 黒耀石の縦長剝片の一部側縁に使用痕の認められるものである。

第7号ピット（第9図、図版5A）

E-12区で検出した。規模は75×64cm、深さ25cm程で不整円形を呈する。

傾斜地に立地するため、北東壁が低くなる。壁はゆるやかに傾斜し丸味を帯びた墳底面に続く。

墳底面中央に2個の礫が検出され、覆土中からは3点の土器小片が得られたのみである。

北西壁外8cm程の所に径20cm、深さ8cm程の柱穴状小ピットが確認されているが、本ピットとの関連は不明である。

埋土の状況は、以下のとおりである。

A層：黒褐色土（黄褐色ロームが少量混る）

B層：黄褐色土

C層：暗茶褐色土

D層：黒褐色土（A層とほぼ同じ）

遺物

土器（第23図7-1） 厚手の胴部片で、器面にLRの斜縄文が地文として施文されている。第II群土器のいずれかに、対比されると考えられる。

第8号ピット（第10図、図版5C）

E-13区で検出した。規模は117×98cm、深さ20cmで、楕円形プランを呈す。長軸方向はN4°Eである。

傾斜地にあるため、東壁は他より若干低くなっている。

壁はややゆるやかに下り、ほぼ平坦な墳底面へと連る。

墳底より若干浮いた状態で3点の土器が検出されている。他に覆土中より2点の黒耀石剝片があった。

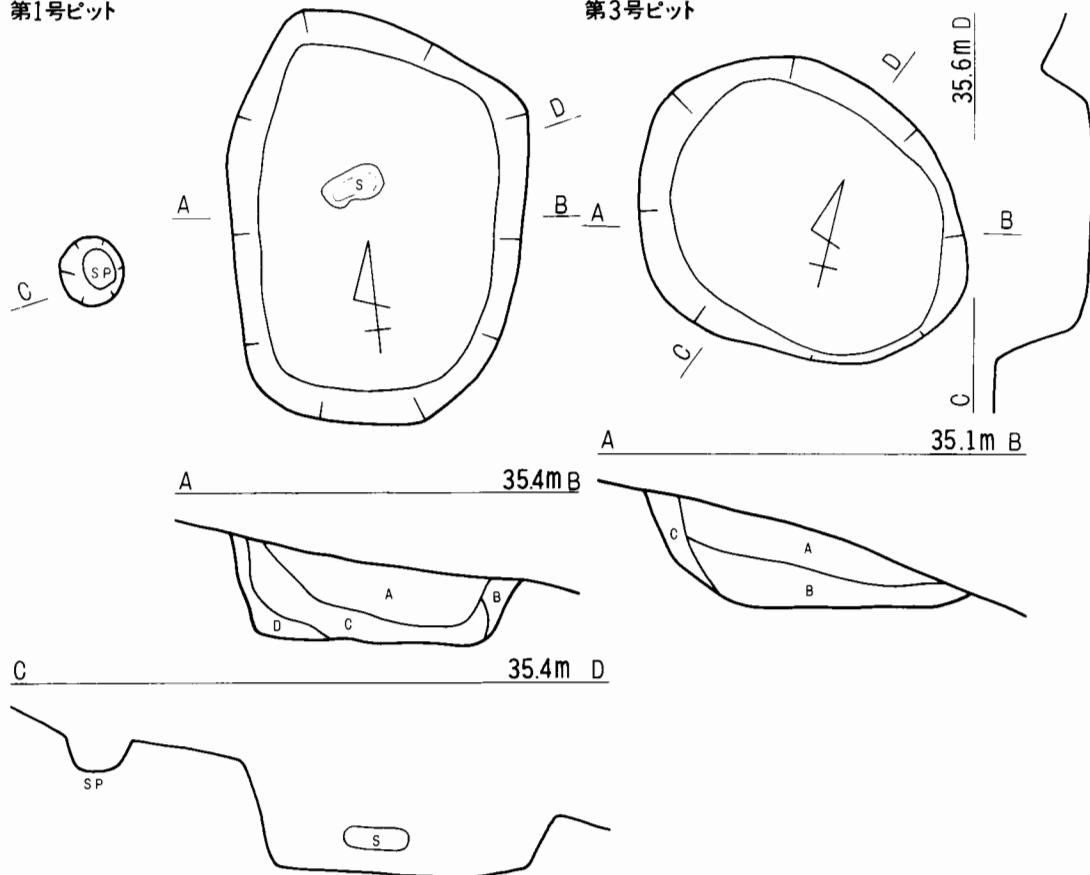
南西壁外側5cm程の所に、径30cm、深さ15cm程の小ピットがあった。本ピットとの関連は明らかではなかった。

埋土の状況は、以下のとおりである。

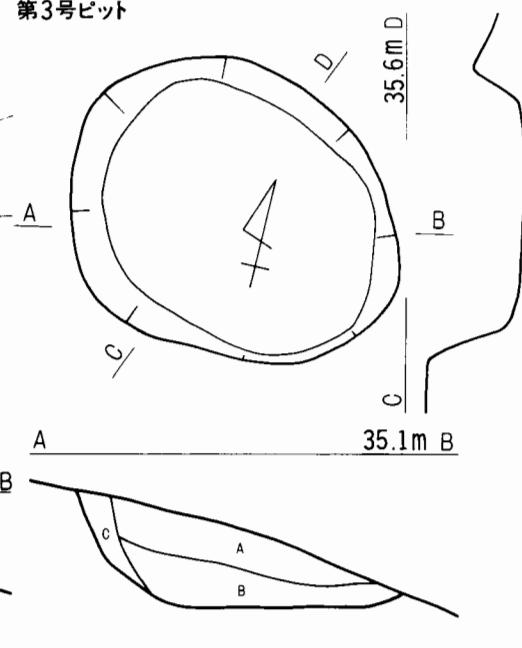
A層：真黒色土

B層：黒褐色土（黒色土に黄褐色ローム粒が若干混る）

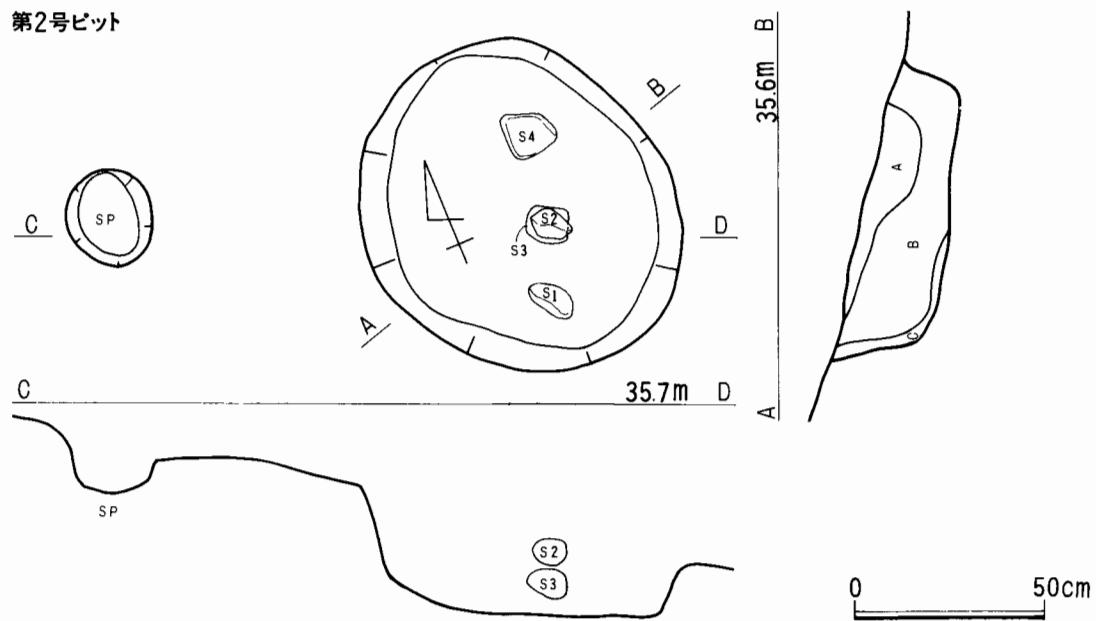
第1号ピット



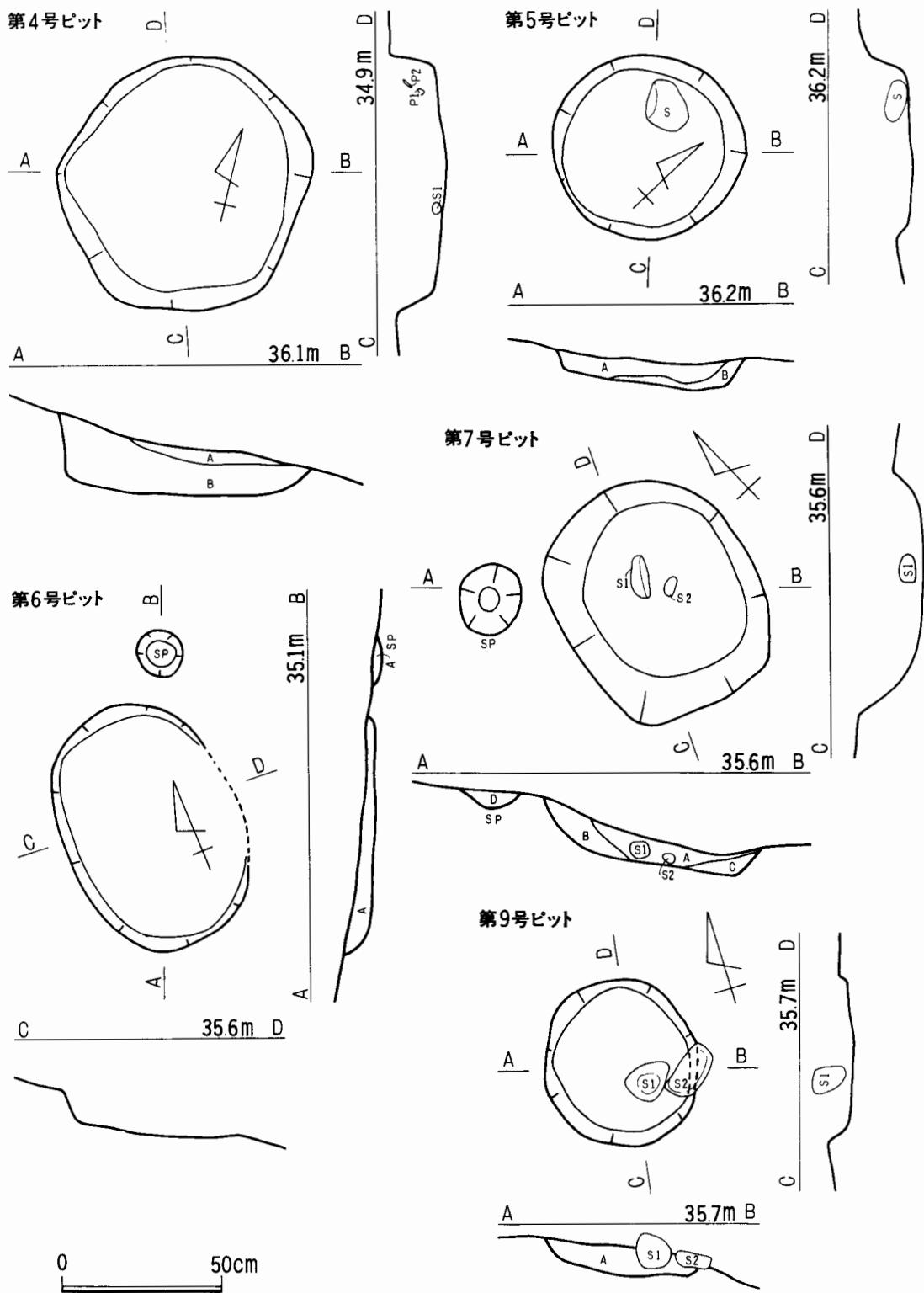
第3号ピット



第2号ピット



第8図 第1～3号ピット



第9図 第4～7・9号ピット

C層：暗褐色土

遺物

土器（第23図8—1，2） 胴部片2点である。器面にはR L斜行縄文（1），L R斜行縄文（2）が地文として施文される。第II群土器D類に胎土・焼成は近似する。

第9号ピット（第9図、図版5B）

E—13区にて検出した。規模は54×50cm、深さ13cm程の円形プランを呈する。

傾斜地のため、北・東壁が低くなる。

壁はゆるやかに傾斜しており、壙底面は若干でこぼこしている。

東壁に一部が重るようにと壙底より数cm浮いた状態で大型礫が2点ある。覆土層中からは3点の土器小片が検出されたのみである。

埋土の状況は、以下のとおりである。

A層：暗褐色土（黒色土に黄褐色ローム粒が多く混る）

第10号ピット（第10図、図版5C）

E—13区において検出した。規模は77×77cm、深さ28cmの円形プランを呈する。

傾斜地のため南東部壁が若干低くなっている。

他壁は直立に近く立つ。壙底はほぼ平坦である。

遺物は、覆土・壙底ともに一切検出していない。

埋土の状況は、以下のとおりである。

A層：真黒色土

B層：黒色土

C層：暗褐色土（黒色土に黄褐色ロームが多量に混る）

第11号ピット（第10図、図版5D）

E—13区にて検出した。規模は61×58cm、深さ19cm程の不整円形を呈する。

壁は比較的直立に近く、壙底面は地面の傾斜と同程度に北東方向が徐々に低く傾斜する。

遺物は、壙底・覆土中からも一切検出していない。

埋土の状況は、以下のとおりである。

A層：黒褐色土（黒色土に黄褐色ローム粒が若干混る）

B層：暗褐色土（黒色土に黄褐色ローム粒が多く混る）

第12号ピット（第10図、図版5E）

E—13区において検出した。規模は90×75cm、深さ19cm程で、プランは楕円形、長軸方向はN3°Wである。

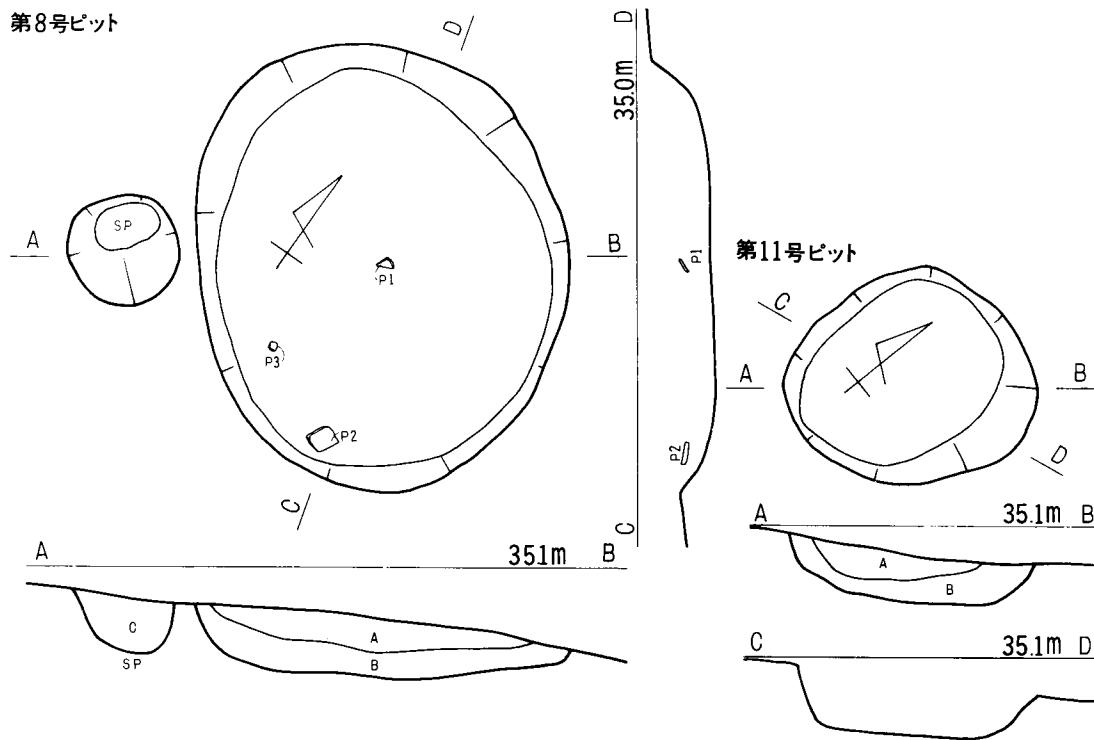
傾斜地のため、北東壁が若干低くなっている。

壁は直立に近く立ち、壙底は平坦となる。

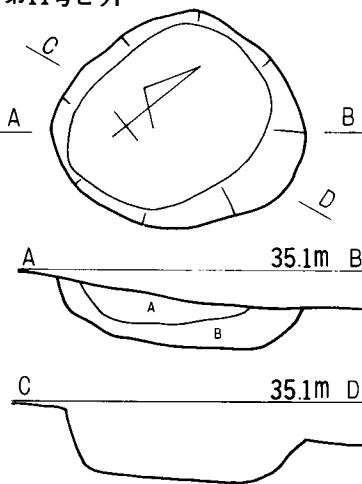
壙底に1点の型式表徴が明らかでない土器片と小礫が3点検出されている。

埋土の状況は、以下のとおりである。

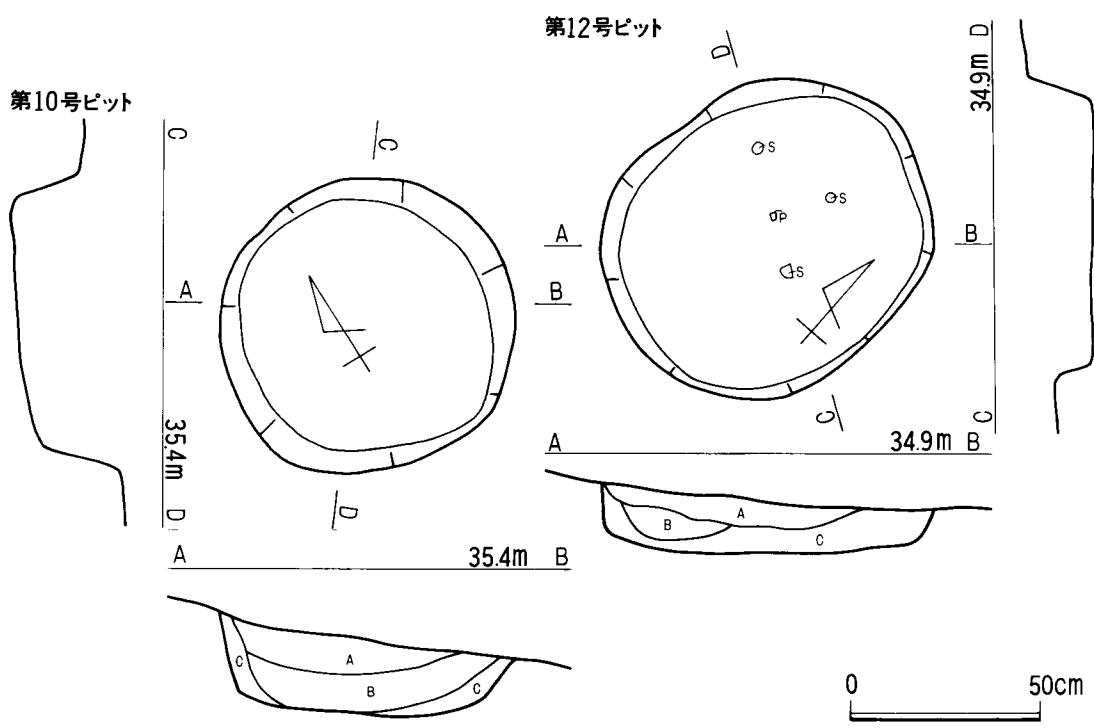
第8号ピット



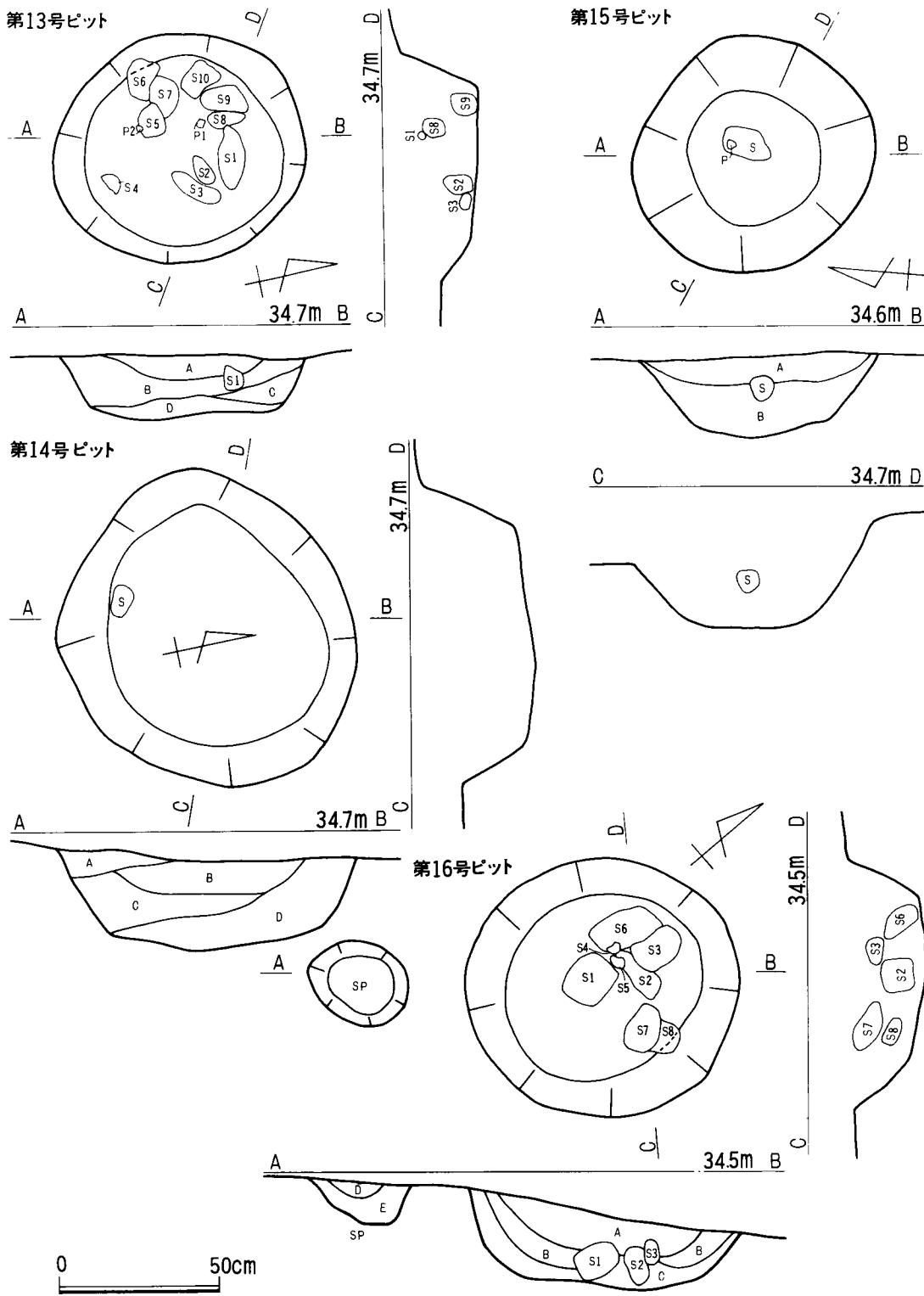
第11号ピット



第12号ピット



第10図 第8・10~12号ピット



第11図 第13～16号ピット

A層：黒色土

B層：黒褐色土（黒色土に黄褐色ローム粒が若干混る）

C層：暗褐色土（黒色土に黄褐色ローム粒が多く混る）

第13号ピット（第11図、図版5 F）

E-13区において検出した。規模は79×72cm、深さ25cm程で、不整円形を呈する。

傾斜地のため、東壁が若干低くなっている。

壁は比較的ゆるやかに傾斜しており、壙底は平坦となる。

壙底には、大小の礫10個が積み重ねるようにあり、さらに型式的表徴が明らかでない土器片が1点検出されている。

埋土の状況は、以下のとおりである。

A層：黄褐色土

B層：黒色土

C層：暗褐色土

D層：黒褐色土

第14号ピット（第11図、図版6 A）

E-13区にて検出した。規模は101×91cm、深さ35cm程で不整円形を呈する。

傾斜地のため、東壁が若干低い。

壁はいずれもゆるやかに傾斜し、壙底面は中央がくぼみ全体に丸味を帯びる。

壙底南壁付近に中型の礫が1点あった。覆土中から型式的表徴の明らかでない土器小片が1点得られている。

埋土の状況は、以下のとおりである。

A層：暗褐色土（攪乱層か）

B層：真黒色土

C層：黒褐色土（黒色土に黄褐色ローム粒が若干混る）

D層：褐色土（黄褐色ローム粒が多量に混る）

第15号ピット（第11図、図版6 B）

E-13区にて検出した。規模は75×70cm、深さ33cm程で、円形プランを呈する。

傾斜地のため西壁が若干下る。

壁は傾斜しており、壙底は若干せまく丸味を帯びる。

覆土中央に大型の礫が1個、土器片が1点検出された。

埋土の状況は、以下のとおりである。

A層：黒褐色土

B層：暗褐色土

遺物

土器（第23図15-1） 口縁が外反し山形突起を有する。突起部の内側は斜めに削り取られ、R

Lの燃糸を並列して押圧する。器面には、R Lの斜行縄文が施文されている。第IV群土器B類に相当する。

第16号ピット（第11図、図版7 A）

E-13区にて検出した。規模は84×80cm、深さ25cm、円形プランを呈する。

傾斜地のため東側壁が若干下る。

壁は直立に近く立ち壙底近くにて大きく丸味を帯びる。壙底面は丸い。

壙底中央に大型の礫が8個、まとまって集積していた。覆土中をも含め他に遺物は一切無い。

南西壁外18cm程の所に32×28cm、深さ13cmの小ピットがある。本ピットとの関連は不明であった。

埋土の状況は、以下のとおりである。

A層：真黒色土

B層：黒色土

C層：褐色土（黄褐色ローム粒が多量に混る）

D層：黒色土

E層：黒褐色土

第17号ピット（第12図、図版6 C, D）

E-13・14区にて検出した。規模は82×72cm、深さ30cm程であり、不整円形を呈する。

傾斜地に立地するため、南壁が若干低い。

北壁のみ傾斜が強く、他はゆるやかとなり壙底近くにて丸味を帯びる。壙底は狭く丸い。

壙口に半完形土器が潰れた状態で1個体ありさらに小礫が1個あった。壙底には3個の大型礫が置かれ、覆土中には5点の土器片が検出されている。

埋土の状況は、以下のとおりである。

A層：真黒色土

B層：黒褐色土

C層：暗黄褐色土（褐色土中に黄褐色ローム粒が多量に混る）

D層：褐色土

E層：黒色土

遺物

土器（第22図17-1、第23図17-2～6） 1は、鉢形土器で、口縁がやや外反し2個1対の山形突起が対面して付く。全体にゆがみがひどく、底径と口径の中心軸は一致しない。口縁の突起内面には頂部より垂下する短刻線にて刻まれる。器面にはL Rの斜行縄文が全面に施文される。底面は中央が外へ突出し、この面にもL R斜行縄文が施文される。第IV群土器B類eに相当する。

2～6は、深鉢形土器の胴部片である。2～4、6はL R斜行縄文、5はR L斜行縄文が地文として施文される。

第18号ピット（第12図、図版7 B）

E-13、F-13区にて検出した。規模は55×47cm、深さ13cm程であり、不整円形を呈する。

傾斜地に立地しているため、北～東にかけての壁が若干低くなる。

壁は直立に近く立ち、壙底は平坦となる。

壙口付近に大型礫1個と、土器片を1点検出した。

埋土の状況は、以下のとおりである。

A層：真黒色土

B層：黄褐色土

遺物

土器（第23図18—1） 沈線文と地文のすり消し帯によって文様を構成する、銀杏葉状を呈する文様がみられる。第III群土器B類に相当する。

第19号ピット（第12図、図版7C）

D—11区にて検出した。規模は76×73cm、深さは21cm程を算し、円形プランを呈する。

傾斜面に立地するため、北から東にかけての壁は若干下る。

壁はゆるやかに傾斜しており、壙底の丸味と区画が明らかではない状況にある。

覆土中、壙底とともに一切の遺物は、検出していない。

埋土の状況は、以下のとおりである。

A層：真黒色土

B層：黒褐色土（粉のような感じである）

C層：黄褐色土（黒褐色土が混り合っている）

第20号ピット（第12図、図版7D）

D—12区において検出した。規模は101×95cm、深さ34cm程の不整梢円形を呈する。長軸方向はN 12°Wである。

傾斜地のため、北から東にかけての壁は若干低い。

南東から北西にかけての壁は直立に近く立ち、北から東にかけての壁はゆるやかな傾斜がある。

壙底は平坦に近い。

覆土中に礫2点があり、壙底南西壁沿いには2点の礫、土器片2点が検出された。

埋土の状況は、以下のとおりである。

A層：真黒色土

B層：黒褐色土

C層：暗褐色土（黄褐色ローム粒が混る）

遺物

土器（第23図20—1、2） 比較的厚手で深鉢形土器の胴部片である。R L 斜行縄文（1）、L R 斜行縄文（2）が地文として施される。

第II群土器に属すると考えられる。

第21号ピット（第13図、図版8A）

D—12区にて検出した。規模は101×95cm、深さ34cm程あり、壙口は不整円形、壙底は不整隅丸方

形プランを呈する。

傾斜面に立地しているため、北から東にかけての壁は他に比し若干低くなる。

南西壁は直立し、他壁は若干傾斜する。墳底は北東—南西断面では弧を描き、北西—南東断面では平坦となる。

覆土中に礫が5点、土器片が3点検出されている。

埋土の状況は、以下のとおりである。

A層：真黒色土

B層：黒褐色土（淡黄褐色の火山灰が混る）

C層：黒褐色土

D層：暗褐色土（淡黄褐色の火山灰が多く混る）

遺物

土器（第23図21—1～3） 2は鉢形土器で口縁はやや外反し山形の突起を有する口唇は内傾気味に斜めに整形され、この部分にR Lの斜縄文を施す。器面にも同様の縄文が地文として施文される。第IV群土器B類eに相当する。

1は裏面が大きく剝離しているため時期等の所属は不明である。L Rの斜縄文が器面にみられる。

3は第IV群土器B類に属する胴部片で、R Lの縦走縄文が地文として施文されている。

第22号ピット（第13図、図版8B）

E-12区にて検出した。規模は94×88cm、深さ31cm程あり、円形プランを呈する。

南—北断面では壁がゆるやかに傾斜し、平坦な墳底面に連る。東—西断面では傾斜面と一致した方向のため墳底もほぼ並行して傾斜する。壁もゆるやかに傾斜している。

遺物は、覆土及び墳底面とも一切検出していない。

埋土の状況は、以下のとおりである。

A層：真黒色土（根を多く含む）

B層：暗褐色土（軟い）

C層：黄褐色ロームと暗褐色土が混り合った層

第23号ピット（第13図、図版9A）

E-12区にて検出した。規模は72×69cm、深さ19cm程で、円形プランを呈する。

北から東にかけての壁は、傾斜地のため若干低くなる。

壁は全体的にゆるやかな傾斜がつき、墳底は丸味を帯びる。

覆土層中央部に大型礫1個検出した。他に遺物は無かった。

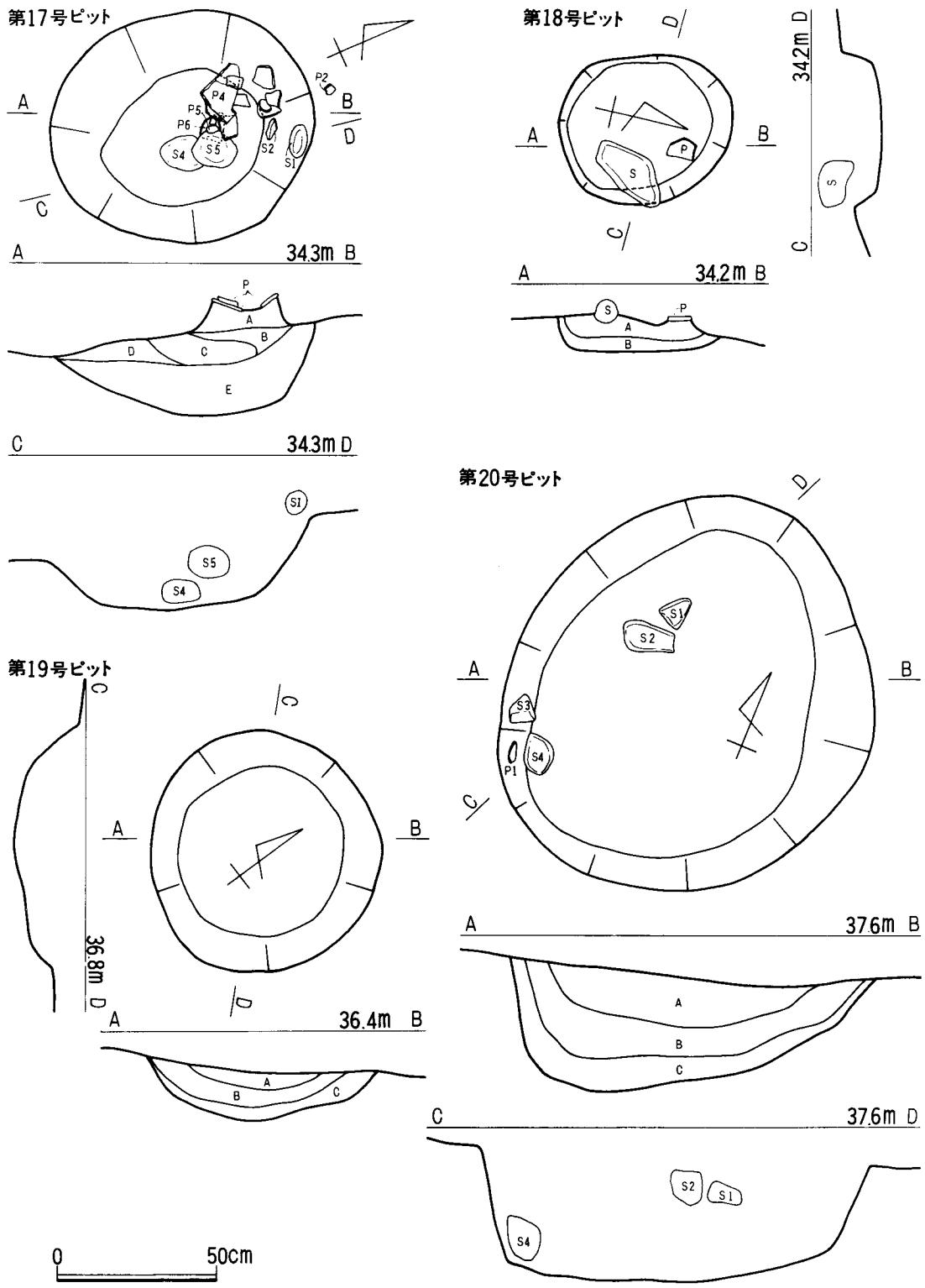
埋土の状況は、以下のとおりである。

A層：真黒色土

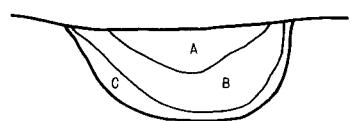
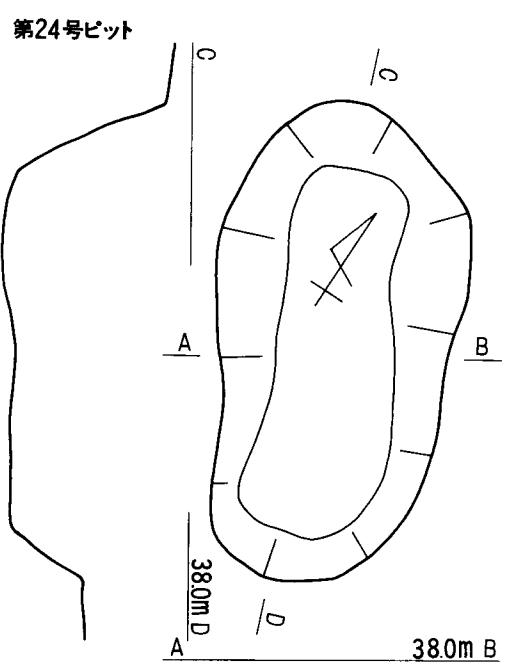
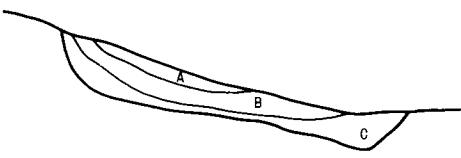
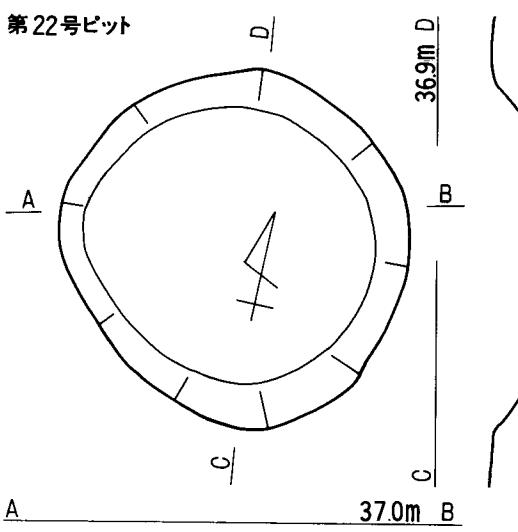
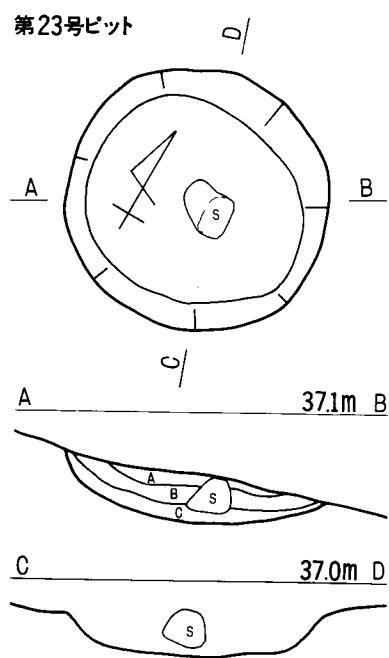
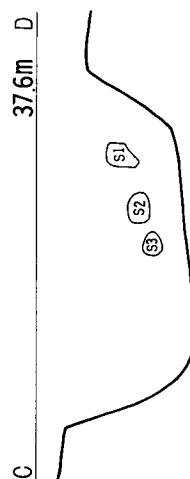
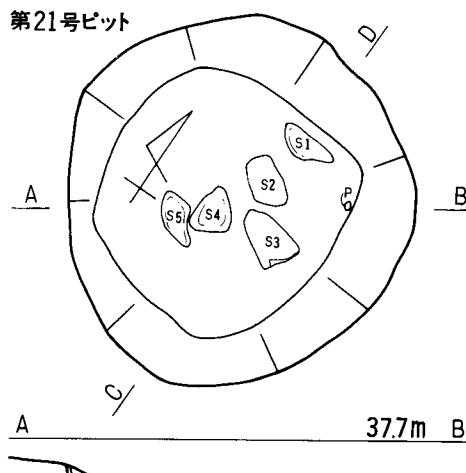
B層：暗褐色土

C層：黄褐色土と暗褐色土が混り合った層

第24号ピット（第13図、図版9B）



第12図 第17~20号ピット



0 50cm

第13図 第21～24号ピット

F—9区にて検出した。規模は128×67cm, 深さ44cm程ある。長楕円形プランを呈し、長軸方向はN24°Wである。

傾斜地のため南東壁が若干低い、南北断面では若干傾斜しほぼ平坦な壙底へと連る。東西断面では東壁のみ直立し丸味のある壙底面と続く。

遺物は、覆土層・壙底とともに一切検出されていない。

埋土の状況は、以下のとおりである。

A層：黒褐色土（黄褐色ローム粒が若干混る）

第25号ピット（第14図、図版9C）

P—6区にて検出した。規模は60×46cm, 深さ9cm程で、楕円形プランを呈する。長軸方向はN52°Eである。

北東—南西の断面では、壁はゆるやかに傾斜し多少でこぼこした壙底との区別はむずかしい。北西—南東の断面では、ゆるやかに傾斜する壁が平坦な壙底にスムーズに連っている。

遺物は、1点の型式表徴の明らかでない土器小片が覆土中より得られたのみである。

埋土は、上部が削平されているため1層よりない。

A層：暗褐色土

第26号ピット（第14図、図版9D）

P—6区にて検出した。規模は58×53cm, 深さ9cm程で、円形プランを呈する。

南—北断面では、壁はゆるやかに傾斜し中央が丸味を帯びくぼむ壙底との区分はむずかしい。東—西断面は壁がやや立ち、壙底は平坦となる。

遺物は、覆土中より1点のみ検出した。

埋土は、上部が攪乱により大きく削平されていることより浅い。

A層：暗褐色土

B層：黄褐色土（暗褐色土に黄褐色ローム粒が多量に混る）

遺物

土器（第23図26—1） L Rの斜縄文を地文とした深鉢の胴部片である。器面は風化がはげしく、荒れ、胎土中の砂粒が浮き出ている。

第27号ピット（第14図、図版10A）

P—7区にて検出した。規模は70×63cm, 深さ15cm程で、不整円形プランを呈する。

南—北断面では、壁が直立に近く立ち壙底は平坦となる。東—西断面では西壁は直立し途中で段となり、東壁は若干傾斜する。

壙底面には、11個の礫が積み重ねられるようにあり、土器片9点、石器1点が検出され、覆土層中には黒耀石剝片9点が出土した。

埋土の状況は、以下のとおりである。

A層：黒色土（粒子が細かく軟い）

B層：黒褐色土（粒子が粗い）

遺物

土器（第23図27—1～4） いずれも薄手の深鉢形土器の胴部片である。器面にはL Rの斜縄文が地文として施文されている。

第IV群土器B類に属すると考えられる。

石器（第26図27—1） 黒耀石幅広剝片の一部側縁に使用痕の認められるものである。

全体に火熱を受けたと思われ、表面はくもりガラス状となっている。

第28号ピット（第14図、図版11A）

P—7区にて検出した。規模は44×38cm、深さ7cm程の不整円形プランを呈する。

表土層がかなり削平されているため、非常に浅い皿状の壙底のみ検出されている。

遺物も一切検出していない。埋土の状況も壙底のみのため1層よりない。

A層：暗褐色土層

第29号ピット（第14図、図版11B）

Q—7区にて検出した。規模は64×62cm、深さ12cm程あり、プランは円形を呈する。

これも上部が削平されており、皿状の壙底部のみ残った状況である。

壙底中央に壙底面より1～2cm浮いた状態で3個の礫が検出されている。他に遺物は一切無い。

埋土は、上部が大きく削平されている事より壙底近くの2層よりみられなかった。

A層：暗褐色土

B層：暗茶褐色（粒子が粗く軟い）

第30号ピット（第14図、図版10B）

Q—6区にて検出した。規模は58×58cm、深さ21cm程あり、不整円形を呈する。

断面は、底の丸い掘り鉢形を呈する。

壙底中央に大型礫1個と小型の礫2個が置かれており、土器片が3点覆土中に検出されている。

埋土の状況は、以下のとおりである。

A層：真黒色土

B層：黒色土

C層：黒褐色土（炭粒・ベンガラ粒を若干含む）

遺物

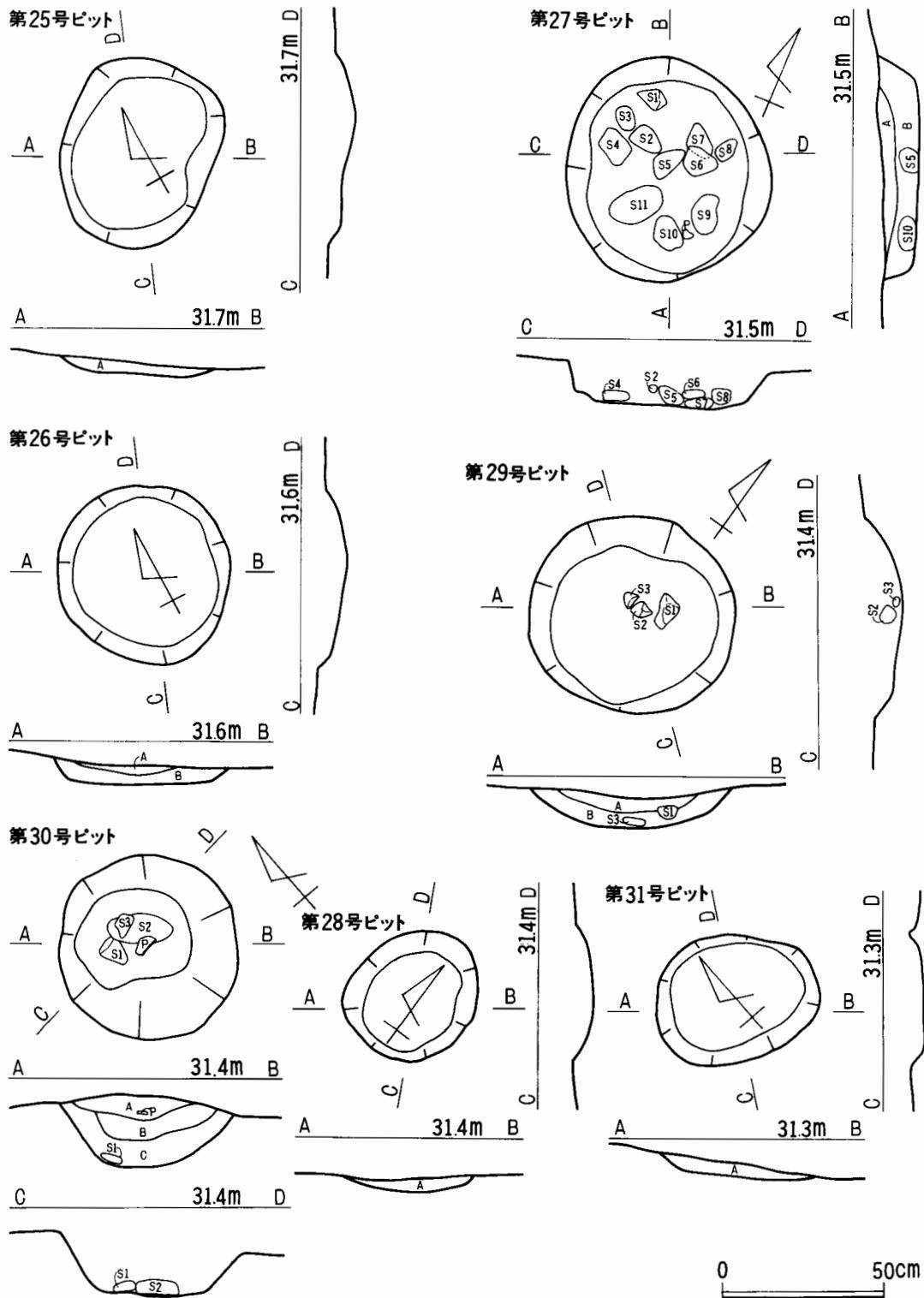
土器（第23図30—1, 2） 1は口縁部で若干外反する。口唇直下には刻み目を連続してめぐらし、器面にはR Lの斜行縄文が地文として施される。第IV群土器B類eに相当する。

2は厚手の深鉢形土器胴部片で、器面には羽状縄文が地文として施文される。第II群土器であろう。

第31号ピット（第14図、図版11C）

Q—6, 7区において検出した、規模は51×40cm、深さ9cm程の、楕円形プランを呈する。長軸方向はN69°Wである。

上部は大きく削平され、壙底部のみ残った状況であり浅い皿型を呈する。



第14図 第25~31号ピット

傾斜面にあるため、南東壁は不明瞭である。

遺物は、一切検出していない。

埋土の状況は、上部が削平されているため1層よりない。

A層：黒褐色土

第32号ピット（第15図、図版11D）

P-7区にて検出した。規模は52×36cm、深さ8cm程あり、楕円形プランを呈する。

長軸方向はN5°Wである。

上部は大きく削平されているため、断面は浅い皿状を呈する。

壙底面に大型礫1個と、土器片4点を検出した。

埋土の状況は、上部が削平され壙底部のみ残った状態で2層しかない。

A層：黒褐色土（ベンガラ粒が若干混る）

B層：暗褐色土（黄褐色ローム粒が多く混る）

遺物

土器（第23図32-1～4） 2は貼付帯によって文様が構成され、貼付帯上は半截竹管の内面を押引した連続刺突が付く。地文はLRLの複節斜行縄文である。第II群土器B類に相当する。

1は平行する縄線文（R）が1段みられ、地文はRの撚糸文が縦位に施文される。3はRL斜縄文を地文とする底部であり、底面が外へ張り出す。1, 3は、第IV群土器B類に属する。

4はRLの斜縄文のみみられるもので所属時期等は不明である。

第33号ピット（第15図、図版12A）

Q-7区において検出した。規模は95×66cm、深さ14cm程あり、楕円形プランを呈する。

長軸方向は、N65°Eである。

傾斜面にある事、上部を大きく削平されている事より断面形は浅い皿状となる。

壙底面に、土器片3点と石片1点を検出している。

埋土は、上部が削平され壙底部のみのため2層よりない。

A層：黒褐色土（黄褐色ローム、火山灰粒が多量に混り軟い）

B層：暗褐色土（比較的硬くベンガラ粒が若干混る）

遺物

土器（第23図33-1～3） 2は鉢形土器の口縁で口縁に山形突起が付く。突起部は内傾気味に斜に削られ、突起頂部には刻み目が付けられる。器面にはRLの斜行縄文が地文として施文されている。3も鉢の胴部片であろう。RLの斜縄文が地文となる。1はLRの斜縄文が地文となる。

第IV群土器B類に属する。

第34号ピット（第15図、図版12B）

Q-7区にて検出した。規模は56×55cm、深さ9cm程を数える。プランは不整隅丸方形を呈する。

上部は大きく削平されており、断面形は浅い皿状で壁は一部を除いて直立に近く立つ。

壙底面に、総計6点の土器片が検出されている。

埋土は、壙底部のみ残っている状況のため1層のみである。

A層：暗褐色土（黄褐色ローム粒が若干混る）

遺物

土器（第23図34—1～3） 1は口唇上、口唇直下に半截竹管の内面を長く押引きした連続刺突文が各1段めぐる。地文はLRの斜縄文である。第II群土器B類に相当する。

2は胴部片で器面には擦痕様の器面調整痕のみみられる。3は横走沈線文が1段のみみられるもので、2, 3とも所属は不明である。

第35号ピット（第15図、図版12C）

Q—7区にて検出した。規模は $58 \times 46\text{cm}$ 、深さ10cm程で、楕円形プランを呈する。

長軸方向は、N $83^{\circ}W$ である。

上部はやはり削平されているが、壁はやや傾斜し壙底面は平坦になっている。

壙底面に土器片3点と礫1点を検出している。

埋土の状況は、以下のとおりである。

A層：黒色土

B層：黒褐色土

C層：黄茶褐色土

遺物

土器（第23図35—1～5） 3は口縁で口唇は内側に斜になるよう整形される。口縁に2本の平行沈線文がめぐる。地文はRL斜行縄文である。5は幅広い沈線文が十字に描かれる。1, 2, 4は胴部片で1は無文、2はRL斜行縄文が、4はLの非常に細い撚糸文（付加条）が密に施文され地文となる。

いずれも、第IV群土器B類に属すると考えられる。

第36号ピット（第15図、図版12D）

Q—7区において検出した。規模は $98 \times 70\text{cm}$ 、深さ27cm程あり、楕円形プランを呈する。

長軸方向は、N $30^{\circ}W$ である。

南一北断面では、南壁はやや傾斜して直線的に下り若干湾曲した壙底面に連る。北壁は丸味を帯びる。東一西断面では、西壁は斜に直線的に下り、平坦な壙底面に続く。東壁は西壁に比しやや傾斜が弱く丸味を帯びる。

壙口には、総計15個の大型礫、礫があり、ピット外にも大型礫2個と小礫1個があった。礫群の下位、壙底面には口縁部を欠失した土器が1点横向きに置かれていた、小礫も1点検出している。

礫群中には、土器片3点と石鏃1点がある。

尚、壙底面にあった口縁を欠失した土器中には石鏃が1点入っていた。

埋土の状況は、以下のとおりである。

A層：黒褐色土

B層：黄褐色土（黒褐色土粒が混る、非常に硬い）

C層：褐色粘質土

遺物

土器（第22図36—1，第23図36—2～3） 1は、深鉢の底部でLRの斜行縄文を地文としている。底面は揚底となり、底面には刺突文が2重にめぐらされる。

2は、沈線文のみみられる。3，4は胴部片でいずれもRLの縦走縄文が地文となる、第IV群土器B類に相当する。

石器（第26図36—1～3） 1，2とも黒耀石製の石鏃であり、二等辺三角形状に入念な剥離加工が両面に施されている。底辺には抉入が入る。

3は、安山岩の大型扁平礫の一面に擦面がある石皿である。大きく割れしており、一部より残存していない。

第37号ピット（第15図、図版13A，B）

P—7区において検出した。規模は72×70cm、深さ34cm程で、円形プランを呈する。

壁はすべて直立に近く立ち、壙底は平坦となる。

壙底には、少なくとも5個体分程の土器破片が重なるようにあり、覆土中には中小の礫が15点、石片が18点ある。壙口の土器片中には石器が2点まじっていた。

埋土の状況は、以下のとおりである。

A層：真黒色土

B層：黒褐色土

C層：黒色土+暗灰褐色土

D層：暗茶褐色土（褐色土粒が若干混る）

遺物

土器（第22図37—1，2，第23図37—1～15，第24図16～39） 1は胴より底部にかけてであり、上位に1段RLの横走帶縄文がめぐり、地文としてRLの縦走帶縄文が施文される。第V群土器A類に対比される。

2は口径33cm、器高37cm、底径8.4cm程の大型の深鉢形土器である。平縁で口唇上は平らに整形され円形刺突文がめぐらされる。口縁は直立に近く立ち、胴中段付近より徐々にすぼまり底部へと至る。底部は平底である。地文は、RLの斜行縄文である。

15，32，36は厚手である。32は円形刺突文がある。15はLRの斜行縄文が、36はRLRの複節斜行縄文が地文として施文される。

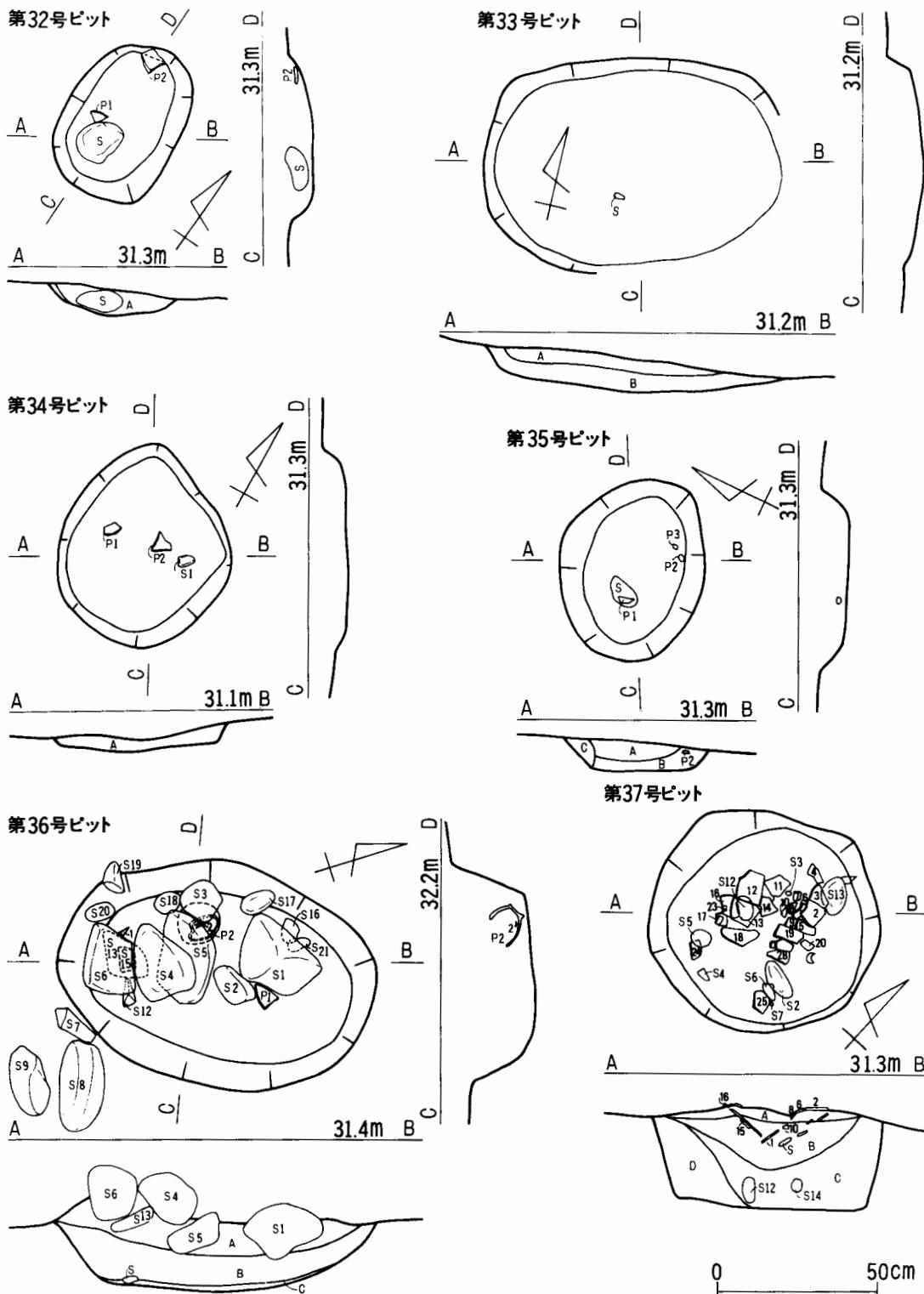
32は第II群土器C類に、36は第II群土器B類に属する。15は第II群土器であろう。

5，14，17は、平行沈線文が特徴となる。第IV群土器B類aに対比される。

8は斜の刺突文列が特徴となり、第IV群土器B類cに対比される。

10，13は沈線が浮彫りのようにめぐらされる。第IV群B類aに属するであろう。

4は口縁部片で口唇上には連続刺突文がめぐる。口縁にLの縄線文が1段みられる。第IV群土器B類dに対比される。3，6，7，9，11，16，18～28，31，33～35，37～39は、縄文のみみられ



第15図 第32～37号ピット

るものである。口縁は、3, 6, 7, 9, 11, 16で、口唇上に竹管文をめぐらす(6, 7), 刻み目を施す(9)があり、他は平らか、丸味を帯びるよう整形される。

地文は、RL斜行縄文(6, 7, 18~22, 24, 27, 28) LR斜行縄文(3, 11, 16, 23, 25, 26), LR横走縄文(9)である。

第22図1とともに第IV群土器B類eに属する。

30は無文土器で、第IV群土器B類fである。

12, 29は底部である。いずれも若干揚底となっている第IV群土器B類であろう。

石器(第26図37—1~3) 1, 2は黒耀石製の石鏃である。二等辺三角形状に入念に両面加工が施されており、底辺には抉入がある。2は尖頭部の一部を欠失している。

3は黒耀石の石核である。縦長剝片を数枚剥離した面が残り、一部に原石面がある。

打面は、原石面からで調整等は行われていない、打角は80度程である。

第38号ピット(第16図、図版13C)

Q—7区にて検出した。規模は75×74cm、深さ18cm程あり、円形プランを呈する。

断面観では、壁はゆるやかに傾斜し壙底は丸味を帯びる。壁と壙底の区分はむずかしい状況となる。

壙口から壙底面より若干浮いた状態で、4個の大型礫が検出されている。覆土中には、12点の土器片があった。

埋土の状況は、以下のとおりである。

A層：真黒色土

B層：黒色土

C層：黒褐色土

遺物

土器(第24図38—1~11) 1, 6は口縁部で、数段の横走沈線文がめぐる。8はLRの縄線文が1段めぐる。他は胴部片でRL斜行縄文(4, 5, 9~11), RL横走線文(7), LR横走帶縄文(2)等が地文として施文されている。

3は厚手で器面が荒れているため文様は明確ではない。胎土等は第III群土器A類に類似する。

他は全例第IV群土器B類に属する。1, 6はa, 8はdに相当する。

第39号ピット(第16図、図版13D)

P—7区において検出した。規模は74×72cm、深さ25cm程あり、円形プランを呈する。

壁は直立に近く下り、壙底は平坦となる。両者ともに堅く非常にしっかりしている。

壙底に大型礫が30個積み重ねるように配置され、最上部は壙口近くまで高まる。

礫群にはさまるように7点の土器片が得られている。

埋土の状況は、以下のとおりである。

A層：黒色土

B層：黒褐色土

C層：茶褐色土

遺物

土器（第24図1～4） 2は、口唇上が平らに整形され、口縁は若干外反する。口縁は入念に研磨され、1段の沈線文がめぐる。3、4は無文の胴部片、1はRLの縦走縄文が施文される。

2～4は、第III群土器B類に、1は第IV群土器B類に相当する。

第40号ピット（第16図、図版14A）

Q-7区において検出した。規模は59×50cm、深さ15cm程あり、円形プランを呈する。

上部は大きく削平されており、皿状を呈する壙底部のみ残った状態にある。

壙底より若干浮いた状況で、大型の礫が2点南西部分から検出されている。さらに土器片が1点得られた。

埋土の状況は、上部が大きく削平されている事から壙底面を覆った1層より検出していない。

A層：黒褐色土

遺物

土器（第24図40-1） 器面が磨滅し型式表徴の明らかでない土器小片である。

胎土には白色火山灰粒・砂粒を多く含む。

第41号ピット（第16図、図版14B）

P-7区において検出した。規模は76×72cm、深さ17cm程あり、円形プランを呈する。

南東壁のみゆるやかな傾斜となり、他壁は直立に近く立つ。壙底は平坦でしっかりしている。

壙底には、総計17個の大小礫が置かれており、礫の間に6点の土器片があった。

埋土の状況は、上部が削平されていることから、2層よりみられない。

A層：黒色土

B層：黒褐色土

遺物

土器（第24図41-1） 口縁部片で口唇は丸味を帯びる。器面には撚糸の端部を刺突する刺突列がみられる。撚糸はRLである。

第IV群土器B類cに相当する。

第42号ピット（第16図、図版14C）

P-7区にて検出した。規模は60×60cm、深さ16cm程あり、不整方形プランを呈する。

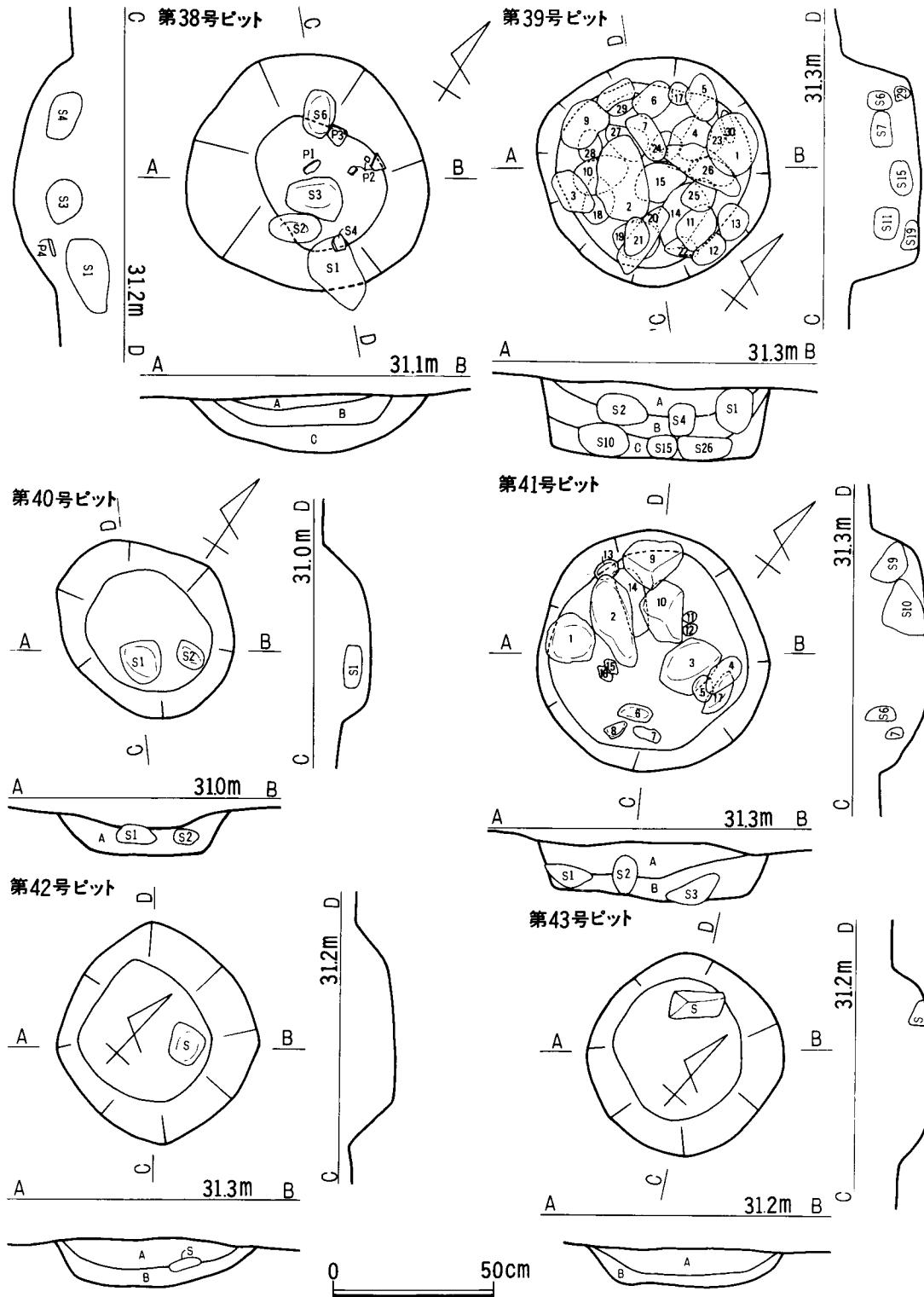
上部が削平されており、断面観は皿状を呈する。南西壁のみ直立に近く立ち他はゆるやかに傾斜する。

覆土中に大型礫が1点、土器片が15点検出されている。

埋土の状況は、上部が削平されている事から、壙底付近の2層よりみられない。

A層：黒色土

B層：黒褐色土（黄褐色土粒が若干混る）



第16図 第38~43号ピット

遺物

土器（第24図42—1～12） 全例第IV群土器B類に属するものである。4，5，10が口縁で、11が底部、他は胴部片である。

4はRLの縄文のみ施文され、口唇上にも縄文がある。eに相当する。5は器面に幅広の沈線文がめぐるもので縄文等は無い。aに相当する。10は無文土器で口唇は細身となる。fに相当する。

胴部片は、RL斜行縄文（2，6，12），LR斜行縄文（3，7）が地文として施文される。1，8，9は無文である。

11は底部で底面にもLRの斜縄文が施文される。

第43号ピット（第16図、図版15A）

P-7区にて検出した。規模は63×59cm、深さ13cm程であり、円形プランを呈する。

上部が削平されて、壙底付近のみ残っている状態である。壁は比較的なだらかに傾斜し、壙底は丸味を帯びる。

壙底北西壁沿いに、大型礫が1点あり、覆土中には小礫が5点、土器片5点、石器1点、黒耀石剝片7点を検出している。

埋土の状況は、上部が削平されていることから2層よりみられない。

A層：黒色土

B層：黒褐色土

遺物

土器（第24図43—1～3） 全例第IV群土器B類に属する土器である。1は口唇上にも縄文が施文された口縁部で若干外反する。口縁に曲線に近い沈線を2段めぐらす。内面にも同様の沈線を描く、地文はLRの斜行縄文である。aに属する。

2，3は胴部片でLRの斜行縄文が地文として施文される。

石器（第26図43—1～3） 全例黒耀石製である。1，3は縦長剝片の一部側縁に使用痕の認められるもので、3は火熱を受け表面がくもりガラス状となる。

2は縦長剝片の左右両側縁に剝離加工が施されたものでバルブ部分がとがる、いわゆる削器である。

第44号ピット（第17図、図版15B）

P-7区において検出した。規模は63×59cm、深さ15cm程あり、不整円形プランを呈する。

上部は削平されており、断面観は皿状を呈する。

壙底には大型礫6個があり、土器片6点、石器1点、黒耀石剝片1点が検出された。

埋土は、上部が削平されていることから2層よりない。

A層：黒色土

B層：黒褐色土

遺物

土器（第24図44—1～3） 全例第IV群土器B類に属する。1は深鉢の口縁で、口唇上は平らと

なり間隔の開く刻み目がめぐらされる。口縁の外反は少く直立に近い。器面には地文の、LR斜行縄文のみ施文される。eに相当する。

2, 3は胴部片で、LR縦走縄文を地文とする(2), 無文(3)である。

石器(第26図44-1) 黒耀石の縦長剝片の一部側縁に使用痕の認められるものである。

第45号ピット(第17図, 図版14D)

P-7区において検出した。規模は60×58cm, 深さ15cm程あり, 円形プランを呈する。

上部は削平されており, 断面は皿状を呈する。壁はゆるやかに傾斜し, 壇底は丸味を帯びる。

覆土中に, 磔石器(石皿)が1点, 土器片18点, 黒耀石剝片5点が検出されている。

上部が削平されているため, 埋土は2層しか無い。

A層: 黒色土

B層: 黒褐色土

遺物

土器(第25図45-1~11) 全例第IV群土器B類に相当する。1は口縁を欠失しているがその附近に竹管文が1段めぐる。地文はLRの縦走縄文で, cに属する。

2~9は胴部片で, RL斜行縄文(3, 5), RL縦走縄文(4, 7), LR斜行縄文(9), LR縦走縄文(2, 6)等が地文として施文される。

10, 11は底部で, 揚底気味である。

石器(第26図45-1) 楕円形状を呈する安山岩の大形礫の一部に敲打痕が認められるもので, 敲き石である。

第46号ピット(第17図, 図版16A)

P-7・8区にて検出した。規模は65×54cm, 深さ8cm程あり, 楕円形プランを呈する。長軸方向はN71°Wである。

上部は大きく削平されており, さらに斜面に立地することから, 北から南東にかけての壁は確認されていない。浅い皿状を呈する。

壇底に大型礫が1点あり, 型式表徴が明らかでない土器小片が1点検出されている。

埋土の状況は, 上部を大きく削平されている事から1層よりみられなかった。

A層: 暗褐色土

第47号ピット(第17図, 図版16B)

P-7区において検出した。規模は64×59cm, 深さ15cm程あり, 円形プランを呈する。

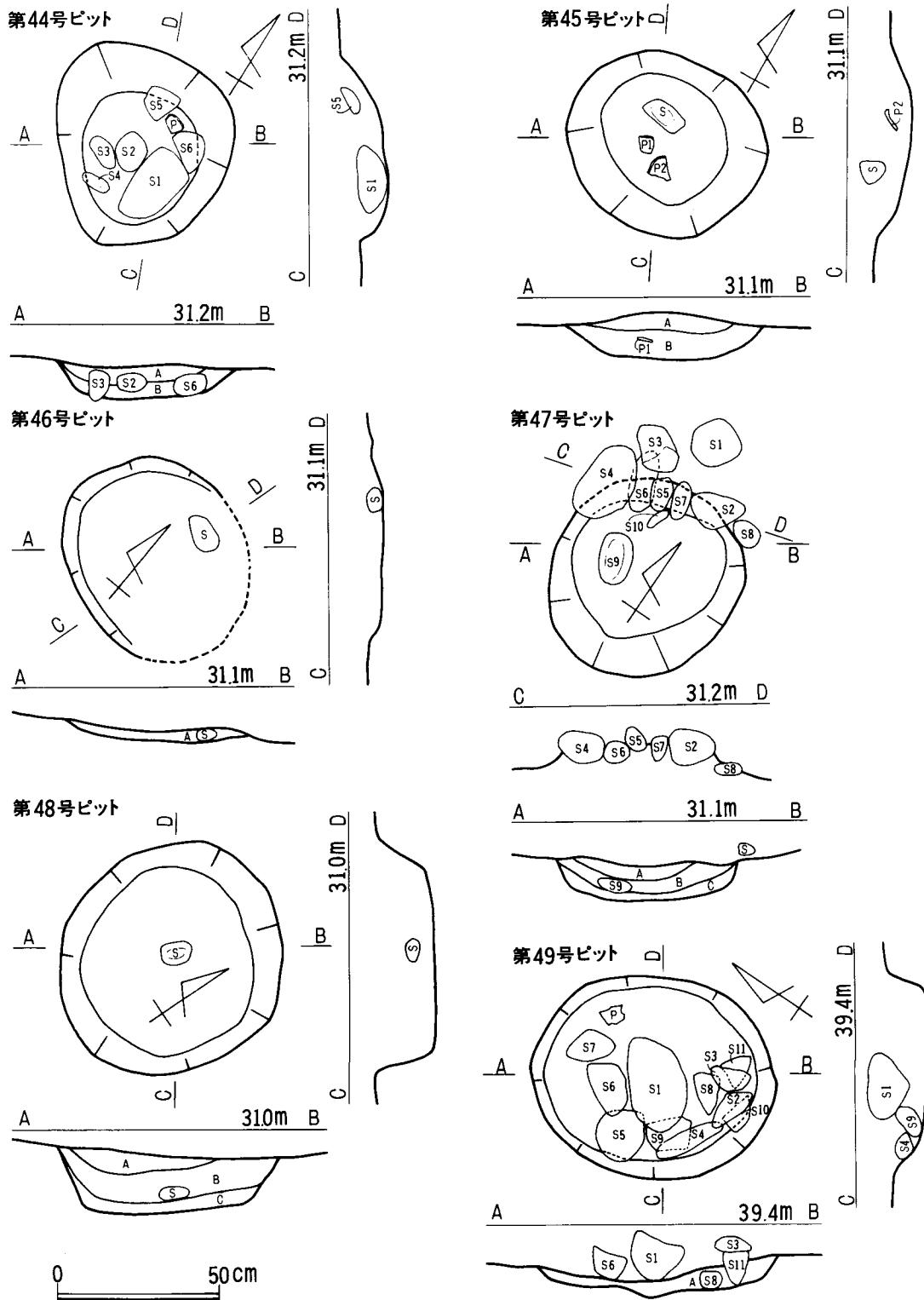
壁は若干傾斜し, 中央が徐々にくぼむ壇底へと連る。

ピット北側壁上(壇口)には8個の大型礫が置かれており, ピット内覆土中には2個の礫があつた。他の遺物は, 一切検出していない。

埋土の状況は, 以下のとおりである。

A層: 黒色土

B層: 暗茶褐色土



第17図 第44~49号ピット

C層：褐色土

第48号ピット（第17図、図版16C）

Q—7区にて検出された。規模は75×70cm、深さ21cm程あり、円形プランを呈する。

壁はやや傾斜し、壙底は平坦に近くなる。

覆土中に大型礫が1点ほぼ中央にあり、土器片15点、石器2点が検出されている。

埋土の状況は、以下のとおりである。

A層：黒色土

B層：暗赤褐色土（焼土に類似した赤色土が多量に混る）

C層：黒褐色土

遺物

土器（第25図48—1～8）全例第IV群土器B類に属する。1、2は口縁部で、口唇上に撫糸を押圧し刻み目をめぐらす（1）。口唇上にも縄文を施文する（2）。器面には地文の縄文（1：RL, 2：LR）のみみられる。1は内面口唇直下に一段RL撫糸の押圧がめぐる、eに相当する。

3は、沈線文が数段めぐらされ、地文はない。aに相当する。

4～8は胴部である。RL斜行縄文（4, 8）、RL縦走縄文（5, 6）、LR斜行縄文（7）が地文として施文されている。

石器（第26図48—1, 2）2点とも黒耀石を素材としている。1は石核で幅広剝片を数枚剝離している。

2は縦長剝片の一側縁に、使用痕の認められるものである。

第49号ピット（第17図、図版17）

H—7区において検出した。規模は77×63cm、深さ13cm程ある。楕円形プランを呈し、長軸方向はN35°Wである。

上部は大きく削平されており、しかも斜面に立地することから、北東部の壁のみ直立して若干高く、他壁はゆるやかに傾斜し低い。壙底は基本的には平坦であるが部分的にくぼんでいる所もみられる。

壙底には大型礫10個が入っており、遺構確認面上にも出ている。壙底に土器片が1点と、覆土中に剝片が1点検出されている。

埋土は、上部が大半削平されていることから壙底面を覆う1層よりない状況であった。

A層：黒色土層

遺物

土器（第25図49—1）平底の底部で器面にはLRの縦走帶縄文が地文として施文される。第V群土器B類dに属する、いわゆる後北C₂・D式土器である。

第50号ピット（第18図、図版16D）

G—6・7区において検出した。規模は85×80cm、深さ16cm程あり、円形プランを呈する。

壁はやや傾斜して下り、壙底近くにて丸味を帯び平坦な壙底面へと連る。

覆土中に土器片2点、黒耀石剝片2点を検出している。

埋土の状況は、以下のとおりである。

A層：真黒色土

B層：暗褐色土

C層：褐色土（黄褐色ローム粒が多量に混る）

遺物

土器（第25図50—1） 器面にL Rの縦走縄文が地文として施文された、胴部小片である。第IV群土器B類に相当すると考えられる。

第51号ピット（第18図、図版18A）

H—12区において検出した。規模は78×64cm、深さ23cm程あり、楕円形プランを呈する。長軸方向は、N80°Eである。

壁は直立に近く下り、平坦な壙底に連る。

覆土層中に、土器片7点を検出している。

埋土の状況は、以下のとおりである。

A層：黒色土

B層：真黒色土

C層：黒褐色土

遺物

土器（第25図51—1、2） 2点とも無文の胴部片である。第III群土器B類、第IV群土器B類のどちらかに属するものであろう。

第52号ピット（第18図、図版18B）

H—12区にて検出した。規模は60×57cm、深さ14cm程あり、円形プランを呈する。

上部が削平されており、断面形は底の平らな皿状を呈する。

遺物は、壙底・覆土とも一切検出していない。

埋土は、上部が削平され壙底部のみ残っている事から2層よりみられなかった。

A層：真黒色土

B層：黒色土

第53号ピット（第18図、図版18C）

H—11・12区において検出した。規模は62×57cm、深さ14cm程あり、円形プランを呈する。

上部は削平され、底が平坦な皿状をなす。

覆土中より土器片1点、石器2点、黒耀石剝片1点を検出した。

埋土は、上部が削平されている事より2層よりない。

A層：真黒色土

B層：黒褐色土

遺物

土器（第25図53—1） 1段の沈線文がめぐり、その下にRの燃糸をループ状に押圧した刺突文がめぐる。第IV群土器B類aに相当する。

石器（第26図53—1，2） 1は緑色泥岩の石斧片で入念に研磨された胴部の破片である。2は硬質頁岩の大形幅広剝片の一側縁に入念な剥離加工が施されたもので、いわゆる削器と称される石器である。

第54号ピット（第18図、図版18D）

G・H—11区において検出した。規模は106×96cm、深さ28cm程あり、大略円形プランを呈する。

斜面に立地するため、南東付近の壁が若干低くなる。壁はやや傾斜し壙底と接する付近で丸味を帯びる。壙底は大略平坦となる。

覆土層中より土器片を1点検出したのみであった。

埋土の状況は、以下のとおりである。

A層：黒色土

B層：黒褐色土

C層：黄褐色土

遺物

土器（第25図54—1） 第III群土器B類に相当する口縁である。口唇上は平らになり縄文が施文される。口縁には集合沈線が山形にめぐる。地文はL R斜行縄文である。

第55号ピット（第18図、図版18E）

H—11区において検出した。規模は59×49cm、深さ12cm程あり、楕円形プランを呈する。長軸方向はN41°Wである。

上部は大きく削平されており、浅い皿状をなす。壁は直立に近い。壙底は平坦であり、傾斜面と同一方向に低くなる。

覆土層中に土器片を1点のみ検出した。

埋土の状況は、上部が大きく削平されている事から2層よりない。

A層：褐色土

B層：黄褐色粘質土

遺物

土器（第25図55—1） 厚手の胴部片であり、L Rの斜行縄文が地文として施文される。

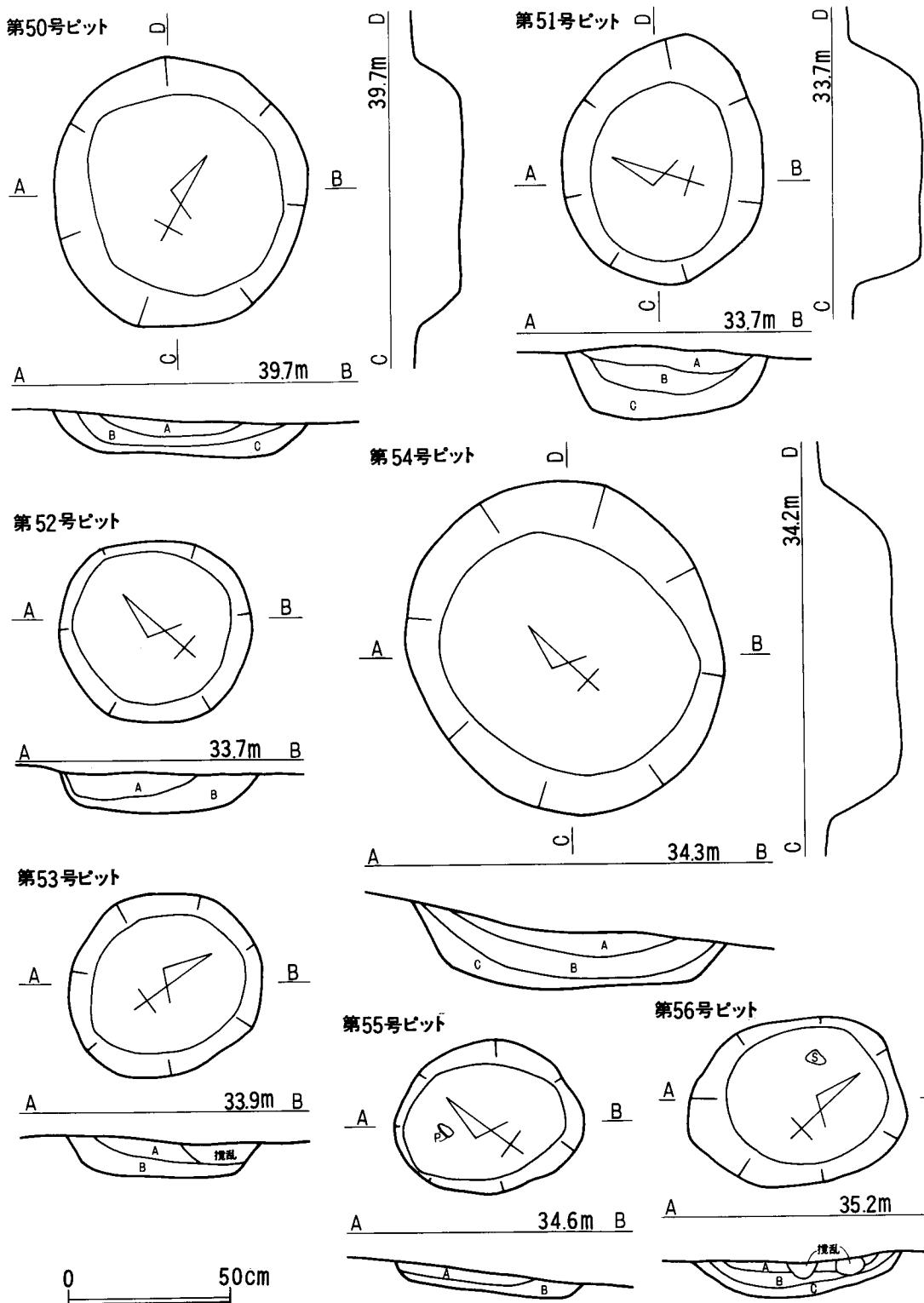
色調・胎土の状況は、第II群土器B類に近似する。

第56号ピット（第18図、図版18F）

H—10・11区において検出した。規模は67×54cm、深さ15cm程あり、楕円形プランを呈する。長軸方向は、N32°Wである。

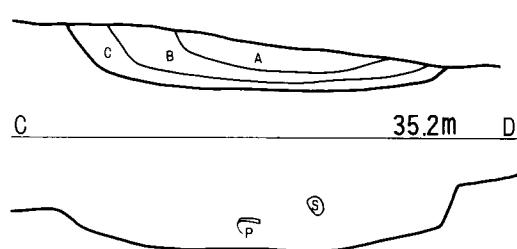
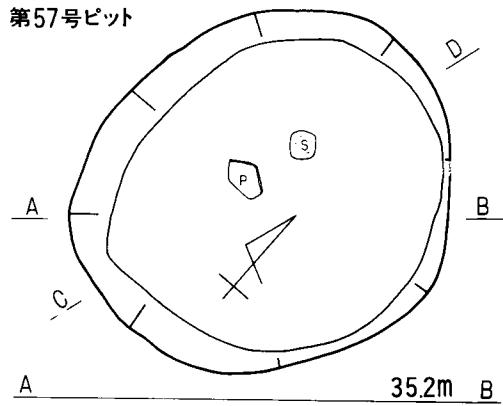
上部は削平されており、中央が一段低い皿状の断面をなす。壁の傾斜はゆるやかであり、壙底面との区分はむずかしい。

覆土中に、小型の礫を1点検出したのみであり、他に遺物は検出していない。

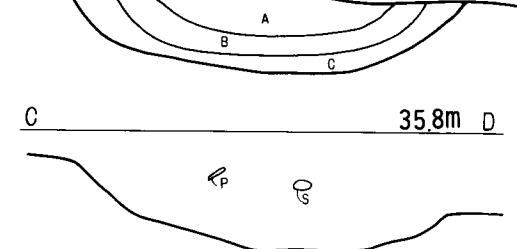
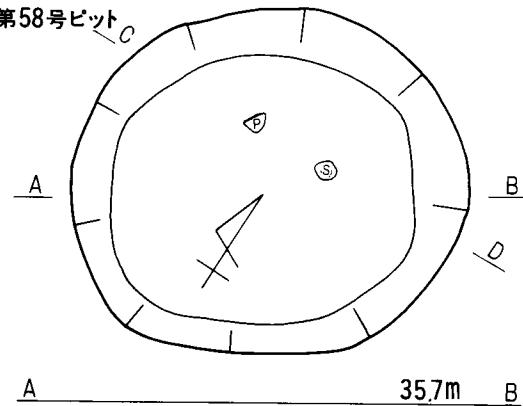


第18図 第50～56号ピット

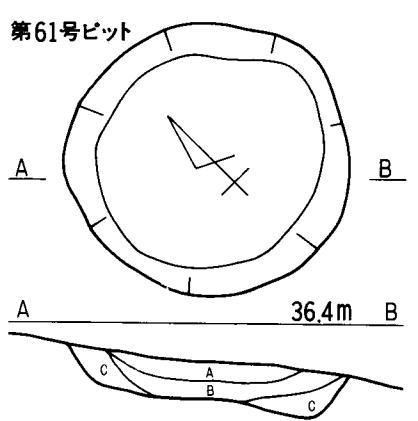
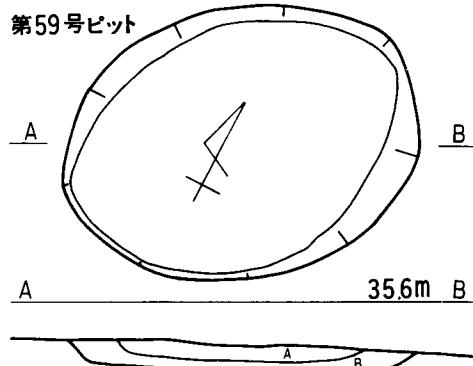
第57号ピット



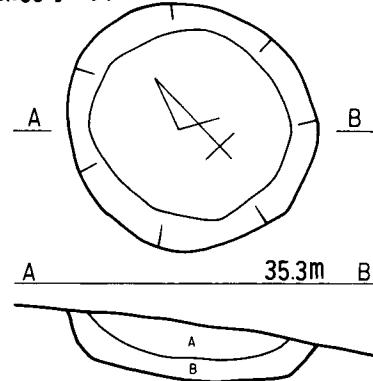
第58号ピット



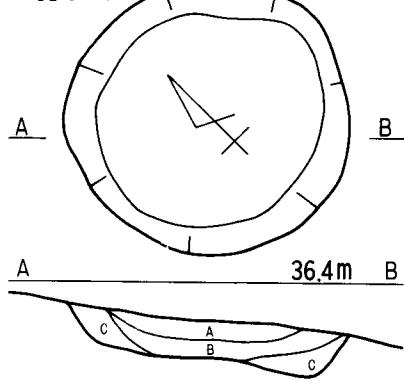
第59号ピット



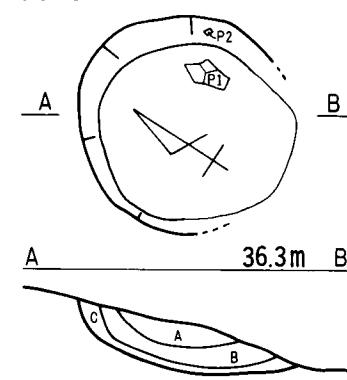
第60号ピット



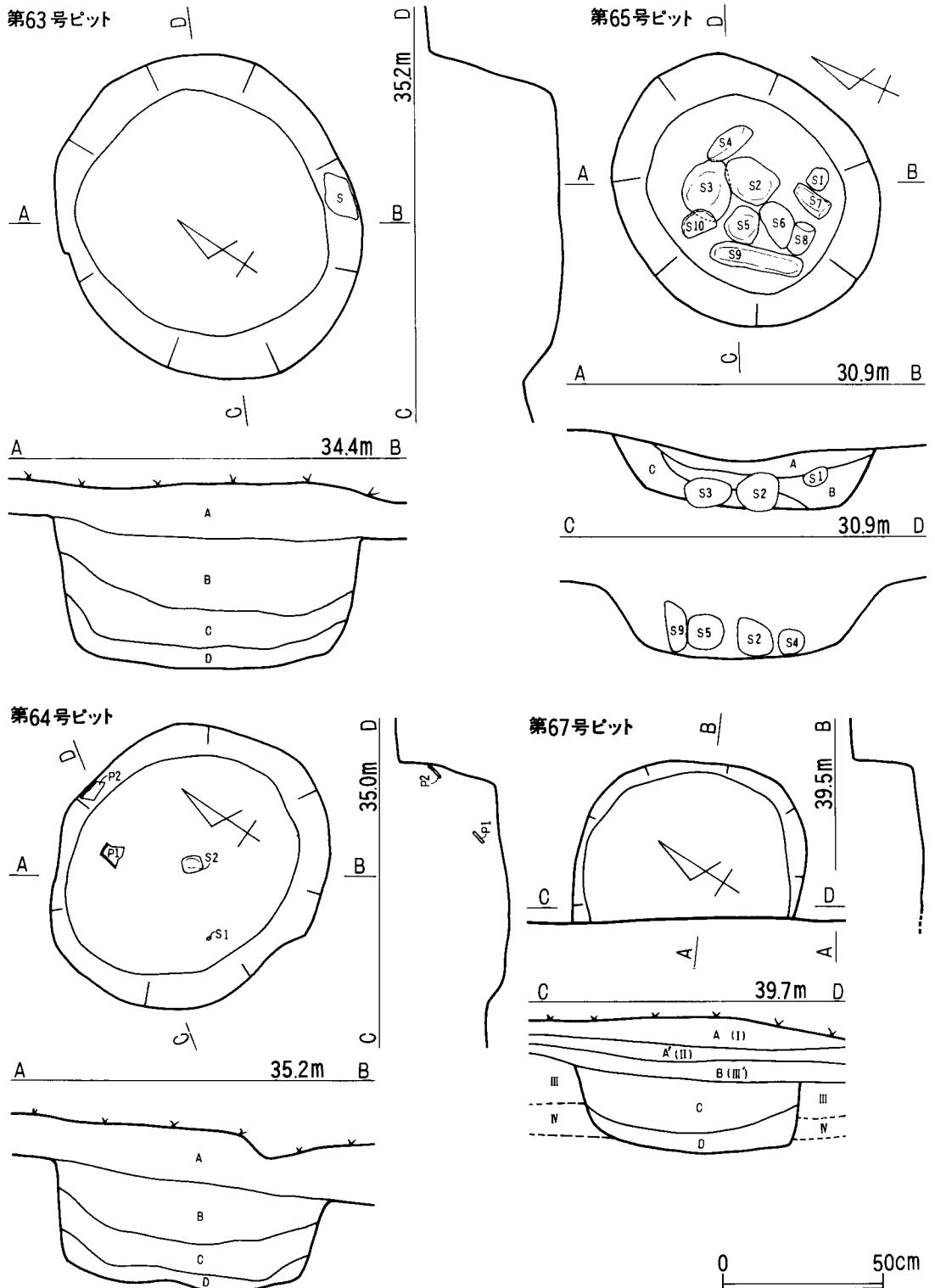
第61号ピット



第62号ピット



第19図 第57~62号ピット



第20図 第63～65・67号ピット

埋土は、上部を大きく削平しているためピットの壌底のみの状況であるが3層が認められた。

A層：真黒色土

B層：暗褐色土

C層：暗褐色土に黄褐色土が混り合う層

第57号ピット（第19図、図版19A）

H-10・11区において検出した。規模は104×91cm、深さ18cm程ある。楕円形プランを呈する。長軸方向は、N9°Wである。

斜面に立地することから、北東壁が若干低くなる。北壁のみ直立に近く立ち他は、若干傾斜する。壌底は平坦となる。

覆土層中から土器片3点と小礫を1点検出した。

埋土の状況は、斜面に立地する事、上部が削平されている事から浅いが、3層を確認している。

A層：真黒色土

B層：暗褐色土

C層：褐色土と茶褐色土が混り合った層

遺物

土器（第25図57-1～3） 第III群土器B類に属する。1は口唇上に縄文が施文され、口縁は若干外反し、ゆるやかな山形突起を有する。口縁には集合沈線により菱形文を連鎖させ、下位にはZ字を連続的にめぐらす。頸は上下を沈線に挟まれすり消し帯となる。地文はL R斜行縄文である。

2は頸以下で、頸には上下を沈線で挟まれるすり消し帯がめぐる。肩には長いZ字を数段描く、地文はL R斜行縄文である。

3は、平底の底部である。

第58号ピット（第19図、図版19B）

G-10区において検出した。規模は105×92cm、深さ24cm程あり、円形プランを呈する。

断面形は、壁がゆるやかに傾斜し丸味のある壌底へと連ることから壌底と壁との区分はむづかしい。

覆土層上位に土器片1点、小礫1点を検出している。

埋土の状況は、以下のとおりである。

A層：真黒色土

B層：黒色土

C層：褐色土（黄褐色ローム粒が多く混る）

遺物

土器（第25図58-1） 厚手の胴部片である。地文はL Rの斜行縄文が施文されている。第II群土器に属する。

第59号ピット（第19図、図版19C）

G-10・11区において検出した。規模は96×72cm、深さ10cm程あり、楕円形プランを呈する。長

軸方向は、N49°Eである。

上部が大きく削平されているため、壙底部付近のみが残った状況にある。断面観は浅い平坦な皿状を呈する。

遺物は、壙底、覆土中にも一切検出していない。

埋土は、上部が大きく削平されているため、壙底を覆った2層のみ確認した。

A層：黒色土

B層：黄褐色土（褐色土中に黄褐色ローム粒が混じる）

第60号ピット（第19図、図版19D）

H-10区において検出した。規模は68×64cm、深さ20cm程あり、円形プランを呈する。

斜面に立地しているため、南東側壁が低い。断面形は、壁が直立に近く立ち、平坦な壙底で皿状を呈する。上部が削平されていると思われる。

遺物は、覆土層中より型式表徴の明らかでない土器片を2点検出したのみである。

埋土は、上部が削平されており、壙底面を覆う2層を確認した。

A層：黒色土

B層：褐色土

第61号ピット（第19図、図版19E）

G-10区において検出した。規模は72×72cm、深さ21cm程ある。円形プランを呈する。

傾斜地に立地するため南東部が低い。上部は削平されており、壁高は低くやや傾斜している。壙底面は中央部が若干高まるが大略的には平坦となる。斜面に並行するように南東部へ傾斜し下る。

遺物は、覆土中及び壙底とも一切検出していない。

埋土の状況は、以下のとおりである。

A層：黒色土

B層：褐色土

C層：黄褐色土

第62号ピット（第19図、図版19F）

H-10区において検出した。規模は59×57cm、深さ21cm程あり、円形プランを呈する。

傾斜面に立地しており、南東壁はかなり低く検出している。断面は丸味を帯びた壙底をもつ皿状を呈する。上部は削平されていると考えられる。

壙底面の北東壁沿いに鉢形土器が1個体置かれていた。他に覆土中より土器片3点出土している。

上部が削平されて皿状を呈する壙底部のみ残った状況であるが、埋土は3層みられる。

A層：黒色土

B層：褐色土

C層：黄褐色土

遺物（第22図62-1、第25図62-2～4） 1は、口径が橢円形を呈する鉢形土器で、口縁には一対となる弁状の突起が付き、口唇上は平らに整形される。突起部の内面には半截竹管の刺突列が

4～5段施される。器面は地文のR L縦走縄文のみが施文されている。底部はくびれ部に1段の沈線がめぐらされ、底面は中央が盛り上がっている。第IV群土器B類eに相当する。

2～4は全て第III群土器A類に相当すると考えられる。2は平行沈線文が1段みられる。全例R Lの斜行縄文を地文としている。器面は風化がはげしく、胎土の大粒砂粒が多量に浮き出ている。

第63号ピット（第20図、図版20A）

H-11区において検出した。規模は105×90cm、深さ42cm程あり、円形プランを呈する。

半分程は発掘区域外にある。壁は直立に近く立ち、壙底はやや中央が低くなるが大略平坦となる。南西部は表土掘削時に掘り取ってしまい壁高20cm程しか確認していない。

覆土中に土器片5点、黒耀石剝片1点、小礫1点を検出している。

埋土の状況は、以下のとおりである。

A層：表土（黒色を呈し、耕作されている）

B層：真黒色土

C層：暗褐色土

D層：茶褐色土

遺物

土器（第25図63-1～4）1、4は第III群土器B類に相当し、3は第IV群土器B類に相当する。2は不明である。

1、4は集合沈線と、すり消し縄文による文様構成が主となる。地文はR L斜行縄文（1）、L R斜縄文（2）である。

3は比較的薄手の胴部片で、地文はL R斜行縄文である。

2は器面に剥落した部分が多く、さらに風化していることより、所属時期等は不明である。

第64号ピット（第20図、図版20B）

H-11区において検出した。規模は95×80cm、深さ34cm程ある、円形プランを呈する。

北東部は、発掘区域外にある。A-Bのラインより南西側は、表土剝土の際に基盤の黄褐色ローム面まで掘下げたため壙底の一部より検出していない。壁は直立に近く立ち、壙底は平坦となる。

覆土中に土器片10点、石器2点、黒耀石剝片4点を検出した。壙底面には遺物は一切検出できなかった。

埋土の状況は、以下のとおりである。

A層：表土（黒色を呈し、耕作が行われている）

B層：真黒色土

C層：黒褐色土

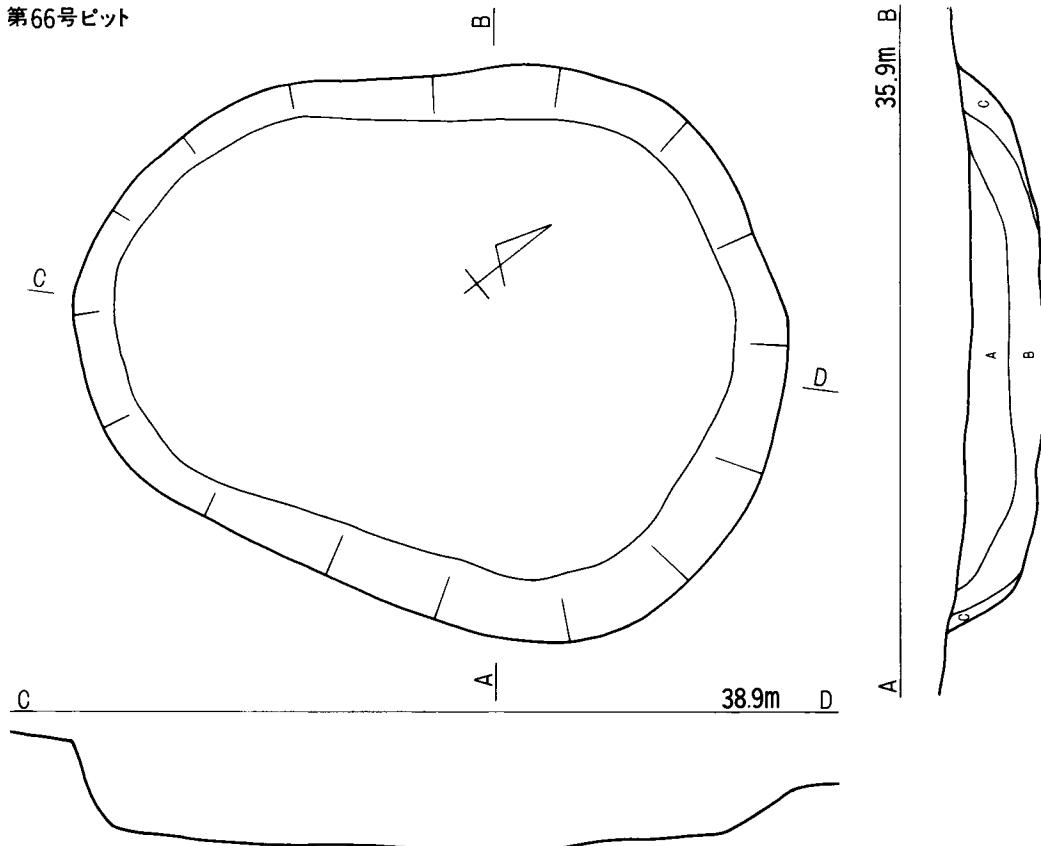
D層：暗茶褐色土

遺物

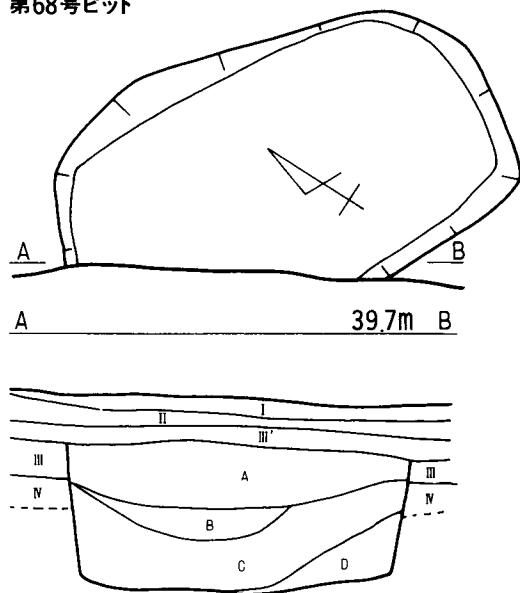
土器（第25図64-1～6）2、4は厚手で器面に竹管状工具による連続刺突文を特徴とする。

地文はL R斜縄文（2）、R L斜縄文（4）で、第II群土器B類に相当する。

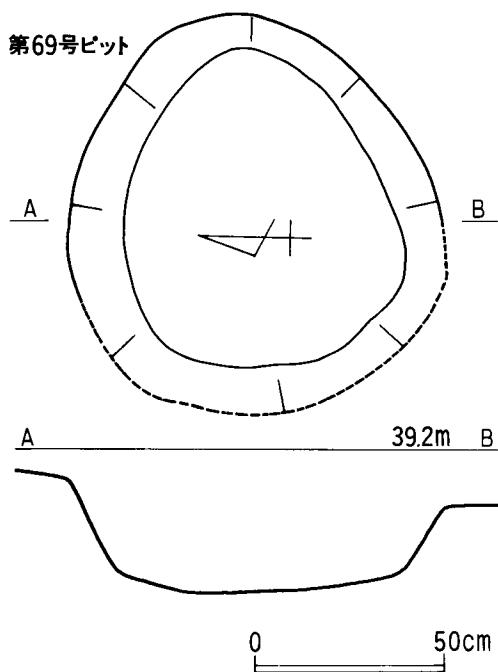
第66号ピット



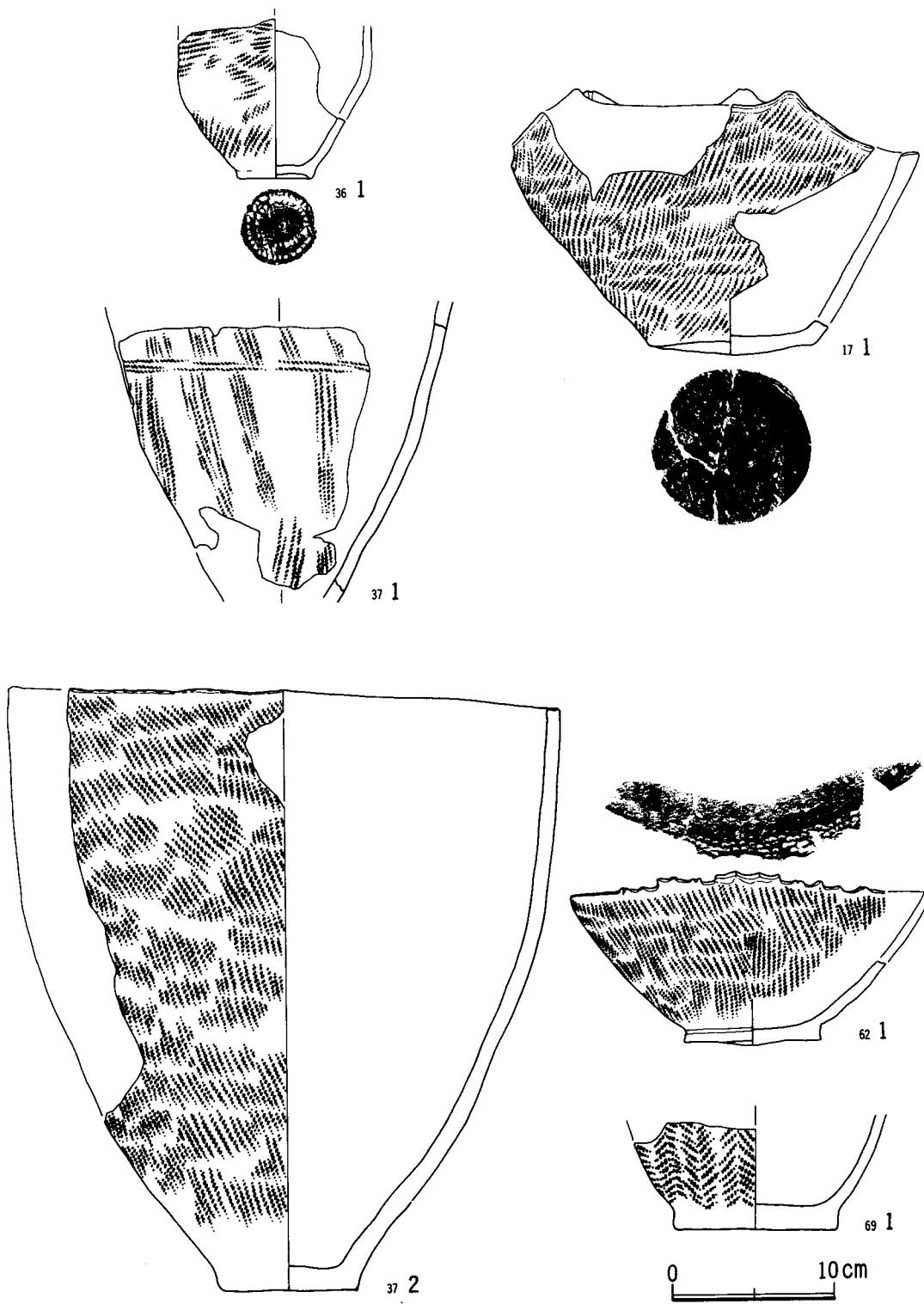
第68号ピット



第69号ピット



第21図 第66・68・69号ピット



第22図 ピット出土土器実測図（小文字はピット名）

5は、LR斜行縄文が地文となる胴部で、胎土には大粒の砂粒を含む。第III群土器A類に相当すると考えられる。

1, 6は、地文の縄文のみの土器で比較的薄手である。1は鉢で口唇は平らに整形される。6は胴部片、地文はRL縦走縄文(1), LR斜行縄文(6)である。1は第IV群土器B類eに相当する。

3は、口唇が三角形状に整形され、刻み目がめぐる。口唇下には細い隆帯を貼付し、隆帯上は刻み目が付く。第V群土器B類dに対比される。

石器(第26図64-1, 2) 2点とも黒耀石製である。1は二等辺三角形状に入念な両面加工が施されている石鏃で、底辺は抉入が入る。

2は石核で上・下より縦長形状の小剝片が剥離されている。

第65号ピット(第20図、図版20C)

P-8区において検出した。規模は90×77cm、深さ23cm程ある、楕円形プランを呈する。長軸方向はN28°Eである。

断面観は、壁が若干傾斜して下り、壙底は大略平坦となる。

壙底中央に大型の礫が10個まとまって置かれており、内2個が石器(石皿)であった。

礫の間に、型式表徴が明らかでない土器小片を3点検出している。

埋土の状況は、以下のとおりである。

A層：赤褐色土(焼土粒、黄褐色ローム粒が若干混る)

B層：黒褐色土

C層：暗褐色土

遺物

石器(第26図65-1) 安山岩の扁平な円礫の表・裏の両面に敲打のくり返しによるくぼみがある、いわゆる敲石で凹石と称される石器である。

第66号ピット(第21図、図版20D)

C-12区にて検出した、第2号竪穴住居跡と切り合うが新旧関係等は不明である。

規模は188×150cm、深さ29cm程あり、楕円形プランを呈する。長軸方向は、N46°Eである。

北東側に向け下る斜面に立地することから、北東側壁は若干下る。断面観では壁が若干傾斜し、ほぼ平坦な壙底面へと連る。

覆土層中から、土器片1点、石器1点を検出したのみである。

埋土の状況は、以下のとおりである。

A層：暗茶褐色土

B層：茶褐色土(黄褐色ロームのブロックが混る)

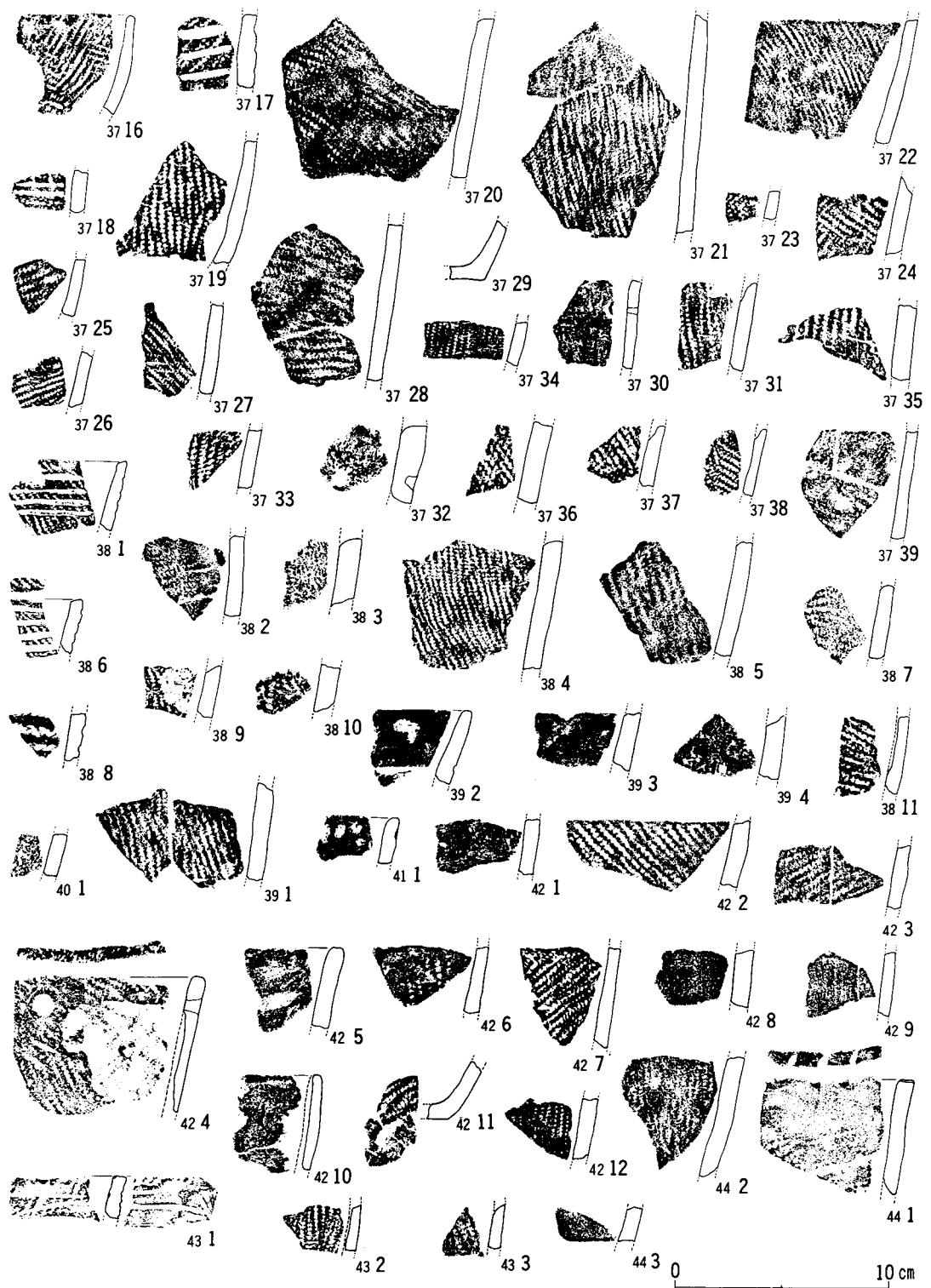
C層：暗黄褐色土(基盤の黄褐色ロームが汚れたもの)

遺物

土器(第25図66-1) 第II群土器に属する厚手の胴部である。地文としてLRの斜行縄文が施文されている。胎土には砂粒と若干の纖維が混入している。



第23図 ピット出土土器拓影（小文字はピット名）



第24図 ピット出土土器拓影（小文字はピット名）

石器（第26図66—1） 黒耀石製の石核で縦長剥片が数枚剥離されている。打面は原石面を一部剥離した面を使用している。打角は85°程である。

第67号ピット（第20図、図版20 E）

H—7区において検出した。発掘区域外との境界にあり、セクション図記録のため南西半分を掘り抜いている。

規模は(51)×72cm、深さ22cm程ある。円形プランを呈すると推定される。

壁は直立に近く立ち、壙底近くで丸味を帯び平坦な壙底へと連る。

覆土中に土器片8点と、石器1点（石鏃）、黒耀石剥片1点を検出した。

埋土の状況は、以下のとおりである。

A層：表土（基本層序I層に対応する）

A'層：灰白色火山灰（基本層II層に対応する）

B層：黒色土（基本層序III'層に対応する）

C層：真黒色土

D層：暗褐色土

遺物

土器（第25図67—1～4） 2～4は第IV群土器B類に属する胴部片であり、地文のR L斜行繩文（4）、L R斜行繩文（2、3）がみられる。

1は、第V群土器B類dに相当する。口唇は三角形状に整形され、刻み目が連続して付けられる。口唇直下には細い隆線を貼りめぐらし、隆線上は刻み目が付く。

石器（第26図1、2） 2点とも黒耀石製である。1は入念に両面加工が施された石鏃の尖頭部で下部を欠失している。

2は、幅広剥片の一部側縁に使用痕の認められるものである。

第68号ピット（第21図、図版20 F）

H—7区において検出した。発掘区域外に大半がある。セクション図記録のため南西部分の角を掘り下げている。

規模は121×72cm、深さ37cm程あり、隅丸長方形プランを呈する。長軸方向は、N58°Wである。

壁は直立に近く立ち、壙底は平坦である。

本ピットの掘り込みは、基本層序のIII層上面より行われている。

遺物は、覆土層中から7点の土器片を検出したのみであった。

埋土の状況は、以下のとおりである。

A層：黒色土（黄褐色火山灰粒が若干混る）

B層：暗褐色土

C層：暗黄褐色土

D層：黄褐色土

遺物



第25図 ピット出土土器拓影（小文字はピット名）

土器（第25図68—1，2） 1は第IV群土器B類cに相当する。口唇が丸味を帯び直下にヘラ状工具の先端を押し付けた刺突列がめぐる。地文はR L斜行縄文である。

2は、L R斜行縄文が施される胴部片であるが、時期等は不明である。

第69号ピット（第21図）

—A—11区において検出した。風倒木痕にて攪乱を受けており、確実な壁は北—東—南の半分程であり他は推定である。

規模は107×98cm、深さ31cm程あり、大略不整円形プランを呈する。

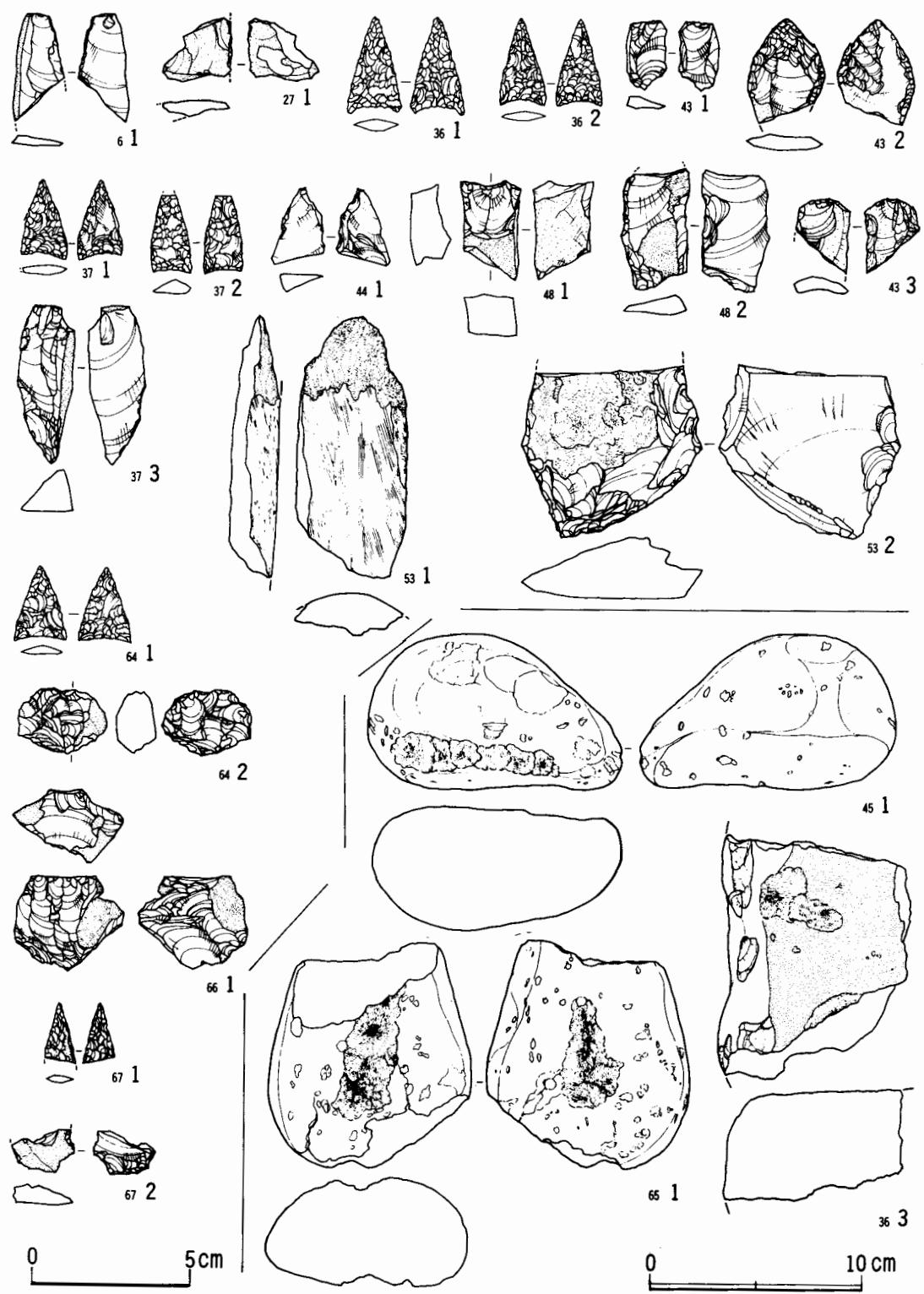
壁はやや傾斜し、壌底近くにて丸味を帯びほぼ平坦な壌底へと連る。

遺物は、覆土層中より1点の土器底部を検出したのみである。

埋土の状況は、風倒木痕の攪乱が主となるため記録していない。

遺物

土器（第22図69—1） 第III群土器A類に属するであろう底部である。器面には羽状縄文が縦位に施文されている。色調は黒褐色を呈し、胎土には砂粒を多く含みもろい。



第26図 ピット出土土器実測図（小文字はピット名）

第3節 Tピット

広範な地区にわたり、溝状を呈する深い特徴的なピットを8個検出した。いわゆるTピットと称しているものである。

第1号Tピット（第27図、図版21A）

C-3区において検出された。規模は197×58cm、深さ50cm程である。長楕円形プランを呈する。長軸方向は、N43°Eである。

北東一南西の傾斜地に作られ、長軸方向は斜面の方向に近い。

長軸断面は、斜面の高い方では壁がゆるやかに傾斜して下り、途中から直立に近い角度におれ壙底へと達する。壙底面は若干でこぼこしており傾斜が付く。斜面の低い方の壁は直立もしくは内傾気味となり立ちあがる。この壁部分が最深部となる。

短軸断面は、左右の壁が途中までゆるやかな傾斜で下り以下垂直に近くなり直に下る。部分的には、オーバーハング気味となる。

遺物は、一切検出していない。

埋土の状況は、以下のとおりである。

I層：真黒色土

II層：真黒色土（I層に比し非常に軟い）

III層：暗茶褐色土

IV層：褐色土

第2号Tピット（第27図、図版21B）

G-11・12区において検出した。規模は305×60cm、深さ103cm程あり、本遺跡では最も大きなものである。

長楕円形プランを呈し、長軸方向はN66°Wである。

長軸の方向と近い方向を向く傾斜面上に、立地している。

長軸の断面では、図右手側が高く左に向って低い。右側の壁はオーバーハングするよう内傾気味に下り壙底近くにて階段状となる。以下平坦で左手に向ひゆるい傾斜となる壙底へと連る、左手壁は急角度で立ち上がる。

短軸断面形は、左右の壁が直に下り途中で傾斜し全体の3分の1程度下った所でさらに直に下る。壙底は平坦となる。

遺物は、一切検出していない。

埋土の状況は、以下のとおりである。

I層：黒色土

II層：赤褐色土（焼土）

III層：明褐色土（焼土粒、炭粒が多量に混る）

IV層：暗茶褐色土（焼土粒が若干混る）

V層：暗黄色土

VI層：黒褐色土

VII層：暗黄色土（V層に似る、非常に軟い）

VIII層：黒褐色土（VI層に似る、非常に軟い）

第3号Tピット（第27図、図版21D）

B・C-6区において検出した。規模は104×62cm、深さ49cm程あり、楕円形プランを呈する。長軸方向は、N7°Eでほとんど南一北といって良い。

第1・2号Tピットと形、埋土の状況に大きな差がみられる。

長軸の断面観は、壁がそれぞれ直立に近く、壌底も平坦となる。短軸の断面観もほとんど同じ状況を呈している。

埋土の状況は、以下のとおりである。

I層：真黒色土

II層：暗褐色土

III層：黒褐色土

IV層：暗茶褐色土

V層：黄褐色土（汚れている）

VI層：黄褐色土（崩落層か）

VII層：黒色粘質土（炭化物を含む）

第4号Tピット（第27図、図版21D）

C-7区において検出した。第1号豎穴住居跡と切り合うが、新旧関係については確認できなかった。

規模は127×59cm、深さ49cm程あり、楕円形プランを呈する。長軸方向は、N4°Wであり、ほとんど南一北といって良い。

ピットの形状・埋土の状況は、前述した第3号Tピットに類似する。

長軸の断面観は、北壁が若干傾斜して下り、でこぼこの壌底へと連る。南壁は底が壌口より奥の所から高まりオーバーハングして内傾しつつ立ちあがる。

短軸の断面観は、東西の壁とも若干傾斜して下り途中からフラスコ状に壁が壌口より奥へ入り込み壌底へと連る。

遺物は、一切検出していない。

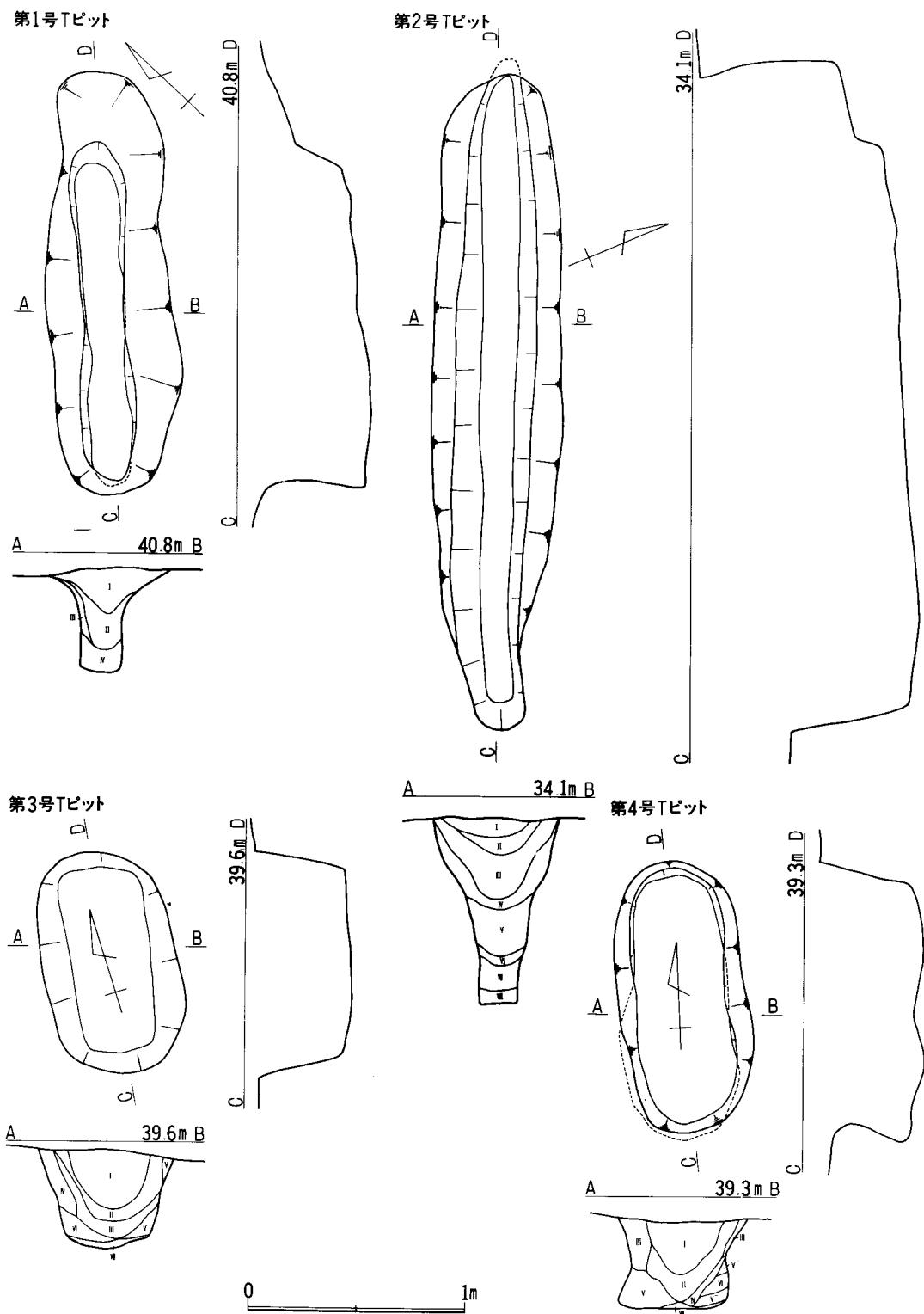
埋土の状況は、以下のとおりである。

I層：真黒色土

II層：暗褐色土

III層：暗茶褐色土

IV層：黒色土



第27図 第1～4号Tピット

V層：黄褐色土

V'層：黄褐色土（汚れが入る）

V''層：黄褐色土（汚れがV'層より多い）

VI層：暗茶褐色粘質土

VII層：黒色粘質土（炭化物を多量に含む）

第5号Tピット（第28図、図版22A）

D-7区において検出した。規模は93×58cm、深さ49cm程あり、隅丸長方形を呈する。

長軸方向は、N73°Eである。

長軸の断面観は、左右の壁が若干傾斜して下り、壙底付近にて丸味を帯びる。壙底面は中央が若干高まる。

短軸の断面観は、左右の壁が直立に近く下り、平坦な壙底面へと連る。

遺物は、一切検出していない。

埋土の状況は、以下のとおりである。

I層：真黒色土

II層：黒褐色土

III層：暗褐色土

IV層：黄褐色土（汚れが多い）

V層：茶褐色土

VI層：黒色粘質土（炭化物を含む）

第6号Tピット（第28図、図版22B）

A-5区において検出した。規模は105×67cm、深さ53cm程あり、楕円形プランを呈する。長軸方向は、N9°Eでありほとんど南一北といってさしつかえない。

長軸の断面観は、左右の壁がやや傾斜して下り、壙底近くにて丸味を帯びる。壙底は中央部が若干高まる。

短軸の断面観は、左右の壁が直立に近く下るが若干でこぼこする。壙底は平坦となる。

遺物は、一切検出していない。

埋土の状況は、以下のとおりである。

I層：真黒色土

II層：黒褐色土

III層：黒色土

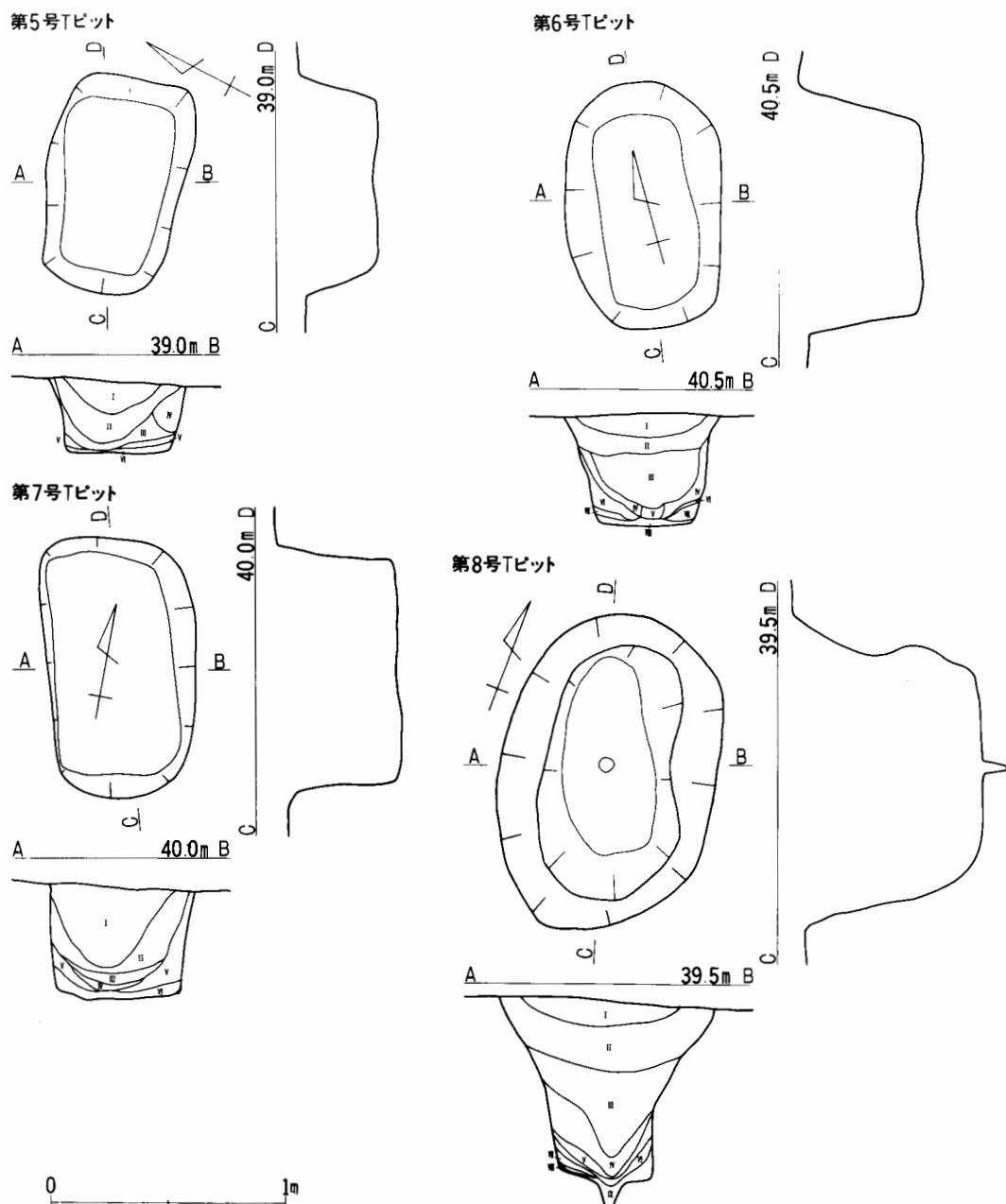
IV層：黄褐色土（汚れている）

V層：暗褐色土

VI層：暗茶褐色土

VII層：黄褐色土（汚れが多い）

VIII層：黒色粘質土（炭化物を多く含む）



第28図 第5～8号Tピット

第7号Tピット（第28図、図版22C）

A—6区において検出した。規模は111×62cm、深さ53cm程ある。隅丸長方形プランを呈する。長軸方向は、N16°Wである。

形状・埋土の状況は第3～第6号Tピットに類似する。

長軸の断面では、左右の壁はいずれも直立に近く立ちほぼ平坦な壙底面と接する部分にて若干丸味を帯びる。

短軸の断面も、ほぼ同様の状態である。

遺物は、一切検出していない。

埋土の状況は、以下のとおりである。

I層：真黒色土

II層：暗褐色土

III層：黒色土

IV層：暗茶褐色土

V層：黄褐色土（汚れている）

VI層：黒色粘質土（炭化物を多く含む）

第8号Tピット（第28図、図版22D）

—A・A—7区において検出した。規模は137×95cm、深さ81cm程あり、楕円形プランを呈する。長軸方向は、N8°Wで、ほとんど南一北といってさしつかえない状態である。

長軸の断面観は、右手側の壁はゆるやかに傾斜して下り途中からオーバーハングし丸味を帯び壙底へと連る。壙底面は平坦となる。

短軸では、左右の壁がそれぞれ傾斜して下り半分程下った所から直立する。

壙底の中央部には、径5cm、深さ11cm程の先細りの柱穴状小ピットが1個ある。

遺物は、一切検出していない。

埋土の状況は、以下のとおりである。

I層：真黒色土

II層：黒色土（堅い）

III層：黒褐色土（軟い）

IV層：黄褐色土

V層：暗褐色土（堅い）

VI層：黄褐色土

VII層：黒褐色土

VIII層：黄褐色土

IX層：黒褐色粘質土（炭化物を多量に含む）

第5章 発掘区出土遺物

発掘区からは、縄文時代早期～晚期、続縄文時代にかけての長期間にわたる土器（縄文時代前期のみ欠如）とそれに伴う石器群が検出されている。発掘区における遺物包含層は永年にわたる耕作のため攪乱され、遺物は層位的な裏付をもって採集されたものではない。

第1節 土 器

縄文時代早期、中期、後期、晩期、続縄文時代と長期間にわたる土器が検出された。

第I群から第V群に分類し、以下概要を記す。

第I群土器（第29図1、第31図1～40）

縄文時代早期に属するであろう土器で、短い撚糸文、絡条体圧痕文、組紐圧痕文、縄文が複合施文される土器、地文の縄文に細い隆線を貼付する土器の2種がある。

前者をA類、後者をB類と細分した。

A類（第29図1、第31図1～22、24～40） 縄文、組紐圧痕文、短い撚糸文、撚糸圧痕文を特徴とする土器である。それぞれの文様が帶状に器面をめぐる。

a (9～11, 13, 15, 17) 器面に組紐圧痕文のみ数段めぐらされるものである。口唇は上から押し付けられたように平らで幅広くなる。15は口唇上に撚糸（RL）を一段押圧してあり、山形の小突起が付き波状口縁となる。

b (6) 口縁に縦位に並列してめぐる短い撚糸文がめぐらされる。口唇は上から押し付けられたようにつぶれ幅広となる。

c (第29図1、第31図21) 器面全体に羽状を呈する不整撚糸文（付加条）が施文される。RLの原体（第29図1）、Rの原体（21）が用いられる。

第29図1は羽状を呈するRLの不整撚糸文間に細かい縄文（軸部分）がみられる。

d (5, 22) 羽状を呈する縄文地と多軸絡条体圧痕文がみられる（L）ものである。

e (16) 撥りの方向がちがう2種の原体を用い羽状を呈する縄文を施文する。

f (8, 18, 20) 横位に数段めぐる撚糸圧痕文と短い撚糸文の帯がみられるものである。LR (8, 18), RL (20) の原体が用いられる。8, 18の口唇上には撚糸（LR）が一段押圧されている。

g (7, 19) 器面に数段撚糸圧痕文がめぐるもので、口唇上にも撚糸を一段押圧している。RL (19), LR (7) 原体である。

h (4) 多軸絡条体圧痕文が帯状にめぐり、斜行縄文が施文された土器である。

絡条体の原体はR、斜行縄文はLRである。口唇上にはRの撲糸が一段押圧されている。

i (14) 組紐圧痕文と短い撲糸文が施される。口唇状にも撲糸文が施文される。撲糸の原体は、Lである。

j (1~3, 24~40) 短い撲糸文の段と斜行縄文がみられるものである。

1は、RL(短い撲糸文・斜行縄文)、2、3はLR(短い撲糸文、斜行縄文)が用いられている。

k (12) 斜行縄文(RL)と組紐圧痕文が組み合わされるものである。

底部 (24~40) 底面が外に張り出し、くびれ部に、短い撲糸文、多軸絡条体の圧痕文が一段めぐらされることを特徴としている。

Lの短い撲糸文が施文される(24, 26, 29, 38, 40) Rの短い撲糸文が施文される(25, 27, 28, 32), Lの多軸絡条体圧痕文(33, 34, 36, 29), Rの多軸絡条体圧痕文(30, 31, 37), LRの撲糸端部を連続して押圧する(35)等がくびれ部分にめぐらされる。

地文は、LR斜行縄文(35, 36, 38), RL斜行縄文(40)が施文される。

B類 (23)

比較的薄手の土器で、RLの斜行縄文が地文として施文されている。地文を施文後に細い粘土紐を貼付している。

いわゆる「中茶路式土器」に類似する。

第II群土器 (第29図2~5, 第31図41~51, 第32・33図)

縄文時代中期に属する土器群である。円筒上層式系土器群、平岸天神山式土器と称される土器群、トコロ6類土器、余市式土器などがある。

A類 (第31図41~51)

円筒上層式系の土器群であり、貼付文を特徴とする土器を一括した。

口縁部文様帶、口縁、突起部に貼付文をもつ。貼付文の幅は比較的細く、3~5mm程である。貼付文上には撲糸の圧痕、縄文等が施文される。貼付文は、口縁及び口縁付近では、縦・横、弧状に付けられる。

口縁に棒状の突起がある(45)ものは、口縁が肥厚する。

B類 (第29図2~5, 第31図52~61)

半截竹管、竹管を多用する土器で、いわゆる「平岸天神山式土器」と称されているものである。

口縁には大型の山形ないしは棒状を呈する突起が付く、口縁は肥厚する。

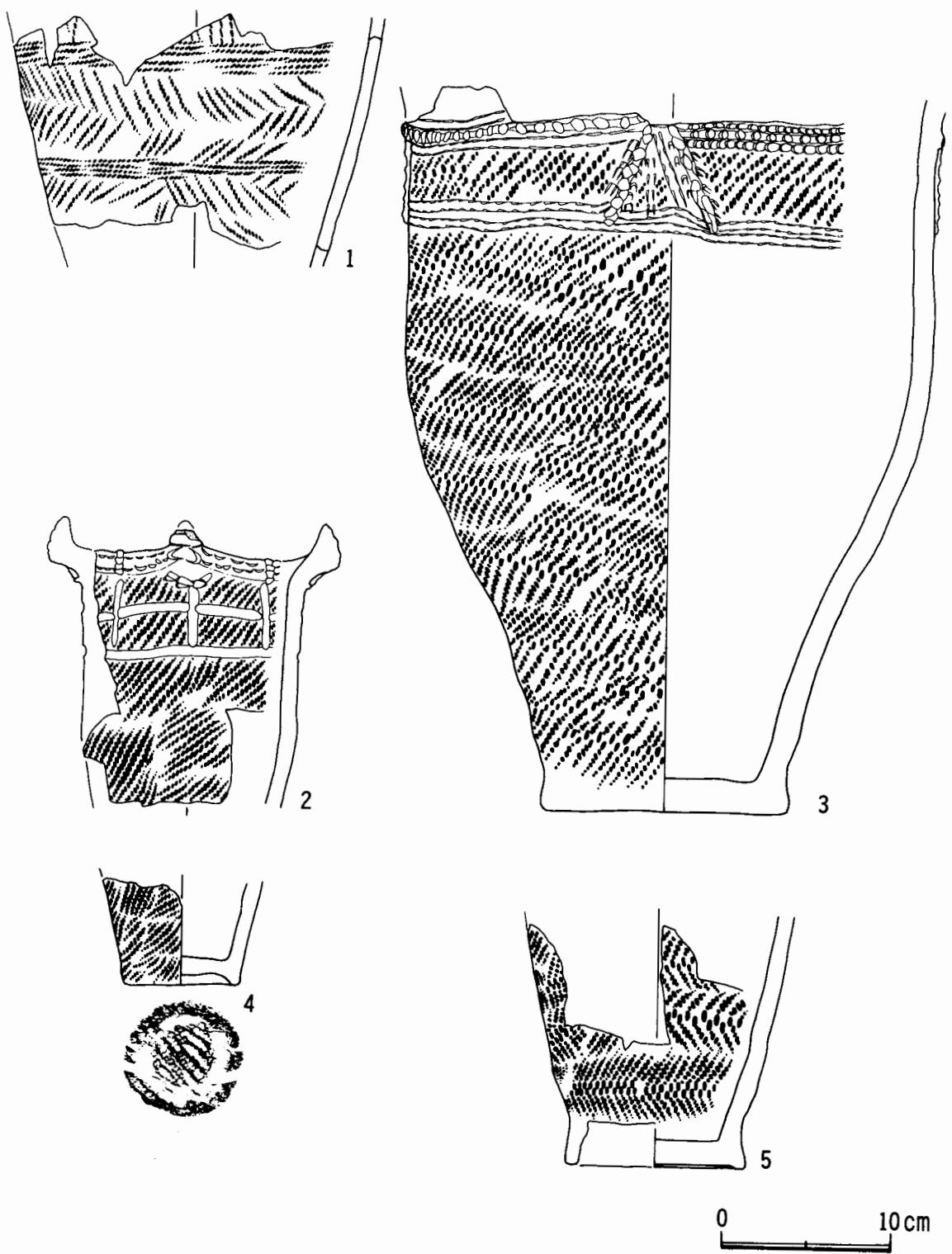
突起部、口縁の肥厚帶上には、半截竹管による沈線文、連續刺突文が付く。

口縁及び突起部には、連鎖状の貼付文、半截竹管文による文様が構成される。

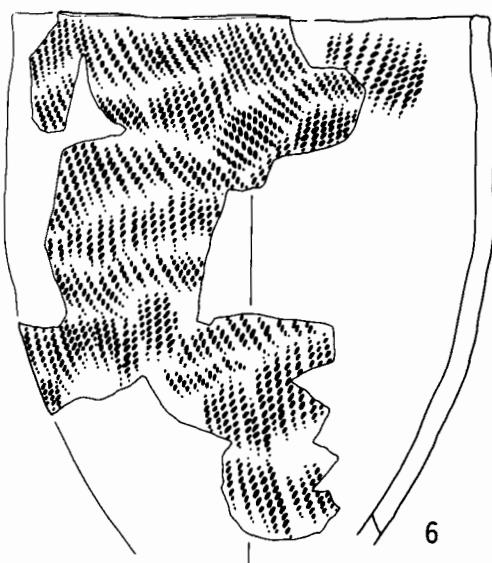
LRの複節斜行縄文がみられる(53, 60)。56は口縁内面にも縄文がみられる例である。

全例焼成も良く、赤褐色に近い色調を呈する。

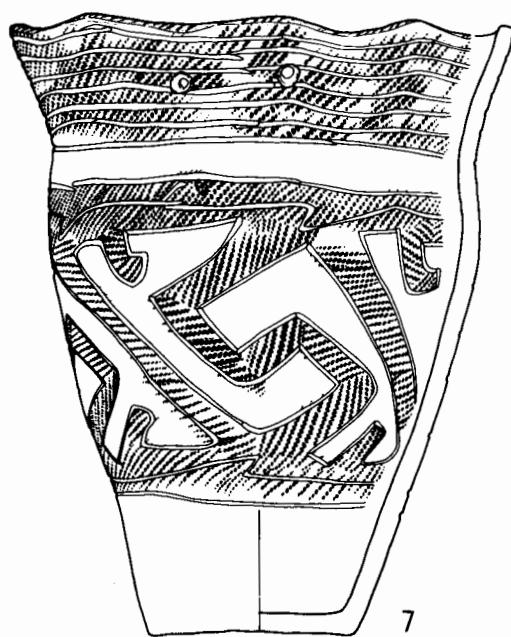
C類 (第32図62~81, 第33図82~86)



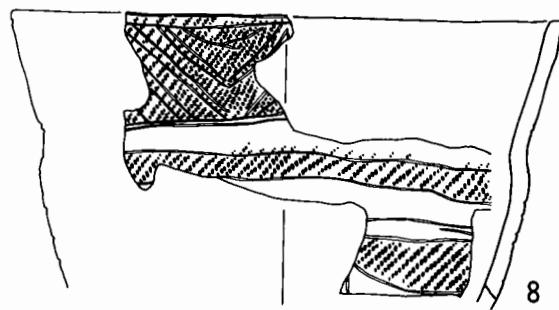
第29図 発掘区出土土器実測図



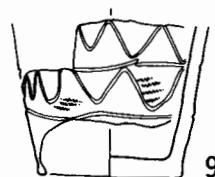
6



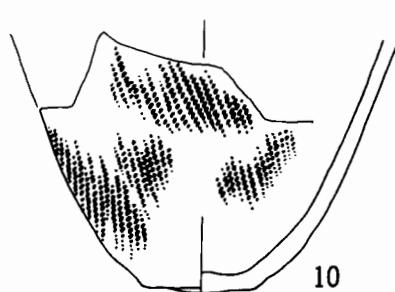
7



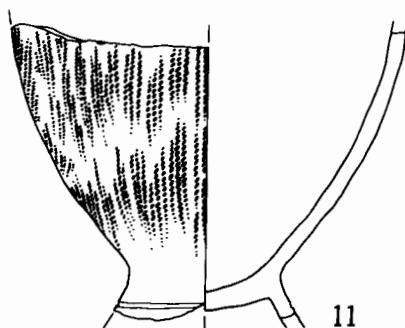
8



9



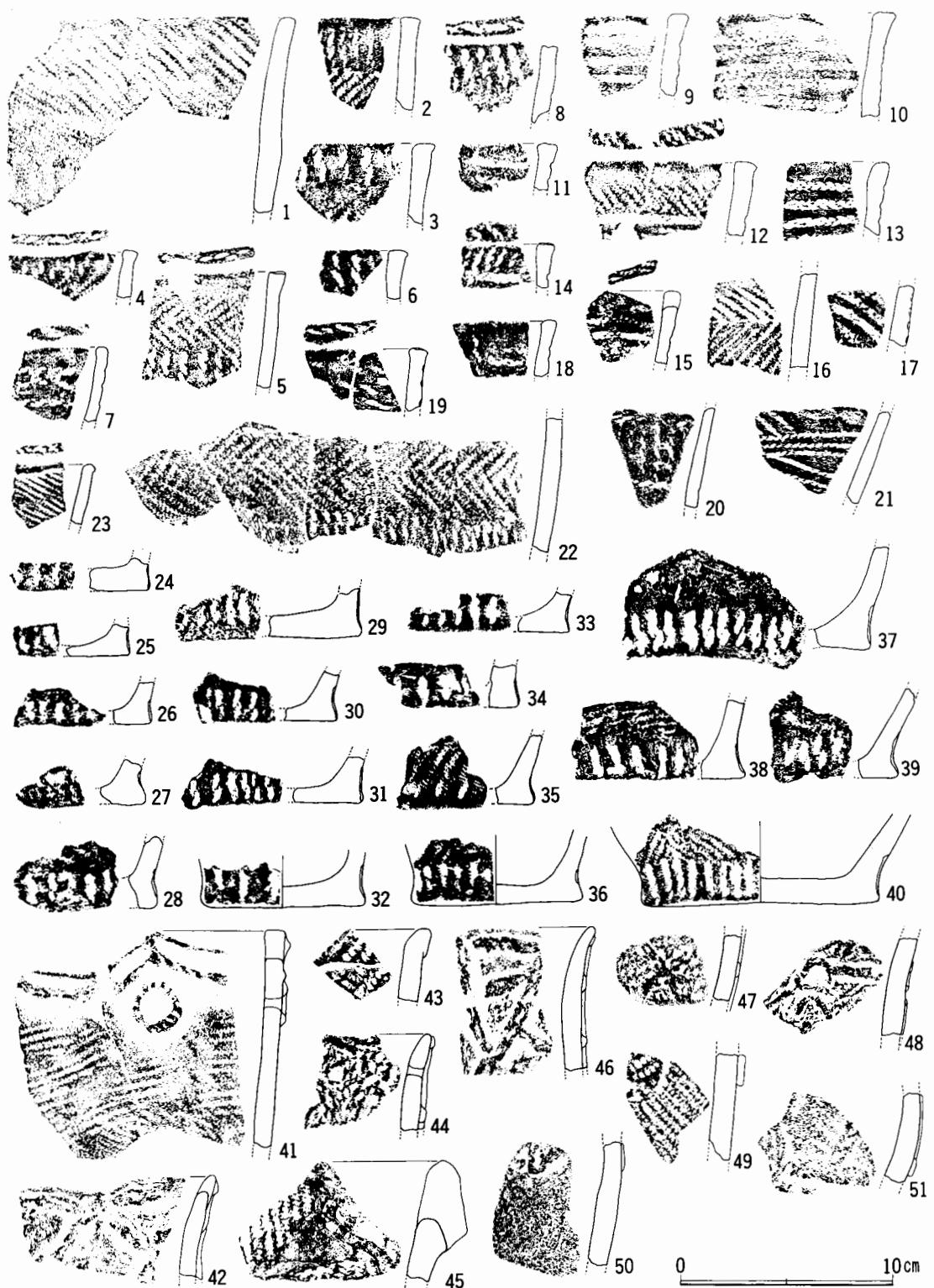
10



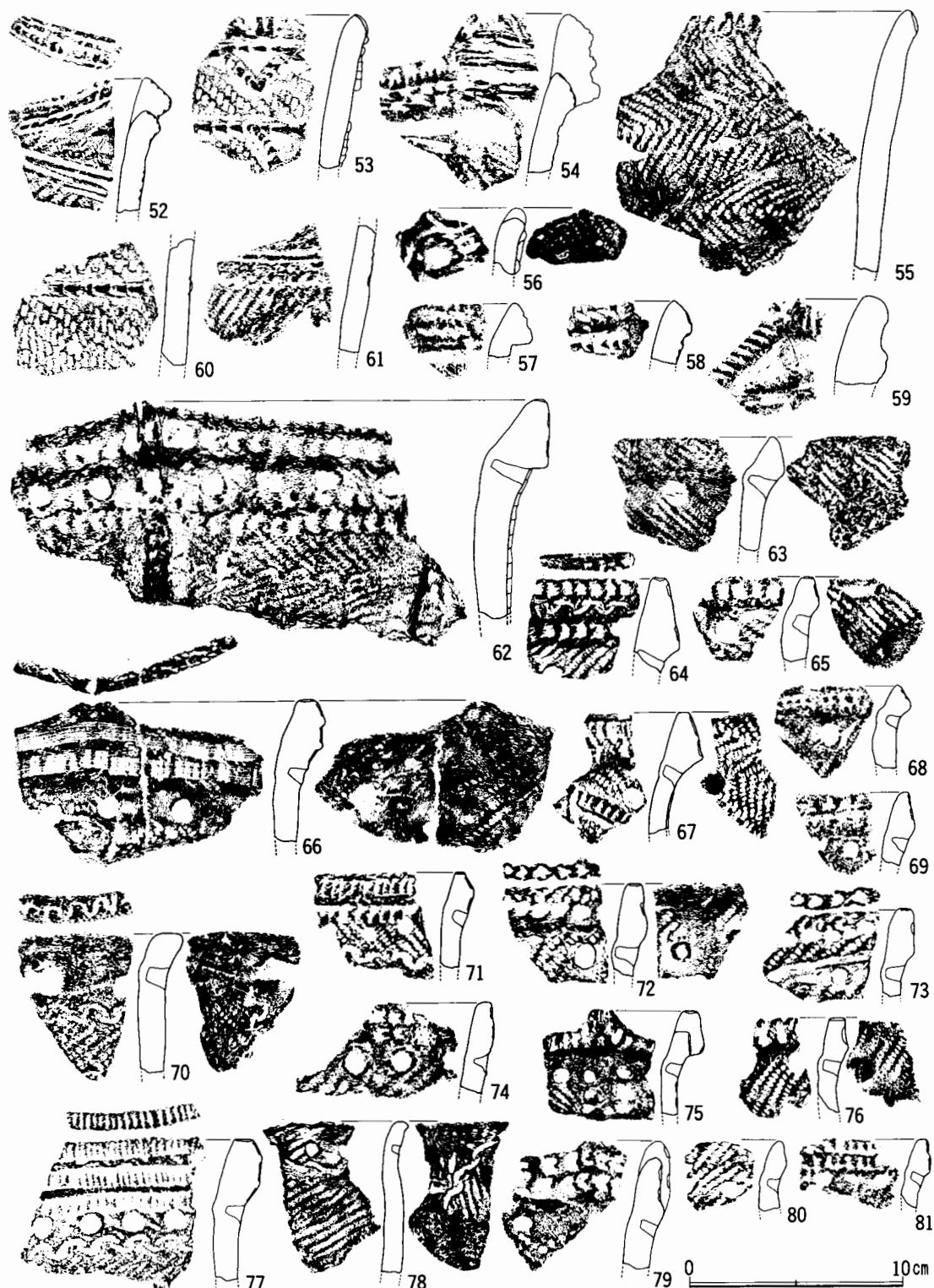
11

0 10cm

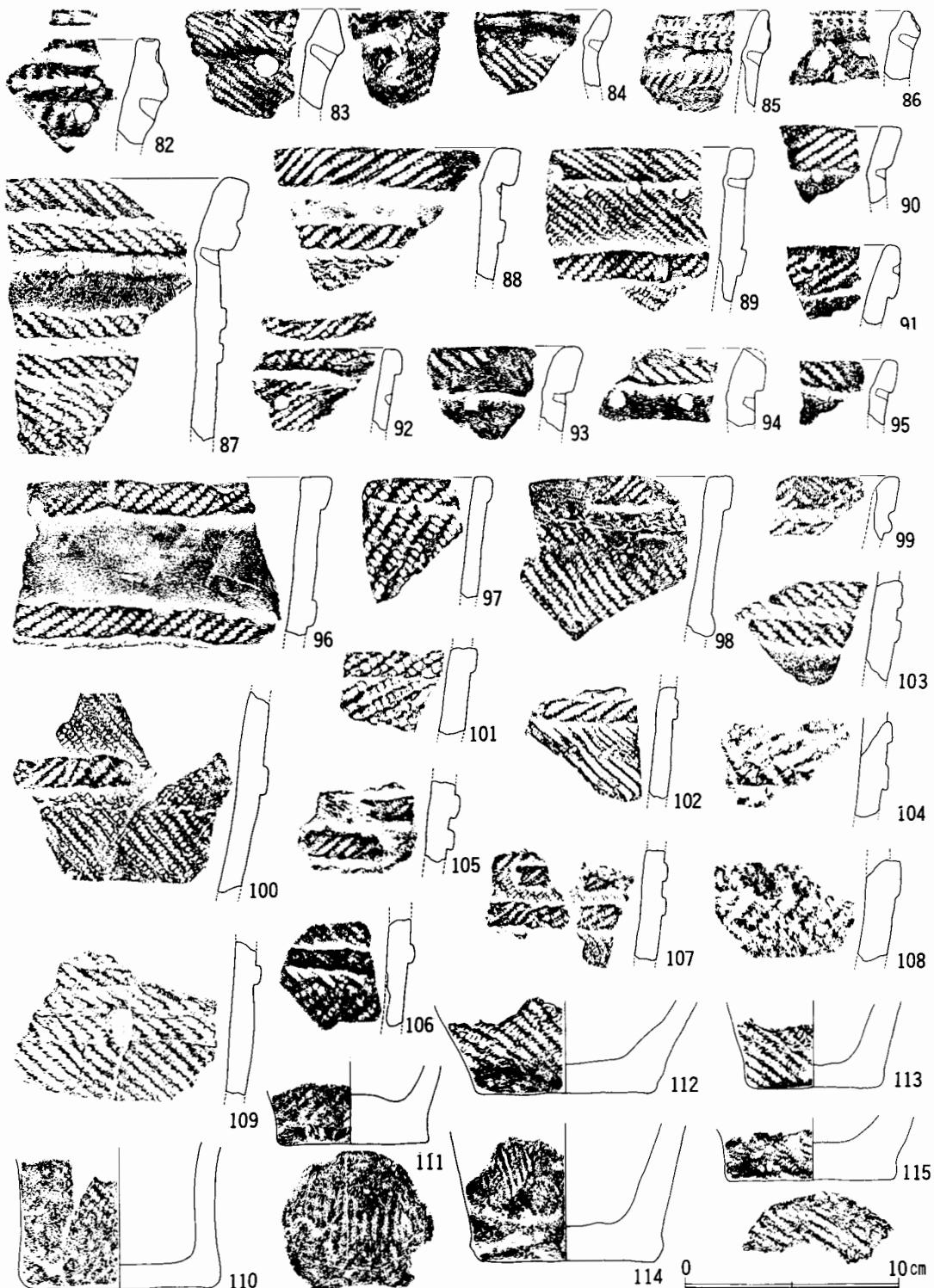
第30図 発掘区出土土器実測図



第31図 発掘区出土土器拓影



第32図 発掘区出土土器拓影



第33図 発掘区出土土器拓影

口縁が部厚く肥厚し、突起を有するものもある。口縁の肥厚部直下に、径10mm程の大きい円形刺突文が2～3cmおきにめぐらされる事を主特徴とする。いわゆるトコロ6類土器、北筒式土器と称されている土器群である。

突起下に垂下する幅広の貼付帯が付くもの(60, 67)もある。

口唇上、肥厚带上には、半截竹管の連続刺突文、幅広のヘラ状工具による連続刺突文等がめぐらされる例が非常に多い。

地文の縄文のみみられる例(63, 70, 78, 83, 84)は5点よりない。

地文は、綾絡文のみみられる結節羽状縄文(62, 71, 77)、結節のあるLR斜行縄文(64, 70, 74, 78)、結束羽状縄文(67)、RL斜行縄文(63, 65, 66, 69, 75, 79, 83, 84)、LR斜行縄文(68, 72, 73, 76, 80～82, 85, 86)等が施文される。

口縁部内面にも器面と同種の縄文が施文される例(63, 65～67, 70, 72, 76, 78, 83)も比較的多くある。

胎土には、大粒の砂粒、小礫が含まれており、若干の纖維を混入した痕跡を有したものも多い(62～65, 68, 70, 75, 78)。

D類(87～109)

幅広の貼付帯(幅15～20mm程)が、横位に数段めぐる土器群である。円形刺突文を有するもの、円形刺突文は欠失しているの2種がある。いわゆる「余市式土器」と称される土器群である。

a (87～95) 円形刺突文列が1段めぐらされる例である。

口唇部を外へ折り返し肥厚帯を作り出し、口唇上は幅広く、平らとなる。

口縁の折り返しによる肥厚带上、頸・胴部の貼付带上には斜行縄文が施文される。

口縁の折り返しによる肥厚带上に撚糸(RL)を押圧する(87)ものもある。

口縁の肥厚帯下は、無文帯となる例が多く、89のみRLの斜縄文がこの部位に施文される。

地文の縄文と、肥厚带上及び貼付帶上の縄文は同種のものが用いられる。RL斜行(87, 93～95), LR斜行(88, 90, 91, 92)である、89のみ地文と肥厚带上にはRLの斜行縄文が施されるが、貼付帶にはLRの斜行縄文が施される。

口唇を折り返した肥厚帯直下に小型の円形刺突文をめぐらす事が主となる(87～90, 93, 95)、肥厚帯より若干下る部分に同種の円形刺突文をめぐらす(92, 94)、口縁の肥厚带上にめぐらすもの(91)もみられる。

b (96～109) 円形刺突文を欠くグループである。

96～99は、口唇を引き伸し外へ折り返した肥厚帯を有するもので、頸・胴に数段の幅広い貼付帯をめぐらす。

口唇上は、平らに整形される。

口縁に無文帯がある例(96, 103)もある。

口縁の折り返しにする肥厚带上、貼付帶上及び器面には、縄文が施文される。

肥厚帶及び貼付帶上にLRの斜縄文が施文され、地文もLRの同種の斜縄文が施文される(96,

97, 99, 101, 105), 両者ともに R L の斜縄文が施文される (103, 109), 貼付帶上には L R の斜縄文が施文され, 地文は R L の斜縄文と原体を変える例 (98, 102, 104, 107), 貼付帶上には R L の斜縄文, 地文には L R の斜縄文が施文 (106), 貼付帶上には L R 斜縄文が, 地文には結節斜縄文 (100), 貼付帶上には R L の斜縄文を, 地文として結束羽状縄文 (108) 等がある。

底部 (第29図 4, 5, 第33図110~115)

厚手の底部である, 底面が大きく揚底となり, 縄文 (R L) を施す (第29図 4), 若干の揚底となる (第29図 5), 平底で底面に縄文を施す (111, 115) がある。

A類からD類のいずれかに属するものと考えられる。

第III群土器 (第30図 6 ~ 9, 第34~36図)

縄文時代後期に属する土器群を一括した。

初頭に属すると考えられる厚手の土器を A, 中葉に属する集合沈線文・すり消し縄文を特徴とした土器を B とした。

A類 (第30図 6, 9, 第34図)

厚手で焼成の非常に悪い土器である。いわゆる「手稻砂山式土器」と称されている土器に相当する。

貼付帶・貼付文が特徴となる。これに沈線文 (半截竹管の内面を用いる例が多い) が加わる。沈線文のみで文様が構成される等がある。

さらに地文としての縄文のみの土器群の 2 種がある。前者を a, 後者を b と便宜的に分類した。

a (第30図 9, 第34図116~133) 貼付帶・貼付文, 沈線文が単独あるいは複合して施文される土器である。

116~119は, 貼付帶, 貼付文のみみられるもので, 貼付帶上には斜行縄文 (116, 118) が施文される。119は貼付帶上を指腹にて連続して押圧する。117は隆起するように付けられた貼付文上に撚糸を一段付ける。

120~124は, 貼付帶が口縁を中心に縦・横に付き, これに沈線文が加わるグループである。

貼付帶上には撚糸を押圧する (120, 121), 指腹を連続して押圧する (122, 123), 竹管状工具の先端を斜目に連続刺突する (124) 等がなされる。沈線は貼付帶に並行するように平行沈線, 弧線文が描かれる。

125は, 垂下するように付けられた縦位の耳状の貼付帶があり, 貼付帶上には撚糸が押圧されている。器面には数段の撚糸圧痕文がめぐらされる。

第30図 9, 第34図126~133は, 沈線文のみで文様を構成するグループである。

文様の構成は, 貼付帶と沈線文が組み合わされるグループと基本的に同じで, 縦横の直線と弧線が組み合わされるもの (9, 126~128), 平行沈線のみみられる (129, 131), 弧線文が組み合わされる (130), S 字・Z 字を描く (132, 133) 等がある。

地文は, R L 斜行縄文 (116, 117, 119~121, 123, 128, 129), L R 斜行縄文 (第30図 9, 第34

図118, 122, 124, 131, 133) が用いられる。

貼付帶上に撚糸を押圧する例では、全例 R L 原体が用いられ、地文の縄文と同一の原体が用いられたものと推定される。

口縁内面に縄文を施す例もある (118, 122, 123, 129), 全例器面と同一の原体を用いている。

b (第30図 6, 第34図134~148) 器面に地文の縄文のみみられる土器群である。器形は、a としたものと類似する。

地文は、R L の斜行縄文 (6, 137~139, 141~143, 145~147), L R の斜行縄文 (135, 136, 144, 148), 単節の羽状縄文 (134), 無節 R の斜行縄文 (140) 等である。

口唇上に地文の縄文と同種の縄文を施す例も多い (134, 135, 137, 138, 140, 143, 145, 148)。口縁内面にも地文の縄文と同種の縄文を施すもの (6, 134, 135, 138, 139, 141, 143, 147) もある。

B類 (第30図 7, 8, 第35・36図)

口縁は若干外反し、頸がくびれ、肩が丸味を帯びるように張り底部へ向け徐々にすぼまるいわゆるキャリパー形を呈する深鉢形土器が多い。

縄文時代後期中葉の集合沈線、すり消し縄文を特徴とする土器群である。

口縁に円弧、山形を描く集合沈線文をめぐらす (8, 149, 150, 153~155, 166, 169, 171, 172, 177, 178, 182~184, 193)。

波状口縁の波状に沿う平行の集合沈線を口縁にめぐらす (7, 151, 152, 167, 168, 170), 波状口縁の突起部では集合沈線を縦位に S 字の沈線で区切る (168, 170)。

口縁は大形の山形を呈し、口縁はヘラにより研磨され無文帶となる (168, 175, 176, 179, 180)。

平縁で、口唇直下に長目の刻みを並列してめぐらし、沈線で一条その直下にめぐらす (181) 等の口縁部形態がある。

口唇上に縄文を施す例もある (7, 149~154)。

頸は、基本的には上下を沈線にはさまれるヘラで入念に研いた無文帶となる (7, 8, 155, 160, 166, 172, 184, 192, 193, 195)。しかし、地文の縄文が施文され、逆 S 字状の長い沈線をめぐらし、カッコ状の沈線を付ける例 (149, 150) もある。

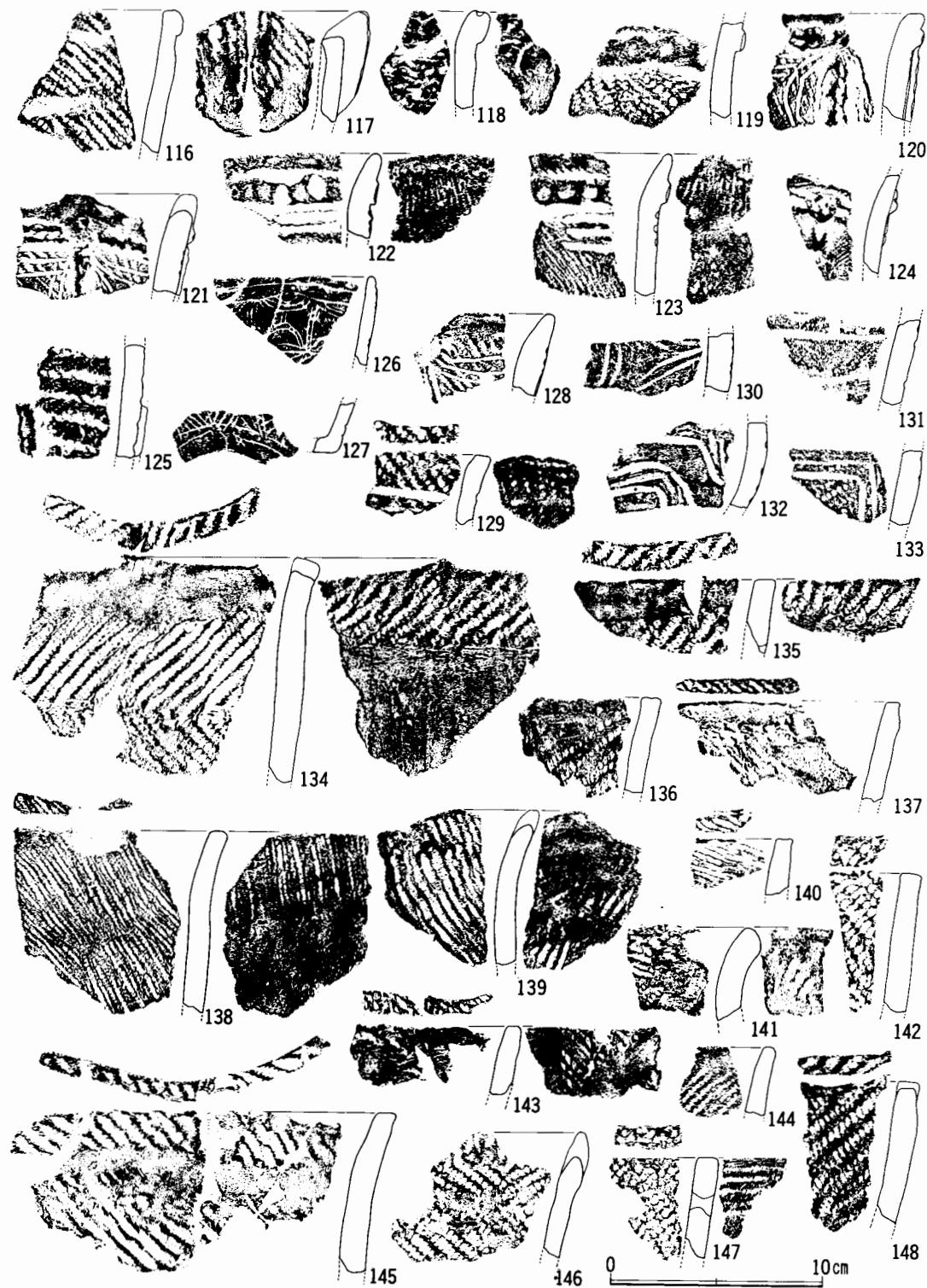
肩は、上下を横走する沈線に挟まれた斜行縄文をめぐらす (8), 地文の斜行縄文地に平行沈線、長い Z 字状の沈線を重ねる (7), 長い Z 字状の沈線を 4・5 段並列してめぐらす (158, 160) 等がある。

胴及び底部にかけては、地文の斜行縄文上に沈線文にて文様を構成し、沈線間の縄文をすり消す文様を構成する。

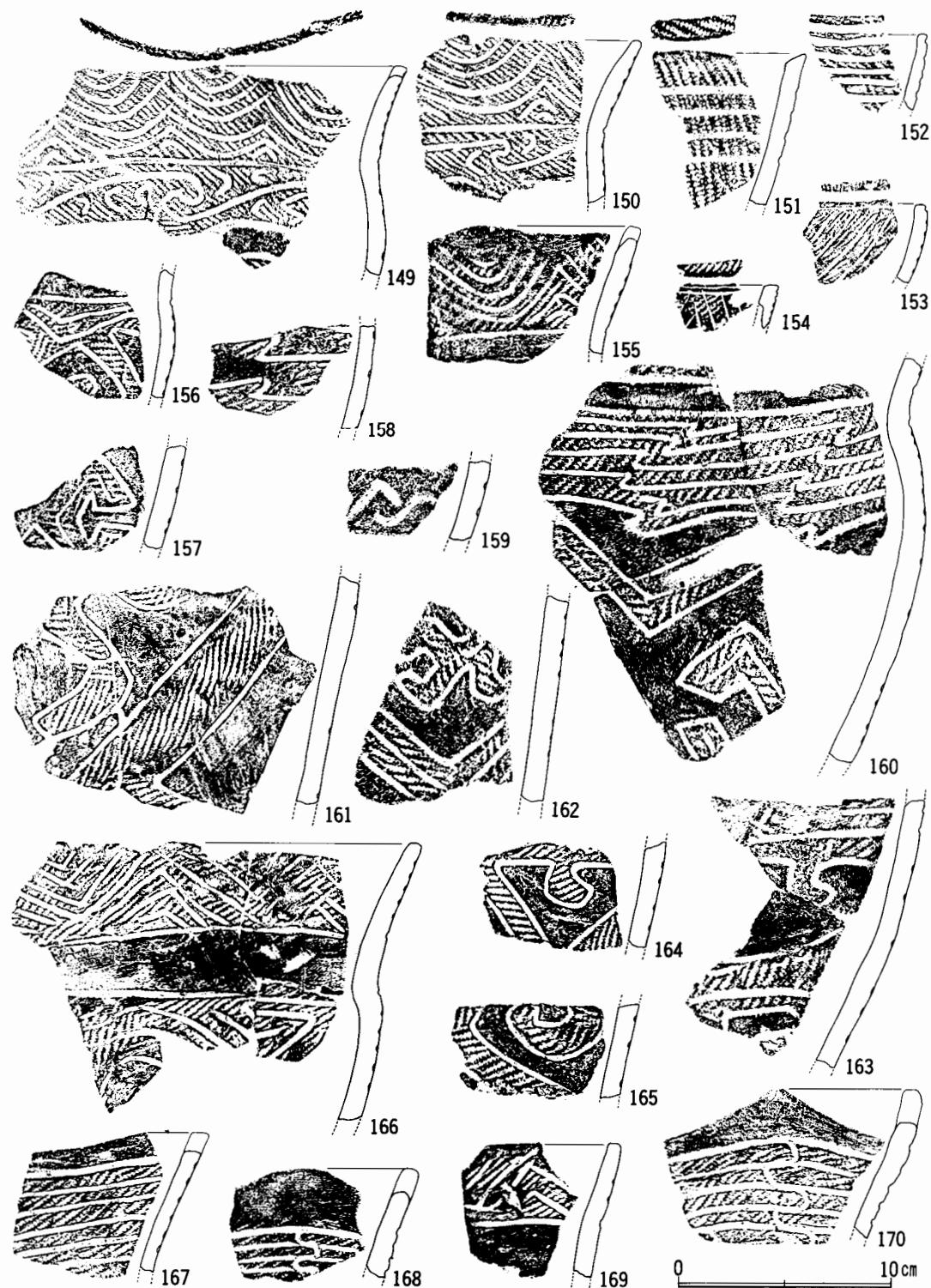
銀杏葉状の文様構成をとる (7, 163~165), 銀杏葉状を呈するスパナの先の様な文様が構成される (156, 157, 160, 162) 等がある。

長い S 字・Z 字形を組み合わせる文様構成となる (8, 214) ものもある。

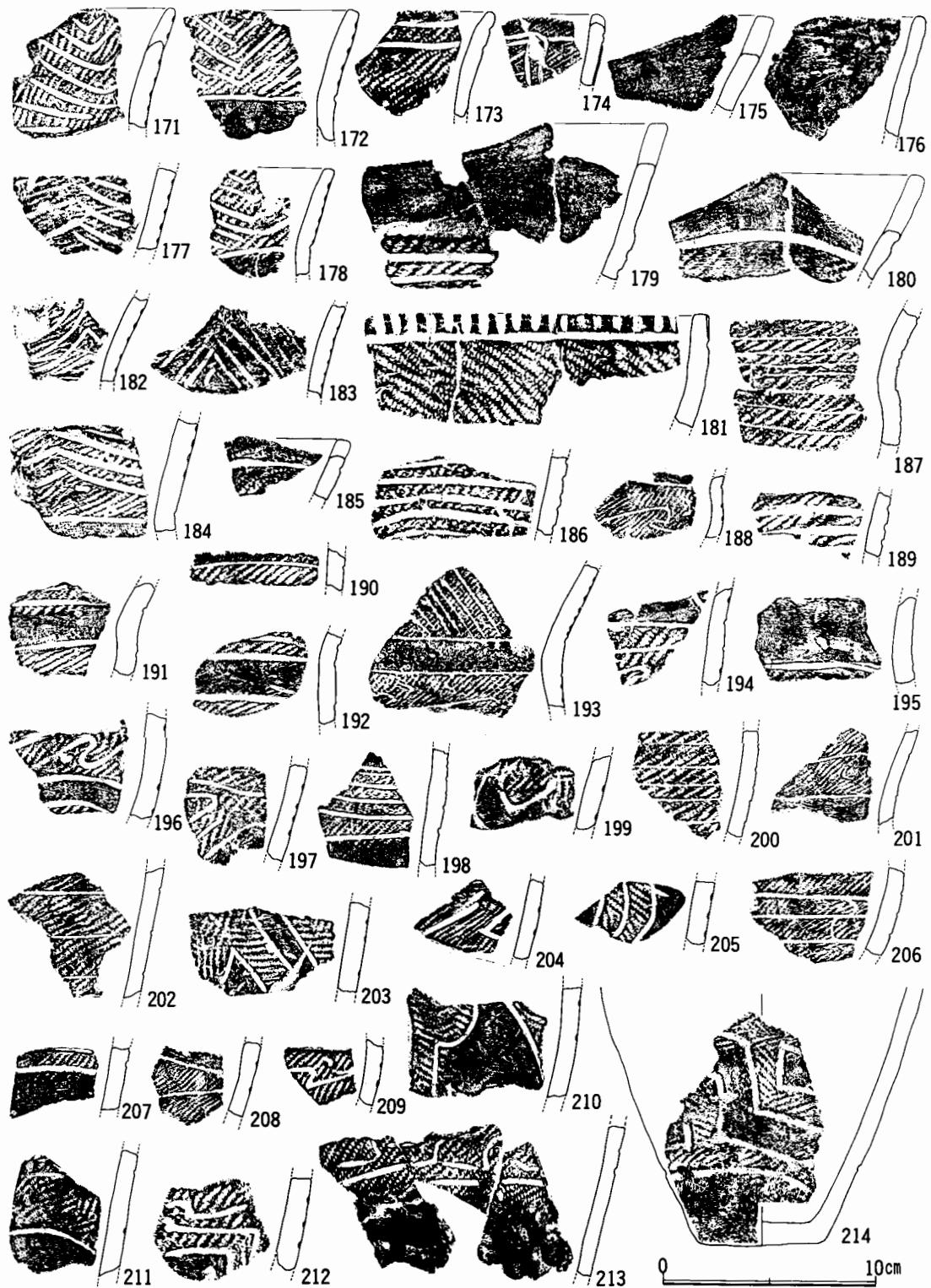
平行沈線文のみ (187, 198, 200, 202), 平行沈線をカッコ状の沈線にて区切る (206) 等もある。



第34図 発掘区出土土器拓影



第35図 発掘区出土土器拓影



第36図 発掘区出土土器拓影

地文の縄文は、R L 斜行縄文 (149~152, 156~158, 181, 205, 210), L R 斜行縄文 (第29図7, 8, 153~155, 160~174, 177~180, 182~204, 206~209, 211~214) が施文される。圧倒的にL R原体が多い。

色調は、茶褐色、暗茶褐色を呈する。胎土には砂粒が多く含まれている。

第IV群土器 (第30図10, 第37~40図)

縄文時代晩期及び続縄文時代初頭に含まれる土器である、明らかに東北地方よりの移入品であろうと推定される土器も含んでいる。

最も多く検出した土器は、沈線文、列点文、縄線文を特徴とする薄手の土器群である。

尚1点のみ、土製品が得られている。

土製品 (217)

G—7区にて検出した。大きさは高さ40mm、幅25mm、最大厚22mm程を算する。全体形は円錐形で底面は三角形状の工具の先端を突き刺している。底面の周囲には竹管状工具を連続的に押引(突引文)している。

A類 (215, 216)

215は、薄手の鉢型の口縁部片である。口唇上は平らに整形され、口縁は肩、胴に比し薄く整形されて外反する。肩には段がつく。胴は丸味を帯び以下徐々にすぼまる。

L Rの縄文が胴に施文される。色調は暗褐色から黒褐色を呈し、胎土には砂粒を含む。

「日の浜式土器」に類似する。

216は、薄手の土器で、器面上には浮彫りによる雲形文状の文様がみられる。器形は、小片のため不明であるが、器面上及び内面は丁寧に研磨されており、両面ともに「漆」と考えられる茶褐色の塗料が所々に残っている。全面に塗られていたものが、剥れたものと推定される。

色調は、明褐色を呈する。胎土中には細い砂粒を若干含む。断面では中心部が黒褐色を呈する。

「大洞A'式土器」に相当し、東北地方からの移入品であろう。

B類 (第30図10, 第37図217~第40図421)

縄文時代晩期末から続縄文初頭に位置すると考えられる土器群である。今回の調査では最も多く得られている。

沈線文、突瘤文、列点文、刺突文、縄線文、縄文、無文と多岐にわたる文様要素がある。文様要素別にa~fの6グループに細分した。

a (218~290) 口縁が直立に近く立ち口径が最大径をなし、以下徐々に底部に向けすぼまる深鉢形土器、浅い鉢形で口縁に複雑な形の突起、釣耳のようなものが付く鉢形土器がある。

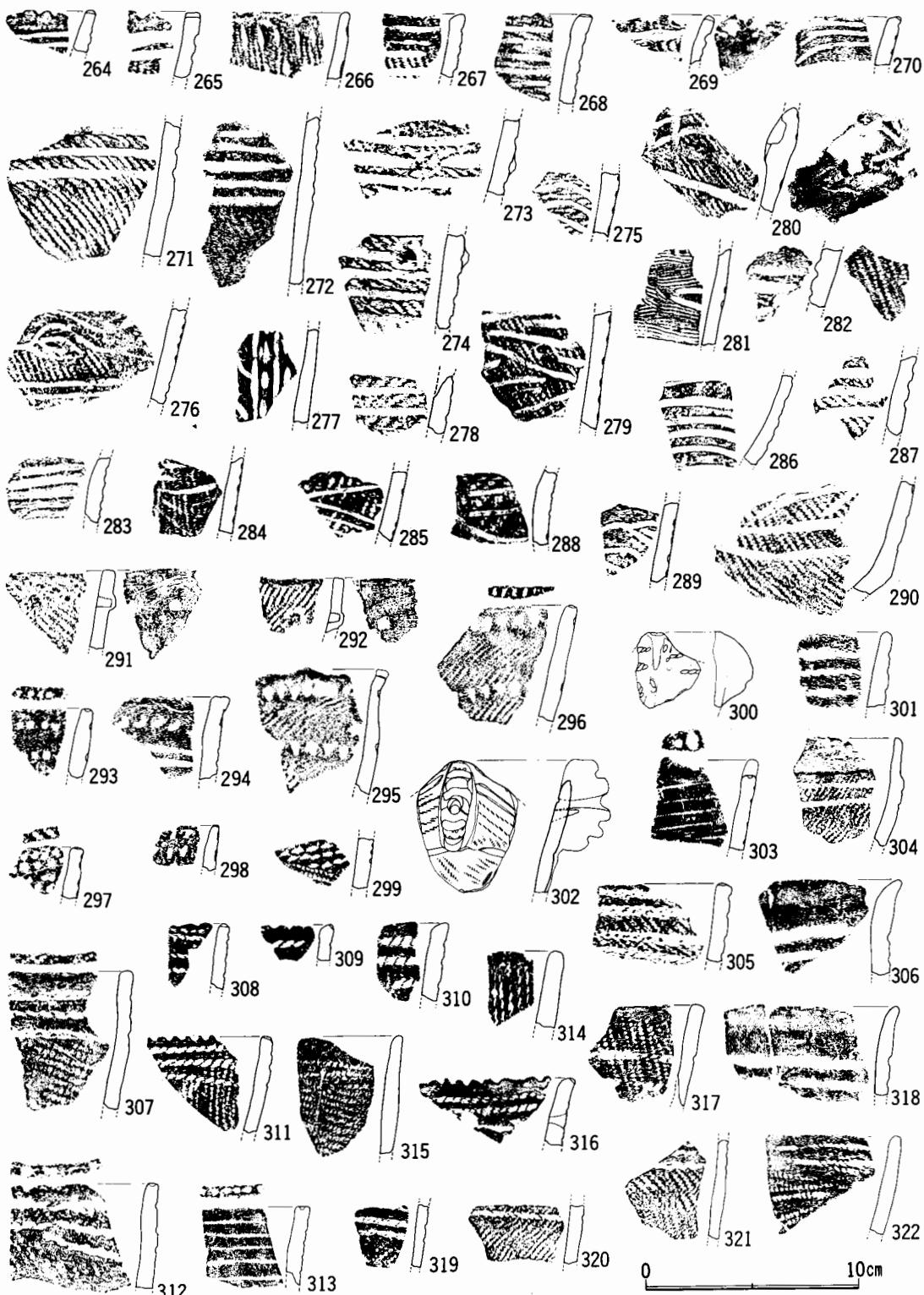
沈線文にて器面を、装飾する事を基本とする。

鉢形土器で口縁に複雑な形の突起が付く (219, 220, 222, 223, 255)。さらに釣手と考えられる小孔が突起部にある (219, 220, 223, 255) ものもみられる。

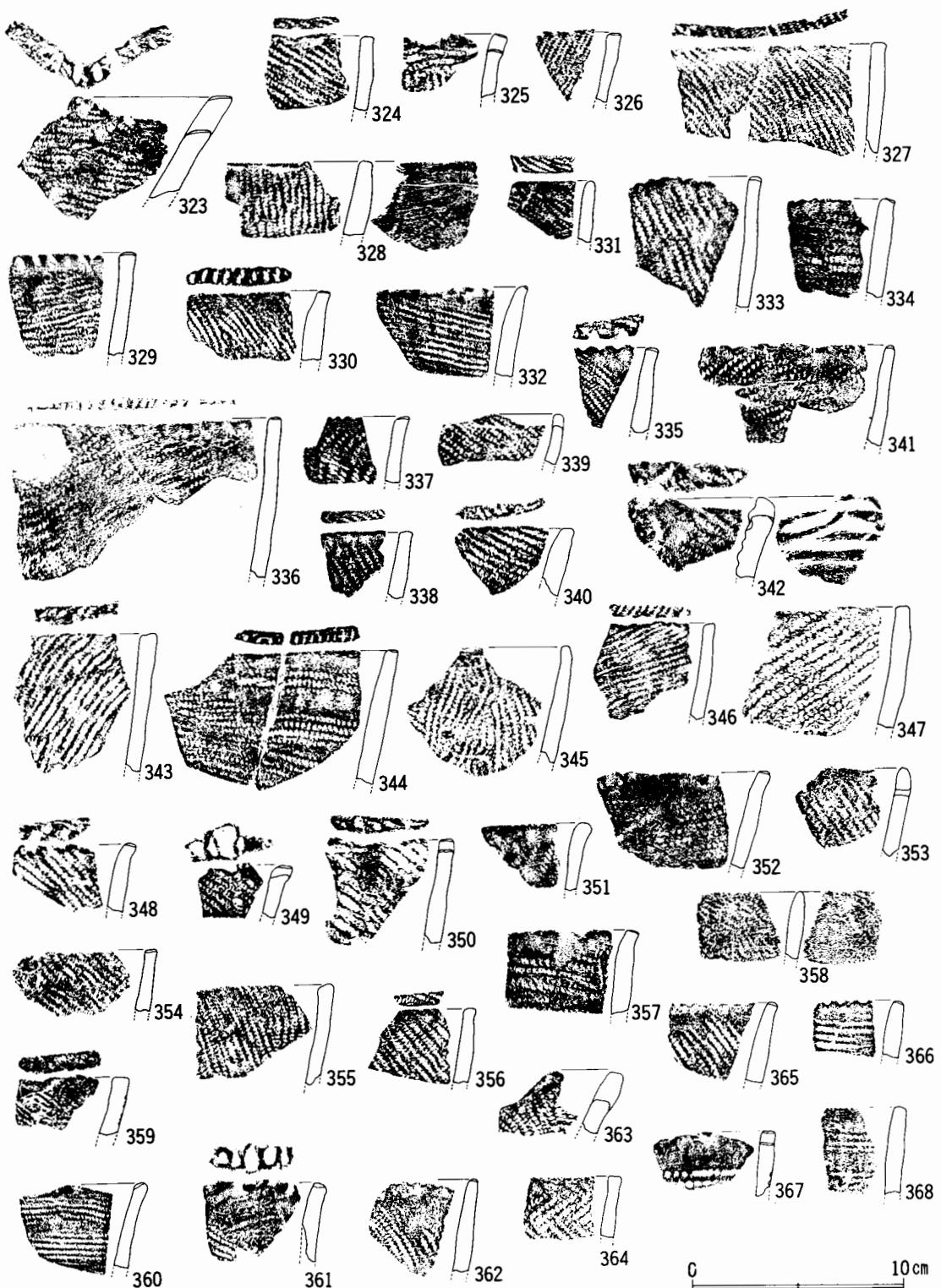
突起が弁状となり釣耳のように小孔を削孔してある (218, 221) ものもある。



第37図 発掘区出土土器拓影



第38図 発掘区出土土器拓影



第39図 発掘区出土土器拓影

いずれも、口縁に沿って沈線文がめぐらされる。

口縁に平行してやや幅広の集合沈線文をめぐらす例が最も多くある。器形は深鉢、鉢等である。深鉢はほとんど平縁であり口唇上に連続した刻み目を付ける例が多い。鉢は大形の山形突起をもつようである。^{*}

平縁で、口縁に集合する平行沈線が施文され、口唇上には特に文様を付けない(224, 228, 235, 236, 243, 244, 254, 267, 268, 270), 口唇上に縄文を施す(225, 257), 口唇上に刻み目をめぐらす(227, 228, 230~234, 237, 238, 240, 246~249, 253, 262, 264, 265)等である。

口縁内面に平行沈線を一段めぐらす例(228, 230)があり、244は、これに縄文が加る。

2連突起、山形突起を有したもので口縁に平行沈線文を数段めぐらす(239, 241, 242, 245, 252, 255, 256, 261, 269, 280)例もあるほとんどが鉢型土器と推定される。

242, 252は、沈線の途中に貼り瘤を付け、変形工字文としている。同種のものは、273, 274にもみられる。

突起部の内面には、幅広の沈線で文様を描くものも多い(239, 242, 252, 256)。241, 261は、内傾気味にそぎ取られたかのような口唇上に縄文を施文している。

細い沈線文を数本めぐらし、若干間をあける沈線文間に縦位の沈線を並列してめぐらす(250, 251), 2本の沈線を並列し蛇行させる(263), 口縁より垂下するよう縦位の沈線を並列して付ける(266), 平行沈線文間に三角形状の列点文をめぐらす(259)等がみられる。

縦・横を主体とした沈線文ではなく、弧線を多用するものもある、平行沈線と組み合わされる例が多い。

レンズ状を呈する(276, 279, 281)。平行沈線と弧線の組み合せで変形工字文が構成される(284, 285, 288~290)等である。

地文の縄文は、圧倒的にR L斜行縄文が多いが、R L横走縄文(247), L R斜行縄文(255, 258, 261, 275, 278, 285, 286, 288), L R縦走縄文(259), L R横走縄文(264)もみられる。281のみ櫛目状の条痕文が地文となる。

全体的に器面が風化し、荒れた土器片が多い。色調は明褐色、茶褐色を呈する。胎土には多量の砂粒を含む。

b (291, 292) 裏面より器面に向け径3~4mmの刺突列が口縁にあるもので、器面には円形の瘤状の隆起がめぐる。いわゆる突き瘤文である。

平縁であり、口唇上は平らに整形される。口縁はやや外反する。

器面には、地文としてR L斜行縄文(291), L R斜行縄文(292)が施文されている。

色調は暗褐色を呈し、胎土には砂粒を含む。

c (293~299) 刺突列を特徴とする。工具は細い丸棒、竹管が用いられる。

293は細い丸棒工具の先端を刺突したもので、口唇上に一段、口縁に二段刺突列がみられる。

294は径6mm程の断面が円形の棒状工具をやや下方より刺突した刺突列が一段みられる。

295, 296, 297は、細味の竹管様工具の先端を斜め下方より刺突した、刺突列がみられる。299は

左斜めより刺突している。

298は、ヘラ状工具の先端を縦位に並列し連続して押し付けたもので口唇上に一段、口縁に二段めぐらされる。

地文はL R斜行縄文(295, 296), R L斜行縄文(299)が施文される。

d (305~322) 口縁に平行して数段縄線文(撚糸の押圧)がめぐらされるものである。

口縁に突起がありこの部分に弁状の耳を付ける(300, 302), 平縁で口唇上に刻み目をめぐらす(303, 308, 309, 311, 316), 口唇上に円形刺突をめぐらす(313), 口唇上に縄文を施文する(307, 312)等がある。

口縁に突起が付くものは、鉢形土器であり、その他は深鉢である。

縄線文は、R(300, 303, 309~313, 315), L(301, 302, 304, 308, 322, 324), R L(305~307, 316~319, 321), L R(320)が用いられている。

地文の縄文は、R L斜行縄文(302, 305, 307, 312, 317, 321), R L横走縄文(322), L R斜行縄文(304, 319, 320), L R横走縄文(315), L R縦走縄文(311)である。

e (第30図10, 323~407) 器面に地文の縄文のみみられる土器である。

平縁で口唇上に刻み目、縄文が施される等の口縁が直立に近く立つ深鉢形土器、口縁に山形突起・弁状突起を有し、口縁が外反する鉢形土器がある。

深鉢形土器では、口唇上に連続する刻み目をめぐらすもの(323, 325, 326, 329, 332~334, 336, 337, 341, 344, 348, 352, 354, 357, 361, 362, 365, 366, 373~375, 379, 383, 385, 389, 391~394, 399)が最も多くある。

地文の縄文と同種の縄文を口唇上に施すもの(324, 327, 331, 338, 340, 343, 346, 350, 356, 359, 370, 377, 378, 388, 397), 撥糸の押圧で刻み目をめぐらす(330), 口唇上には縄文を口唇直下に刻み目を施す(335)等がある。

鉢形土器では、ほとんどの例では山形突起を有し突起部口唇が肥厚する。突起頂部には刻み目が付けられる。

口唇上に縄文を施文する(342, 386), 連続する刻み目をめぐらす(325, 349, 367), 縄文を施文しその上を刻む(323)等がある。

突起部の内面に沈線文を施すもの(342, 380)もある。

地文の縄文は、R L斜行縄文(第30図10, 324, 327, 330, 331, 333, 335, 338~340, 342, 345, 348~350, 353~356, 358, 359, 361~363, 365, 369~371, 373, 374, 377, 379~381, 385, 387~393, 396~398, 402, 403, 405~407)が最も多く、R L横走縄文(323, 329, 332, 334, 344, 357, 360, 366, 368, 375, 394, 399, 401), R L縦走縄文(325, 328, 372), L R斜行縄文(326, 336, 337, 341, 343, 346, 347, 351, 378, 383, 384, 386, 395, 400, 404), L R横走縄文(352), L R縦走縄文(376), 羽状縄文(364), Lの撚糸文(382)等がある。

第30図10, 403~407は、底部である。底面にも縄文を施文するもの(404~406)もある。

風化がはげしく器面が荒れているものが非常に多かった。色調は明褐色・茶褐色・暗褐色を呈す

る。胎土には砂粒を多く含む。

f (408～421) 無文の土器を一括した，ほとんどが深鉢形を呈する。

全例平縁で，口唇上に刻み目をめぐらす例 (408, 412, 413, 418) もある。

口唇は，細身となり外へ向く (408, 410, 414)，直立する (409, 411)，平らに整形される (416, 419)，丸味を帯びる (413, 415, 420, 421) 等がある。

色調は暗褐色を呈し，胎土中には砂粒を多く含む，器面は風化し荒れているものが多い。

第V群土器 (第30図11, 第41図)

いわゆる恵山式土器，後北式土器を一括した。

恵山式土器をA，後北式土器をBと分類した。

A類 (第30図11, 422～432)

いわゆる恵山式土器である。甕，台付甕，鉢の器種がある。

423～428, 431, 432は，甕である。口縁は大きく外反し頸以下は真直に下り肩が張る。

口縁に山形突起を有する (428)，平縁 (424, 426, 427)，平縁で口唇上に刻み目をめぐらす (423) がある。

口縁，頸，肩の三部位に沈線文帯をめぐらすが，口縁・頸，肩の二部位のもの (423, 424, 426, 427) もある。

428は，大形の山形突起があり，頸は大きくくびれ肩が張る。肩部には短刻線，工字文がみられる。

431, 432は甕の胴部である。

第30図11は，台付甕である。台部に平行沈線が一部みられる。

422, 429, 430は，鉢である。口縁は直立に近く立ち以下底部へ向け徐々にすぼまる。

口縁に横走沈線文とその下に連弧文をめぐらす (422)，浅い鉢で口縁と底近くに横走沈線をめぐらしこれに上下を挟まれる部位に山形を描く (429) 等である。

430は底部で，くびれ部を中心に数本の沈線をめぐらす，底面は揚底である。

地文は，R L 斜行縄文 (422, 424)，R L の横走帶縄文 (423)，R L の縦走帶縄文 (第30図11)，R L の横走帶縄文，縦走帶縄文 (431, 432)，L R 斜行縄文 (425)，L R 縦走縄文 (428) 等である。

焼成は比較的良好である。色調は明茶褐色～茶褐色を呈する。胎土には，白色火山灰粒，砂粒等を含む。

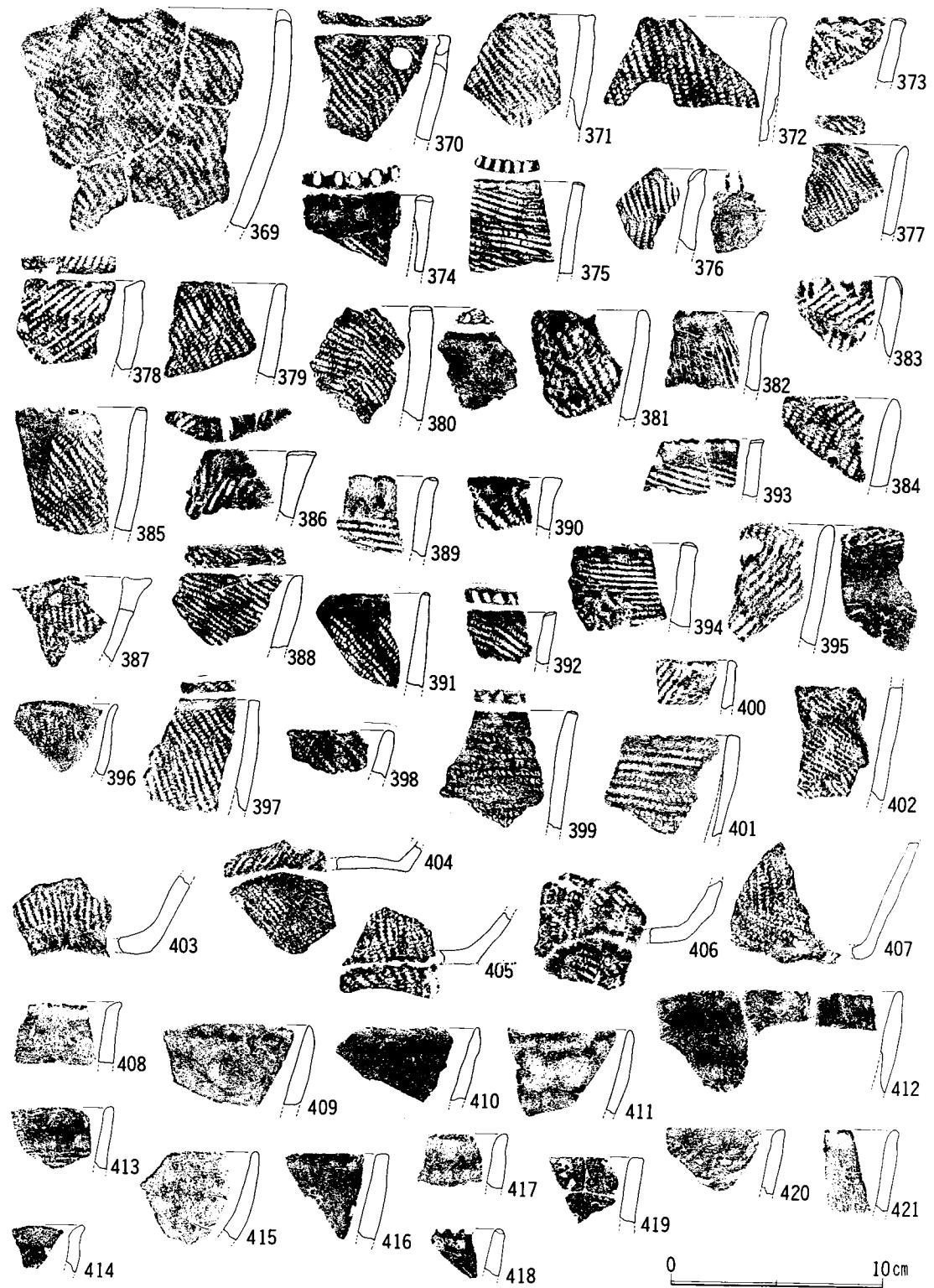
B類 (433～475)

後北式土器を一括した。さらにa～dのグループに細分した。

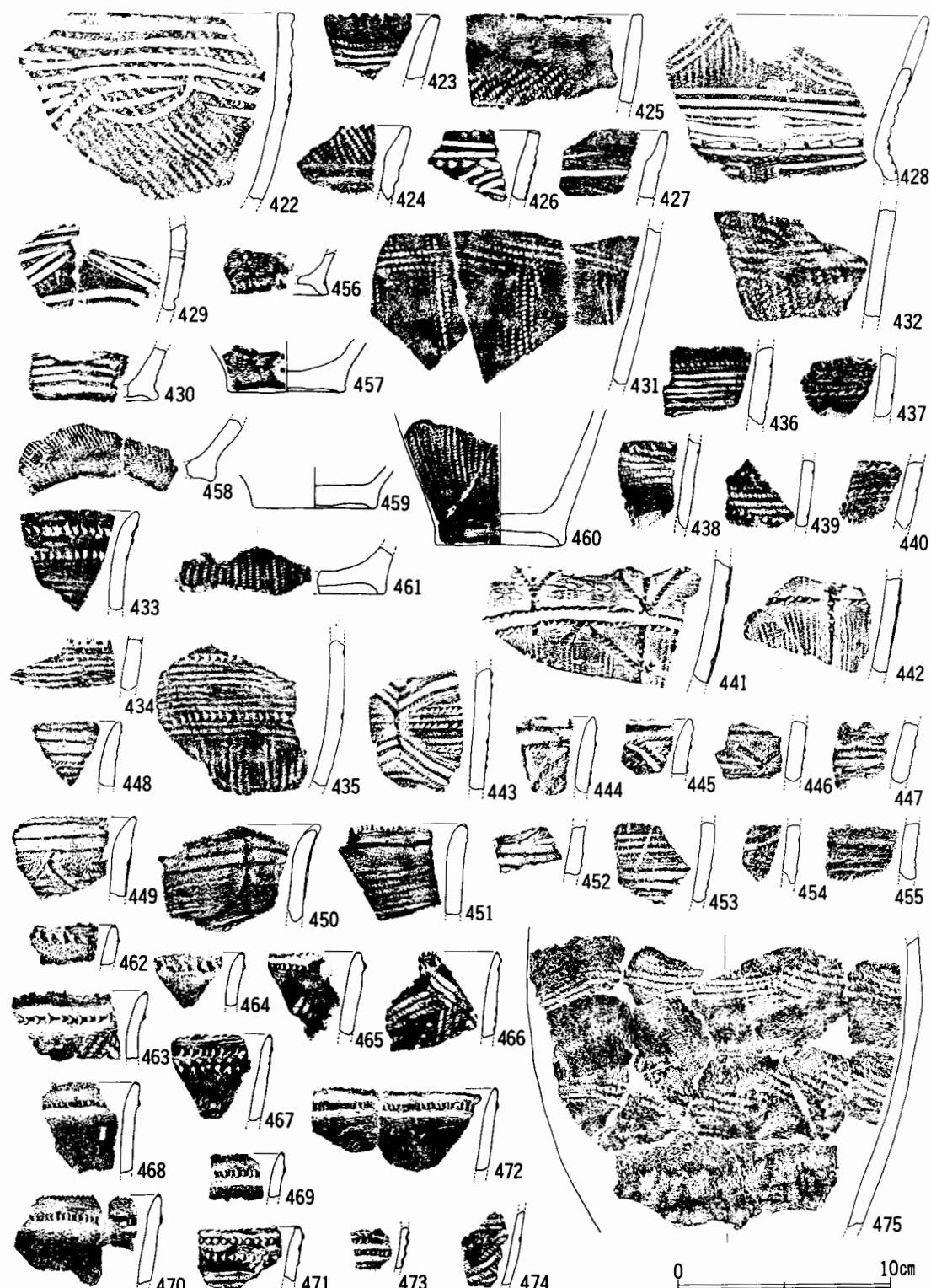
a (433～440) いわゆる後北A式土器に相当する土器である。横走帶縄文の上下を三角形状の列点文あるいは瓜形文にてはさみ器面にめぐらす。

口縁は直立に近く立ち，以下徐々にすぼまる，倒釣鐘形の器形をなす。

縄文は，R L 横走帶縄文 (436～440)，L R 横走帶縄文 (433, 434)，胴上位はR L 横走帶縄文がめぐり下位は縦走帶縊文が地文となる (435) 等である。



第40図 発掘区出土土器拓影



第41図 発掘区出土土器拓影

b (441～447) 後北B式土器に相当する。上下を列点文に挟まれた帶縄文がめぐらされ、さらに細い隆線を縦・横・斜に貼りめぐらし、隆線上には細かい刻み目を付ける。

器形は、倒釣鐘形を呈する。

縄文は、帶縄文であり全てR L原体である。

c (448～455) 後北C₁式土器に相当する。器形はa, bと共に倒釣鐘形を呈する。

主文様は、a, bに順ずる。細い隆線がbと同種の構成に貼りめぐらされるが、隆線上に刻み目は無い。

地文の縄文は、R L横走帶縄文である。

d (462～475) 後北C₂・D式土器に相当する。口唇は断面が三角形状に整形され刻み目がめぐる。口唇直下に一段隆線を貼り隆線上は刻む。上下を三角形状列点にて挟まれた帶縄文が円形、十字形に施文される(466, 471, 474), 帯縄文のみ数段器面にめぐらされる(475)が主文様である。帶縄文は、すべてR L原体が用いられている。

底部 (456～461) A類、B類a～cの土器の底部である。全例揚底である。

456, 461はくびれ部に列点様の縦長の細い列点文がめぐる。

地文は、R L斜行縄文(458), R L縦走縄文(456, 461), R L縦走帶縄文(460)である。

第2節 石器群について (第42~67図, 図版38~50)

本節では、発掘区から出土した石器群411点について報告する。なお、これ以外に石鏃の小破片、同未成品の破片、石斧の破片等を中心に図示していない資料があることをお断わりしておく。

本遺跡から出土した土器群は、縄文早期後半、同中期後半、同後期初頭から中葉、同晩期全般、続縄文初頭、同前期後半、同後期の各時期の資料（主体は後期中葉、晩期末から続縄文初頭）がみつかっており、ここで報告する石器群もこれらの各時期に伴つたものであるが、各々時期の土器群が明瞭に区域を分けて検出されていないため、一括して説明する。

また、計測値・石質については第6表を参照されたい。

石 鏃 (1~51)

図示した51点の石鏃の内、1から19は有茎石鏃、20から29は無茎石鏃、30から33は両面調整の石鏃破片、34から51は石鏃の未成品と考えられるものである。石材は、未成品の44、48が硬質頁岩である以外は黒耀石である。

有茎石鏃の内、1から4は大型品で、長さは4cm以上ある。幅は、4は1.2cmとやや細身であるが他は1.6~1.8cmで、重量も1.9~2.6gで重い。5から14は中型品。15から19は、尖頭部が正三角形に近く、茎部が細身のやや小型のもので、本例は縄文後期に特徴的なものである。無茎石鏃は、各タイプのものがあるが、20の大型品と24は焼けた例、25例は尖頭部が再調整された可能性のあるものである。

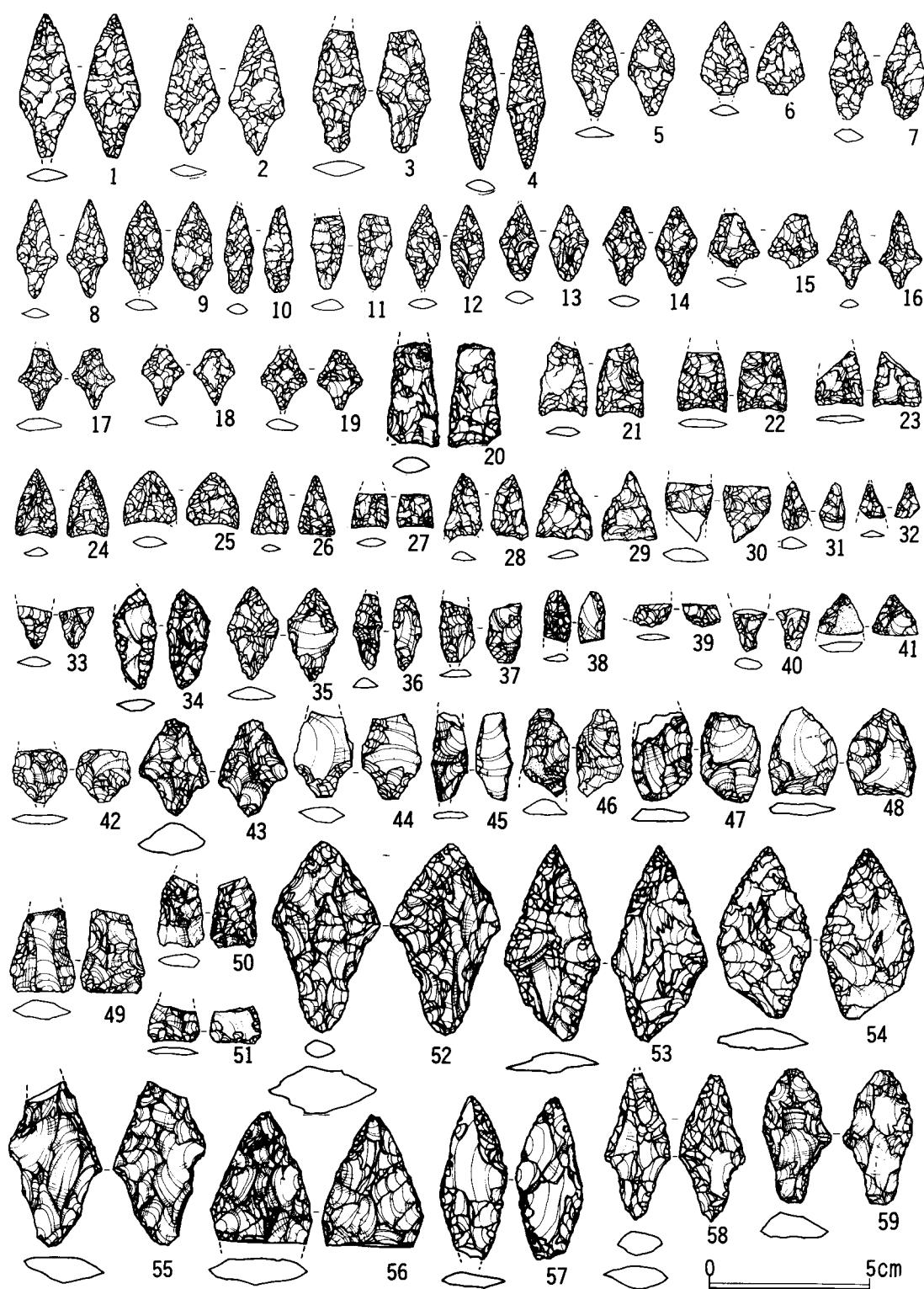
34から51の未成品と思われるものは、素材面が随所に残り、また調整が片面と他面の一部にしか施されていなかったり、さらに調整が不十分のため器厚が減じられていない。

石 鍔 (52~62)

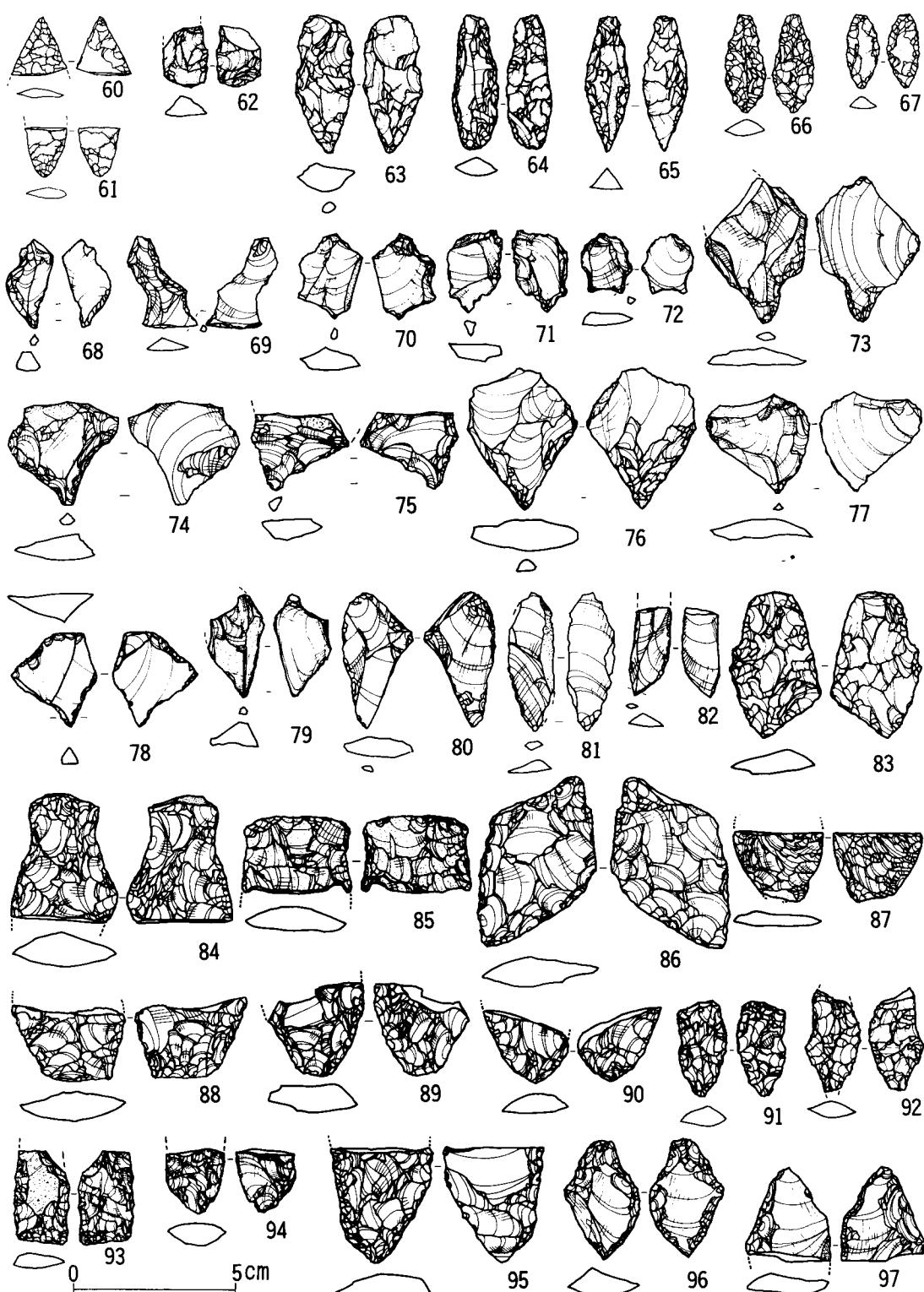
52~62は、石鍔および同破片と考えられるものである。52は、硬質頁岩製で両面に調整が加えられているが、随所でヒンジ・フラクチャーを起こし器厚は減じられていない。なお、尖頭部先端付近の側縁および剝離面の稜が著しく摩滅しているところから、本例は最終的には錐として利用されたものである。53、54、56は、入念な両面調整が施された例であるが、この内53、54は茎部の表面左側側縁は欠損後再調整剝離を入れたものである。55は、調整が不十分で未成品の可能性もある。57は、表面上部にある大きい剝離は、欠損面と考えられるが、その後側縁に使用にともなう細かな剝離が認められるところからそのまま再利用したものである。58、59はやや小型の例で、59は茎部下端（基底部）が平坦で、さらに尖頭部先端は再調整されているが、十分銳利にはなっていない。60~62は、尖頭部ないし茎部の破片で、内62は焼けた資料で、厚みはあるが基底部はやや平坦である。

石 锥 (63~82)

石錐とした例の内、63~67の5点は両面調整ないし半両面調整のものであるが、あとは剝片の側縁に簡単な調整を加えただけの資料である。63は、硬質頁岩製で、柄部側はやや平坦に仕上げられ、



第42図 発掘区出土石器実測図



第43図 発掘区出土石器実測図

また尖頭部との境付近には浅い抉りがある。尖頭部の最大厚は0.9cmと厚く、ドットを入れて表現した先端部分は著しく摩滅している。64は、裏面に入念な調整を加えた資料であるが、図示下端縁を中心にはほとんどの側縁と表裏面の稜線上は摩滅状態である。細身のナイフ状石器の可能性もあるが、ここでは錐と考えておく。65～67は、柄部側が細身に仕上げられた両面・半両面調整品で、65, 66はやや厚手である。尖頭部は、摩耗は特に認められないところからいづれも石鏃の未成品の可能性もある。68は、チャート製で尖頭部付近にだけ刃角の高い刃潰れ状の剝離、先端部には摩耗が認められる。69～72は、縦長ないし不定形の寸の短い剝片を用い、短い尖頭部付近を中心に刃角の高い剝離がある例である。なお、69では柄部側の両側縁にも抉入状の剝離があり、72では尖頭部が2カ所ある。73～76は、各種の幅広の剝片を利用し、図示下端縁を中心に剝離調整を加え、下端にやや幅広の尖頭部を作出したものである。77, 78は、硬質頁岩製で、77は寸の短い幅広剝片、78は厚手の縦長剝片の切断品（破片？）を利用したもので、図示下端に尖頭部がある。79は、やや厚手の横長剝片、80～82は縦長剝片を利用したもので、図示下端縁を中心に短めの剝離が認められる。

ナイフ状石器（83～109）

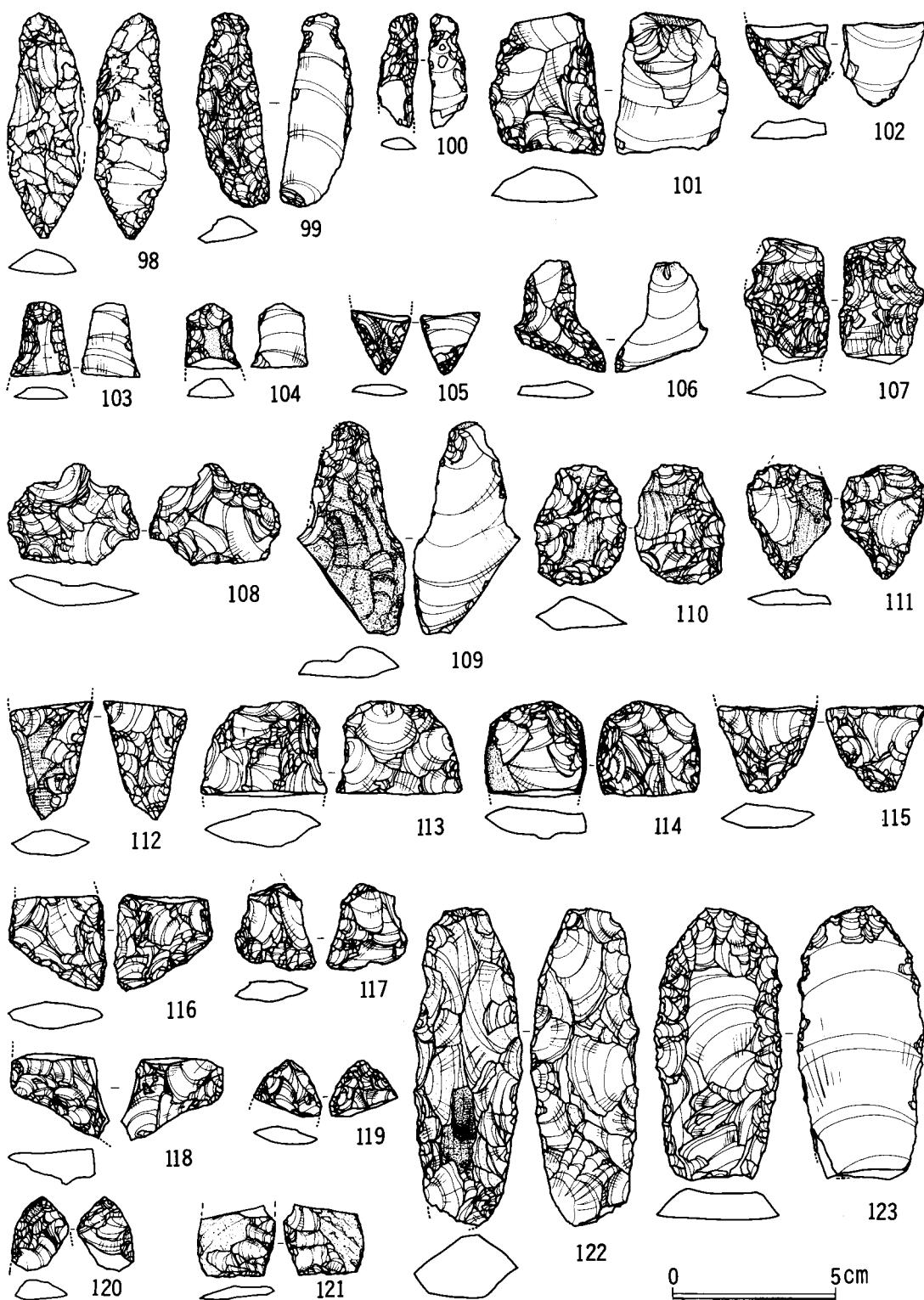
83～94および107, 108は、両面調整品である。この内、83～86は幅広の柄部をもつ例で、85は焼けた資料である。なお、83は関が明瞭でいわゆる「靴型石器」であるが、84は柄部は抉入状に剝離調整が入ったもので縄文晩期末から続縄文初頭頃のタイプと考えられる。86は、柄部上部が欠損した後一部再調整が入っている。87～90は、幅広のタイプの刃部ないし柄部側の破片。91～94は細身の例である。この内、91, 92は入念な両面調整で、91では上部縁は欠損後再調整されており、92は弱い関がある。107は、上下端を欠損している（上端には再調整剝離が入っている）が、不明瞭ながら柄部側はやや細身に仕上げられている。108は、調整剝離が不十分で刃部も作出されていない未成品と考えられるが、図示上面部につまみ状の突出部が作り出されている。

95～98は、半両面・両側縁調整の例である。全体の形状は、96では寸は短いが、刃部は尖頭部状をなし、柄部はやや太目である。98は、縦長剝片を利用したもので、柄部側は厚みがあるが、刃部は薄く仕上げられ尖がっている。

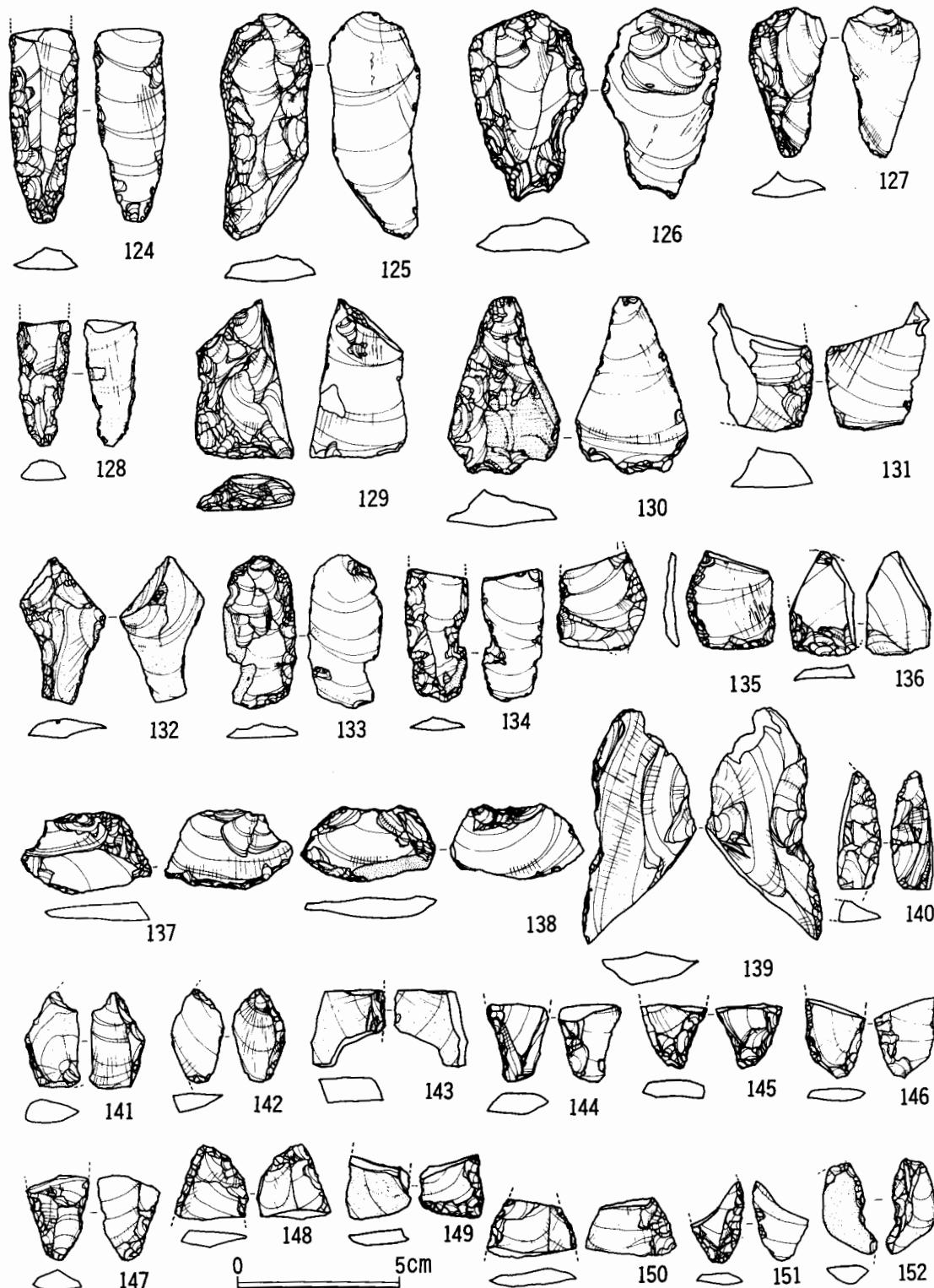
99～106, 109は、片面ないし側縁調整の資料である。99と100は、硬質頁岩製で柄部につまみ状の抉りが両側縁に認められる。なお、100は加熱で随所に火バネがある。101は、柄部側に原石面を残し厚味が十分減じられていないが、刃部側は入念な側縁調整が施されている。102～105は、柄部ないし刃部の破片。106は、硬質頁岩製で、太い柄部と明瞭な関があるので、刃部の剝離は刃角が高く「搔器」的に用いられた可能性もある。いわゆる「靴型石器」の一類である。109は、端部がステップ・フラクチャーを起こした縦長剝片を利用したもので、柄部側は側縁調整とつまみ状の抉りがみられるが、刃部側は未調整の未成品である。

両面体石器（110～122）

両面体石器としたものは、各種の両面調整石器の剝離調整途中の未成品ないし破片である。110は、表裏面に原石面を幅広く残し、また原石面が残る下端縁の調整はステップ・フラクチャーを起こし厚みが減じられていない。111は、調整が不十分で、上部は欠損する。112～116は、両面調整石器の



第44図 発掘区出土石器実測図



第45図 発掘区出土石器実測図

製作途中(未成品)の破損品と考えられるものである。この中で、113にはその上部縁付近にパンチ・ホールの痕がいくつかある。117~121も、製作途中ないし完成品の破片である。122は、棒状の厚手の両面調整品が転覆したものを利用し、裏面側を中心に大きな剝離調整をさらに加えた資料である。しかし、側縁はローリング時の摩滅状態のままで完成された石器とは考えられない。

削器および使用痕のある剝片 (123~216)

123~126, 128は、縦長剝片を利用し、その両側縁に剝離調整がある削器である。

123, 124は、後期旧石器時代の可能性がある資料である。123は、G-7区の暗茶褐色土層直下の黄褐色粘質土層中から検出された資料(第3図S1)である。大きさは長さ8.5cm, 幅4.0cm, 厚さ1.1cmで、幅広の縦長剝片(石刃?)を利用して、一度欠損した図示下端部も含めて全側縁に調整剝離が入っている。調整剝離は、長軸両側縁は一般に刃角が高いが、特に下半部は直角に近く、しかも縁部は摩滅し、心持ち幅狭くなっているところから、この部分は柄部と考えられる。上部縁付近は平坦な仕上げで、裏面側にも平坦な剝離が入り、やや尖がっている。類例は、旧石器とすれば、湧別技法の細石刃核を中心とした山形県大石田町角二山遺跡(宇野・上野1975; 第3図1, p. 102)に同種のものがある。124は、H-8区の黒色土層からみつかったものであるが、幅2cm強の石刃と思われる素材を用い、両側縁から下端縁にかけて入念な調整剝離が入った資料である。バルブ側を欠損するが、この欠損面を含めて本遺跡の他の黒耀石製石器に比べパテナはやや古く旧石器の可能性が高い。なお、表面図左上部縁から裏面右上にかけて上から入っている縦長の剝離は彫刻刀面である可能性もあるところから、後期旧石器時代末の有舌尖頭器をともなう段階に認められる狭長な角形彫刻刀に類似すると考えることもできる。

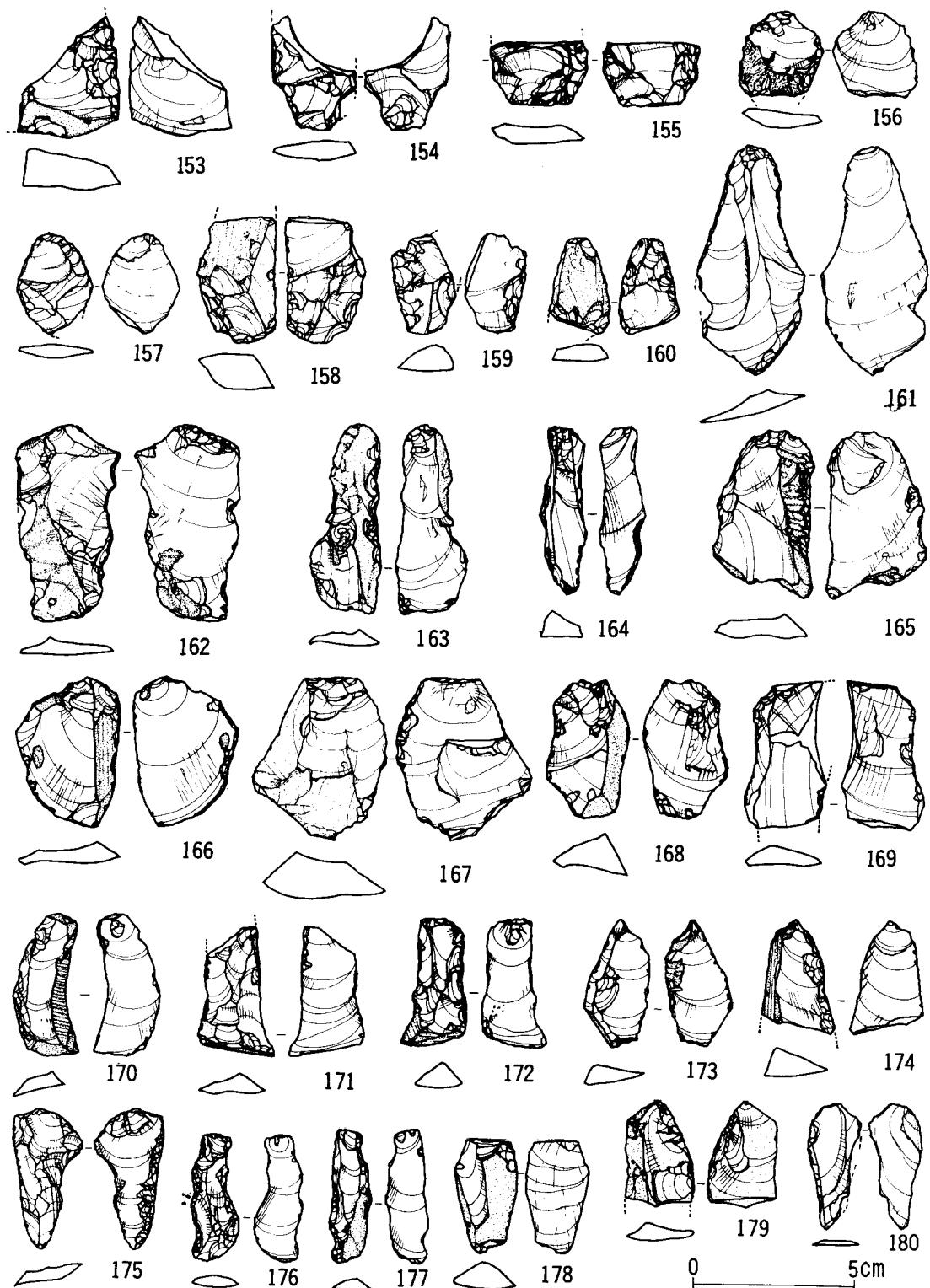
125, 126は、やや厚手の縦長剝片の両側縁を中心に刃角の高い剝離調整があるものである。125では調整のない下半部縁も摩滅状態で、刃潰れ状の微細な剝離がある。126では、下端縁にも調整があり、縁辺のエッジは下端縁から表面右側縁を中心に摩滅状態である。128は、狭長な縦長剝片を利用し、両側縁から下端縁にかけて、やや不規則な刃角の高い調整が入ったもので、両側縁のエッジは摩滅している。

127, 130, 132~134は、縦長剝片を用い、その片側縁にのみ調整剝離がある例である。127, 134では、反対側の側縁にも使用痕状の微細な剝離列があり、130では上部の反対側側縁、133では下端縁にも調整がある。

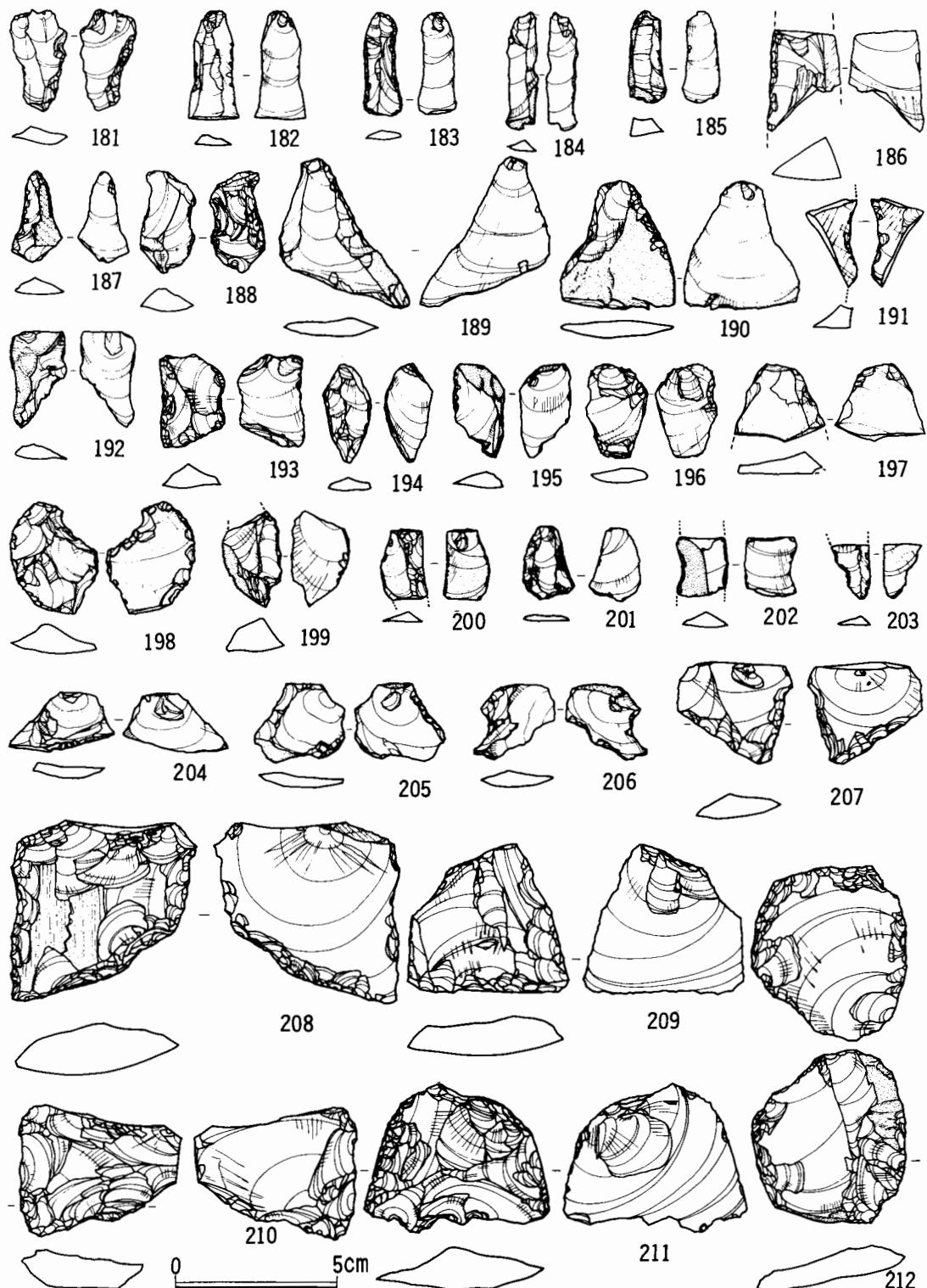
129, 130, 135は、共に側縁調整石器の破片で、129では下端縁にも調整があり、素材は幅広の剝片であった可能性もある。130は、片側縁と上部が大きく欠損するが、正面図右側縁から下端縁の一部に調整剝離があり、またこれらのエッジは摩滅状態である。135は、両側縁と下端縁に剝離がある。

136~139は、横長剝片を利用した側縁調整石器である。137は、ほぼ全側縁に調整がある。139は、刃角の高い側縁調整の入った石器が転覆したもの(本来の石器の面は、光沢が失われ摩滅状態)を、再度分割した剝片であるが、分割後は特に調整は加えていない。

140~160は、140は両面調整石器、それ以外は側縁調整石器の破片である。この内、141, 142, 152の3点は裏面図側に表現した面が大きく剥ぎ取られた欠損面で、前二者については、本来の一次剝



第46図 発掘区出土石器実測図



第47図 発掘区出土石器実測図

離面は図示表面側である。143は、焼けた資料。149は、一次剥離面側に調整がある。155も、一次剥離面の両側縁にも入念な調整がある。158は、パテナの古い縦長剝片を素材に、裏面側を中心に剥離調整を加えているが、一部ステップ・フラクチャーを起こし意図した形状をなしていない未成品と考えられる。なお、141, 142, 147の3点は欠損面についてもリングを入れている。

161から206は、各種剝片の側縁に使用にともなうと考えられる微細なあるいは不規則な剥離がある資料である。161～203は、縦長ないし縦長の剝片を利用したもので、163, 165, 171, 172, 174の表面図右側縁にみられる剥離、175の裏面にある剥離は比較的整ったもので調整である可能性もあり、特に175は調整石器の未成品とも考えられる。なお、172の下端縁にも微細な剥離がある。また、179, 192, 197, 200は焼けた黒耀石製の資料である。204, 206は寸の短い幅広剝片を利用したものである。

207～216は、やや大型の幅広剝片を素材にして、表面側の側縁調整と同時にほとんどの例には裏面側にも側縁調整があるものである。これらの資料は、それ自身石器として使われた可能性もあるが、何らかの両面調整石器の未成品の可能性もある。なお、石質は207は玄武岩、208, 210, 213は硬質頁岩、209はチャート製で、あとは黒耀石製である。

搔 器 (217～252)

ここで搔器と分類したものには、大きく4種類のタイプがある。

一つは、217～222に示した縦形の例で、217, 221は横長剝片、他は縦長剝片を素材にして、素材の長軸の一端に丸味をもった刃部を作出したものである。この内、217は硬質頁岩を原材にし、下端縁に幅広の調整剝離が入っているが、刃部周辺の表裏面は著しく摩耗し光沢がある。218, 220, 221には長軸両側縁にも調整剝離ないし使用痕状の微細な剝離列があり、特に221は表面のほぼ全面に調整が及んでいる。

二つめは、223～227の5点で、素材の長軸両側縁に刃角の高い調整剝離を施し、長軸の一端はやや尖るように仕上げた例である。素材は、223～225は縦長剝片、226, 227は横長剝片である。なお、223, 224の原材は硬質頁岩で、224では図上部には柄部が作り出されている。225は焼けた資料。

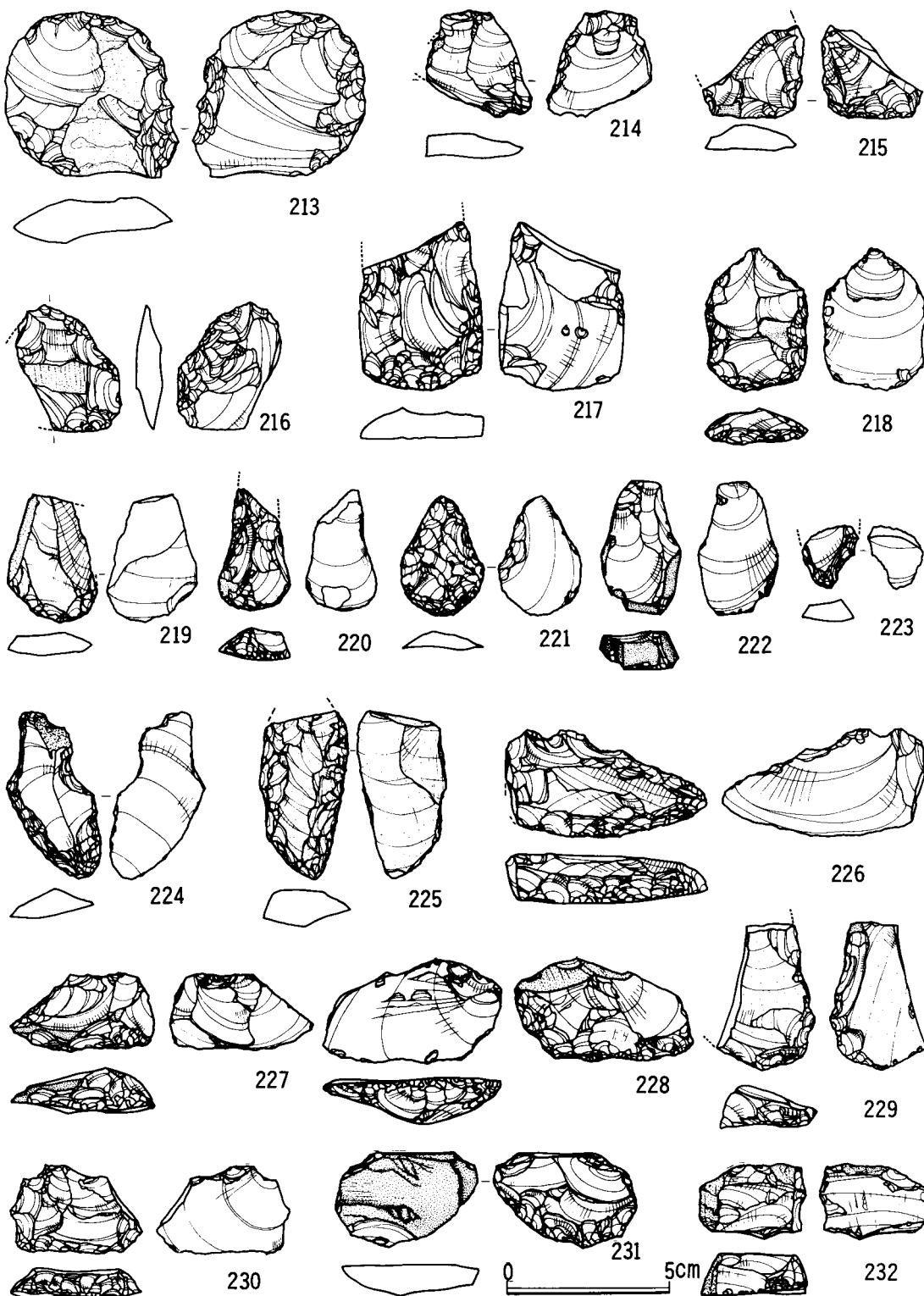
三つめは、228～235, 237～239の諸例で、横長ないし寸の短い幅広の剝片を素材にして、その長軸の一側縁を中心刃角の高い調整剝離があるものである。この内、228, 231は裏面側に調整剝離があるもの、229は焼けて破損したものである。

四つめは、236, 240～252の例で、小型の剝片を利用した円形ないし拇指状タイプのものである。236～244は円形のタイプで、240では裏面側にも一部調整があり、244は裏面側に調整が入ったものである。245～252は、拇指状ないし不定形のもので、249, 252は調整は裏面側に集中し、また252は焼けた資料である。

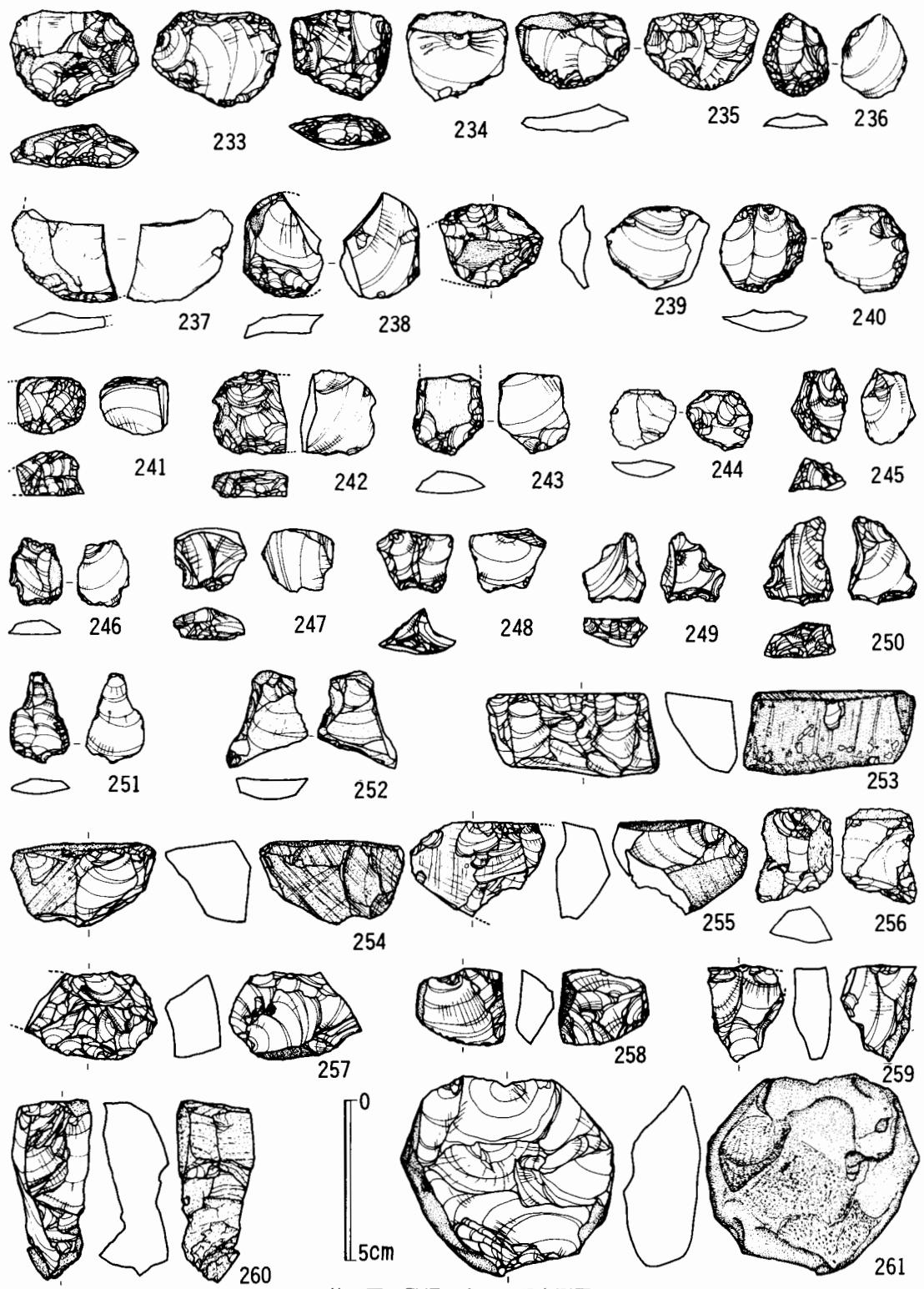
剝片石核 (253～265)

剝片石核としたものは、石材でみると253～260は黒耀石で、261～264は硬質頁岩、265はメノウ製である。

黒耀石製の資料のうち、253～255, 260の4点は角礫を素材にし、甲板面および裏面側には大きく原石面を残す例で、260は素材を縦に、他は横に利用したものである。なお、255は熱破碎で一部欠



第48図 発掘区出土石器実測図



第49図 発掘区出土石器実測図

損する。

硬質頁岩製のもののうち，261，262，264の3点は転礫を利用したもので，裏面および甲板面に原石面を幅広く残す。

楔形石器（266～271）

全例黒耀石である。266は，厚手の剝片を再利用したもので，表裏面の一部にもとの剝離面が残る。267～269は，薄手の剝片を用い，図示上下端面からの使用にともなう剝離がみられる。270，271は，ミス・ブローによってスポール状に剝取された剝片である。

有孔石製品（272，273）

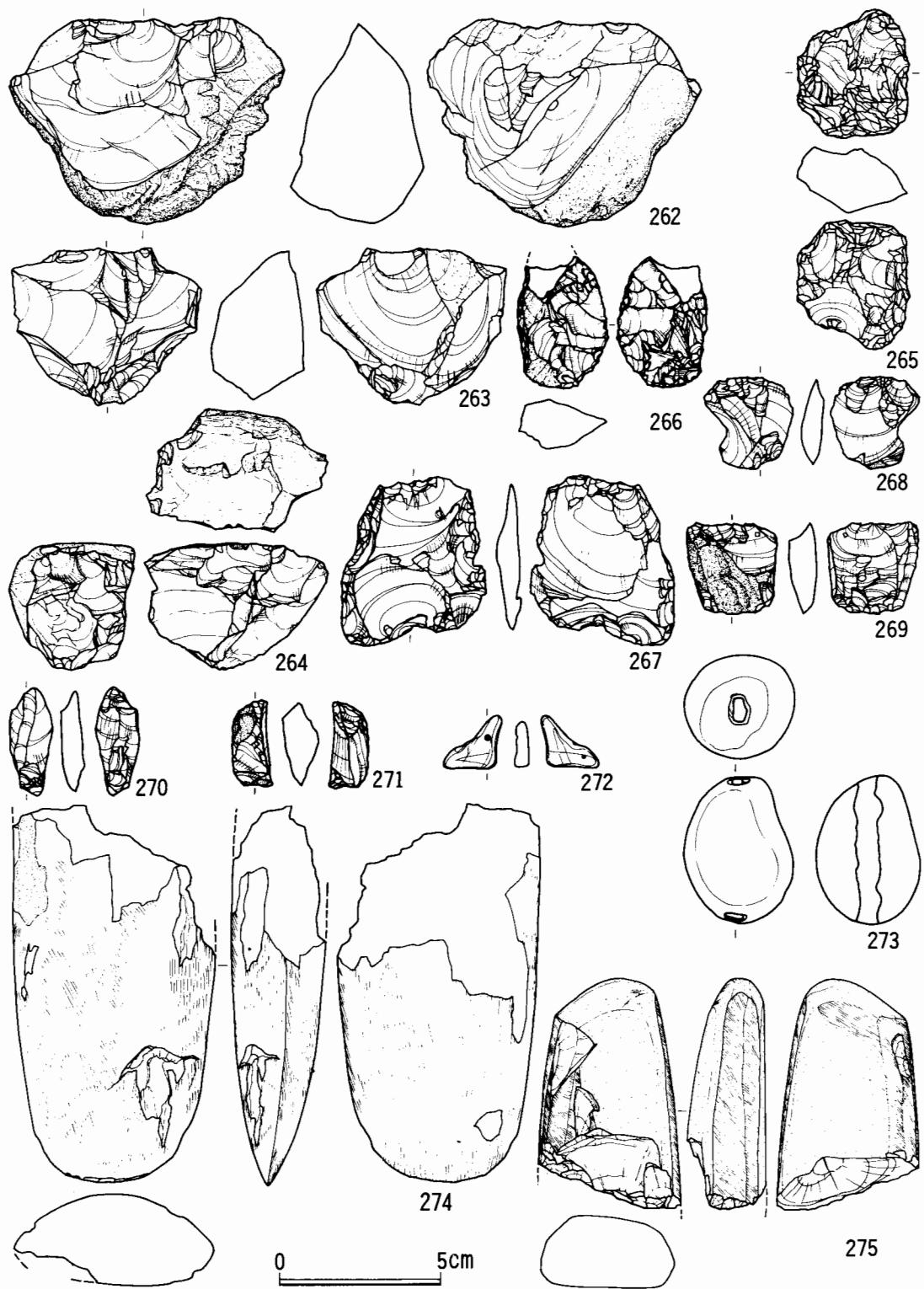
272は，薄緑色の滑岩製の小転礫で，研磨痕はみとめられないが，両面に穿孔途中の孔がある。273は，泥岩製で，いわゆる「虫喰石」に相当するもので，礫の中央に自然に開いたと考えられる不整四角形の孔が貫通する。特に調整はみとめられない。

石斧（274～306，368，370）

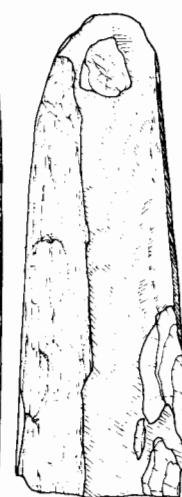
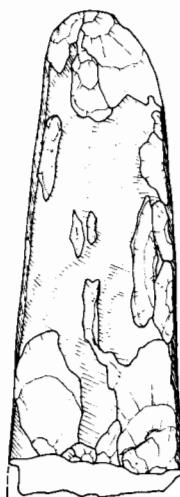
石斧としたものの内，274～289，291，292は完成品，290，293～306，368，370は未完成品である。なお，図示しなかったが完成品の小破片，未完成品は他に数多くある。

完成品の内，274～276は厚みのある資料で，274はほぼ全面研磨し，刃部は両刃的である。275は棒状の転礫を原材にして，一部側縁調整した後，側縁を中心とし研磨したもので，表裏面は原石面を軽く研磨した程度である。図下部で欠損後表面側に再調整剝離を入れている。276は，棒状の剝離調整した素材を敲打調整したもので刃部は欠損する。277～286，288～289，291，292は板状のやや薄手の例で，277は扁平な板状の転礫を原材にして，側縁を剝離調整したのち研磨したもの。278は，板状に剝離された剝片を素材にし，入念な側縁調整を入れ，また刃部は煤けた状態で，一部に細かいひび割れが認められるところから，この部分は加熱された可能性がある。279，280，283は，剝離調整したあと全面研磨したもので，刃部端には279では使用痕，280では使用に伴う破碎が認められ，283では再研磨によって刃部下端縁が平坦になっている。281は，板状転礫か剝片を利用したもの。282は，扁平狭長の片刃石斧の刃部破片。284は，側面に一部節理面が残るがほぼ全面研磨した例で，刃部端には使用に伴う破碎がある。285は，原石面が残る剝片を素材にした扁平狭長タイプの破片である。286，288，289は，ほぼ全面入念な研磨が認められる例で，刃部端には286では破碎痕，288では再研磨による研ぎ出し面，289では使用痕が残る。291は，厚手の石斧の板状に剥脱（剝離）した資料を再研磨したもの，292は板状の転礫の一部を研磨しただけの資料である。287は，やや厚手の狭長な石斧である。

未完成品のうち，290は板状の転礫の一部に研磨を入れているが，刃部は形成されていない。また，加熱によるひび割れ，黒班がある。293は剝離調整し側面を研磨しただけのもの，294は破損した石斧に再調整剝離を入れたもの，295は板状転礫を剝離調整後側面と刃部の片面だけを研磨したもの，296は剝離調整のみで研磨痕がないもの，297は擦切石斧の端部の破片，298は剝離調整のみで器厚が減じられていないところから途中で廃棄されたものと考えられる。299は，板状剝離の素材をごく一部研磨しただけのもの，300は板状の転礫を加熱し火バネ剝離したものを，敲打整形し，側縁の一部



第50図 発掘区出土石器実測図



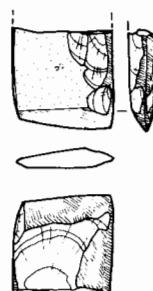
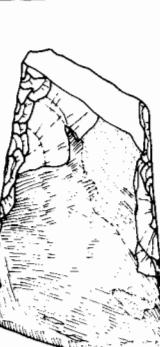
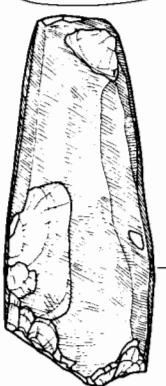
276

277



278

279



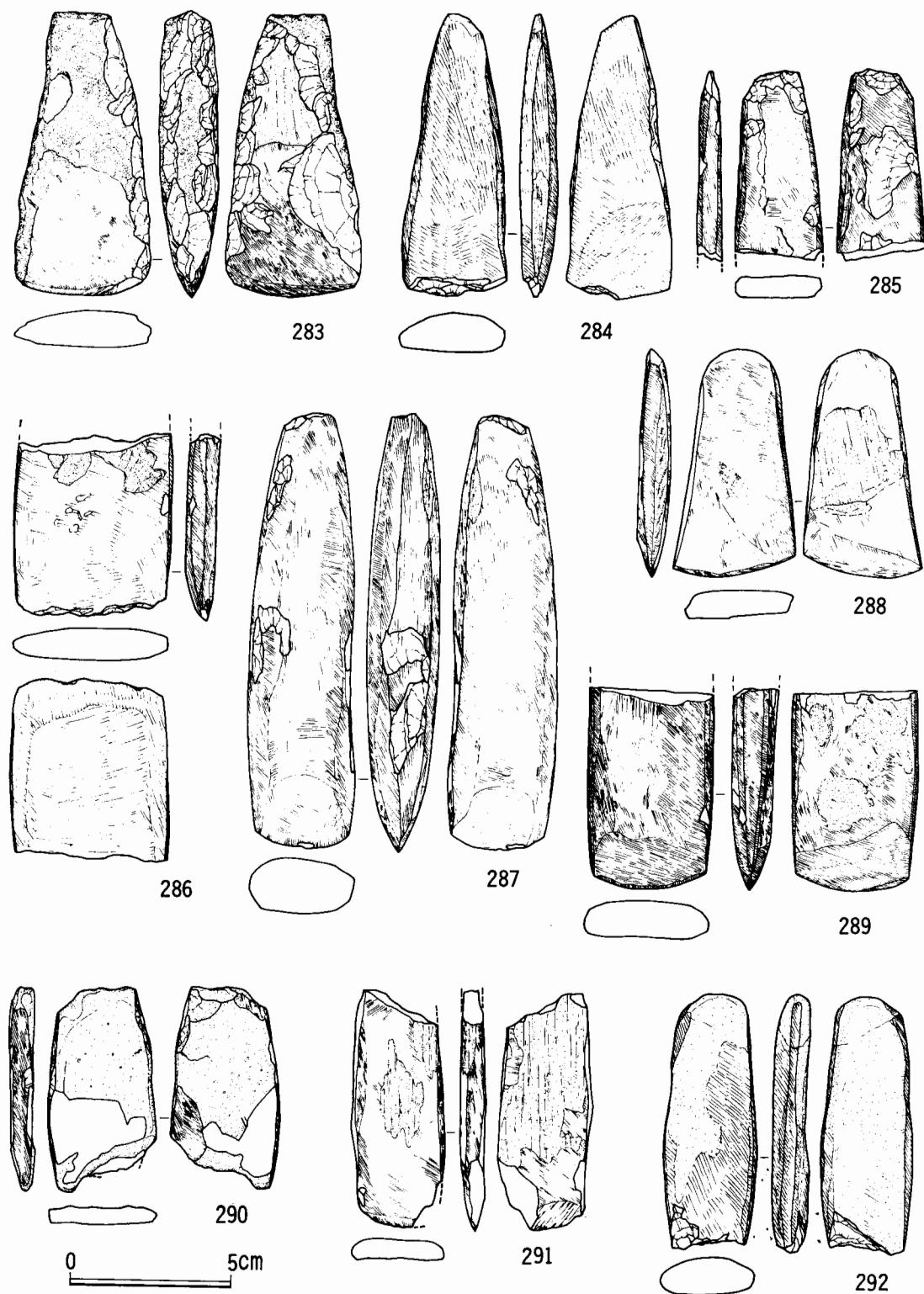
280

281

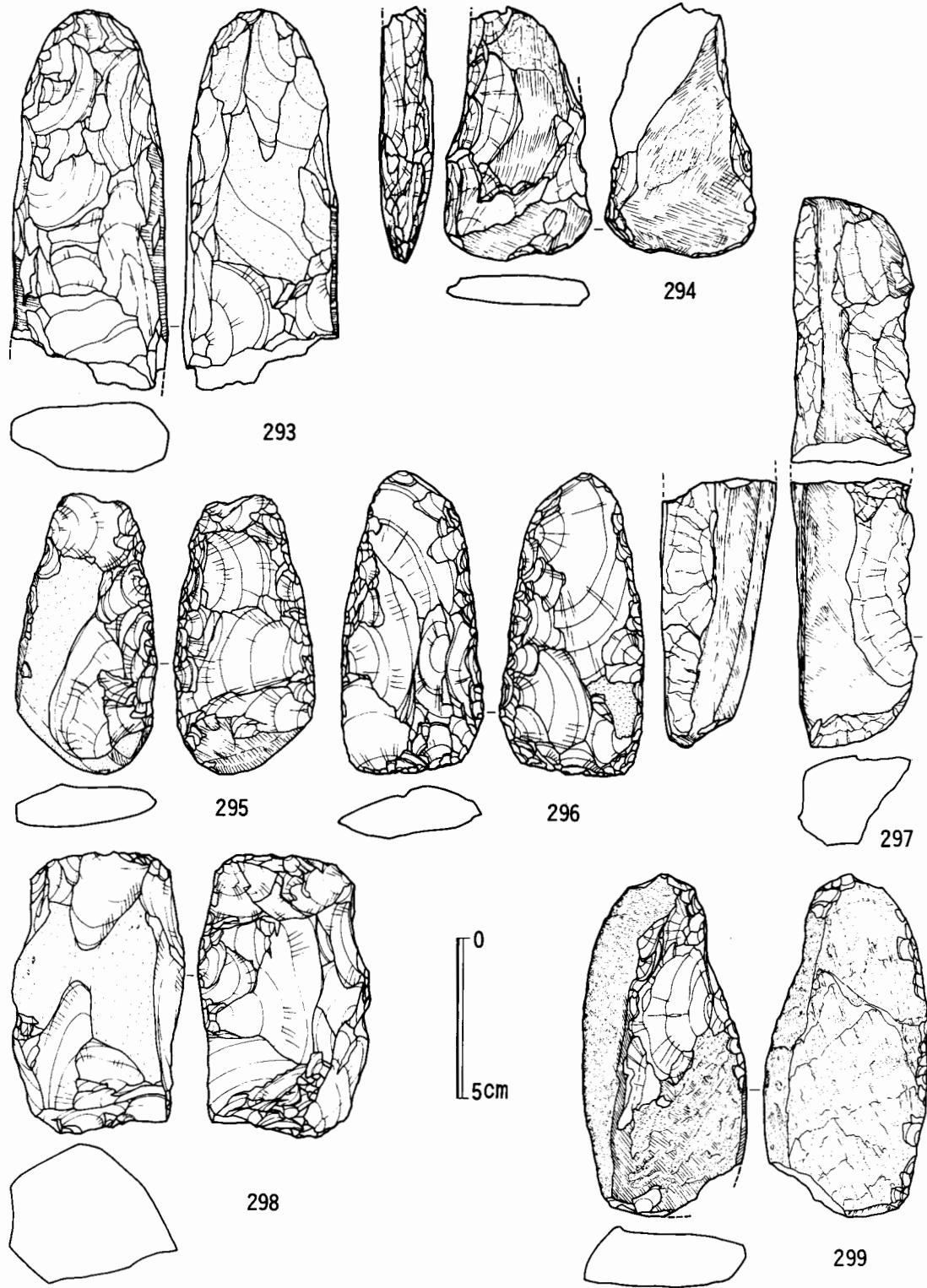
282

0 5cm

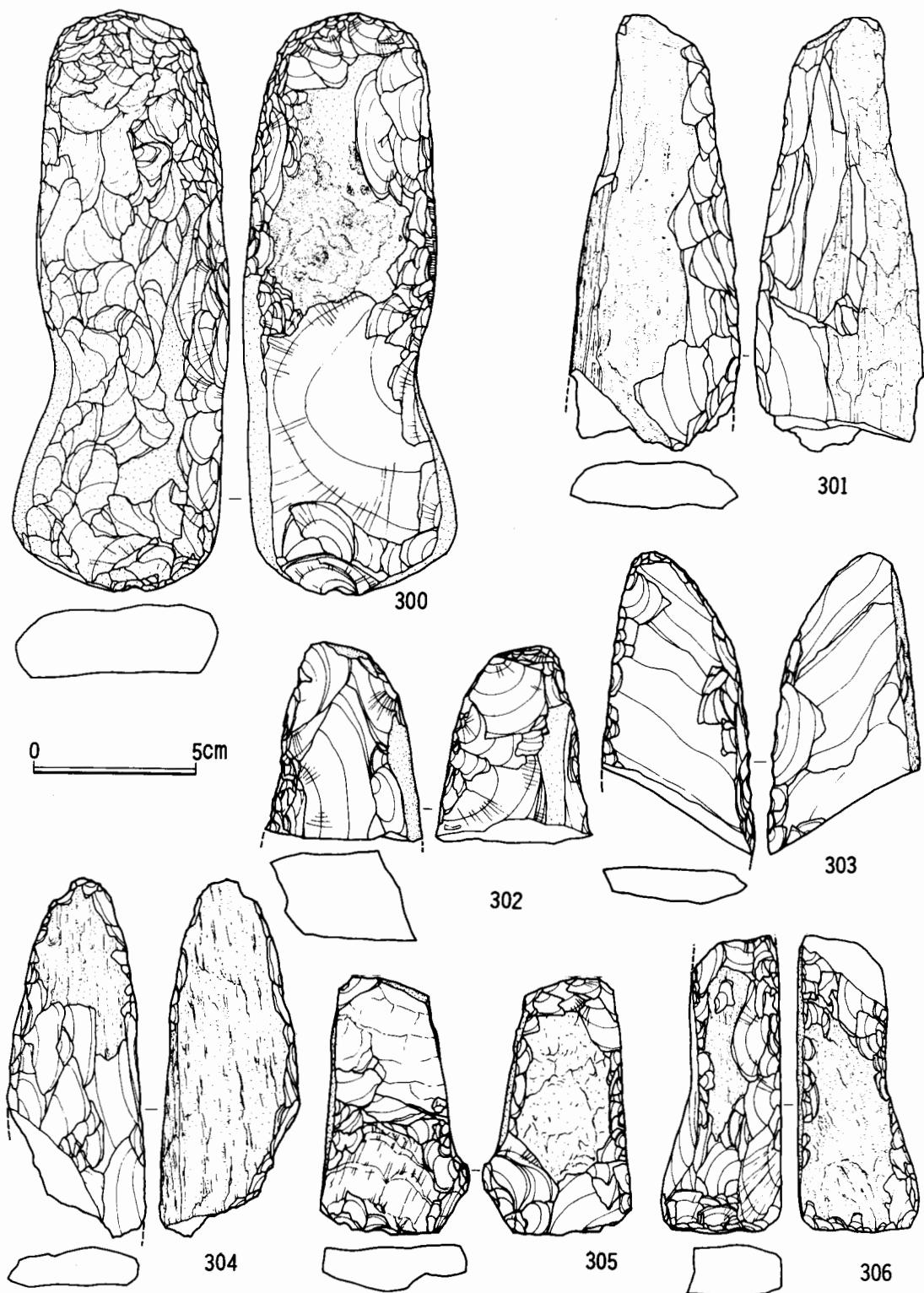
第51図 発掘区出土石器実測図



第52図 発掘区出土石器実測図



第53図 発掘区出土石器実測図



第54図 発掘区出土石器実測図

を研磨したもの、301～306は剥離調整しただけで廃棄されたものである。368は、各所から明瞭な加撃点を残す比較的大きな剥片を取っており、370では裏面右側面の一部に研磨痕がある。

砥 石 (307～319)

307～312は、砂岩製の砥石である。いずれも長軸にそった四面を利用したものが多く、その面はゆるく凹んでいる。なお、309は砥面の面体調整をするため剥離調整する途中で大きく欠損し廃棄された資料である。313は、凝灰岩製で、図示両面がかなり利用され、砥面が大きく凹んだ例であるが、さらに側縁部には敲打にともなうと考えられる剥離痕、表裏面の中央付近には細かい傷の集合体からなる敲打痕がある。316～318は、砥面がほぼ平坦な例で、317の表裏面にはごく浅い敲打痕が上下に認められる。319は、いわゆる「石鋸」に相当し図示下縁がV字状をなす。なお、上端面は欠損後に再利用（研磨）されている。

擦 石 (320～354, 356～359)

320～354は、断面三角形の狭い稜を擦面とした擦石である。

本遺跡の資料は、一般的には擦面両端部の敲打痕はあまり認められず、かわりに擦面上部の両側面に原石面を軽く擦った擦面があるものが多い。また、幾つかの例には擦面の角を敲打したことによる剥離痕が認められる。なお、321の上部縁にみられる剥離痕は剥脱にともなうものであり、330の下図面の中央付近には敲打痕がある。331の下図面の擦面は入念なものであり、また331, 333では上端縁も軽く擦られている。338は、二つの稜に擦面があるものの、348の両側面には浅い敲打痕がある。354は、断面楕円形状の小型の転礫を利用したもので、上部縁も擦られている。なお、346, 354は焼けて一部に黒班がある。

356～359は、板状の転礫を利用し、主にその両面を擦面としたものである。356は、擦面は原石面を軽く擦った程度のもので、また両面の下部には深い敲打痕がある。357は、厚手の礫を利用し、両面に擦面があるもの、358は片面の一部に擦面があるもの、359は両面の一部に擦面があると同時に、上下端縁が敲打され、特に下端縁ではその面は平坦になっている。

石 錘 (355)

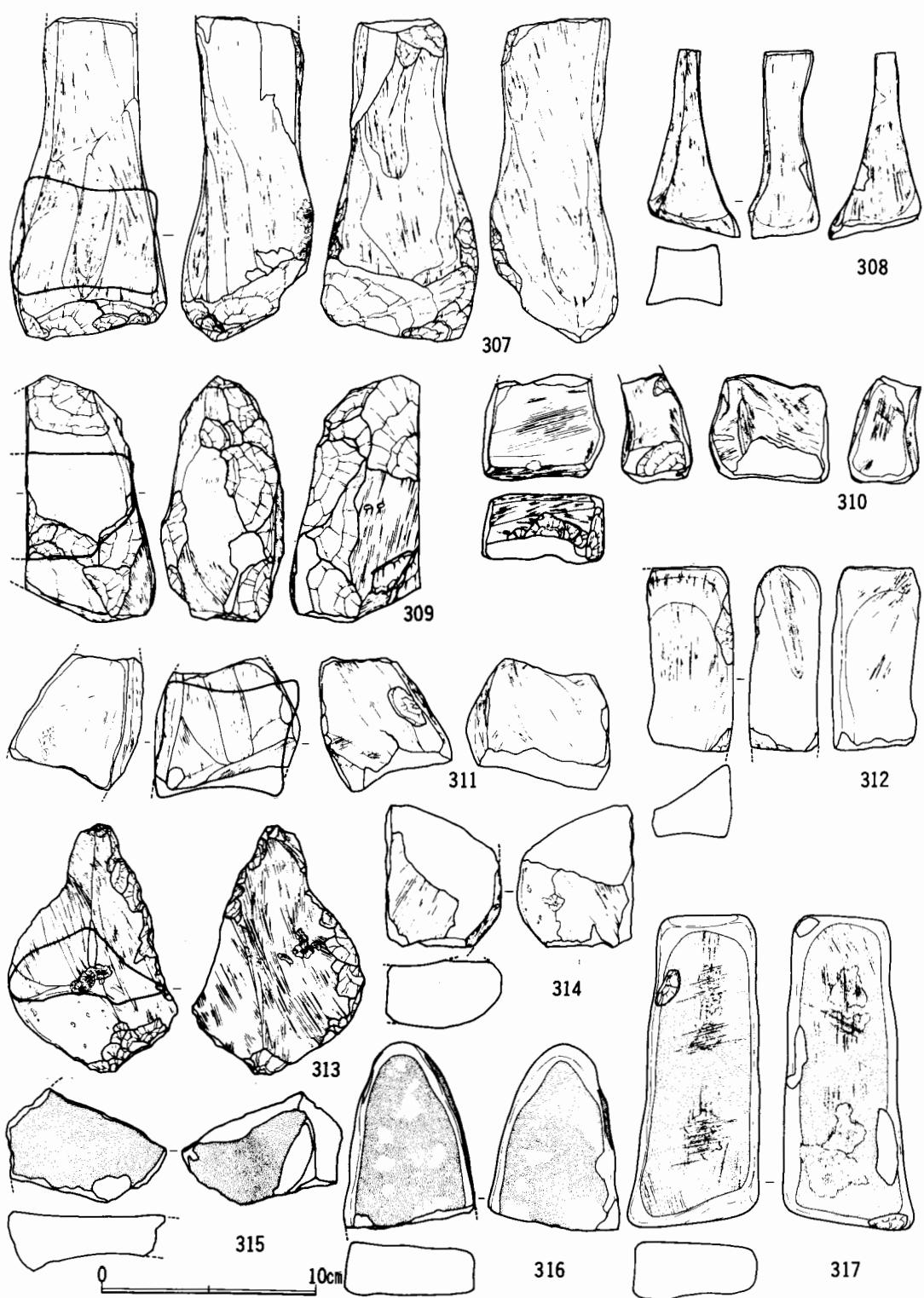
355は、扁平の平面形は不整卵形の転礫を利用し、その上下端縁中央付近と左右端縁中央付近に抉り状の剥離を入れた資料である。大きさは、 $11.5 \times 14.1\text{cm}$ とやや大きく、重量は550gある。

敲 石 (360～367, 369, 371～391)

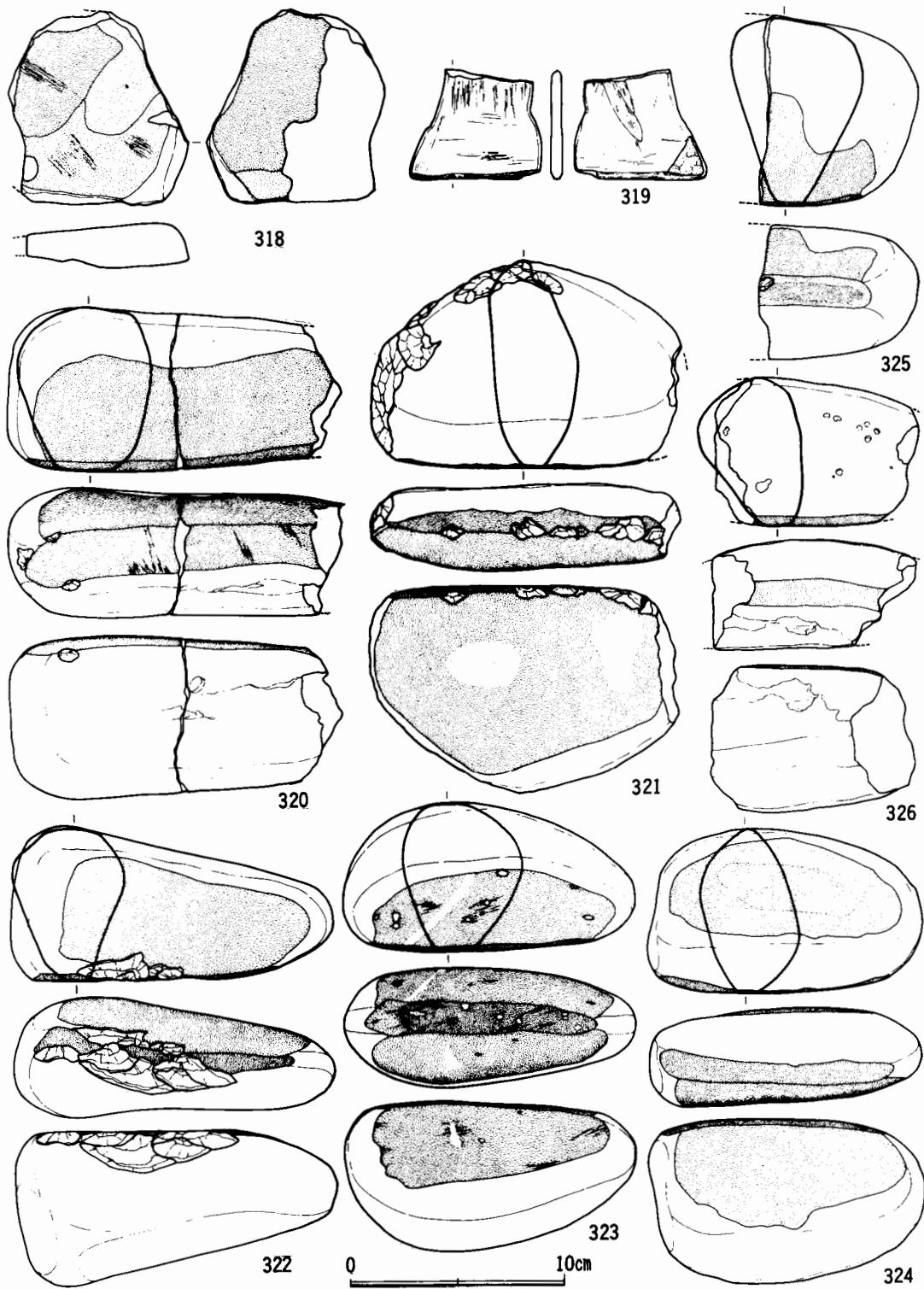
360～367, 369, 371, 372, 380は、やや縦長の板状ないし棒状の転礫を用い、その上下端縁ないし側縁を敲打面として利用した例である。繰り返し利用された敲打面は平坦になっている例が多い。この内、360は敲打にともなう剥離痕があるもの、361は側縁の一部に敲打面があるもの、369は幅広い下端面に敲打痕があり、その衝撃にともなう剥離痕が数多く認められる。372の表面には加熱による火バネ（剥脱面）が隨所にある。なお、380の一部には黒班がある。

373は、泥岩製の拳大の転礫の表面に散発的にキズ状の敲打痕があるものである。

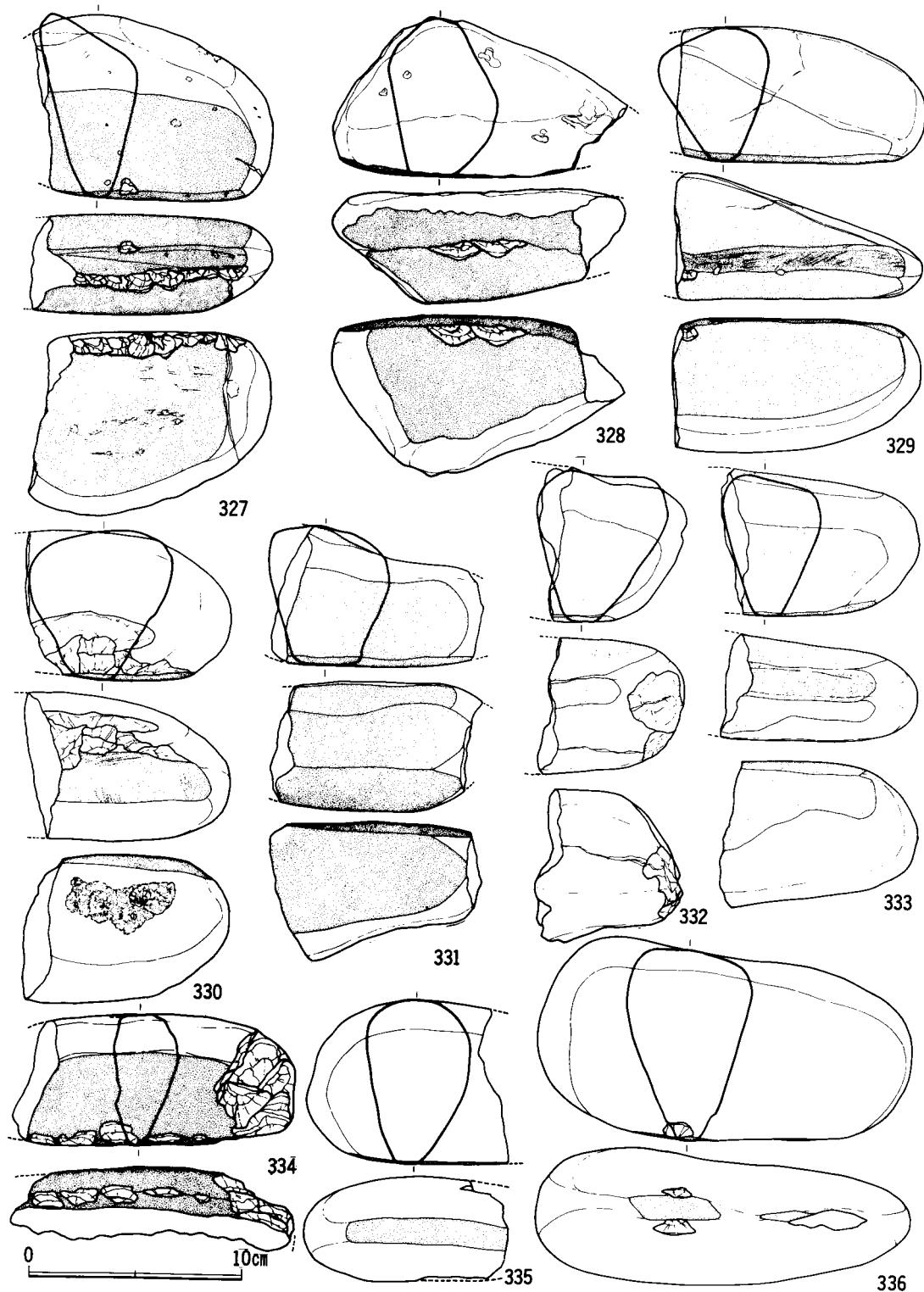
374～379, 381, 391は、比較的扁平で平面形が楕円形ないし棒状の転礫を用い、その平坦な両面に細かなキズの集合体からなる敲打痕が認められる例で、上下端縁ないし側縁にも敲打痕があるも



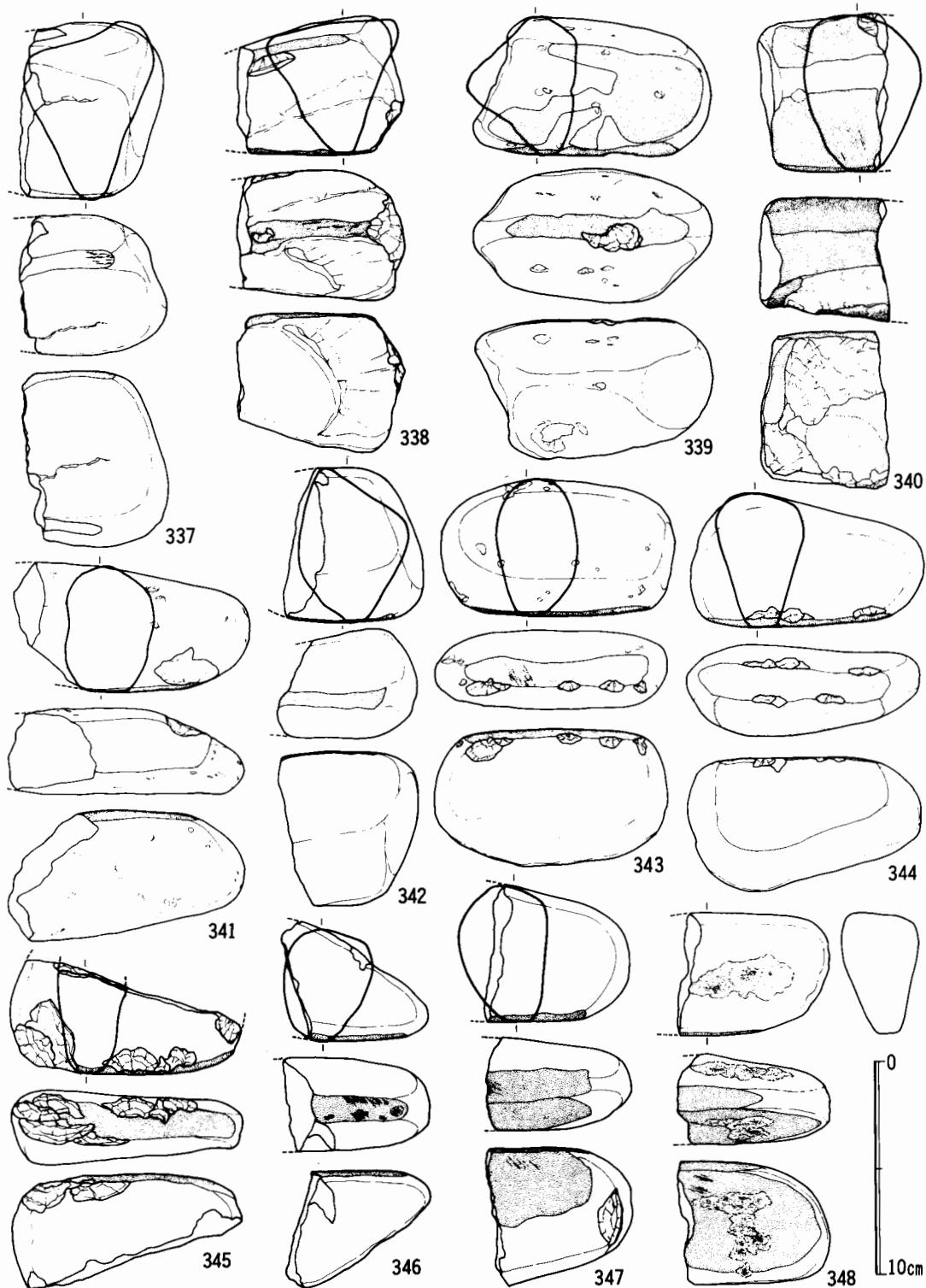
第55図 発掘区出土石器実測図



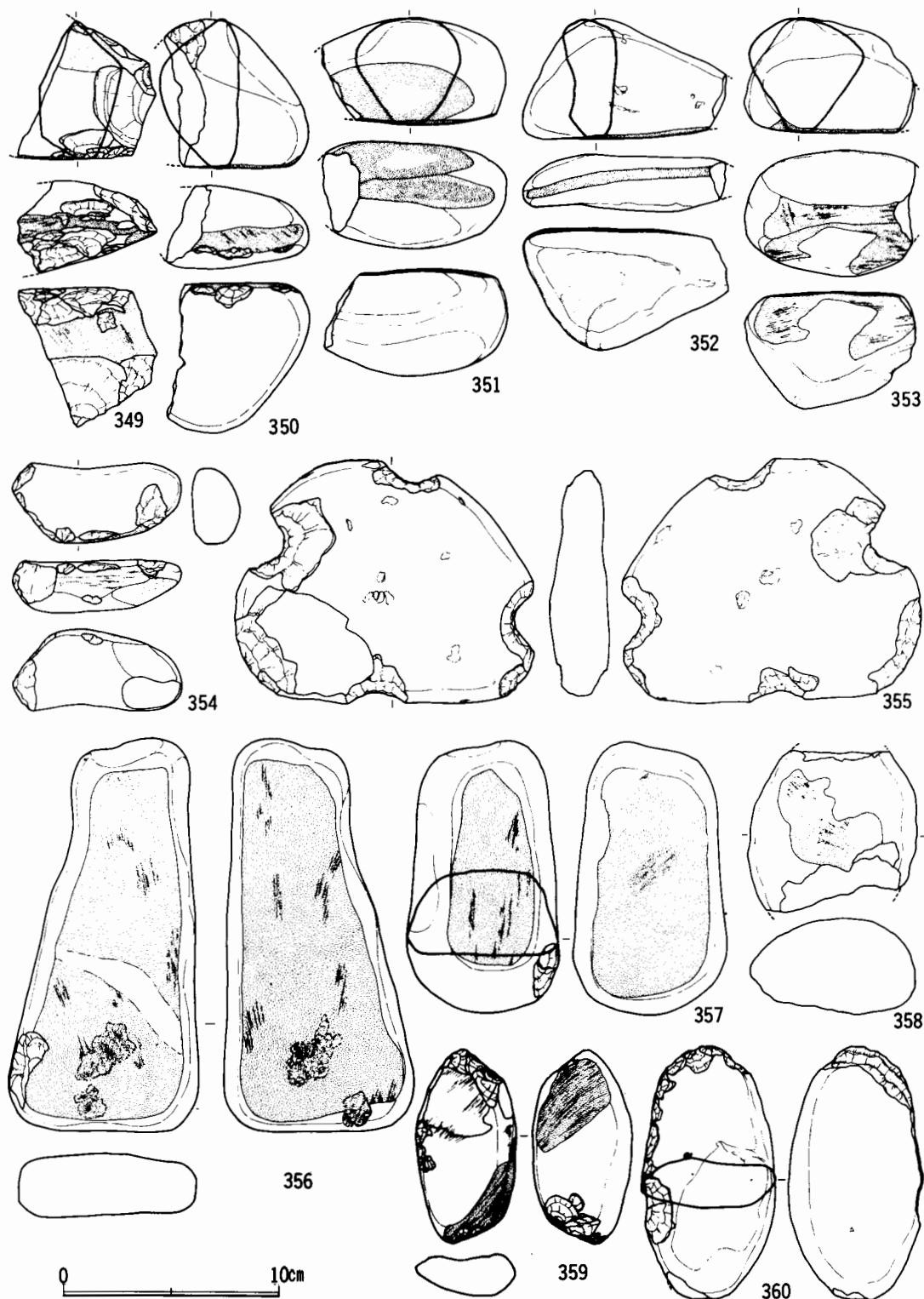
第56図 発掘区出土石器実測図



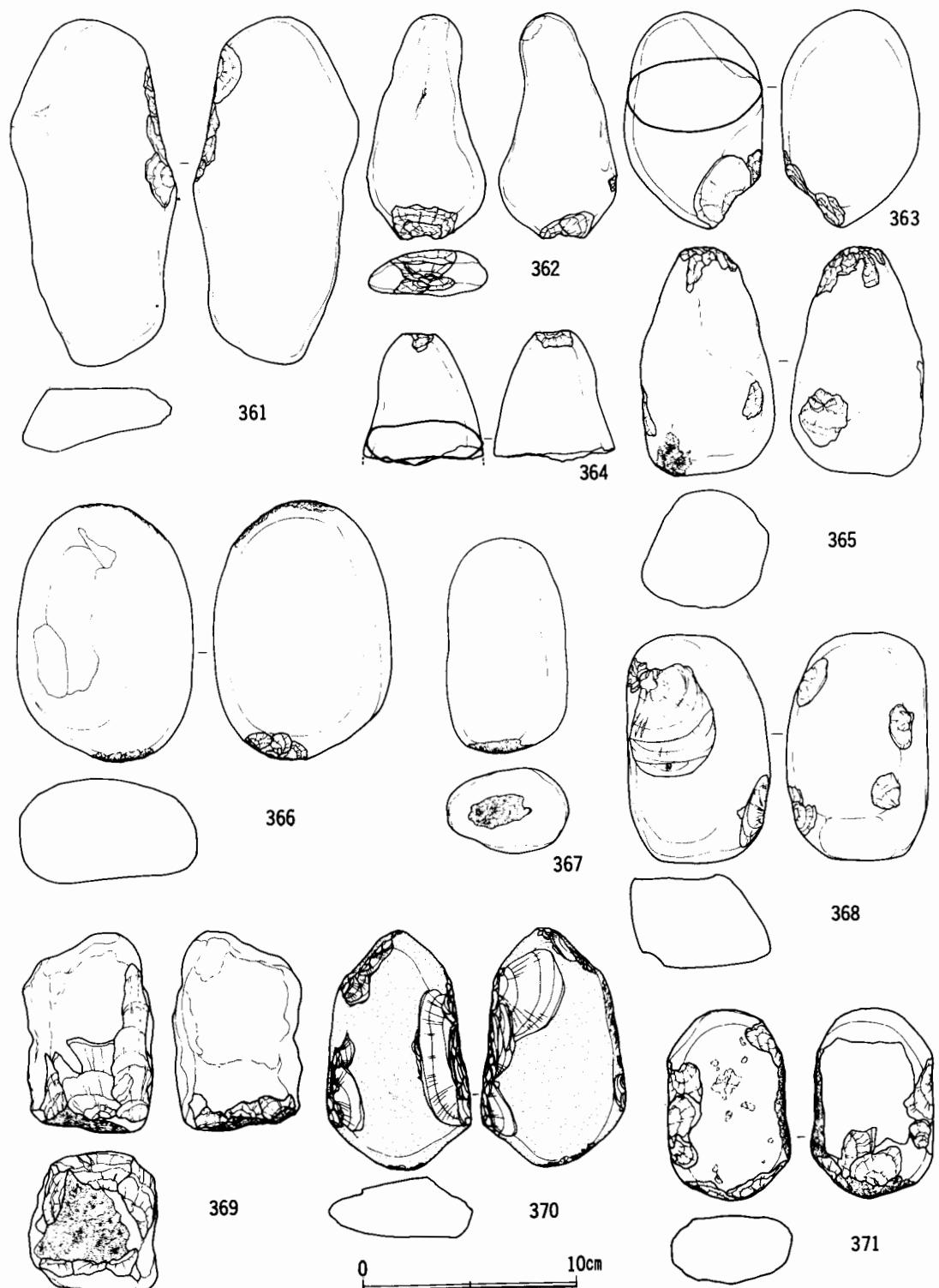
第57図 発掘区出土石器実測図



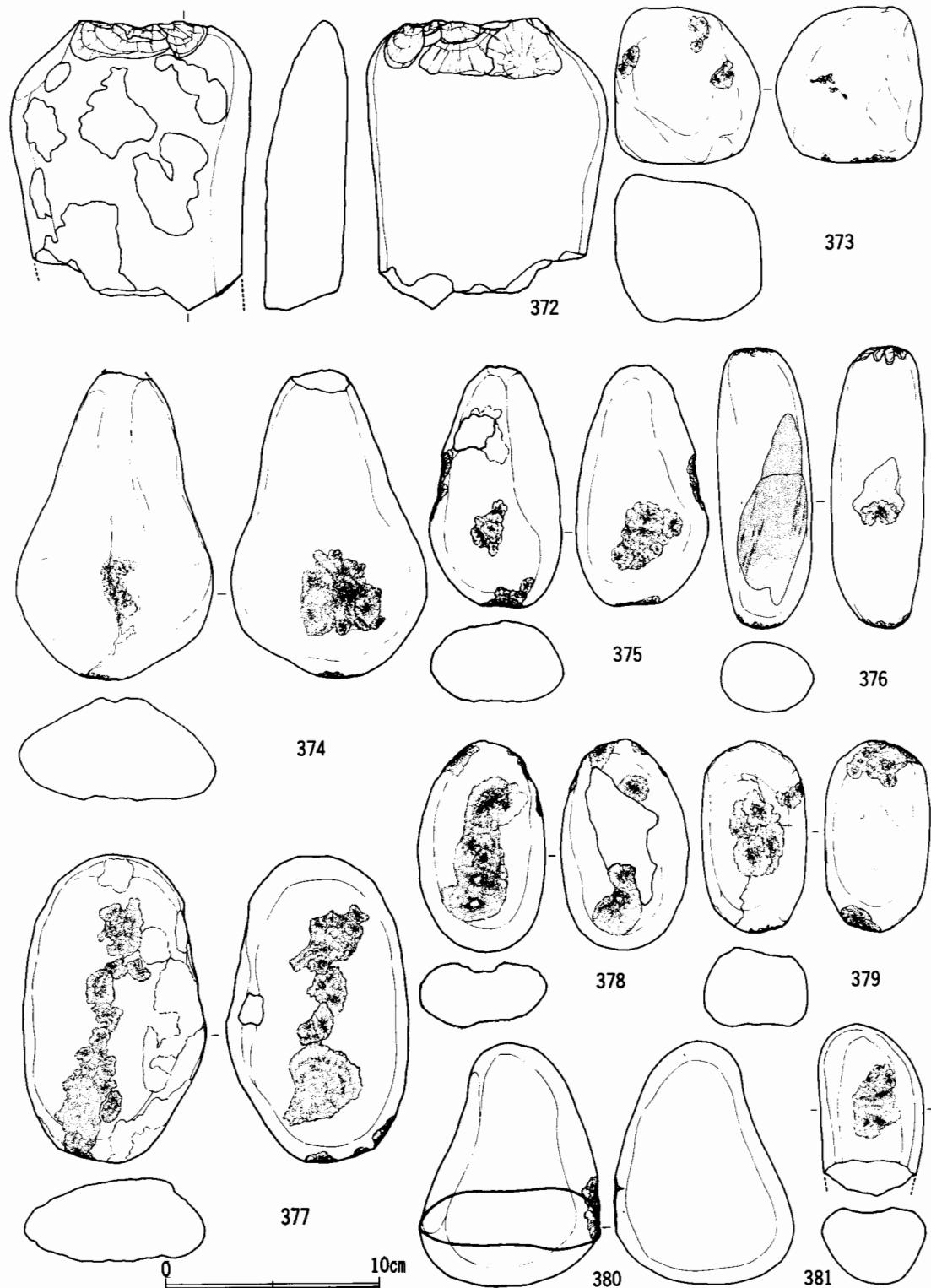
第58図 発掘区出土石器実測図



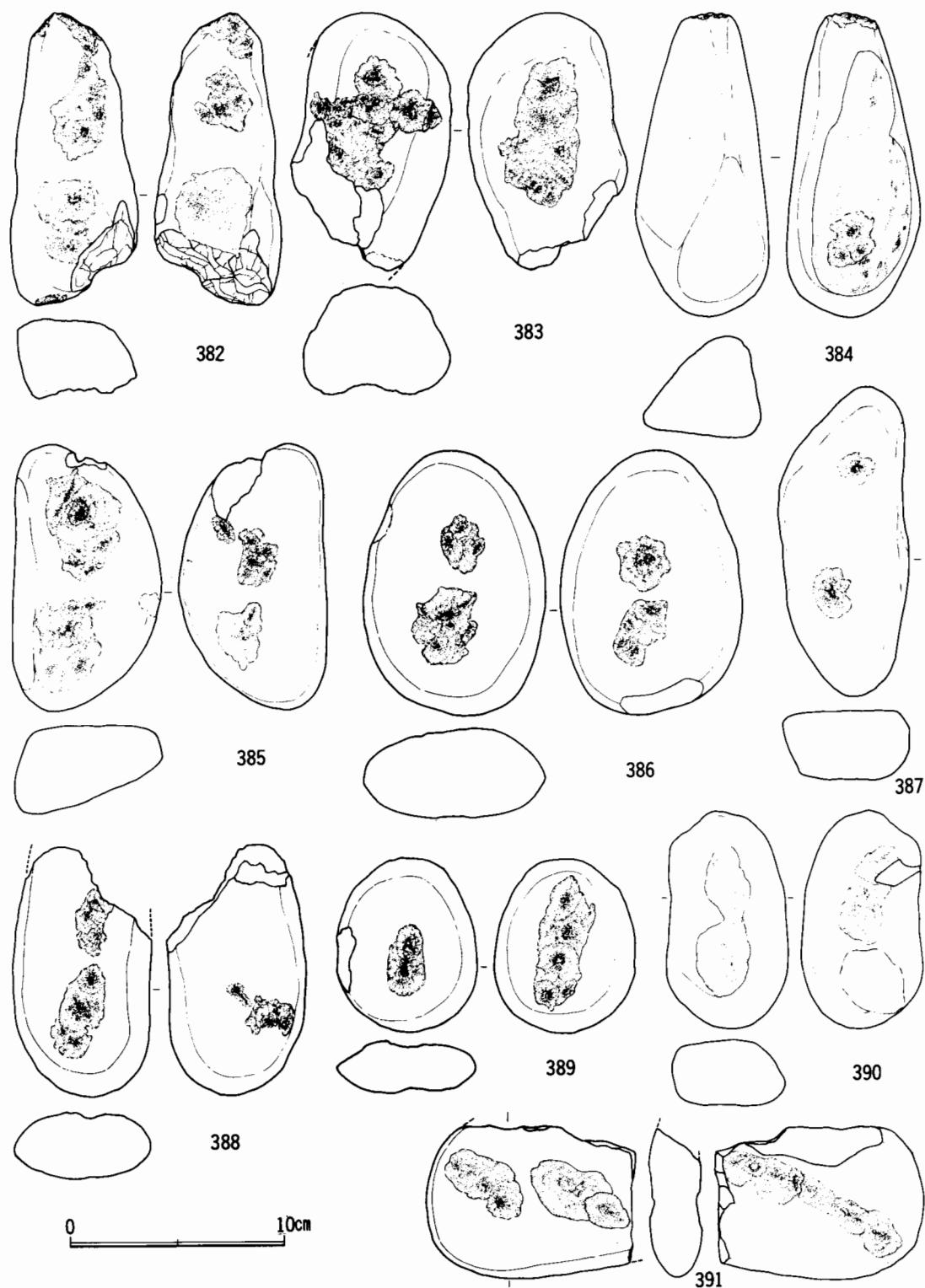
第59図 発掘区出土石器実測図



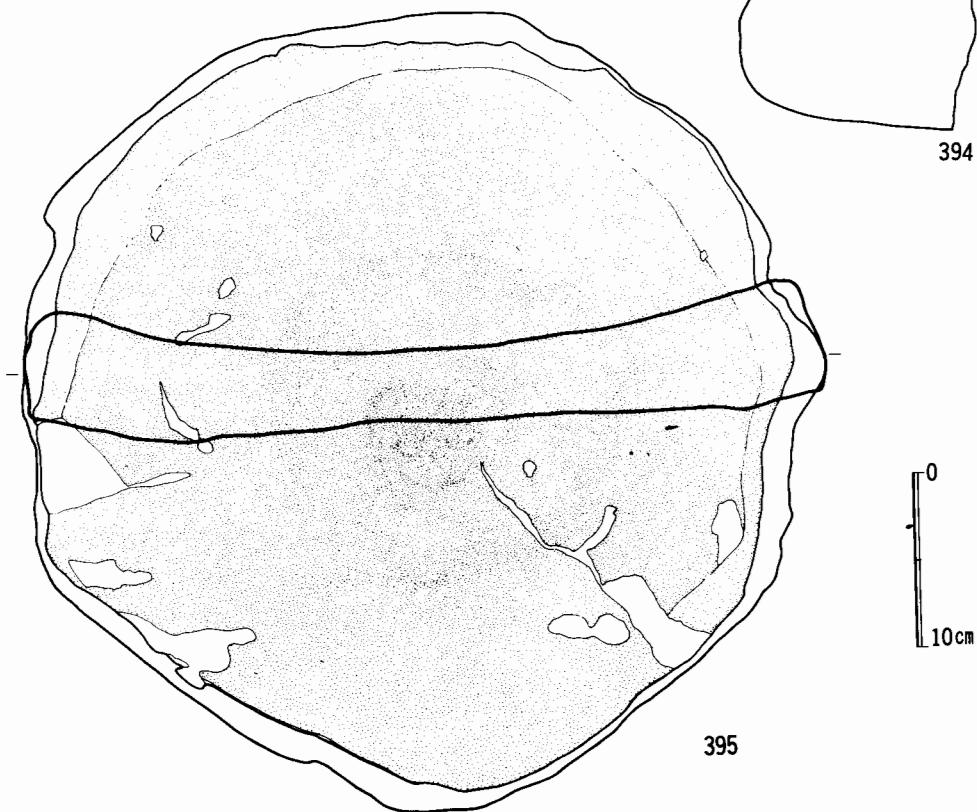
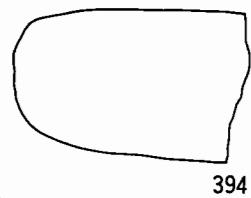
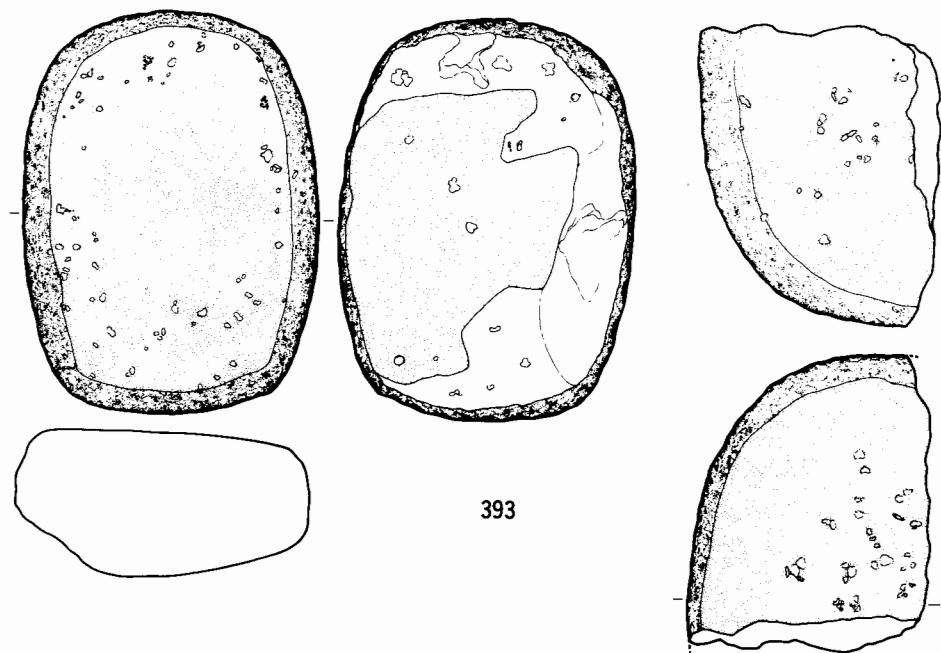
第60図 発掘区出土石器実測図



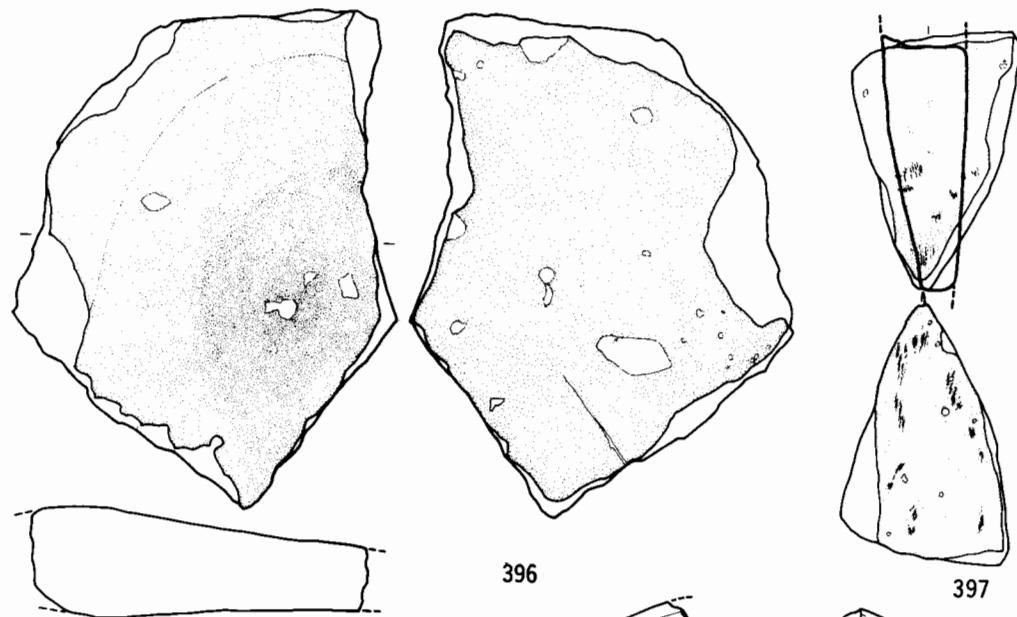
第61図 発掘区出土石器実測図



第62図 発掘区出土石器実測図



第63図 発掘区出土石器実測図

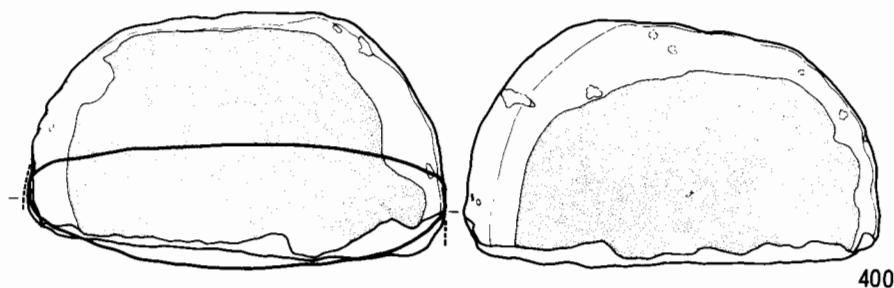


396

397

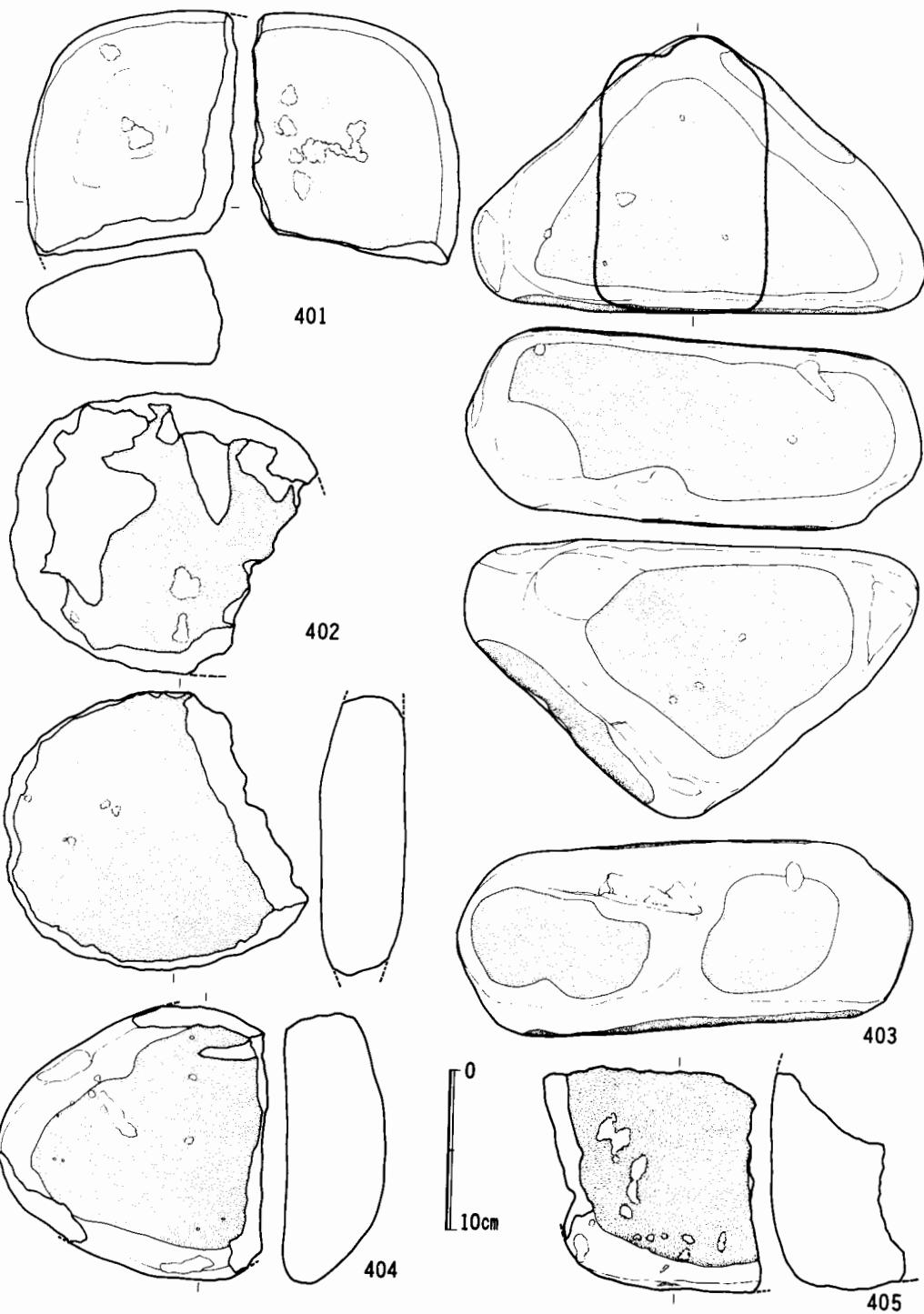
398

399

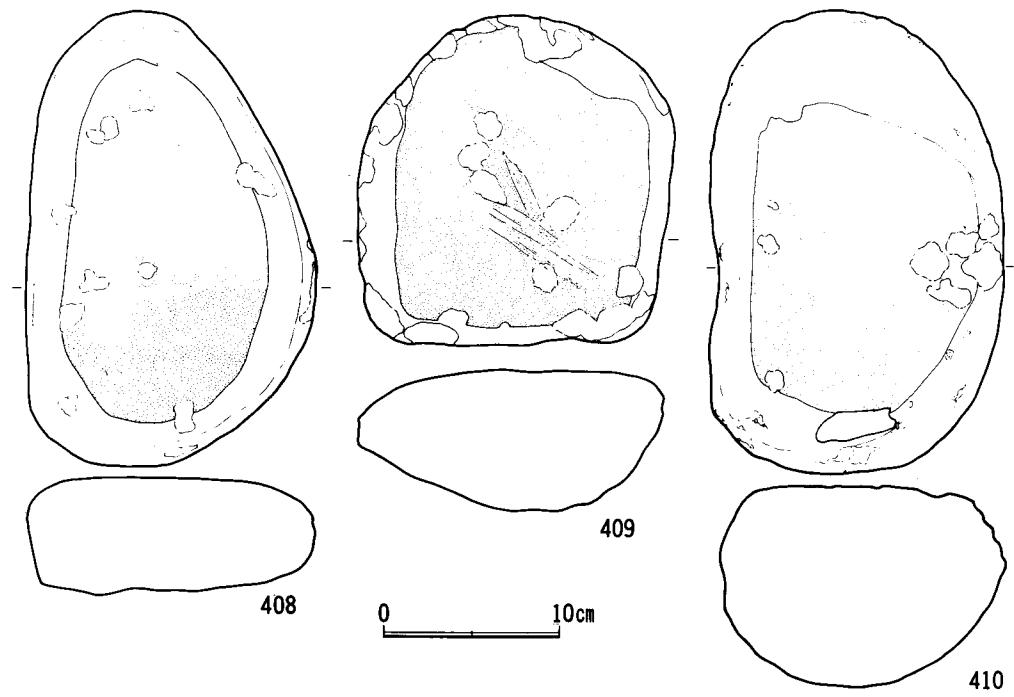
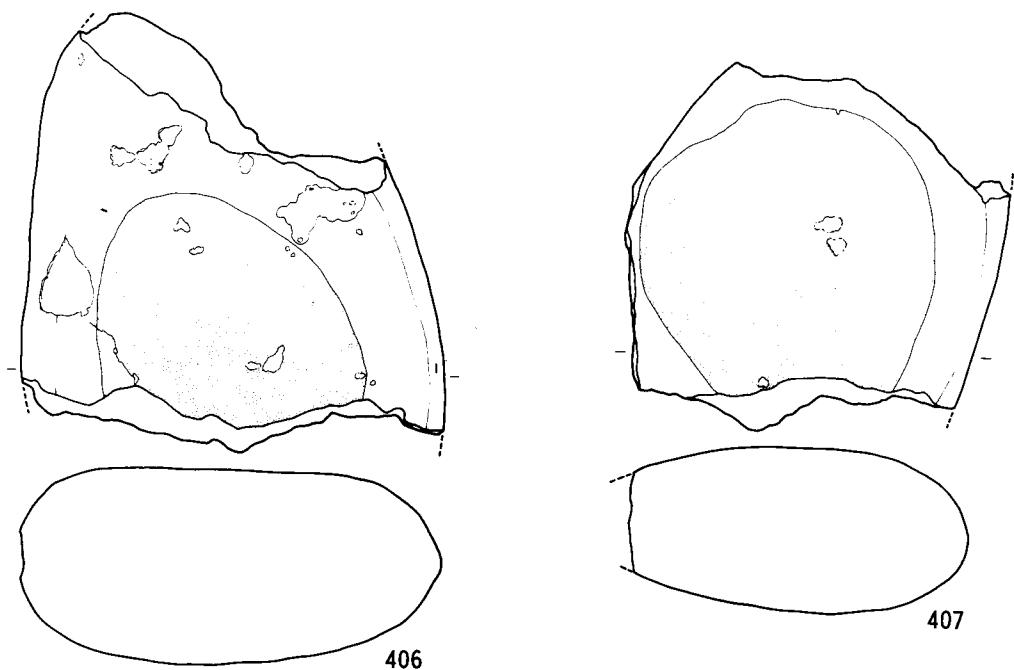


400

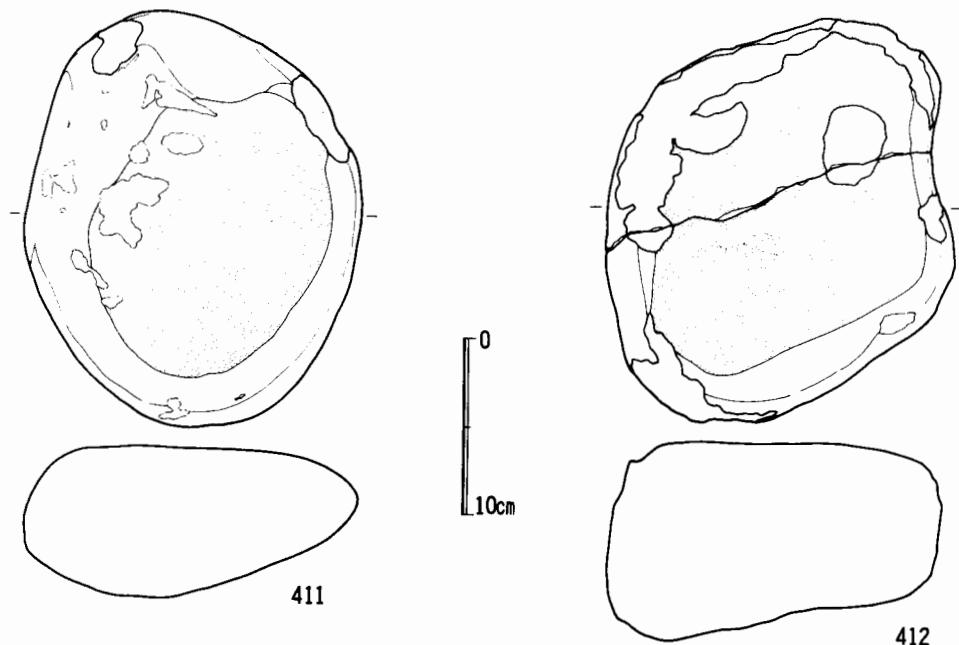
第64図 発掘区出土石器実測図



第65図 発掘区出土石器実測図



第66図 発掘区出土石器実測図



第67図 発掘区出土石器実測図

のもある。この中で、376には上下端縁に繰り返し利用した敲打痕があると同時に、両平坦面の一部に擦面が認められる。また、379の一部に黒班が、384の裏面に擦面がある。

石皿 (393~412)

ここで「石皿」としたものは、大型の板状の転礫を利用し、その平坦面に擦面がある資料を一括したものである。

393, 394, 401, 405は、やや厚手の原石を用い側面を敲打整形し、表面側に図示した平坦面を主な使用面とし、その面はほぼ平坦な例である。裏面は一般的には床ずれ状に部分的に擦られた面になっている。395~397は、やや薄手の板状の素材を用いたものである。395は、 $45.3 \times 45.3\text{cm}$ の大きさの大型品で、図示面を使用面とし、その面体はゆるく凹んでいる。側面は特に調整ではなく、一部に剥脱した面があるだけである。裏面は床ずれ状に突出した部分だけ軽く擦られた状態になっている。396は、両面を使用面としたもの、397は裏面（下図面）は表面に比べ原石面が軽く擦られた程度の面である。398~400, 402, 404, 406~412の諸例は、平面形が不整橍円形の中型の転礫を利用し、特に側面を含めて調整をしないで、その片面ないし両平坦面（原石面）を軽く擦った程度の資料である。この中で、399は擦面として表現した部分は平滑さがあまりないところから、単なる転礫によるローリングしただけの面の可能性もある。412も全体に黒色の物質が付着した資料であるが、石質が軟らかく擦面の状態は明確ではなく、また擦痕状に表現した部分も後天的なキズである可能性もある。さらに、410の擦面とした部分は面体自身はがたがたの面であるが全体として平坦になっているところから、繰り返しの敲打による整形面の可能性もある。なお、404の裏面の一部には黒班

が認められ、409では側面に火バネ状の剥脱が隨所にある。403は、厚手の平面不整三角形の転礫を用い、両平坦面および三側面が擦面として利用されている特異な例である。特に両平坦面の一部は入念な擦面である。

(上野秀一)

〔引用文献〕

宇野修平・上野秀一 1975 「角二山遺跡」『日本の旧石器文化』 2

第6章 結語

本遺跡の発掘調査によって、竪穴住居跡2軒、土壙墓と考えられるピット79個、陥し穴と考えられる溝状を呈するいわゆるTピット8個を発見した。

2軒の竪穴住居跡のうち1軒は、傾斜地に立地するため半分程の壁より検出されなかつたが楕円形状プランに石囲い炉を有したものであった。また、1軒は小型の楕円形プランで床面に焼土（地床炉）のみ検出したものである。

前者は床面、柱穴内に若干の土器が発見されており、縄文時代晚期の終末から続縄文時代初頭と考えられる。

後者は、若干の遺物から縄文時代中期後半の「トコロ6類土器」かと推定される。

縄文時代晚期～続縄文時代にかけての竪穴住居跡の発見例は、札幌市内においては、T466遺跡にもある。縄文時代中期に属する「トコロ6類土器」の竪穴住居跡の発見例は比較的多くみられており、本遺跡の例と大差ない状態である。

69個検出したピット群は、大別して3グループになり、集中して分布しているようである。1つは、南東向の傾斜面、1つは東北東向きの傾斜地で、さらに発掘区最北東端の南東向きの緩斜面である。前2者は、現在は排水路をはさんで直交するように向き合うが、かつては、沢地をはさんで向き合っていたものと考えられる。また最北東端のグループは約150m²の地区に25・6個まとまって検出しておらず、排水路の北東側に集中分布するグループと未発掘調査区域（現状保存分約3,300m²）内に連続してピットがあるものと推定される。

さて、ピット内に土器、石器等を検出した例は非常に少く5個よりない、全体の7%程である。大型の礫が数個から十数個入れられたものは21個あり、全体の30%近くに達する。

他のピットには、覆土層中に若干の土器片、石片等が混る程度で人為的に遺物を入れたものは見られない状況にある。

しかし、土器・石器等が壙底面にあるもの、礫を入れるもの、全く物が検出されないピットの3者の埋土の状況に差位はみられない。このことはほとんどが同一の使用用途であった事を示すものである。

これらのピット群は、伴出土器より考えそのほとんどが縄文時代晚期から続縄文時代初頭にかけての土壙墓であろう。この時期の土壙墓群は、昭和56年度に発掘調査した今回の調査区域の道々西野一白石線の北側においても検出している。立地も川に向けた傾斜面であり、今回の土壙墓群と連りを有したものと考えられる。

8個検出したTピットは、遺物が少く25%の発掘調査区域より発見したものである。第3、4、6、7号Tピットの4個は、10～12m程の間隔をおいて、排水路（かつての沢地）に平行するよう

並列して並ぶ。他は単独に近い状況であるが、発掘区域外もあるため不明であった。

検出した土器群は、縄文時代早期の「東釧路III式土器」をはじめ、縄文時代中期の「円筒上層系土器」「平岸天神山式土器」「北筒式土器」「余市式土器」、縄文時代後期の「手稻砂山式土器」、中葉の集合沈線文を特徴とする「手稻式土器」、縄文時代晚期の「大洞系土器」、晩期末から続縄文初頭にかけての「タンネトウL式土器」、続縄文時代の「恵山式土器、後北式土器」が得られた。時期で欠如しているのは、縄文時代前期のみという非常に幅広い時期である。

中でも縄文時代晩期末から続縄文初頭に位置する土器群が最も多く得られているが、この時期の土器に限って器面が摩滅し荒れている例が多いという特徴がある。

石器は、不確実ながらも2・3点の旧石器時代に属するかと考えられる石器を検出している。1点のみ確実に基盤の黄褐色ローム層中より検出したものだが、他は他の遺物と混在状況で検出されている。

石器群は、多く多種多様であるがほとんどが層位的裏付を有せず、どの土器群に伴出したかは不明であった。

尚、本遺跡の、道々西野一白石線に沿う山林部分約3,300m²について、現状保存する事が予定されている。中学校の敷地内であり、学校教育の中で埋蔵文化財の保護、保存という事について、良好な教材として活用してもらいたい。

第2表 積穴住居跡計測値一覧表

住居 番号	挿図 番号	発掘区	規 模		深さ (cm)	平面形	長軸方向	炉 跡	柱穴数	遺 物			備 考
			長径×短径(cm)							土器	石器	剝片・礫	
1	6	C・D-7	280×220	16	楕円形	N55°E	焼土 1	2	15	2	3	2	第4号Tピットと一部切り合う
2	7	B・C-12 B・C-13	582×486	24	楕円形	N76°W	石囲い炉	25	15	2	6	9	礫は炉石のため 焼けている 剝片2点は柱穴 内出土 第66号ピットと 切り合う

第3表 ピット計測値一覧表

ピット 番号	挿図 番号	発掘区	規 模		深さ (cm)	平 面 形	長軸方向	出 土 遺 物			備 考
			長径×短径(cm)					土器	石器	剝片・礫	
1	8	E-12	106×79	28	楕円形	N10°E				1	
2	8	E-13	92×80	29	円形		3			4	
3	8	E-13	93×77	31	楕円形	N70°W	1				
4	9	E-12	80×80	27	不整円形		4			1	
5	9	E-12	59×58	14	円形					1	
6	9	E-12	80×55	11	楕円形	N 5°E		1			
7	9	E-12	75×64	25	不整円形		3	2			
8	10	E-13	117×98	20	楕円形	N 4°E	3				
9	9	E-13	54×50	13	円形						
10	10	E-13	77×77	28	円形						
11	10	E-13	61×58	19	不整円形						
12	10	E-13	90×75	19	楕円形	N 3°W	3			3	
13	11	E-13	79×72	25	不整円形		2			10	
14	11	E-13	101×91	35	不整円形		1			1	
15	11	E-13	75×70	33	円形		1			1	
16	11	E-13	84×80	25	円形					8	
17	12	E-13・14	82×72	30	不整円形		6			5	完形土器1点
18	12	E・F-13	55×47	13	不整円形		1			1	
19	12	D-11	76×73	21	円形						
20	12	D-12	130×113	43	不整楕円形	N12°W	2			4	
21	13	D-12	101×95	34	円形		3			5	
22	13	E-12	94×88	31	円形						
23	13	E-12	72×69	19	円形					1	
24	13	F-9	128×67	44	長楕円形	N24°W					
25	14	P-6	60×46	9	楕円形	N52°E	1				
26	13	P-6	58×53	9	円形		1				
27	14	P-7	70×63	15	不整円形		9	1	9	11	
28	14	P-7	44×38	7	不整円形						
29	14	Q-7	64×62	12	円形					3	
30	14	Q-6	58×58	21	不整円形		3			3	
31	14	Q-6・7	51×40	9	楕円形	N69°W					
32	15	P-7	52×36	8	楕円形	N 5°W	4			1	
33	15	Q-7	95×66	14	楕円形	N65°E	3	1			
34	15	Q-7	56×55	9	不整隅丸方形		6			1	
35	15	Q-7	58×46	10	楕円形	N83°W	6			1	
36	15	Q-7	98×70	27	楕円形	N30°W	4	3		20	壇底に完形土器、土器内 に石織1点が入っていた
37	15	P-7	72×70	34	円形		83	2	18	15	壇口に2個体以上の土器
38	16	Q-7	75×74	18	円形		12			4	
39	16	P-7	74×72	25	円形		7			30	
40	16	Q-7	59×50	15	円形		1			2	

ピット番号	挿図番号	発掘区	規 模 長径×短径(cm)	深さ (cm)	平 面 形	長軸方向	出 土 遺 物			備 考
							土器	石器	剝片・礫	
41	16	P-7	76×72	17	円 形		6		17	
42	16	P-7	60×60	16	不 整 方 形		15		1	
43	16	P-7	60×58	13	円 形		5	3	5 2	
44	17	P-7	63×59	15	不 整 円 形		6	1	1 5	
45	17	P-7	60×58	15	円 形		18	1	5	
46	17	P-7・8	65×54	8	楕 円 形	N71°W	1		1	
47	17	P-7	64×59	15	円 形				10	
48	17	Q-7	75×70	21	円 形		15	2	1	
49	17	H-7	77×63	13	楕 円 形	N35°W	1		1 10	
50	18	G-6・7	85×80	16	円 形		2		2	
51	18	H-12	78×64	23	楕 円 形	N80°E	7			
52	18	H-12	60×57	14	円 形					
53	18	H-11・12	62×57	14	円 形		1	2	1	
54	18	G・H-11	105×96	28	円 形		1			
55	18	H-11	59×49	12	楕 円 形	N41°W	1			
56	18	H-10・11	67×54	15	楕 円 形	N32°W			1	
57	19	H-10・11	104×91	18	楕 円 形	N 9°W	3		1	
58	19	G-10	105×92	24	円 形		1		1	
59	19	G-10・11	96×72	10	楕 円 形	N49°E				
60	19	H-10	68×64	20	円 形		2			
61	19	G-10	72×72	19	円 形					
62	19	H-10	59×57	21	円 形		3			完形土器1点
63	20	H-11	105×90	42	円 形		5		1 1	
64	20	H-11	95×80	34	円 形		10	2	4	
65	20	P-8	90×77	23	楕 円 形		2	2	2 8	第2号竪穴住居跡と切り合
66	21	C-12	188×150	29	楕 円 形	N46°E	1	1	1	
67	20	H-7	(51×72)	(22)	円 形		8	2		半分のみ検出
68	21	H-7	(121×72)	37	隅丸長方形	N58°W	7			半分のみ検出
69	21	-A-11	(107)×98	31	不 整 円 形		1			土器底部1

第4表 Tピット計測値一覧表

Tピット番号	挿図番号	発掘区	規 模 長軸×短軸(cm)	深さ (cm)	平 面 形	長軸方向	備 考		
1	27	C-3	197×58	50	長 楕 円 形	N43°E			
2	27	G-11・12	305×60	103	長 楕 円 形	N66°W			
3	27	G・C-6	104×62	45	椭 円 形	N 7°E			
4	27	C-7	127×59	49	椭 円 形	N 4°W	第1号竪穴住居跡と切り合		
5	28	D-7	93×58	34	隅丸長方形	N73°E			
6	28	A-5	105×67	53	椭 円 形	N 9°E			
7	28	A-6	111×62	53	隅丸長方形	N16°W			
8	28	-A・A-7	137×95	81	椭 円 形	N 8°W	壇底面に径5cm、深さ11cmの柱穴状小ピット1個		

第5表 遺構出土石器計測値一覧表

插図番号	出土地区	類別	全長(%)	最大幅(%)	最大厚(%)	重量(g)	石質	備考
26-6-1	第6号ピット	削器	(33.0)	(16.0)	3.5	1.3	Obs.	欠失
27-1	第27号ピット	削器	(20.0)	(21.0)	5.0	2.0	〃	〃
36-1	第36号ピット	石鏃	31.0	17.0	3.5	1.15	〃	
36-2	〃	〃	37.5	14.0	3.0	0.8	〃	
36-3	〃	石皿	(114.0)	(86.0)	(55.0)	760.0	And.	
37-1	第37号ピット	石鏃	25.0	14.5	3.0	0.65	Obs.	
37-2	〃	〃	(24.0)	13.0	4.5	0.95	〃	先端欠失
37-3	〃	削器	49.5	17.5	13.0	9.9	〃	
43-1	第43号ピット	〃	22.0	12.5	4.0	1.1	〃	
43-2	〃	〃	(33.0)	24.0	5.0	3.4	〃	
43-3	〃	〃	(23.0)	16.5	5.0	1.6	〃	焼けている
44-1	第44号ピット	〃	24.0	16.5	6.0	1.55	〃	
45-1	第45号ピット	敲石	74.0	118.0	57.0	710.0	And.	
48-1	第48号ピット	削器	30.5	19.0	13.0	8.1	〃	焼けている
48-2	〃	〃	(48.0)	21.0	6.0	6.4	〃	
53-1	第53号ピット	〃	(82.0)	(35.0)	(13.0)	44.65		
53-2	〃	石斧	(54.0)	56.0	19.5	54.6	Har.-sha.	
64-1	第64号ピット	石鏃	23.0	16.0	3.0	0.6	Obs.	
64-2	〃	石核	20.5	27.5	12.5	6.45	〃	
65-1	第65号ピット	敲石	(107.0)	95.0	50.0	620.0	And.	凹石・欠失
66-1	第66号ピット	石核	30.0	34.0	23.0	15.2	Obs.	
67-1	第67号ピット	石鏃	(19.0)	(9.5)	2.0	0.3	〃	基部欠失
67-2	〃	削器	(13.5)	(19.0)	6.0	1.2	〃	
6-1	第1号堅穴住居跡	削器	101.0	21.0	11.0	11.9	Obs.	
7-1	第2号堅穴住居跡	〃	(23.0)	(29.5)	3.0	9.9	〃	
7-2	〃	〃	40.0	26.0	13.0	6.4	〃	

第6表 発掘区出土石器計測値一覧表

挿図番号	出土地区	器種名	規格			重量(g)	石質	備考
			長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)			
42-1	E-12	石鏃	(4.6)	(1.8)	(0.4)	(2.6)	Obs.	
2	G-9	〃	(4.1)	(1.7)	(0.4)	(2.2)	Obs.	
3	C-9	〃	(3.8)	(1.6)	(0.4)	(2.6)	Obs.	
4	P-7	〃	(4.5)	(1.2)	(0.3)	(1.9)	Obs.	
5	H-6	〃	(3.0)	(1.5)	(0.3)	(1.2)	Obs.	
6	H-6	〃	(2.3)	(1.5)	(0.3)	(1.0)	Obs.	
7	P-7	〃	(3.1)	(1.3)	(0.3)	(1.3)	Obs.	
8	P-6	〃	3.1	1.3	0.4	1.1	Obs.	
9	P-7	〃	(2.8)	(1.3)	(0.4)	(1.4)	Obs.	
10	A-13	〃	(2.8)	(0.9)	(0.3)	(1.8)	Obs.	
11	C-11	〃	(2.3)	(1.1)	(0.2)	(0.7)	Obs.	
12	B-13	〃	(2.7)	(1.1)	(0.2)	(0.8)	Obs.	
13	G-11	〃	(2.4)	(1.2)	(0.4)	(1.1)	Obs.	
14	P-7	〃	(2.4)	(1.3)	(0.3)	(1.0)	Obs.	
15	P-7	〃	(1.7)	(1.6)	(0.2)	(0.8)	Obs.	
16	P-7	〃	2.5	1.9	0.3	0.7	Obs.	
17	P-6	〃	(1.9)	(1.4)	(0.3)	(0.6)	Obs.	
18	P-7	〃	(1.8)	(1.3)	(0.2)	(0.5)	Obs.	
19	Q-6	〃	(1.9)	(1.4)	(0.2)	(0.7)	Obs.	
20	Q-7	〃	(3.3)	(1.7)	(0.4)	(2.5)	Obs.	
21	P-7	〃	(2.3)	(1.5)	(0.3)	(1.2)	Obs.	
22	P-3	〃	(1.9)	(1.5)	(0.2)	(0.8)	Obs.	
23	A-11	〃	(1.6)	(1.5)	(0.2)	(0.6)	Obs.	
24	D-7	〃	2.2	1.3	0.3	0.9	Obs.	
25	P-7	〃	(1.8)	(1.3)	(0.2)	(0.8)	Obs.	
26	P+Q-8	〃	(1.9)	(1.2)	(0.2)	(0.4)	Obs.	
27		〃	(1.1)	(1.2)	(0.3)	(0.3)	Obs.	
28	P-8	〃	(2.2)	(1.2)	(0.4)	(0.7)	Obs.	
29	H-7	〃	(2.3)	(1.8)	(0.4)	(1.3)	Obs.	
30	P-4	〃	(1.9)	(1.5)	(0.4)	(0.9)	Obs.	
31		〃	(1.6)	(0.8)	(0.4)	(0.4)	Obs.	
32	C-7	〃	(1.1)	(0.9)	(0.1)	(0.1)	Obs.	
33	P-7	〃	(1.4)	(1.1)	(0.2)	(0.3)	Obs.	
34	A-10	〃	(3.2)	(1.4)	(0.6)	(1.7)	Obs.	未成品
35	P-6	〃	2.9	1.6	0.4	1.2	Obs.	〃
36	B-12	〃	(2.4)	(0.9)	(0.3)	(0.6)	Obs.	〃
37	A-9	〃	(1.9)	(1.1)	(0.2)	(0.5)	Obs.	〃
38	C-13	〃	(1.6)	(0.9)	(0.2)	(0.3)	Obs.	〃
39	F-7	〃	(0.8)	(1.2)	(0.2)	(0.2)	Obs.	〃
40	P-6	〃	(1.4)	(1.1)	(0.3)	(0.4)	Obs.	〃
41	P-4	〃	(1.3)	(1.5)	(0.3)	(0.5)	Obs.	〃
42	Q-11	〃	(1.7)	(1.7)	(0.3)	(0.8)	Obs.	〃
43	P-7	〃	3.1	2.2	0.9	3.7	Obs.	〃
44	P-7	〃	(2.7)	(1.9)	(0.5)	(2.3)	Har.-sha.	〃
45	P-7	〃	(2.8)	(1.2)	(0.3)	(0.8)	Obs.	〃
46	C-12	〃	(2.8)	(1.5)	(0.5)	(1.6)	Obs.	〃
47	H-7	〃	(2.8)	(1.9)	(0.4)	(2.1)	Obs.	〃
48	O-7	〃	2.8	2.2	0.4	2.3	Har.-sha.	〃
49	P-6	〃	(2.7)	(2.0)	(0.5)	(2.9)	Obs.	〃
50	C-8	〃	(2.3)	(1.5)	(0.2)	(1.2)	Obs.	〃

挿図番号	出土地区	器種名	規格			重量(g)	石質	備考
			長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)			
42-51	表採	石鋸	(1.2)	(1.6)	(0.2)	(0.5)	Obs.	未成品
52	E-12	石鋸	6.1	3.4	1.4	19.2	Har.-sha.	雑として利用
53	B-7	〃	6.2	3.0	0.7	8.8	Obs.	
54	F-6	〃	5.4	3.0	0.7	9.1	Obs.	
55	A-11	〃	(5.2)	(2.9)	(0.8)	(9.0)	Obs.	
56	A-11	〃	(4.1)	(3.2)	(0.9)	(8.9)	Obs.	
57	C-12	〃	(5.1)	(2.1)	(0.5)	(4.9)	Obs.	
58	D-13	〃	(4.6)	(2.1)	(0.8)	(5.3)	Obs.	
59	O-8	〃	5.2	2.2	0.7	5.0	Obs.	
43-60	D-6	〃	(1.8)	(1.7)	(0.3)	(0.7)	Obs.	
61	A-11	〃	(1.6)	(1.3)	(0.4)	(0.7)	Obs.	
62	E-13	〃	(1.9)	(1.4)	(0.7)	(1.4)	Obs.	
63	石錐	4.3	1.8	0.9	6.5	Har.-sha.		
64		〃	4.2	1.5	0.6	3.4	Obs.	
65		〃	5.2	1.4	0.9	3.8	Obs.	
66		〃	(3.1)	(1.3)	(0.6)	(1.9)	Obs.	
67		〃	2.3	1.1	0.4	0.8	Obs.	
68		〃	2.8	1.5	0.6	1.6	Che.	
69		〃	2.9	2.2	0.4	1.6	Obs.	
70		〃	2.7	2.0	0.8	3.1	Obs.	
71		〃	2.6	1.7	0.7	2.6	Obs.	
72		〃	1.9	1.6	0.4	1.2	Obs.	
73	G-11	〃	(4.6)	(3.2)	(0.5)	(6.1)	Obs.	
74	B-9	〃	3.2	3.5	0.8	7.4	Obs.	
75	H-8	〃	(2.4)	(3.1)	(0.6)	(4.0)	Obs.	
76	〃	4.5	3.5	0.9	10.6	Obs.		
77	P・Q-8	〃	3.2	3.2	0.6	4.2	Har.-sha.	
78	Q-7	〃	3.0	2.7	1.0	5.1	Har.-sha.	
79	B-13	〃	(3.2)	(1.8)	(0.7)	(2.5)	Obs.	
80	D-7	〃	(4.2)	(2.2)	(0.7)	(4.3)	Obs.	
81	〃	(4.4)	(1.3)	(0.4)	(1.2)	Obs.		
82	〃	(2.8)	(1.3)	(0.4)	(1.2)	Obs.		
83	C-8	ナイフ状石器	4.6	2.9	0.7	7.9	Obs.	
84	A-17	〃	(5.1)	(3.3)	(1.1)	(14.8)	Obs.	
85	B-13	〃	(2.5)	(2.9)	(0.7)	(7.0)	Obs.	
86	B-13	〃	5.4	3.7	0.8	16.1	Obs.	
87	A-11	〃	(2.3)	(2.8)	(0.4)	(2.8)	Obs.	
88	A-13	〃	(2.5)	(3.6)	(0.9)	(6.4)	Obs.	
89	D-12	〃	(3.0)	(3.0)	(0.8)	(6.2)	Obs.	
90	C-11	〃	(2.4)	(2.7)	(0.6)	(3.0)	Obs.	
91	H-7	〃	3.0	1.6	0.6	3.1	Obs.	
92	C-13	〃	(3.3)	(1.8)	(0.6)	(2.9)	Obs.	
93	P-6	〃	(2.9)	(1.8)	(0.5)	(2.8)	Obs.	
94	P・Q-8	〃	(2.0)	(1.8)	(0.7)	(1.9)	Obs.	
95	B-12	〃	(3.6)	(3.2)	(0.7)	(8.4)	Obs.	
96	P・Q-8	〃	3.8	2.4	0.8	5.1	Obs.	
97	D-7	〃	(3.0)	(2.7)	(0.6)	(4.1)	Obs.	
44-98	D-12	〃	(7.1)	(2.4)	(0.9)	(11.8)	Obs.	
99	B-11	〃	6.1	2.3	0.8	8.1	Har.-sha.	
100	E-13	〃	(3.6)	(1.3)	(0.4)	(1.6)	Har.-sha.	

挿図番号	出土地区	器種名	規格			重量(g)	石質	備考
			長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)			
44-101	G-8	ナイフ状石器	4.4	3.6	1.2	17.7	Obs.	
102	D-6	〃	(2.7)	(2.6)	(0.6)	(3.3)	Obs.	
103	G-8	〃	(2.3)	(1.9)	(0.4)	(1.7)	Obs.	
104	G-7	〃	(2.1)	(1.8)	(0.6)	(2.1)	Obs.	
105	D-8	〃	(2.0)	(1.9)	(0.3)	(0.8)	Obs.	
106	H-8	〃	3.5	2.8	0.6	4.4	Obs.	
107	D-7	〃	(3.9)	(2.6)	(0.6)	(7.6)	Obs.	
108	E-12	〃	3.2	4.1	0.7	7.3	Obs.	未成品
109	H-8	〃	(6.7)	(3.4)	(1.3)	(17.6)	Obs.	〃
110	F-12	両面体石器	3.8	2.9	1.1	10.0	Obs.	
111	E-8	〃	(3.6)	(2.7)	(0.5)	(4.3)	Obs.	
112	B-11	〃	(3.7)	(2.6)	(0.8)	(5.8)	Obs.	未成品
113	P-8	〃	(3.0)	(3.9)	(1.2)	(15.0)	Obs.	〃
114	P-7	〃	(3.0)	(3.2)	(0.9)	(10.0)	Obs.	〃
115	G-7	〃	(2.7)	(3.1)	(0.9)	(6.5)	Obs.	〃
116	H-8	〃	(3.0)	(3.0)	(0.9)	(7.6)	Obs.	〃
117	A-10	〃	(2.7)	(2.5)	(0.6)	(3.8)	Obs.	
118	C-11	〃	(2.6)	(3.0)	(1.1)	(6.5)	Obs.	
119	P-7	〃	(1.8)	(2.1)	(0.5)	(1.7)	Obs.	
120	P-7	〃	(2.3)	(1.8)	(0.6)	(2.2)	Obs.	
121	A-11	〃	(2.3)	(2.4)	(0.5)	(2.7)	Obs.	
122	C-13	〃	(10.0)	(3.4)	(1.9)	(58.7)	Obs.	
123	G-7	削器および使用痕のある剝片	(8.5)	(4.0)	(1.1)	(44.6)	Obs.	
45-124	H-8	〃	(6.1)	(2.2)	(0.7)	(9.6)	Obs.	
125	P-7	〃	7.1	2.9	1.1	20.7	Obs.	
126	B-13	〃	6.0	3.7	1.0	24.4	Obs.	
127	D-12	〃	4.7	2.4	0.9	6.4	Obs.	
128	G-9	〃	(3.9)	(1.7)	(0.6)	(4.3)	Obs.	
129	B-12	〃	5.0	3.1	1.0	14.7	Obs.	
130	D-10	〃	5.6	3.5	1.1	17.4	Obs.	
131	D-11	〃	(5.1)	(3.3)	(1.3)	(11.2)	Obs.	
132	G-8	〃	4.6	2.7	0.8	5.8	Obs.	
133	P-8	〃	4.8	2.3	0.6	6.2	Obs.	
134	P-7	〃	(4.2)	(2.6)	(0.6)	(4.7)	Obs.	
135	Q-7	〃	(3.1)	(2.8)	(0.4)	(3.1)	Obs.	
136	H-6	〃	(3.3)	(2.1)	(0.4)	(3.3)	Obs.	
137	F-7	〃	2.6	4.0	0.8	5.2	Obs.	
138	G-7	〃	2.4	4.2	0.8	6.8	Obs.	
139	H-6	〃	7.4	3.6	0.9	18.9	Obs.	
140	H-8	〃	(3.7)	(1.5)	(0.8)	(3.2)	Obs.	
141	G-8	〃	(3.0)	(1.7)	(0.7)	(4.0)	Obs.	
142	P-8	〃	(2.9)	(1.7)	(0.5)	(2.2)	Obs.	
143	C-12	〃	(2.4)	(2.4)	(0.8)	(5.6)	Obs.	
144	A-11	〃	(2.4)	(2.0)	(0.6)	(2.8)	Obs.	
145	B-12	〃	(2.0)	(2.1)	(0.6)	(2.4)	Obs.	
146	P-7	〃	(2.5)	(1.9)	(0.4)	(1.9)	Obs.	
147	G-6	〃	(2.7)	(2.0)	(0.6)	(2.2)	Obs.	
148	C-13	〃	(2.3)	(2.4)	(0.5)	(2.5)	Obs.	
149	P-8	〃	(2.0)	(2.1)	(0.4)	(1.6)	Obs.	
150	G-8	〃	(1.8)	(2.8)	(0.5)	(2.3)	Obs.	

挿図番号	出土地区	器種名	規格			重量(g)	石質	備考
			長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)			
45-151	P-7	削器および使用痕のある剝片	(2.5)	(1.7)	(0.3)	(1.0)	Obs.	
152	H-7	〃	(2.9)	(1.7)	(0.6)	(2.1)	Obs.	
46-153	A-12	〃	(3.8)	(3.2)	(1.0)	(10.2)	Obs.	
154	G-7	〃	(3.6)	(2.6)	(0.5)	(3.5)	Obs.	
155	G-8	〃	(2.0)	(3.0)	(0.7)	(4.3)	Obs.	
156	B-12	〃	(2.7)	(2.6)	(0.5)	(3.6)	Obs.	
157	B-12	〃	(3.2)	(2.4)	(0.4)	(2.6)	Obs.	
158	A-13	〃	(4.0)	(2.5)	(1.1)	(9.5)	Obs.	
159		〃	(3.1)	(2.0)	(0.8)	(3.8)	Obs.	
160	P-6	〃	(3.0)	(1.9)	(0.6)	(3.6)	Obs.	
161	D-6	〃	(7.2)	(3.4)	(0.8)	(13.0)	Har.-sha.	
162	A-9	〃	(6.2)	(3.3)	(0.8)	(12.5)	Obs.	
163	表採	〃	6.0	2.3	1.0	8.3	Obs.	
164	B-11	〃	5.3	1.5	0.8	5.6	Obs.	
165	C-9	〃	5.3	3.2	0.9	14.2	Obs.	
166	Q-9	〃	4.7	3.3	0.7	9.2	Obs.	
167	G-8	〃	5.1	4.2	1.4	24.8	Har.-sha.	
168	C-12	〃	5.4	2.6	1.3	11.9	Obs.	
169	B-9	〃	(4.6)	(2.6)	(1.0)	(9.7)	Obs.	
170	B-13	〃	4.5	2.1	0.6	5.3	Obs.	
171	F-12	〃	(4.1)	(2.4)	(0.7)	(4.0)	Obs.	
172	C-12	〃	4.0	2.1	0.8	5.4	Obs.	
173	B-9	〃	4.1	2.1	0.8	5.4	Obs.	
174	C-13	〃	(3.6)	(2.3)	(1.0)	(6.1)	Obs.	
175	A-9	〃	4.4	2.2	0.4	3.2	Obs.	
176	D-13	〃	4.0	1.5	0.4	2.1	Obs.	
177	D-6	〃	4.2	1.4	0.4	2.2	Obs.	
178	D-7	〃	3.6	2.0	0.8	5.5	Obs.	
179	D-13	〃	(3.3)	(2.2)	(0.6)	(4.7)	Obs.	
180	A-11	〃	(4.0)	(1.7)	(0.3)	(1.8)	Har.-sha.	
47-181	B-13	〃	3.2	1.8	0.6	2.7	Har.-sha.	
182	A-9	〃	3.4	1.6	0.3	1.9	Obs.	
183	D-13	〃	3.2	1.2	0.3	1.3	Obs.	
184	P-18	〃	3.7	1.1	0.4	1.2	Obs.	
185	Q-7	〃	2.9	1.2	0.6	2.0	Obs.	
186	P-11	〃	(3.2)	(2.3)	(1.2)	(6.7)	Har.-sha.	
187	A-11	〃	2.9	1.6	0.6	1.5	Obs.	
188	P-6	〃	3.2	1.8	0.7	3.3	Obs.	
189	H-7	〃	4.7	4.1	0.6	6.2	Obs.	
190	D-6	〃	5.1	3.6	0.5	6.5	Obs.	
191	F-7	〃	(2.8)	(1.6)	(0.7)	(1.9)	Obs.	
192	G-9	〃	3.1	1.8	0.5	2.1	Obs.	
193	A-9	〃	2.9	2.0	0.8	4.4	Obs.	
194	D-6	〃	3.1	1.5	0.6	2.0	Obs.	
195	B-12	〃	2.9	1.6	0.6	2.0	Obs.	
196	D-7	〃	3.0	1.9	0.4	2.4	Obs.	
197	A-12	〃	(2.5)	(2.8)	(0.6)	(3.7)	Obs.	
198	攪乱	〃	3.5	2.8	0.9	6.8	Obs.	
199	D-6	〃	(3.1)	(1.9)	(1.0)	(4.8)	Obs.	
200	A-12	〃	(2.2)	(1.5)	(0.3)	(0.9)	Obs.	

挿図番号	出土地区	器種名	規格			重量(g)	石質	備考
			長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)			
47-201	D-12	削器および使用痕のある剝片	2.3	1.6	0.2	0.8	Obs.	
202	P-7	〃	(1.9)	(1.6)	(0.5)	(1.6)	Obs.	
203	B-12	〃	(1.7)	(1.2)	(0.3)	(0.4)	Obs.	
204	B-12	〃	1.9	3.3	0.4	1.9	Obs.	
205	D-8	〃	2.5	2.8	0.5	3.3	Che	
206	D-8	〃	2.4	2.6	0.6	2.2	Obs.	
207	P-6	〃	3.2	3.6	0.8	10.1	Ba.	
208	C-12	〃	5.7	5.7	1.7	47.8	Har-sha.	
209	G-7	〃	4.7	5.1	1.4	31.0	Che.	
210	D-13	〃	5.1	5.1	1.2	22.8	Har-sha.	
211	H-6	〃	4.7	5.8	1.3	28.2	Obs.	
212	B-9	〃	5.4	4.9	1.1	23.2	Obs.	
48-213	C-11	〃	5.2	5.4	1.5	39.4	Har-sha.	
214	表採	〃	(3.3)	(3.3)	(0.8)	(8.1)	Obs.	
215	B-11	〃	(2.9)	(3.2)	(0.7)	(5.2)	Obs.	
216	D-7	〃	(4.0)	(3.3)	(0.8)	(9.9)	Obs.	
217	B-11	搔器	(5.3)	(3.9)	(1.0)	(19.2)	Har-sha.	
218	C-8	〃	4.5	3.2	1.0	13.1	Obs.	
219	O-13	〃	(4.0)	(2.8)	(0.9)	(9.2)	Obs.	
220	A-12	〃	(3.8)	(2.3)	(0.8)	(6.0)	Obs.	
221	A-12	〃	3.8	2.6	0.6	5.2	Obs.	
222	B-13	〃	4.2	2.5	0.9	8.6	Obs.	
223	P-7	〃	(2.0)	(1.8)	(0.7)	(2.2)	Har-sha.	
224	H-8	〃	5.3	3.0	0.8	11.3	Obs.	
225	A-12	〃	(5.3)	(2.8)	(1.1)	(17.7)	Obs.	
226	B-13	〃	(3.4)	(6.3)	(1.3)	(29.2)	Obs.	
227	B-12	〃	2.5	4.5	1.4	12.2	Obs.	
228	H-6	〃	3.2	5.6	1.3	21.0	Obs.	
229	H-8	〃	(4.6)	(3.1)	(1.1)	(15.0)	Obs.	
230	D-12	〃	2.8	4.1	0.7	9.8	Obs.	
231	C-12	〃	3.0	4.5	1.0	11.7	Obs.	
232	P-7	〃	2.4	3.4	1.2	10.0	Obs.	
49-233	P-6	〃	3.1	4.1	1.2	14.5	Obs.	
234	C-12	〃	2.9	3.2	1.0	9.1	Obs.	
235	P-8	〃	2.5	3.6	1.1	8.0	Obs.	
236	P-8	〃	2.7	2.1	0.4	2.5	Obs.	
237	A-11	〃	(2.9)	(3.4)	(0.8)	(7.0)	Obs.	
238	H-8	〃	(3.4)	(2.5)	(0.7)	(5.8)	Obs.	
239	C-12	〃	(2.6)	(3.3)	(0.9)	(6.8)	Obs.	
240	B-13	〃	2.8	2.8	0.7	5.7	Obs.	
241	Q-6	〃	(1.8)	(2.2)	(1.3)	(5.3)	Obs.	
242	Q-7	〃	(2.7)	(2.4)	(1.0)	(6.6)	Obs.	
243	C-13	〃	(2.6)	(2.3)	(0.7)	(4.1)	Obs.	
244	〃	〃	1.9	2.1	0.5	1.8	Obs.	
245	G-8	〃	2.4	1.8	0.8	2.5	Obs.	
246	P-7	〃	2.1	1.7	0.4	1.7	Obs.	
247	P-7	〃	2.0	2.3	0.9	4.4	Obs.	
248	P-7	〃	2.0	2.4	1.4	3.8	Obs.	
249	P-7	〃	2.2	2.0	0.8	2.9	Obs.	
250	P-7	〃	2.8	2.2	1.0	5.2	Obs.	

挿図番号	出土地区	器種名	規格			重量(g)	石質	備考
			長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)			
49—251	P—7	搔器	2.9	1.9	0.5	1.8	Obs.	
252	A—12	〃	3.1	2.6	0.7	4.7	Obs.	
253	E—13	剥片石核	2.2	5.4	2.1	36.4	Obs.	
254	A—11	〃	2.7	4.6	2.7	29.3	Obs.	
255	A—12	〃	(3.0)	(4.3)	(1.7)	(19.2)	Obs.	
256	Q—8	〃	3.0	2.5	1.1	8.4	Obs.	
257	G—9	〃	(2.8)	(4.2)	(1.6)	(18.5)	Obs.	
258	P—7	〃	2.5	2.8	1.4	8.4	Obs.	
259	B—12	〃	(3.1)	(2.4)	(1.4)	(9.1)	Obs.	
260	Q—7	〃	5.7	2.5	2.0	26.9	Obs.	
261	C—8	〃	6.3	6.7	2.7	120.0	Har.-sha.	
50—262	H—7	〃	6.5	8.6	4.2	190.0	Che.	
263	P・Q—8	〃	5.0	6.0	3.0	74.2	Har.-sha.	
264	A—11	〃	4.0	5.8	4.0	73.0	Che.	
265	B—13	〃	3.5	4.1	2.2	28.0	Aga.	
266	O—12	楔形石器	(4.2)	(2.9)	(1.6)	(15.9)	Obs.	
267	A—10	〃	5.3	4.5	1.0	19.3	Obs.	
268	D—7	〃	2.9	2.8	0.5	4.0	Obs.	
269	D—7	〃	2.9	2.9	0.8	7.4	Obs.	
270	P—8	〃	3.4	1.4	0.7	2.6	Obs.	
271	P—8	〃	2.8	1.4	1.1	3.3	Obs.	
272	G—7	有孔石製品	1.7	1.9	0.5	1.5	Talc	
273	B—9	〃	4.6	3.5	3.3	54.8	Mud.	
274	C—13	石斧	(11.8)	(6.3)	(2.9)	(260.0)	Ser.	
275	F—3	〃	(7.2)	(4.5)	(2.3)	(120.0)	Gre.-mud.	
51—276	G—8	〃	(12.8)	(4.6)	(2.7)	(240.0)	Sch.	
277	Q—7	〃	12.2	4.9	1.9	200.0	Gre.-mud.	
278	D—6	〃	10.1	4.2	1.3	120.0	Sch.	
279	F—7	〃	10.7	4.4	1.4	110.0	Gre.-mud.	
280	P—7	〃	9.8	4.0	1.3	73.3	Gre.-mud.	
281	B—13	〃	(8.0)	(4.6)	(1.0)	(74.5)	Gre.-mud.	
282	H—8	〃	(2.7)	(2.7)	(0.6)	(7.2)	Gre.-mud.	
52—283	D—6	〃	8.9	4.3	1.2	94.4	Gre.-mud.	
284	〃	〃	8.9	3.3	1.3	54.2	Gre.-mud.	
285	A—10	〃	(5.9)	(2.8)	(0.7)	(19.4)	Gre.-mud.	
286	B—11	〃	(5.8)	(5.0)	(1.0)	(57.3)	Sch.	
287	A—13	〃	13.7	3.4	1.8	180.0	Bl.-mud.	
288	A—12	〃	7.2	3.9	0.9	38.5	Gre.-mud.	
289	F—13	〃	(6.3)	(4.0)	(1.2)	(60.5)	Gre.-mud.	
290	A—6	〃	(6.5)	(3.5)	(0.6)	(21.5)	Gre.-mud.	未成品
291	B—12	〃	(7.4)	(3.0)	(0.7)	(25.4)	Sch.	
292	F—13	〃	8.0	3.0	1.2	42.4	Gre.-mud.	
53—293	H—8	〃	(11.9)	(4.9)	(2.2)	(190.0)	Sch.	未成品
294	A—9	〃	(8.0)	(4.6)	(1.0)	(70.1)	Sch.	"
295	C—11	〃	8.8	4.5	1.4	78.1	Gre.-mud.	"
296	G—7	〃	9.5	4.5	1.7	67.9	Gre.-mud.	"
297	A—10	〃	(8.4)	(3.9)	(2.8)	(130.0)	Sch.	"
298	H—8	〃	8.9	5.4	4.4	240.0	Gre.-mud.	"
299	P—6	〃	(10.8)	(5.1)	(1.9)	(170.0)	Gre.-mud.	"
54—300	C—7	〃	18.2	6.7	2.4	465.0	Mud.	"

挿図番号	出土地区	器種名	規格			重量(g)	石質	備考
			長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)			
54-301	P・Q-8	石斧	(13.6)	(5.4)	(1.5)	(190.0)	Sch.	未成品
302	C-9	〃	(6.2)	(4.9)	(2.8)	(100.6)	Gre.-mud.	〃
303	A-1	〃	(9.7)	(4.8)	(1.2)	(70.2)	Sch.	〃
304	P-6	〃	(11.3)	(4.4)	(1.3)	(82.0)	Sch.	〃
305	試掘	〃	8.1	4.7	1.5	83.8	Gre.-mud.	〃
306	C-9	〃	(9.3)	(3.8)	(1.6)	(82.9)	Gre.-mud.	〃
55-307	C-13	砥石	(15.2)	(7.3)	(5.6)	(630.0)	Sa.	
308	G-9	〃	8.8	4.4	2.9	64.9	Sa.	
309	A-10	〃	(11.6)	(5.1)	(5.0)	(440.0)	Sa.	
310	C-8	〃	(5.0)	(5.7)	(3.3)	(125.0)	Sa.	
311	G-9	〃	(6.2)	(6.8)	(5.6)	(245.0)	Sa.	
312	G-8	〃	(8.7)	(5.1)	(3.4)	(120.0)	Sa.	
313	P・Q-8	〃	11.2	7.9	3.6	180.0	Tu.	
314	G-8	〃	(6.7)	(5.4)	(3.2)	(110.0)	Tu.	
315	〃	〃	(5.4)	(7.5)	(2.8)	(85.3)	Tu.	
316	C-11	〃	(8.8)	(6.2)	(2.5)	(220.0)	Sa.	
317	H-6	〃	14.8	6.2	2.7	370.0	Sa.	
56-318	G-7	〃	(9.1)	(8.4)	(2.1)	(180.0)	Sa.	
319	C-11	〃	5.1	6.2	0.6	22.2	Tu.	
320	D-13	擦石	(7.8)	(15.7)	(6.2)	(1130.0)	And.	
321	B-11	〃	(9.8)	(14.5)	(4.2)	(820.0)	And.	
322	D-13	〃	7.3	15.1	5.3	760.2	And.	
323	B-11	〃	7.0	13.7	5.6	700.2	And.	
324	D-10	〃	7.7	12.9	4.7	600.2	And.	
325	B-11	〃	(8.9)	(7.5)	(6.2)	(510.0)	And.	
326	D-12	〃	(7.0)	(9.5)	(5.0)	(450.0)	And.	
327	B-11	〃	(8.8)	(11.4)	(4.6)	(580.0)	And.	
328	A-10	〃	(7.5)	(13.9)	(5.2)	(650.0)	And.	
329	B-11	〃	(6.4)	(11.8)	(5.2)	(480.0)	And.	
330	B-11	〃	(7.1)	(9.7)	(6.8)	(610.0)	And.	
331	B-11	〃	(6.6)	(10.0)	(5.7)	(560.0)	And.	
332	B-11	〃	(7.3)	(7.0)	(6.2)	(350.0)	And.	
333	D-12	〃	(6.9)	(9.4)	(4.6)	(390.0)	And.	
334	B-10	〃	(6.3)	(13.4)	(3.1)	(390.0)	Mud.	
335	A-11	〃	(7.8)	(9.6)	(4.9)	(450.0)	And.	
336	B-13	〃	9.6	17.8	6.0	1350.0	And.	
58-337	A-11	〃	(8.2)	(6.8)	(6.1)	(390.0)	And.	
338	A-10	〃	(6.5)	(7.9)	(6.2)	(360.0)	And.	
339	B-10	〃	6.6	11.2	5.2	580.0	And.	
340	C-11	〃	(7.4)	(6.2)	(5.5)	(380.0)	And.	
341	B-11	〃	(6.2)	(11.0)	(4.2)	(380.0)	And.	
342	C-13	〃	(7.3)	(6.6)	(5.2)	(320.0)	And.	
343	F-12	〃	6.4	11.0	3.8	420.0	And.	
344	A-11	〃	6.3	11.0	4.2	400.0	And.	
345	B-11	〃	(5.4)	(10.8)	(3.2)	(180.0)	And.	
346	B-11	〃	(5.6)	(6.9)	(4.2)	(120.0)	And.	
347	D-11	〃	(6.5)	(6.8)	(4.2)	(230.0)	And.	
348	D-12	〃	(5.8)	(7.2)	(3.7)	(210.0)	And.	
59-349	D-13	〃	(6.9)	(6.5)	(3.9)	(140.0)	And.	
350	B-11	〃	(7.1)	(6.7)	(3.7)	(190.0)	And.	

插図番号	出土地区	器種名	規格			重量(g)	石質	備考
			長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)			
59—351	B—11	擦石	(5.2)	(7.6)	(4.9)	(280.0)	And.	
352	C—11	〃	(5.7)	(9.6)	(2.5)	(170.0)	And.	
353	A—11	〃	(5.4)	(8.1)	(5.4)	(320.0)	And.	
354	A—10	〃	3.8	7.9	2.2	75.6	And.	
355	E—12	石錐	11.5	14.1	2.8	550.0	And.	
356	P—7	擦石	18.4	9.9	3.0	740.0	And.	
357	A—11	〃	12.3	7.1	4.5	620.0	And.	
358	E—13	〃	(7.6)	(7.9)	(4.5)	(330.0)	And.	
359	B—10	〃	9.0	4.7	2.0	91.9	Tu.	
360	E—9	敲石	(11.8)	(6.3)	(2.4)	(240.0)	And.	
60—361	C—13	〃	16.4	7.8	3.0	420.0	And.	
362	D—8	〃	10.6	5.6	2.2	140.0	And.	
363	D—12	〃	10.2	6.5	3.5	280.0	Mud.	
364	Q—7	〃	(6.2)	(5.6)	(2.0)	(67.6)	And.	
365	D—12	〃	10.8	6.3	5.5	410.0	And.	
366	B—11	〃	12.1	8.3	4.9	700.0	And.	
367	A—10	〃	10.1	5.7	4.0	330.0	And.	
368	A—10	石斧	10.8	6.7	4.4	510.0	Mud.	未成品
369	A—12	敲石	9.4	6.1	6.7	500.0	Che.	
370	P—6	石斧	11.3	6.8	2.9	360.0	Che.	未成品
371	C—11	敲石	9.0	5.8	3.2	240.0	And.	
61—372	A—9	〃	(13.1)	(11.3)	(4.1)	(890.0)	And.	
373	C—9	〃	7.4	6.9	7.0	650.0	Mud.	
374	A—9	〃	(14.5)	(9.3)	(4.9)	(700.0)	And.	
375	〃	〃	11.4	6.3	3.8	360.0	And.	
376	F—8	〃	13.3	4.5	3.3	250.0	And.	
377	A—10	〃	14.6	8.6	3.9	690.0	And.	
378	C—12	〃	10.0	6.0	3.1	210.0	And.	
379	B—11	〃	9.0	5.0	3.8	250.0	And.	
380	C—11	〃	11.4	8.5	2.9	420.0	And.	
381	G—8	〃	(8.1)	(5.0)	(3.6)	(200.0)	And.	
62—382	A—9	〃	13.8	6.0	3.8	380.0	And.	
383	C—3	〃	(12.1)	(7.6)	(5.2)	(520.0)	And.	
384	B—13	〃	14.3	6.3	4.8	490.0	And.	
385	C—13	〃	12.6	7.0	4.2	410.0	And.	
386	A—9	〃	12.5	8.6	4.3	690.0	And.	
387	C—13	〃	14.6	6.3	3.3	460.0	And.	
388	A—13	〃	(11.8)	(6.5)	(3.1)	(260.0)	And.	
389	A—10	〃	8.2	6.6	2.5	200.0	And.	
390	A—10	〃	10.3	5.8	3.1	280.0	And.	
391	A—10	〃	(7.2)	(9.9)	(2.5)	(250.0)	And.	
392	欠番							
63—393	F—9	石皿	22.9	16.7	8.3	4800	And.	
394	F—13	〃	(16.9)	(13.9)	(8.6)	(2600)	And.	
395	F—11	〃	45.3	45.3	8.3	16000	And.	
396	B—11	〃	(28.4)	(21.9)	(6.3)	(4500)	And.	
397	G—7	〃	(14.7)	(9.6)	(6.4)	(800)	And.	
398	P—6	〃	(16.7)	(11.0)	(6.6)	(1250)	And.	
399	G—9	〃	(18.4)	(13.4)	(9.4)	(2500)	And.	
400	B—13	〃	(14.0)	(23.7)	(7.3)	(2800)	And.	

挿図番号	出土地区	器種名	規格			重量(g)	石質	備考
			長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)			
65-401	G-9	石皿	(15.6)	(13.0)	(7.1)	(1900)	And.	
402	A-11	//	(17.3)	(19.0)	(5.4)	(2000)	And.	
403	C-10	//	17.1	28.3	10.7	800	And.	
404	B-3	//	(17.1)	(16.7)	(6.6)	(2750)	And.	
405	F-12	//	(14.0)	(13.9)	(8.7)	(1800)	And.	
66-406	B-10	//	(17.7)	(24.0)	(11.3)	(8800)	And.	
407	B-10	//	(20.0)	(21.9)	(9.4)	(6000)	And.	
408	P-12	//	25.9	16.6	6.7	4450	And.	
409	G-9	//	18.7	18.0	8.0	3550	And.	
410	A-13	//	26.3	16.9	11.4	6100	And.	
67-411	F-9	//	23.6	19.1	8.6	4550	And.	
412	F-12	//	23.0	19.9	11.3	5700	And.	

計測値のうち、カッコ内の数字は現在値である。
石質の略記号は、以下のとおりである。

Aga.	: 瑪瑙 (Agate)
And.	: 安山岩 (Andesite)
Ba.	: 玄武岩 (Basalt)
Bl.-mud.	: 黒色泥岩 (Black mudstone)
Che.	: チャート (Chert)
Gre.-mud.	: 緑色泥岩 (Green mudstone)
Har.-sha.	: 硬質頁岩 (HardShale)
Mud.	: 泥岩 (Mudstone)
Obs.	: 黒曜石 (Obsidian)
Sa.	: 砂岩 (Sandstone)
Sch.	: 片岩 (Schist)
Ser.	: 蛇紋岩 (Serpentine)
Talc	: 滑石
Tu.	: 凝灰岩 (Tuff)

図 版

縮 尺 図版23下段, 38~43 (約2分の1)

図版23上段, 25~27, 30~37,

44~50 (約3分の1)

図版24, 28, 29 (約4分の1)

図版 1

◎ 惠圖



A 発掘区全景



B 発掘区全景

図版 2



A 発掘区全景



B 発掘区全景

图版 3



A 第1号竪穴住居跡



B 第2号竪穴住居跡

図版4



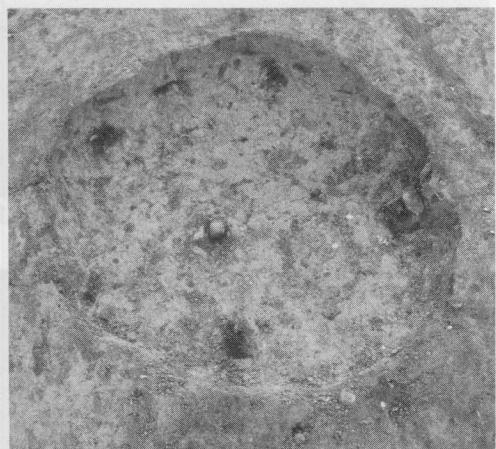
A 第1号ピット



B 第2号ピット



C 第3号ピット



D 第4号ピット



E 第5号ピット



F 第6号ピット

図版 5



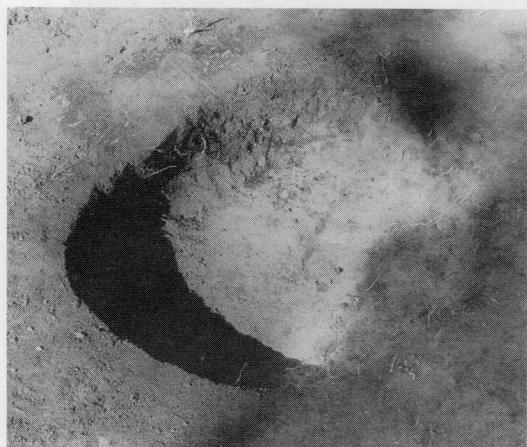
A 第7号ピット



B 第9号ピット



C 第10号ピット



D 第11号ピット

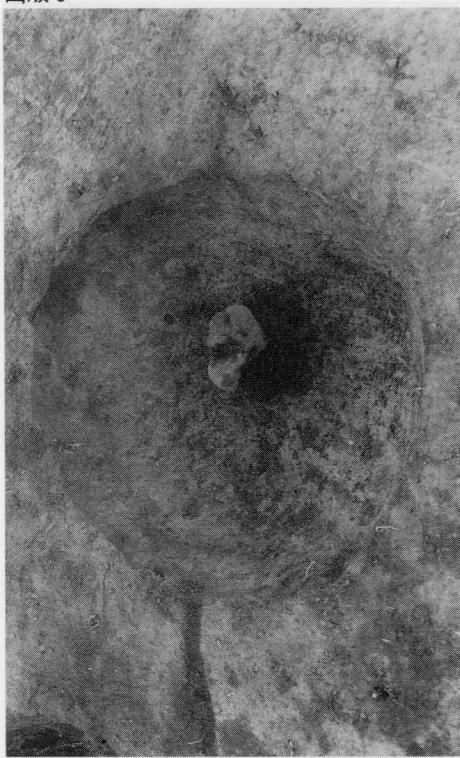


E 第12号ピット



F 第13号ピット

図版6



A 第14号ピット



B 第15号ピット



C 第17号ピット上面



D 第17号ピット

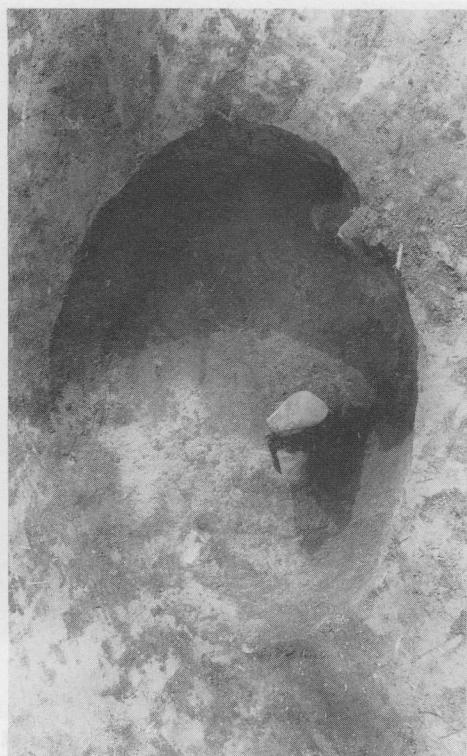
図版 7



B 第18号ピット



A 第16号ピット



D 第20号ピット
C 第19号ピット



図版 8



A 第21号ピット



B 第22号ピット

図版 9



A 第23号ピット



B 第24号ピット

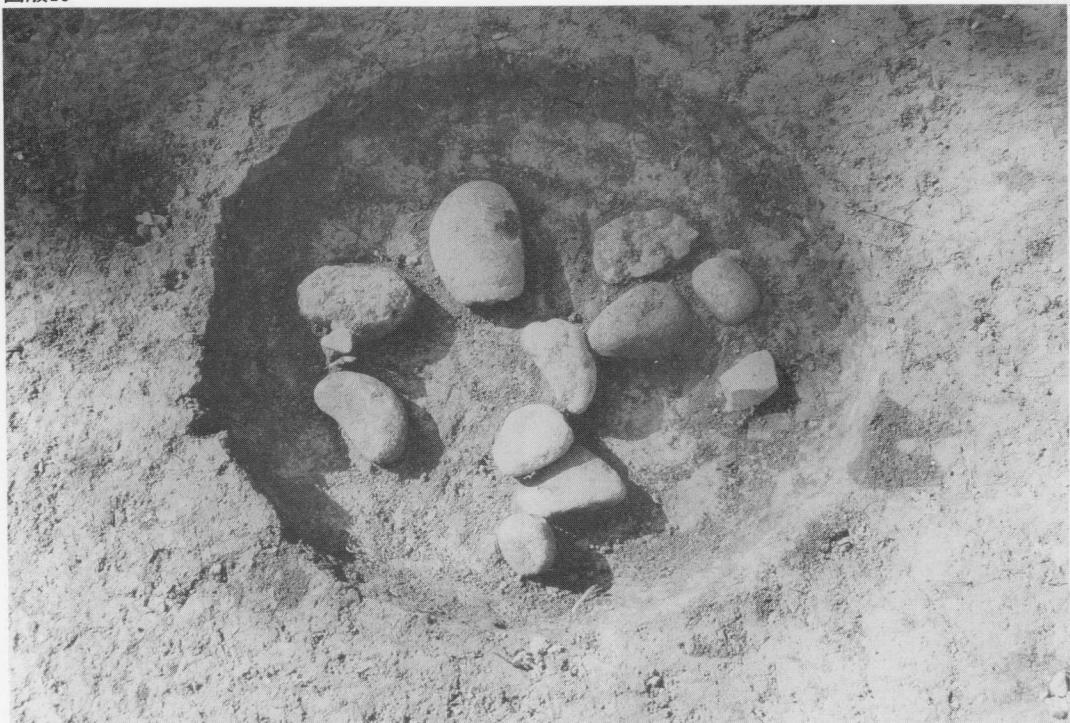


C 第25号ピット

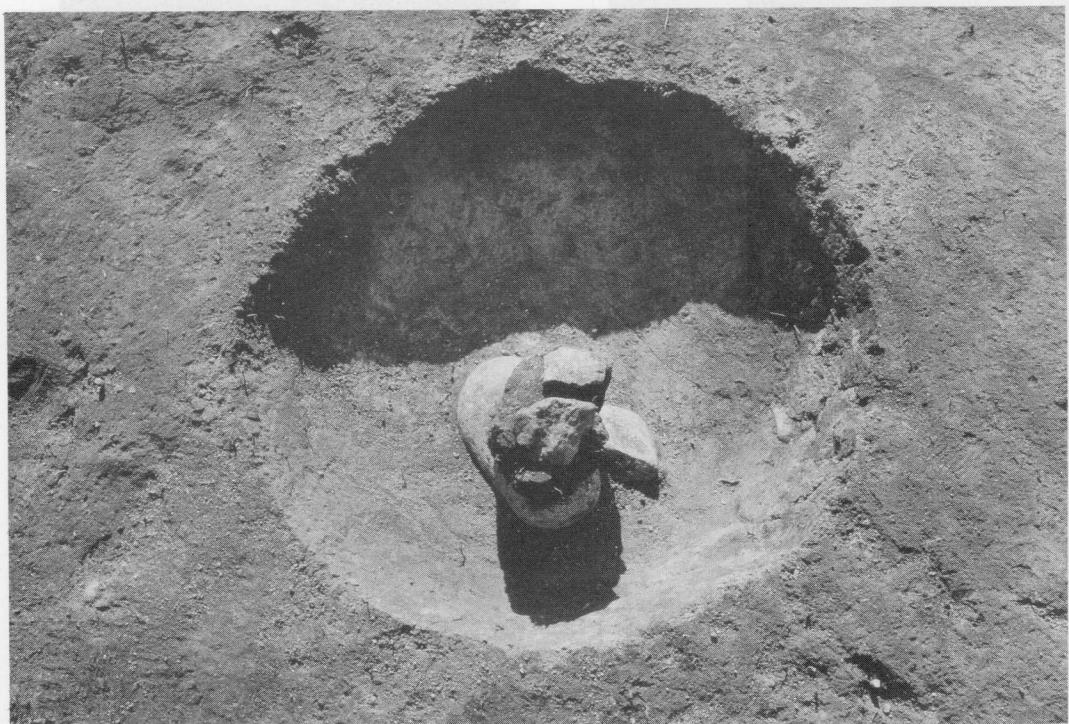


D 第26号ピット

図版10



A 第27号ピット



B 第30号ピット

図版11



A 第28号ピット
B 第29号ピット



C 第31号ピット

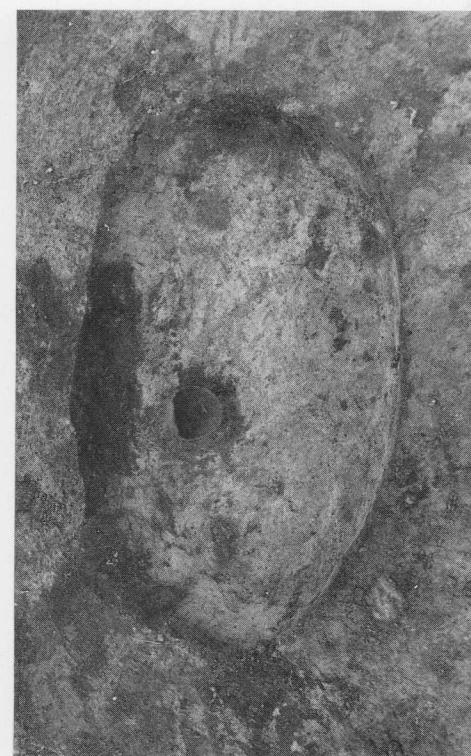


D 第32号ピット

図版12



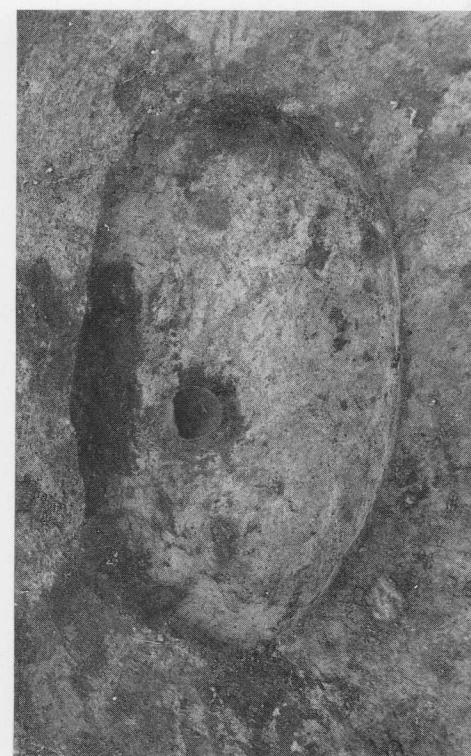
A 第33号ピット



B 第34号ピット



C 第35号ピット

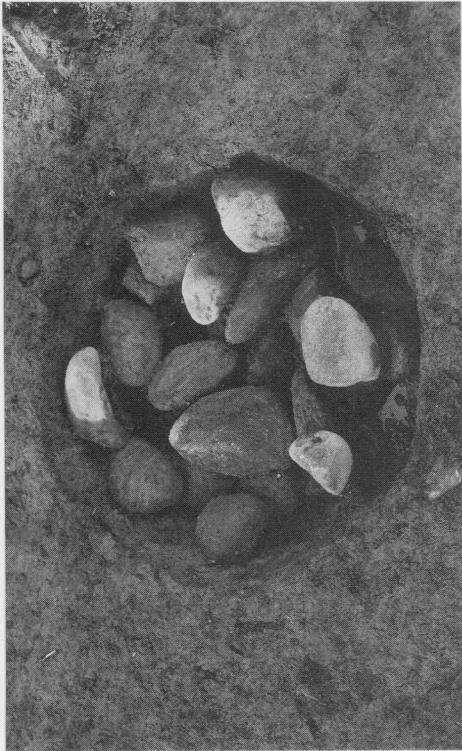


D 第36号ピット

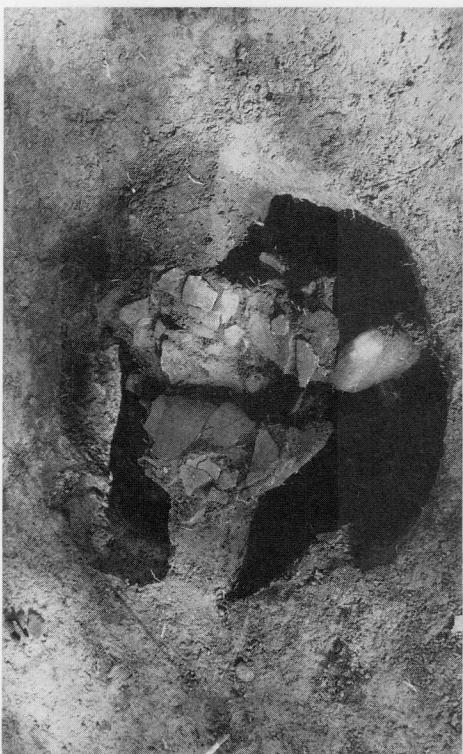
図版13



A 第37号ピット上面遺物出土状況



B 第37号ピット



C 第38号ピット

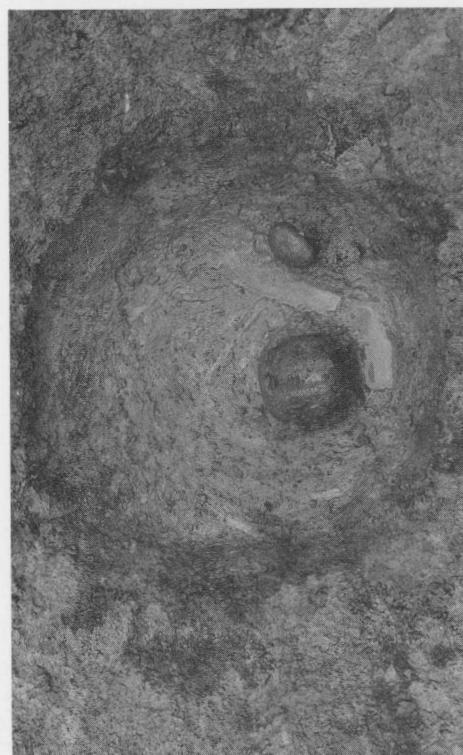


D 第39号ピット

図版14



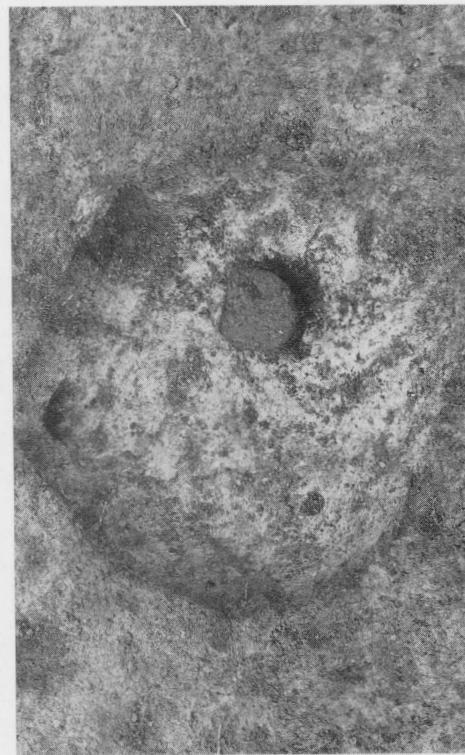
B 第41号ピット



A 第40号ピット

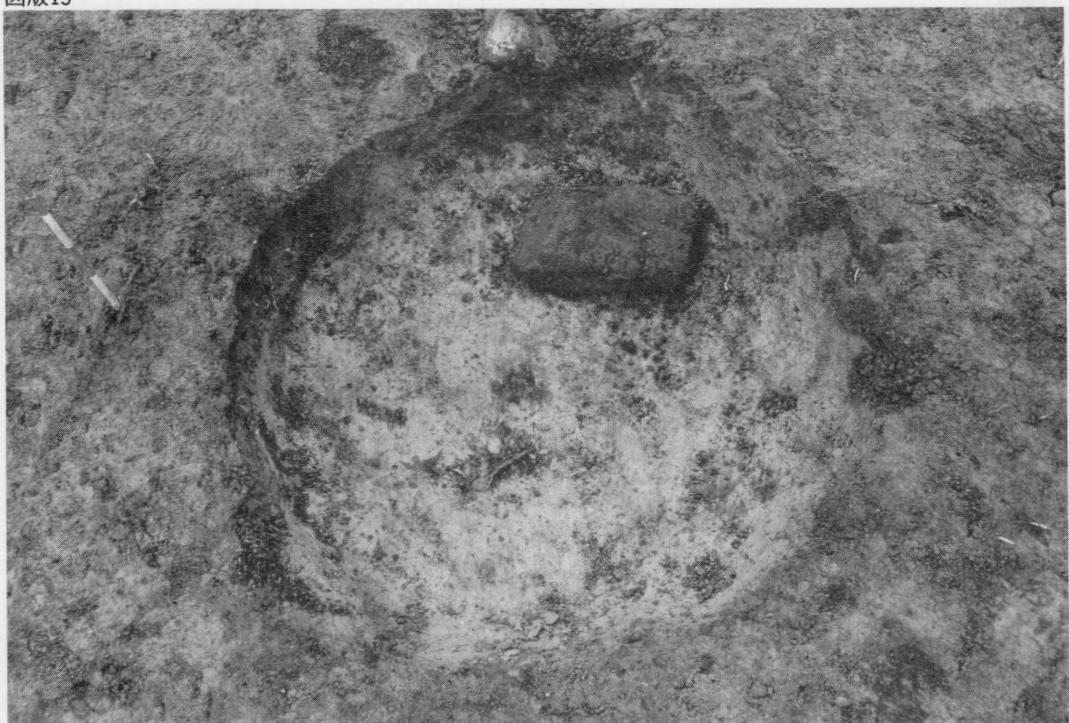


D 第45号ピット



C 第42号ピット

図版15



A 第43号ピット



B 第44号ピット

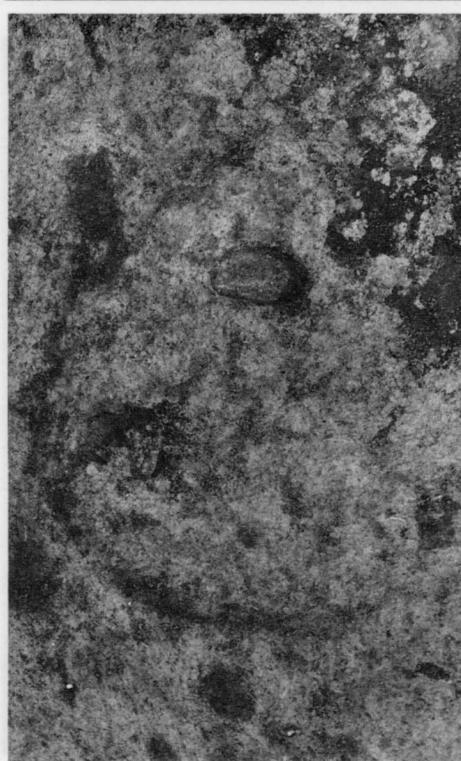
図版16



A 第46号ピット



B 第47号ピット



C 第48号ピット

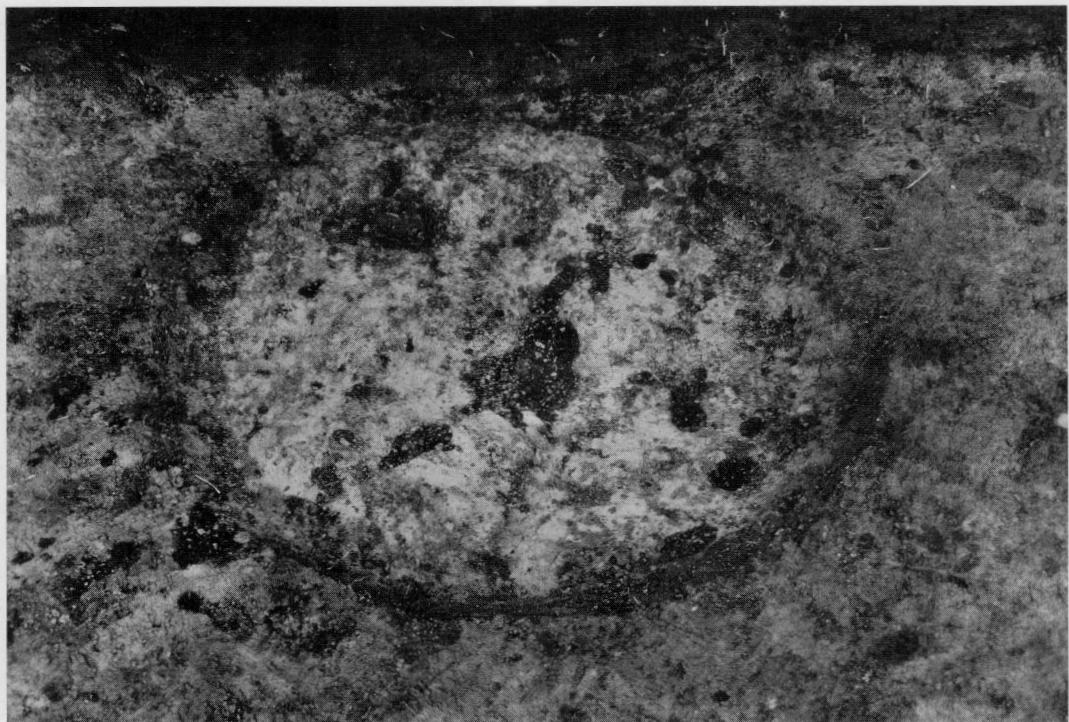


D 第50号ピット

図版17



A 第49号ピット上面



B 第49号ピット

図版18



A 第51号ピット



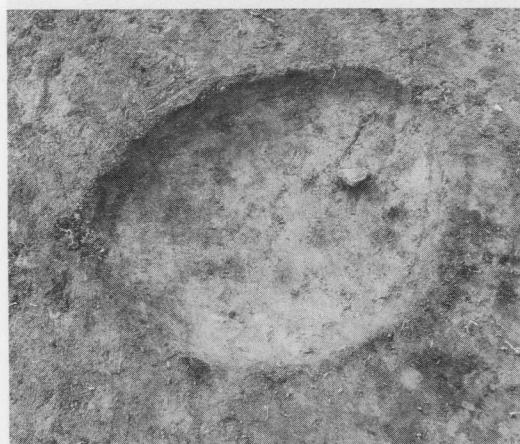
B 第52号ピット



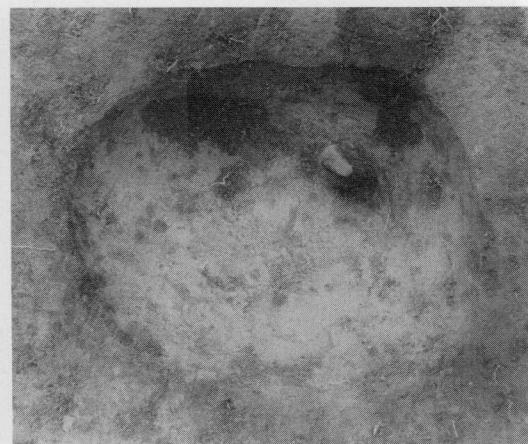
C 第53号ピット



D 第54号ピット



E 第55号ピット

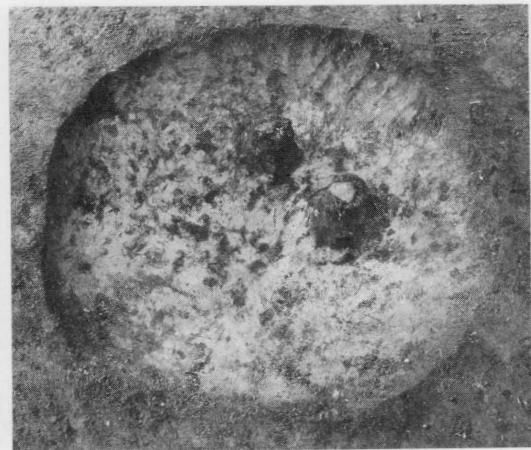


F 第56号ピット

図版19



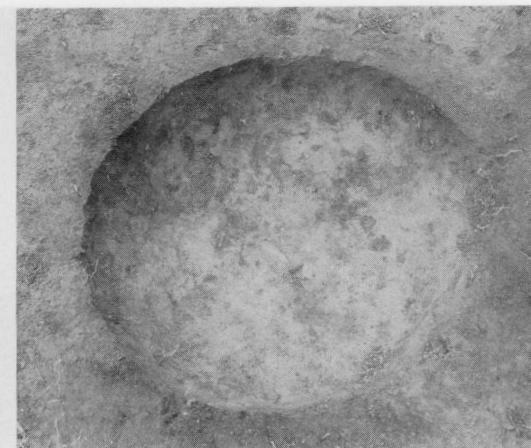
A 第57号ピット



B 第58号ピット



C 第59号ピット



D 第60号ピット



E 第61号ピット



F 第62号ピット

図版20



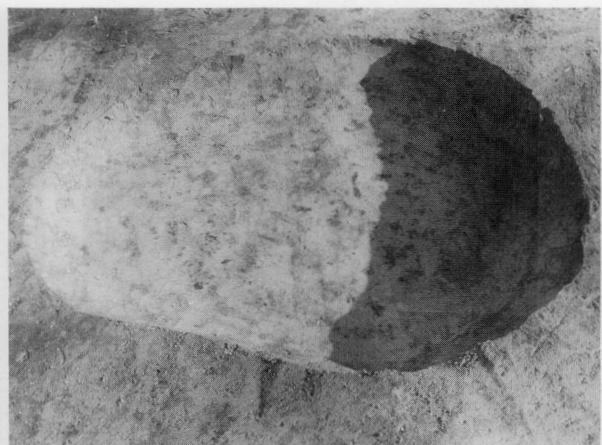
A 第63号ピット



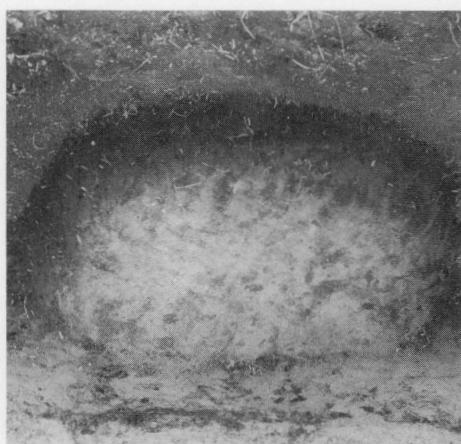
B 第64号ピット



C 第65号ピット



D 第66号ピット

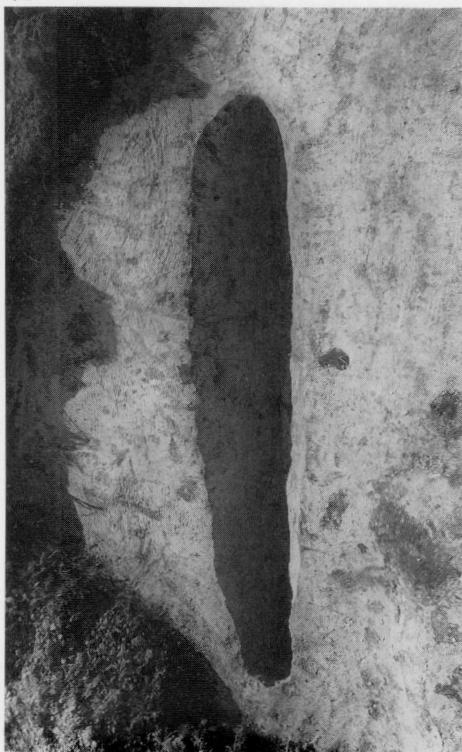


E 第67号ピット



F 第68号ピット

図版21



A 第1号Tビット



B 第2号Tビット



C 第3号Tビット

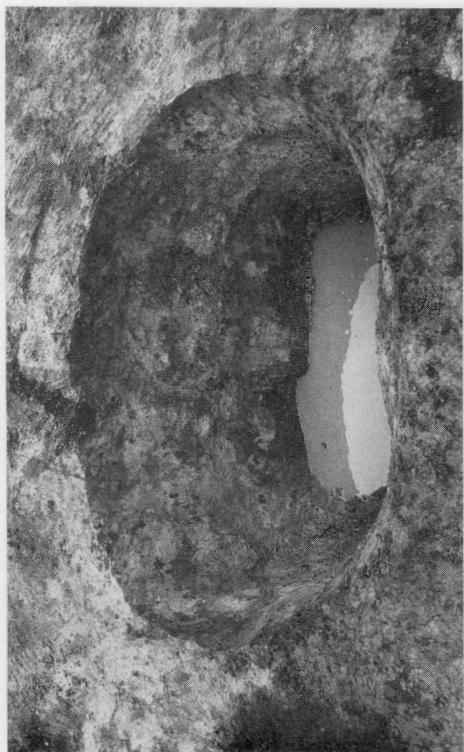


D 第4号Tビット

図版22



A 第5号Tピット



B 第6号Tピット



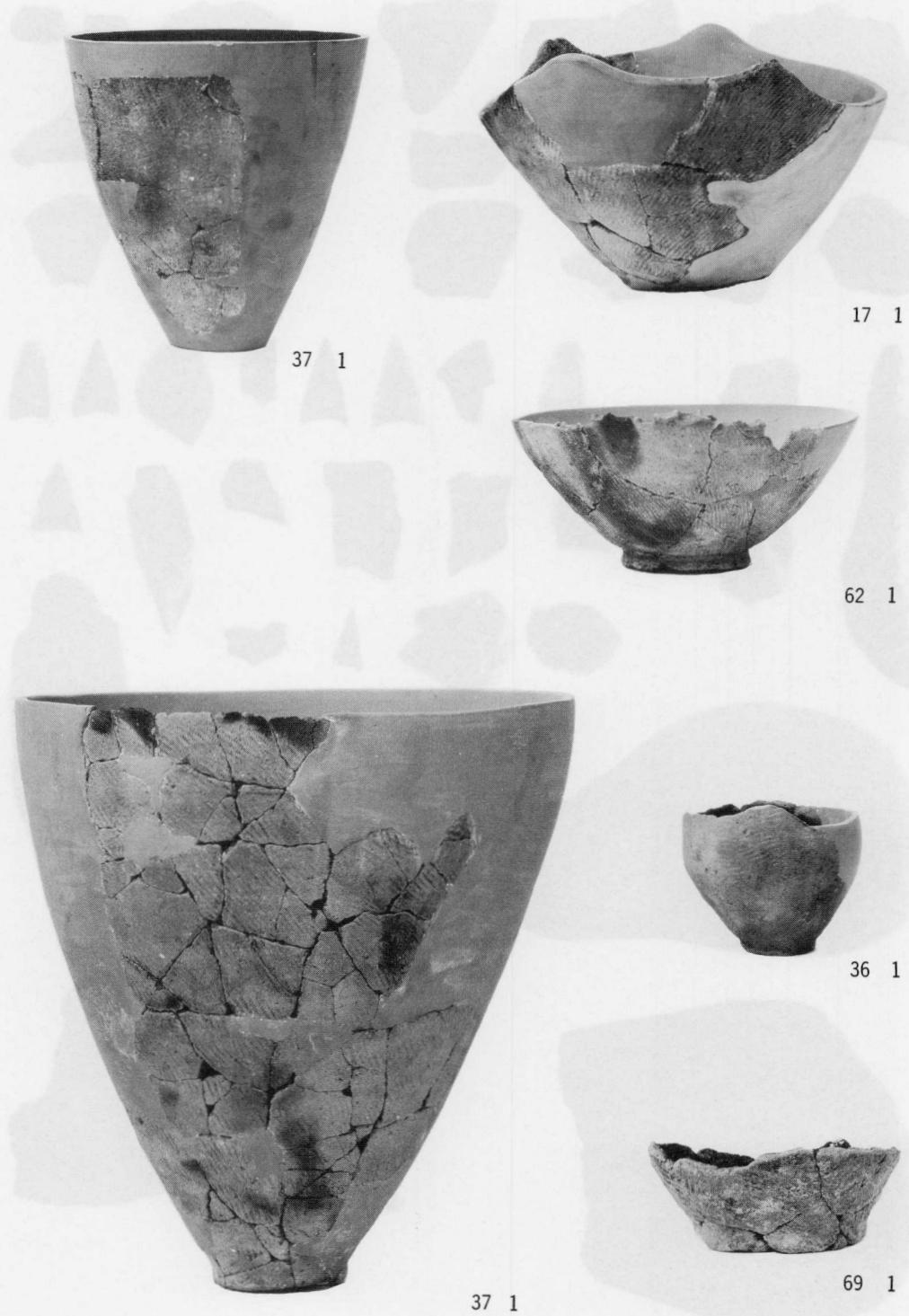
C 第7号Tピット



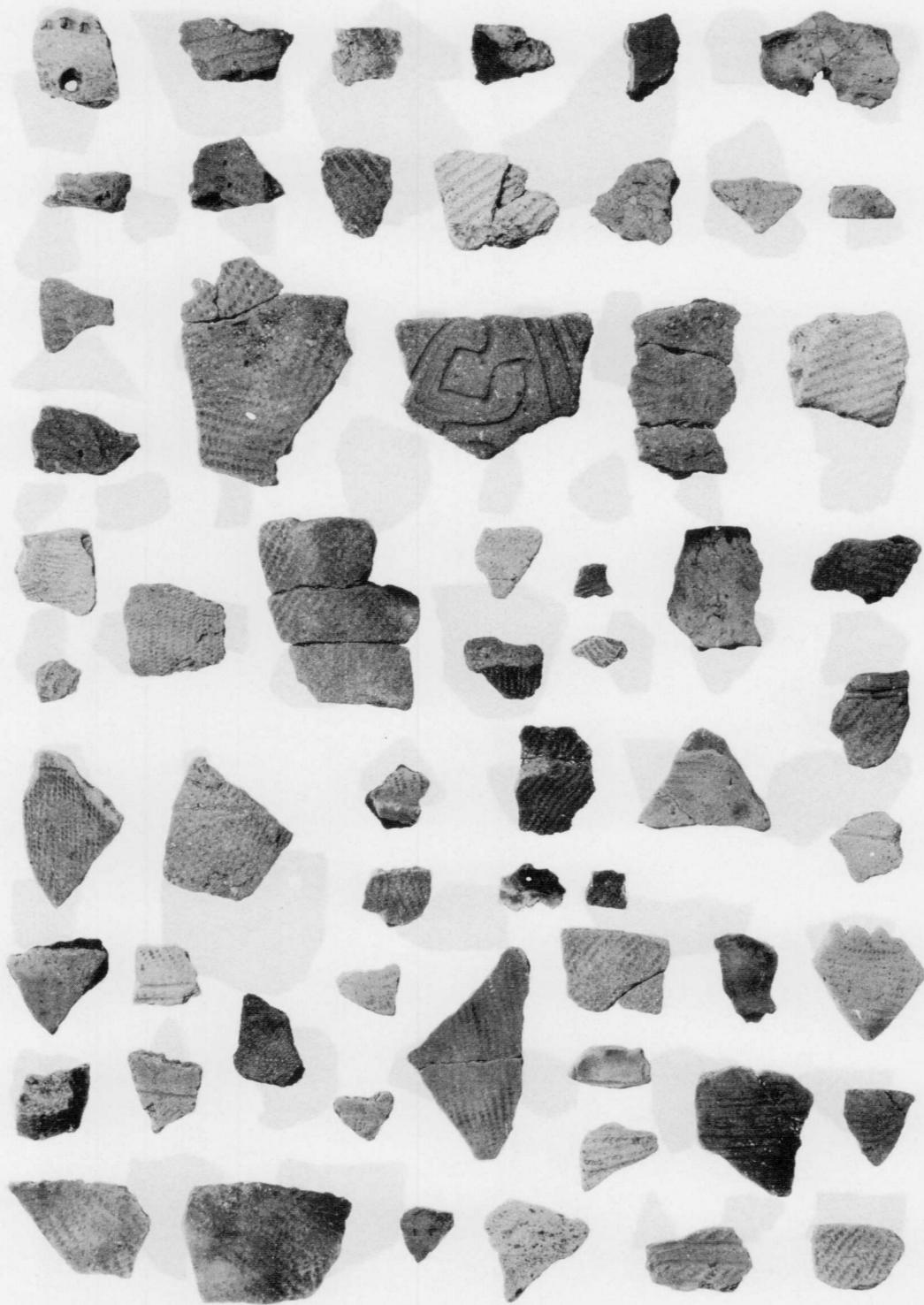
D 第8号Tピット



第1号(右)・2号(左) 竪穴住居跡出土土器 (上段) 竪穴住居跡及びピット出土石器 (下段)



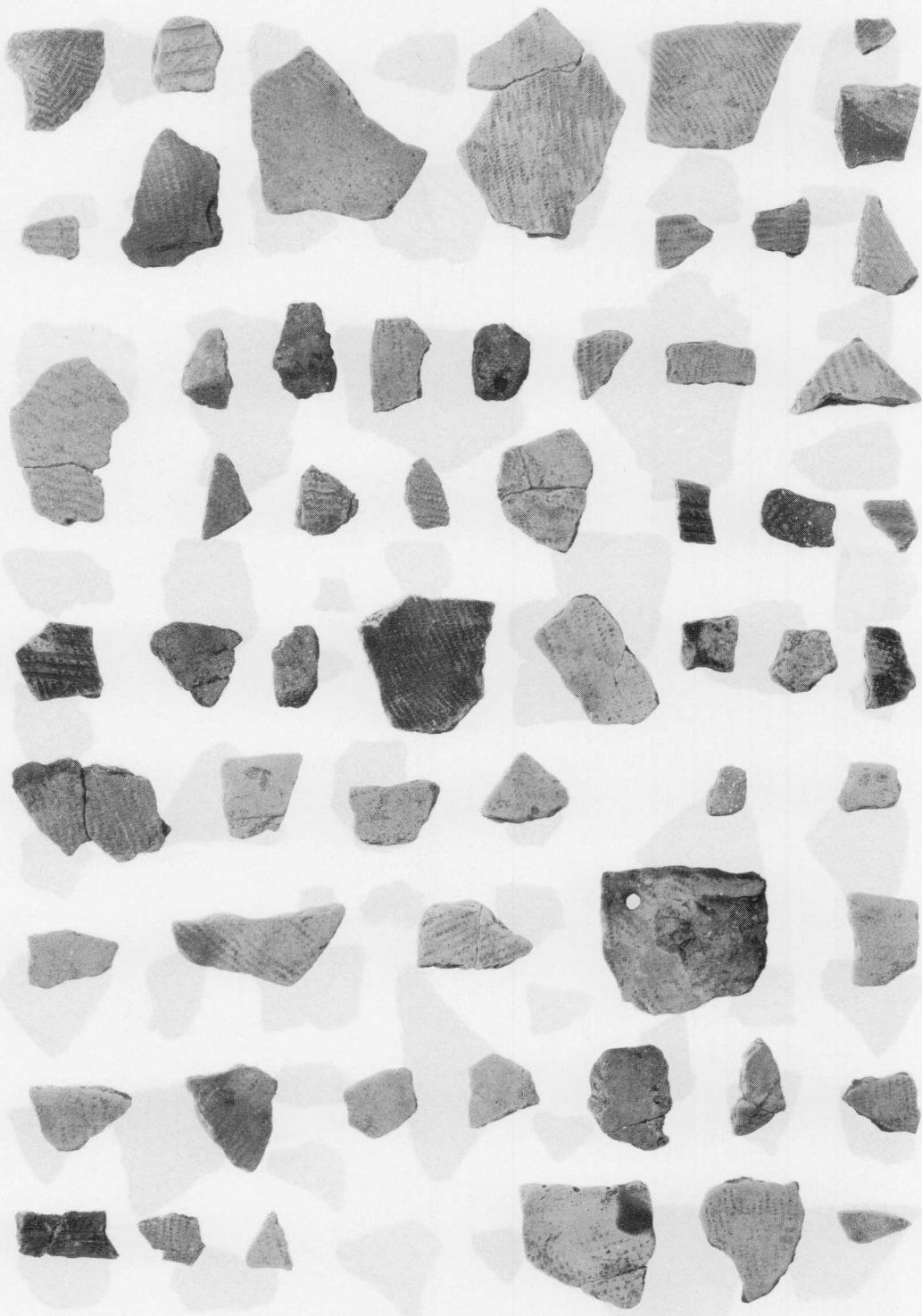
ピット出土土器



ピット出土土器

図版26

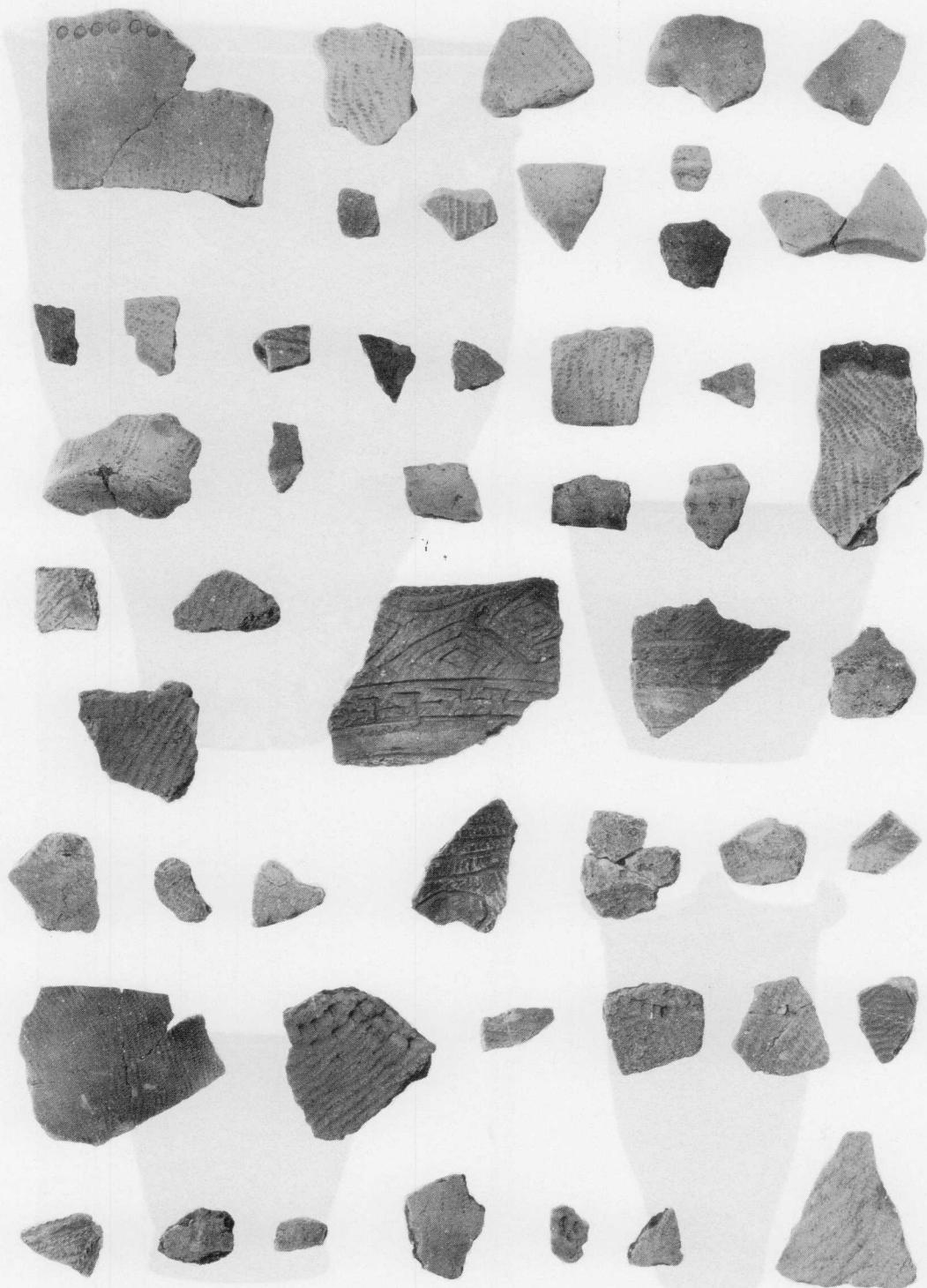
古墳



ピット出土土器

図版27

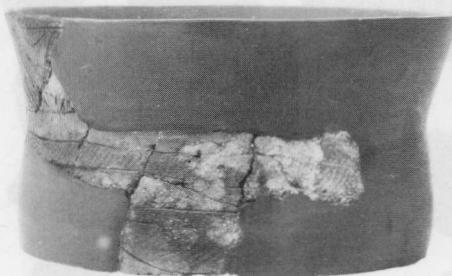
略圖



ピット出土土器



発掘区出土土器

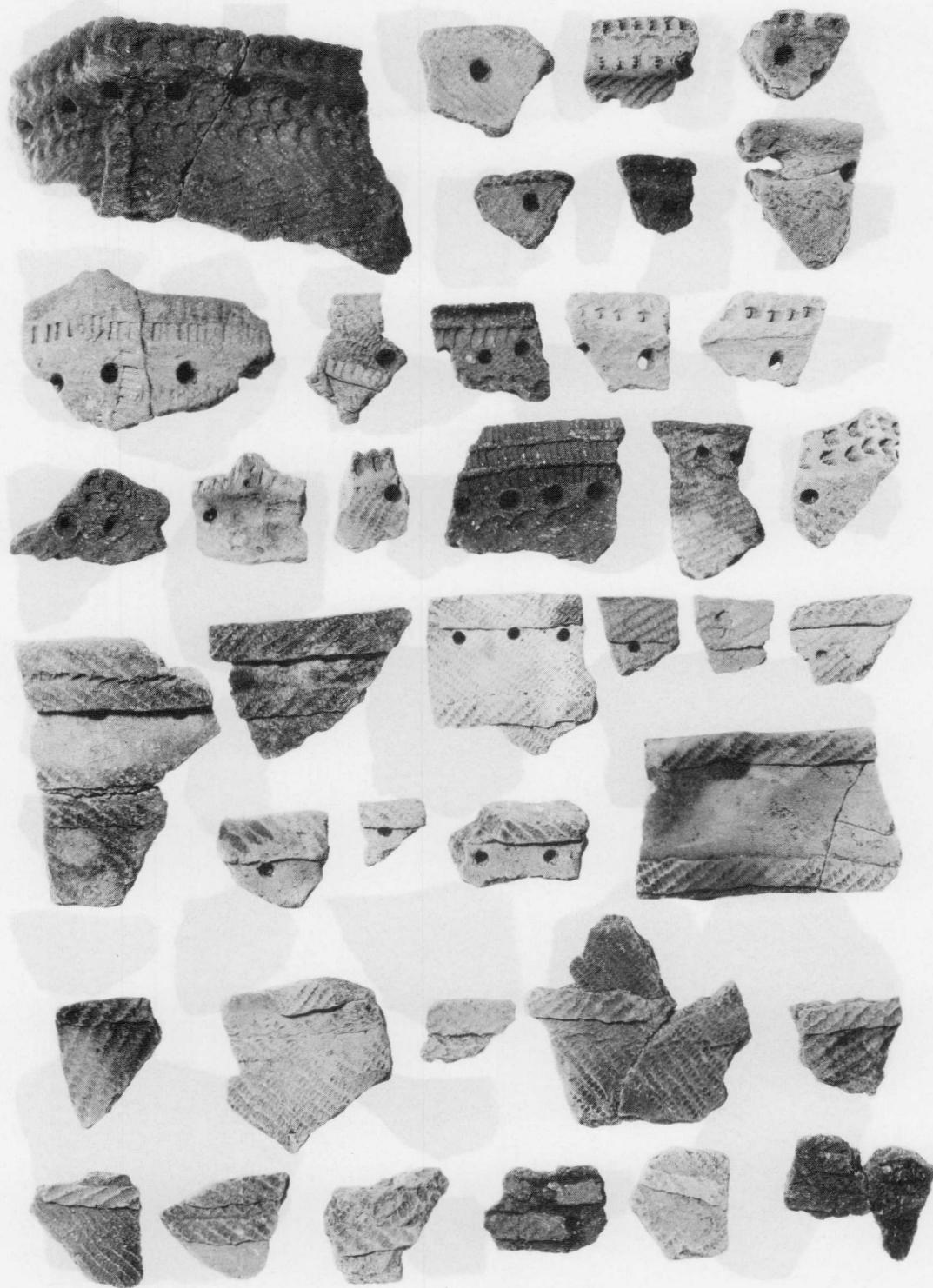


発掘区出土土器



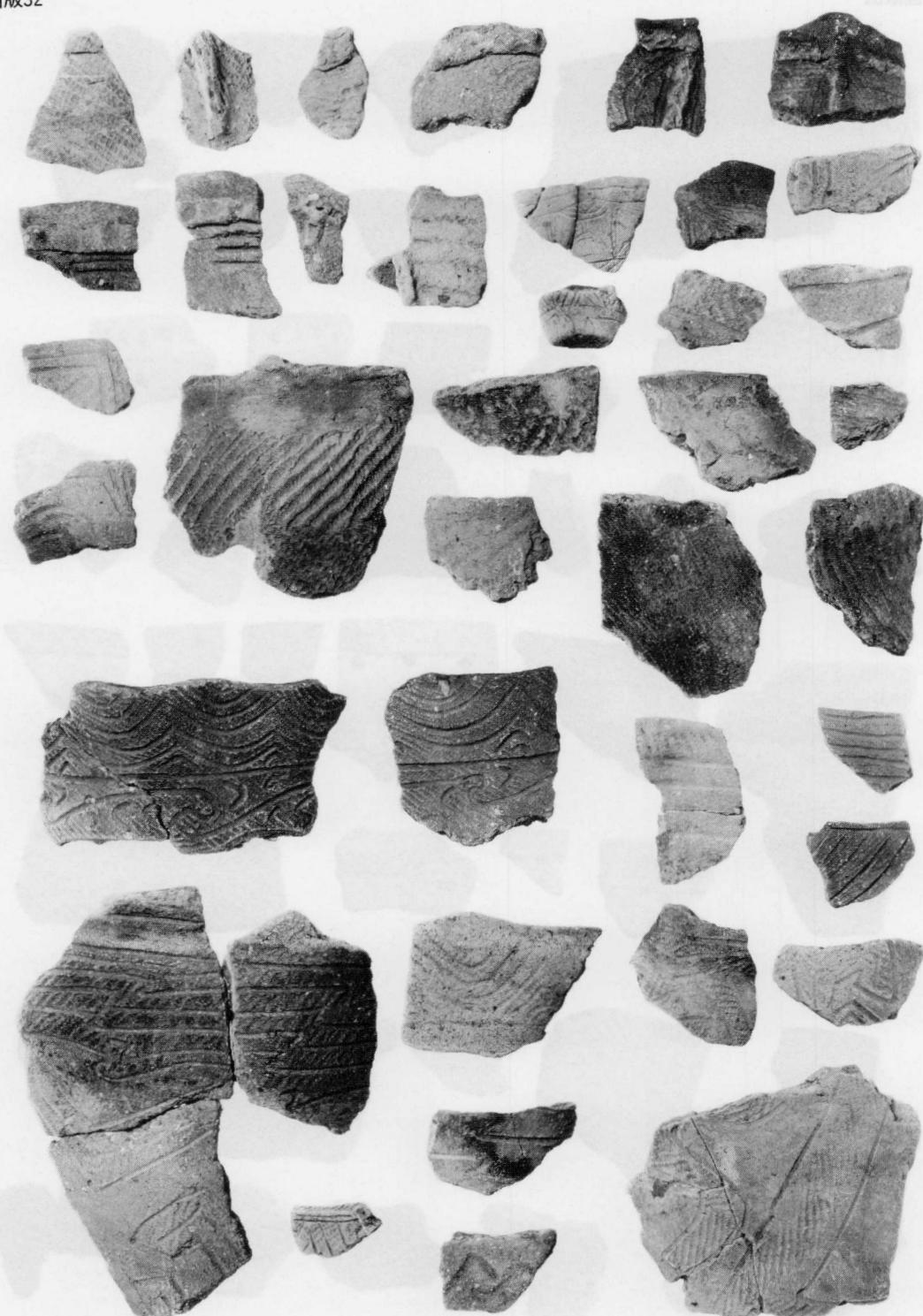
発掘区出土土器

図版31

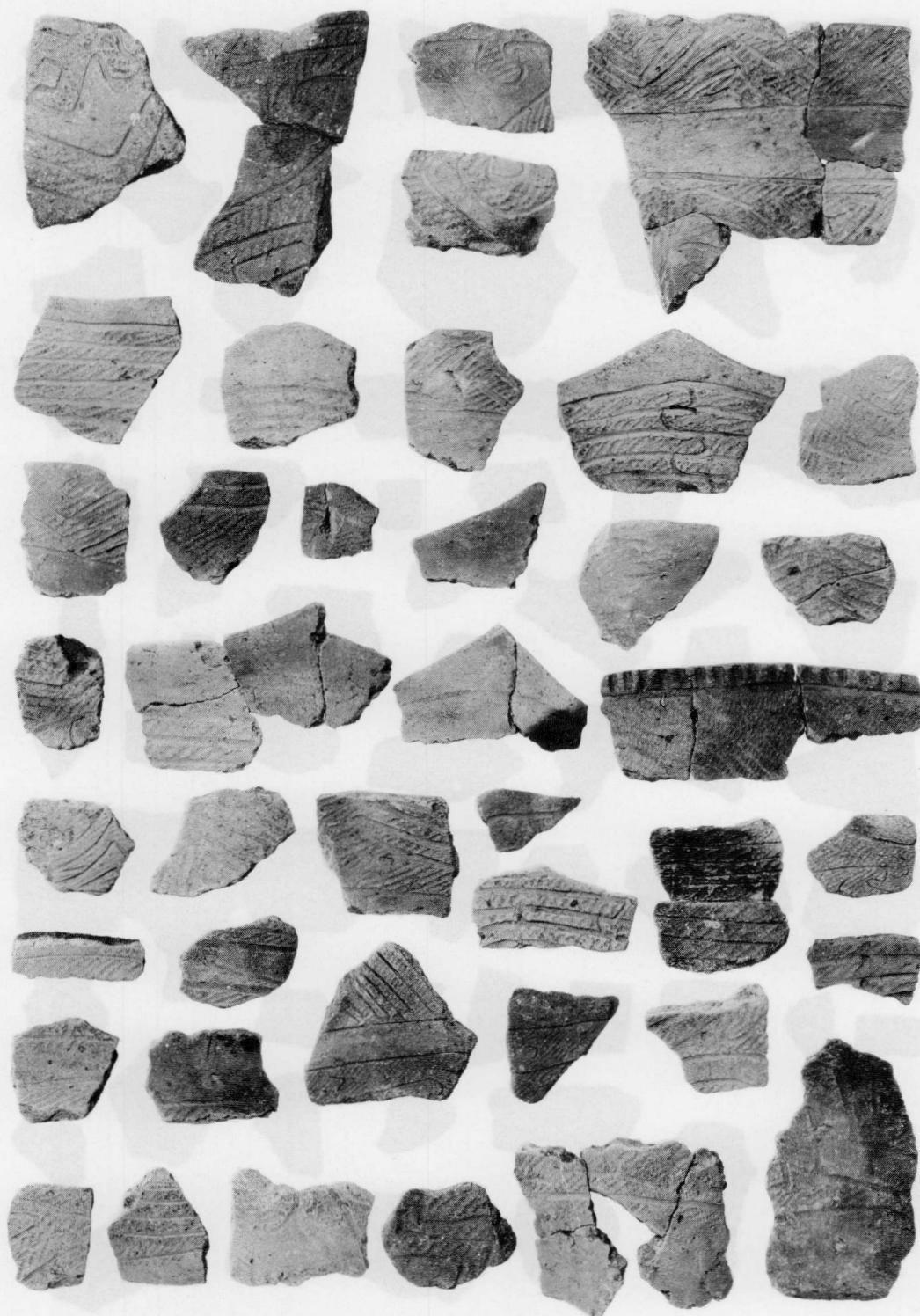


発掘区出土土器

図版32

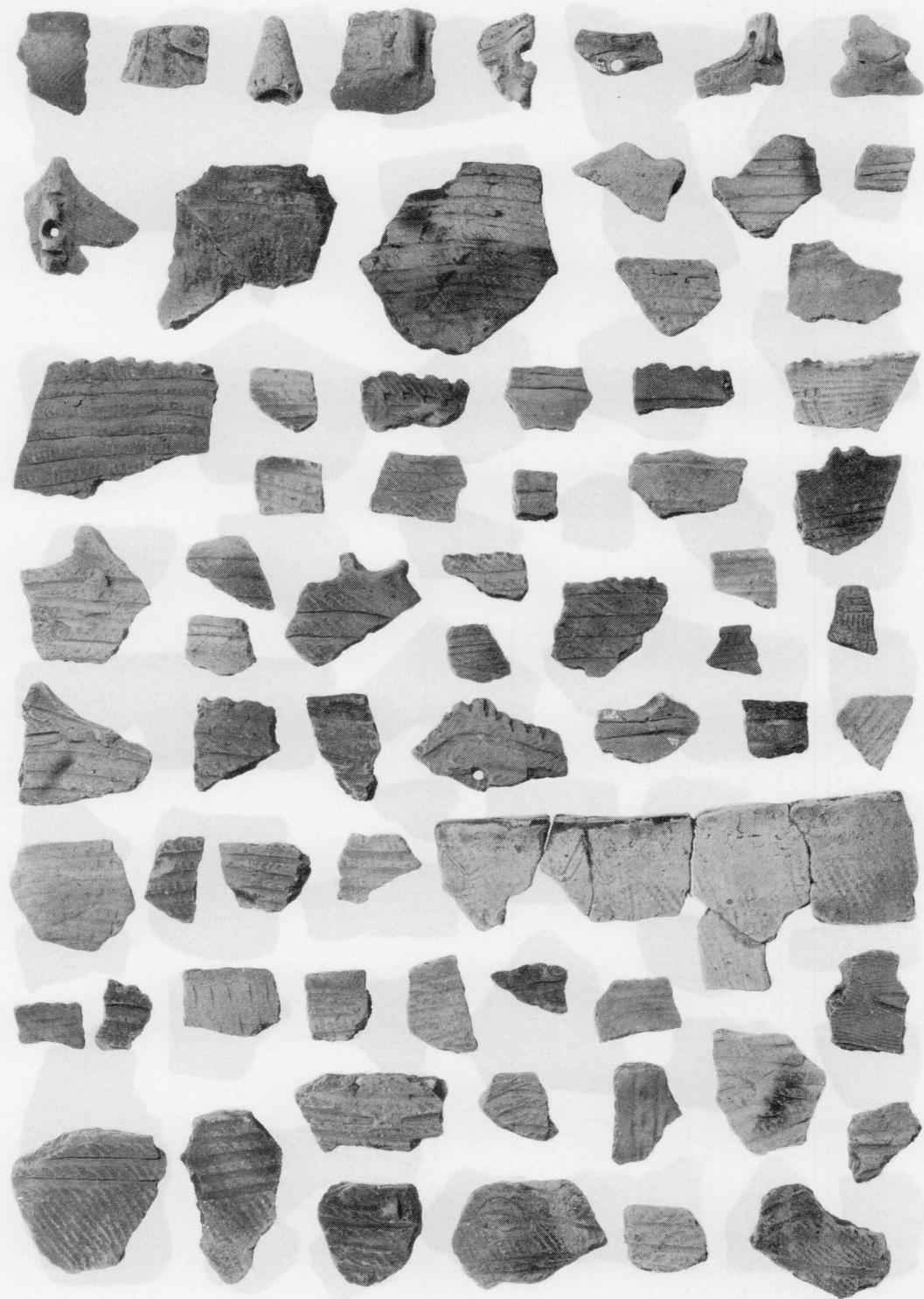


発掘区出土土器



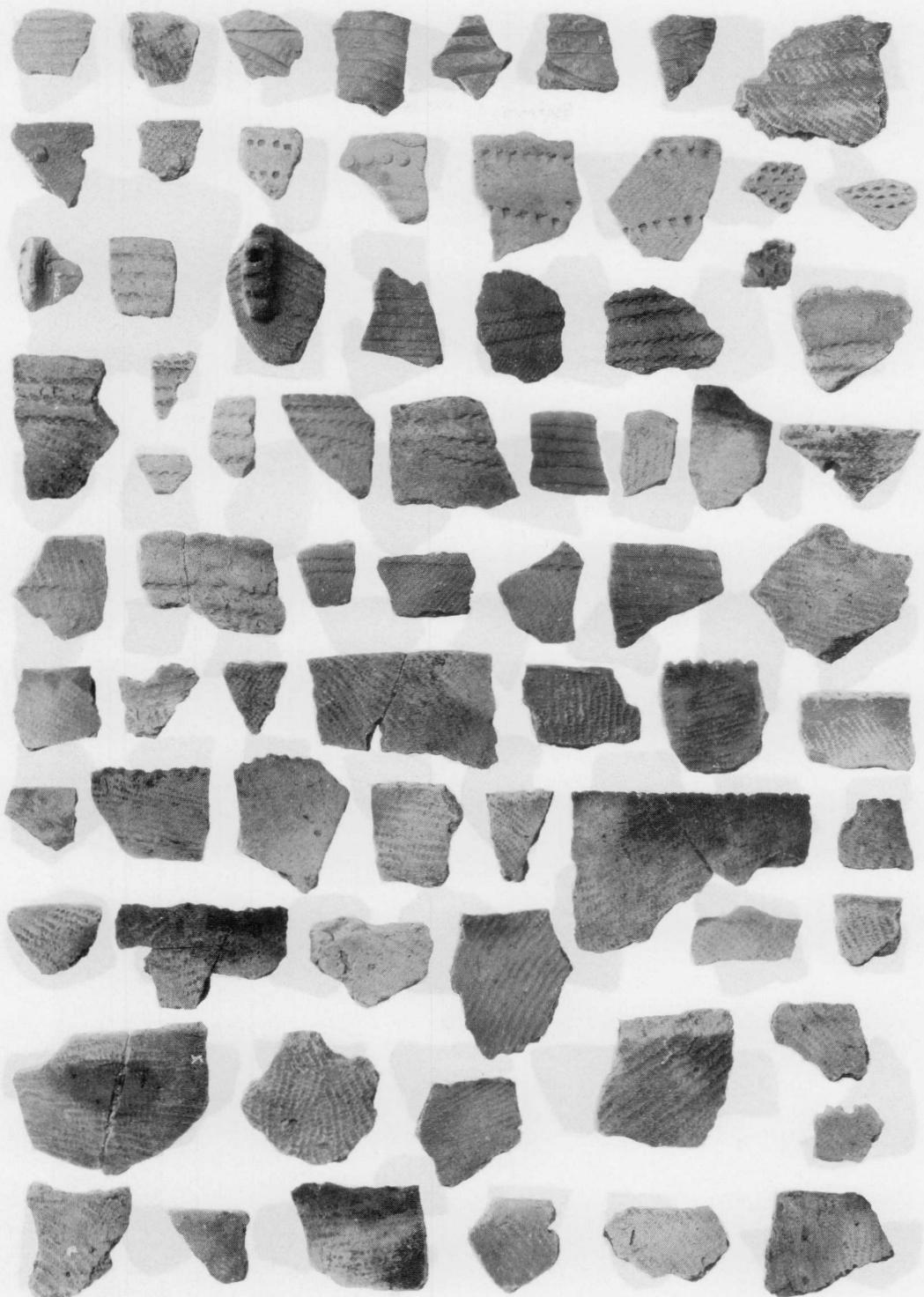
発掘区出土土器

図版34



発掘区出土土器

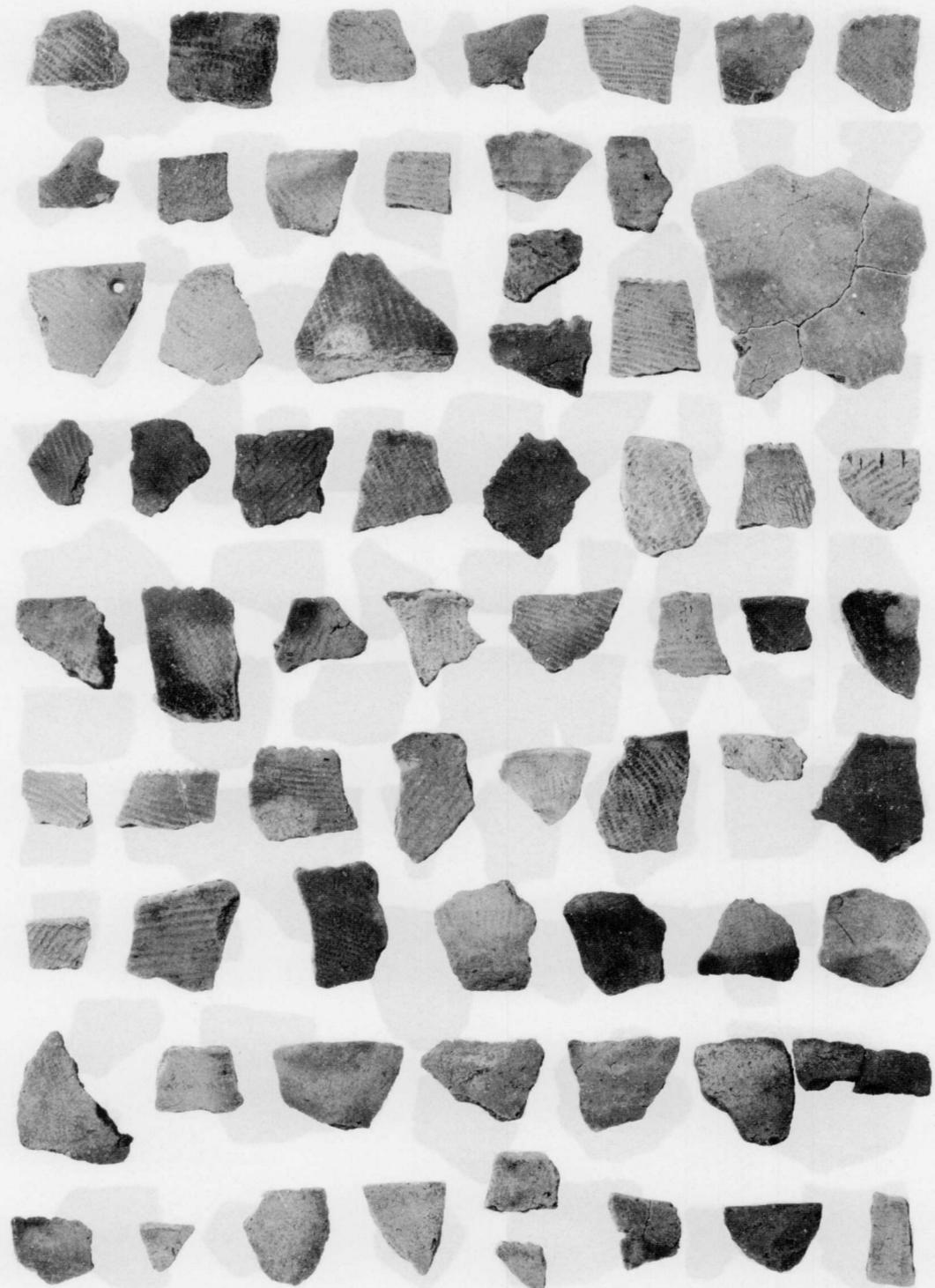
図版35



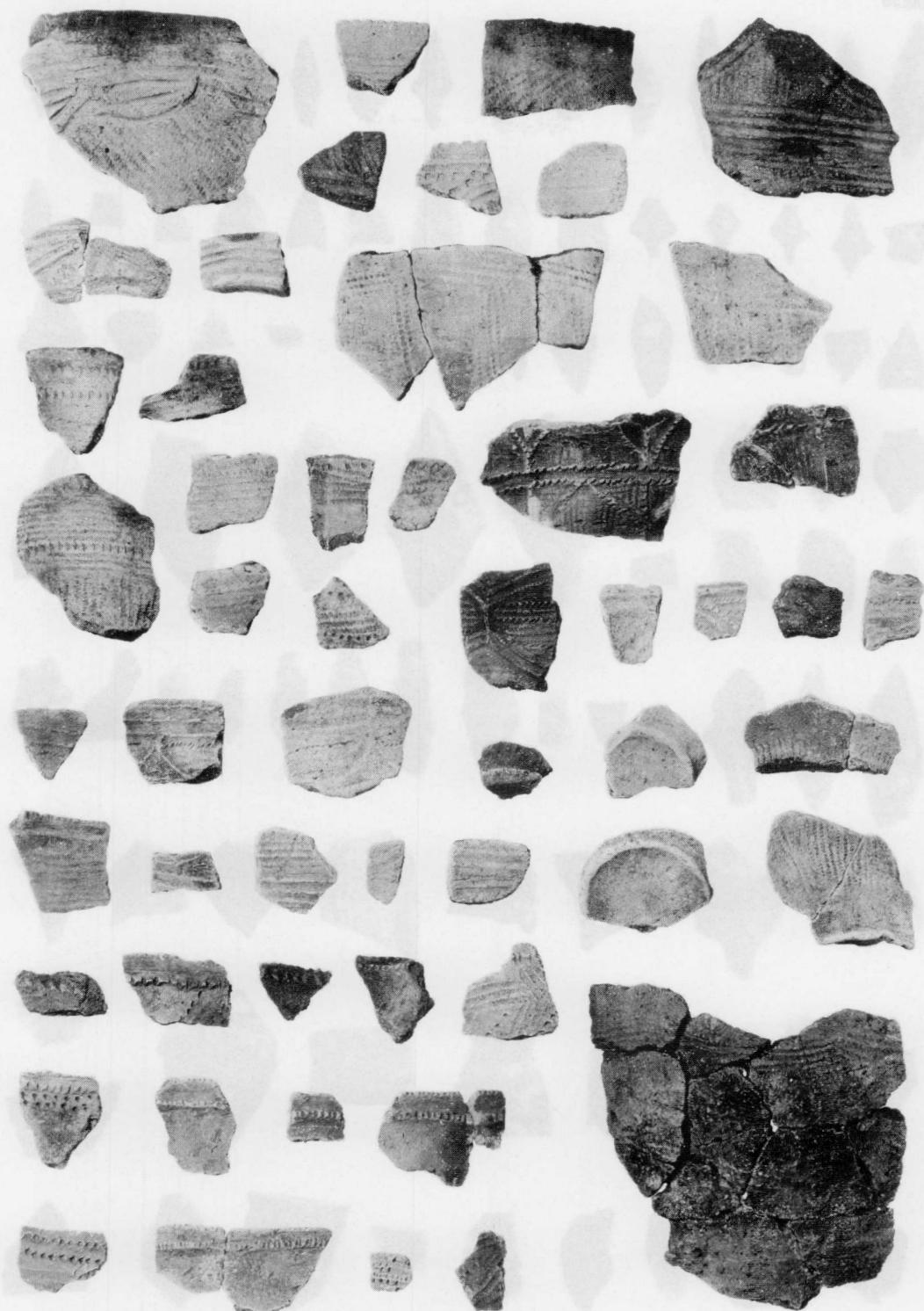
発掘区出土土器

図版36

古墳



発掘区出土土器



発掘区出土土器

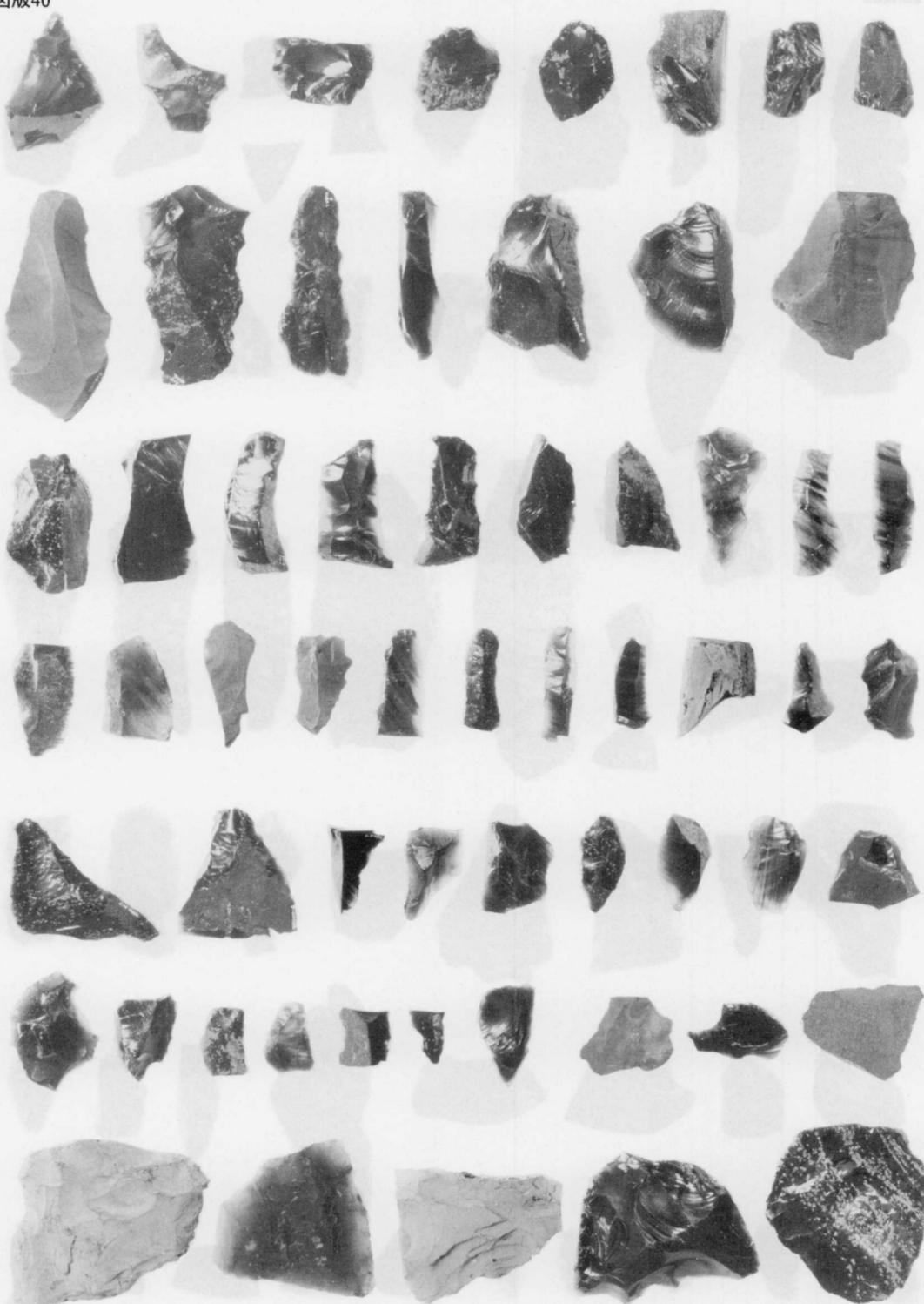


発掘区出土石器



発掘区出土石器

図版40



発掘区出土石器

図版41



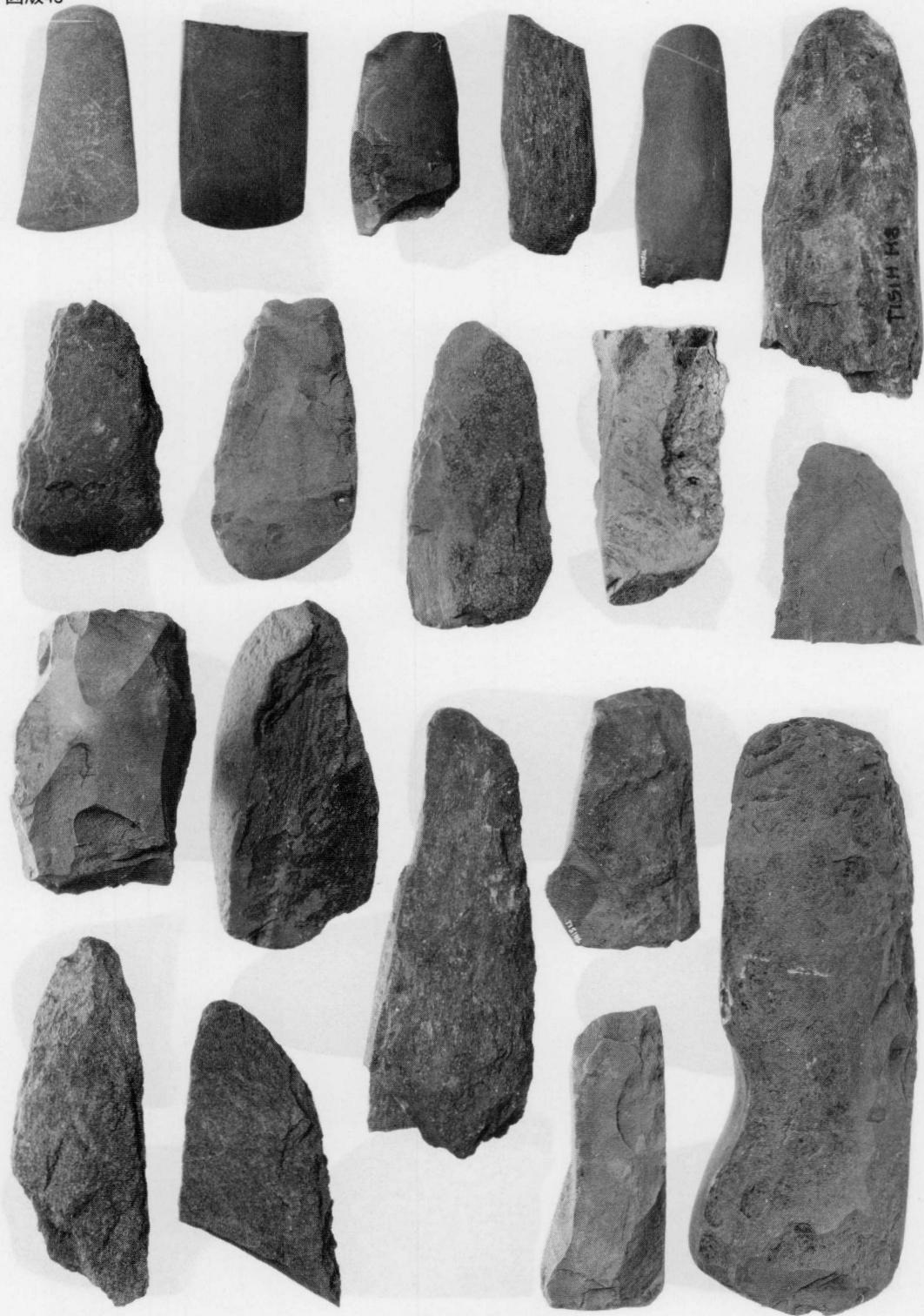
発掘区出土石器

図版42



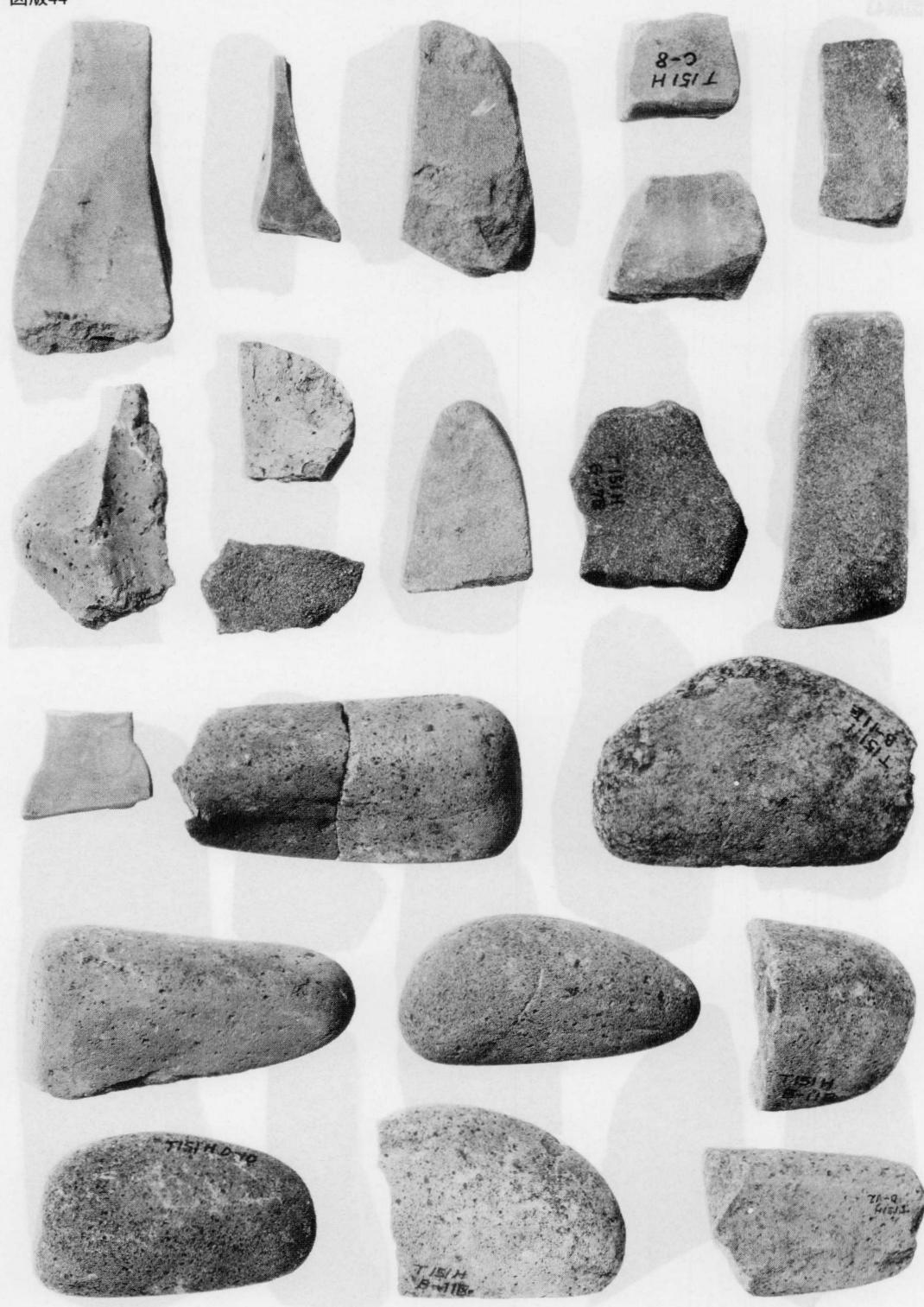
発掘区出土石器

図版43



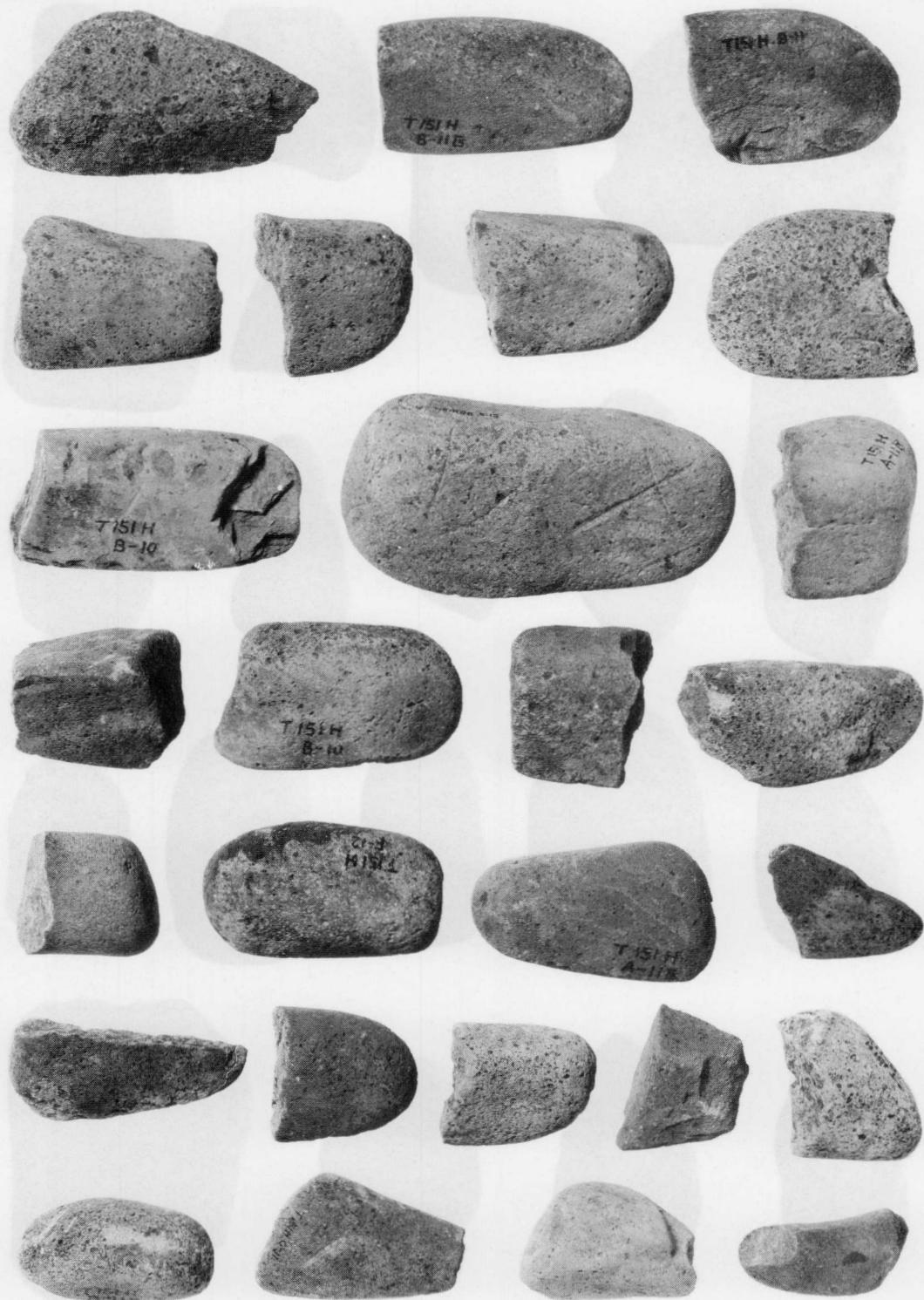
発掘区出土石器

図版44



発掘区出土石器

図版45



発掘区出土石器

図版46



発掘区出土石器

図版47



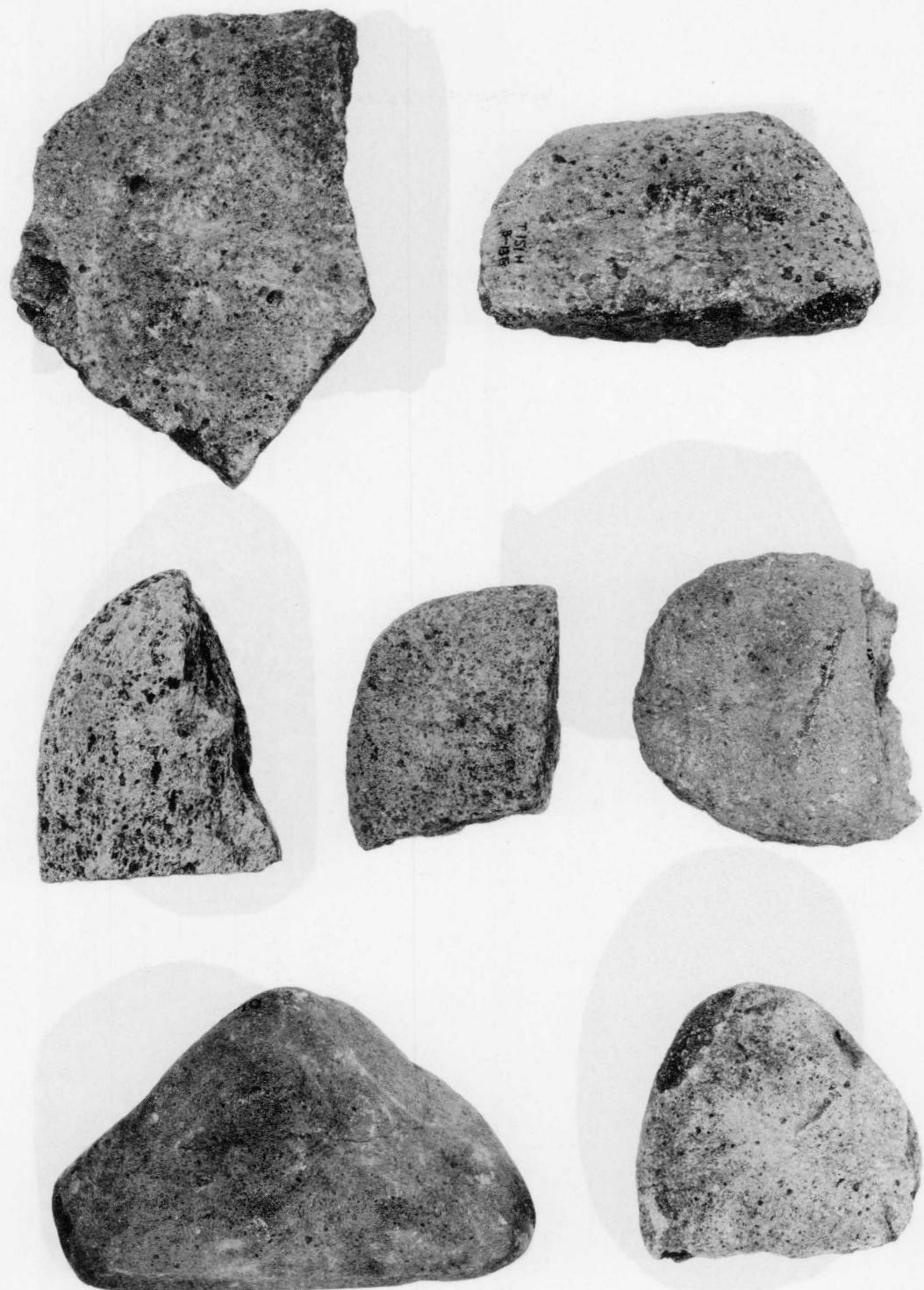
発掘区出土石器

図版48



発掘区出土石器

図版49



発掘区出土石器



発掘区出土石器

札幌市文化財調査報告書XXXVIII

T 151 遺跡
南側地点

平成元年3月25日 印刷
平成元年3月31日 発行

発行者 札幌市教育委員会
060 札幌市中央区南1条西14丁目
印刷所 中西印刷株式会社
札幌市東区東雁来3条1丁目